

石川県松任市

相川遺跡群

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区東相川
工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

石川県立埋蔵文化財センター

石川県松任市

相川遺跡群

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区東相川
工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は県営は場整備事業御手洗・出城地区東相川^{たうご}工区にかかる埋蔵文化財（東相川遺跡、東相川B遺跡、東相川C遺跡、中相川遺跡、相川新A遺跡）発掘調査報告書である。調査地はいずれも松任市相川町地内にあたる。
2. 調査は県農林水産部耕地整備課（松任土地改良事務所）の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。費用は同課が負担した他、一部文化庁の補助金を得ている。
3. 各年度の現地調査の担当、期間等は以下のとおりである。

昭和61年度	越坂一也	8月25日～11月14日	約2,000㎡	中相川遺跡
昭和62年度	越坂一也	7月6日～9月14日	約1,000㎡	東相川遺跡
昭和63年度	北野博司	7月26日～9月12日	約1,200㎡	東相川B・C遺跡
平成元年度	垣内光次郎・川畑 誠	5月31日～6月30日	約280㎡	相川新A遺跡、東相川遺跡

調査にあたっては、横山貴広、大藤雅男、宮本直哉、安宅 務、西谷昌司、藤重 啓の協力を得た。
4. 出土品整理は、平成2年度と同3年度に（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
5. 報告書の執筆・編集等は平成3年度に実施した。執筆者および執筆分担は目次のとおりで、編集は北野が行った。
6. 挿図・表番号等は各年度（章）毎の通し番号とした。
7. 本書で用いる方位はすべて座標北、水平基準は海拔高である。
8. 出土品、記録資料等は現在、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

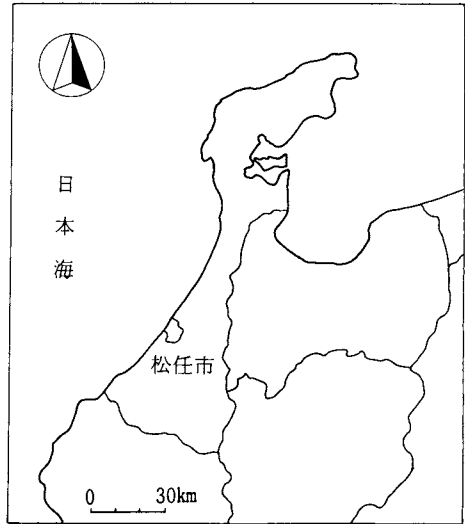
目 次

第1章 相川遺跡群の環境	三浦ゆかり	1
第1節 位置と地理的環境		
第2節 歴史的環境		
第2章 昭和61年度の調査（中相川遺跡）	越坂一也・栃木英道	7
第1節 調査の概要		
第2節 遺構		
第3節 遺物		
第3章 昭和62年度の調査（東相川遺跡）	越坂一也・栃木英道・北野博司	47
第1節 調査の概要		
第2節 遺構		
第3節 遺物		
第4章 昭和63年度の調査（東相川B遺跡・東相川C遺跡）	北野博司	79
第1節 調査の経緯		
第2節 調査の概要		
第3節 第1調査区の遺構と遺物		
第4節 第2調査区の遺構と遺物		
第5節 小結		
第5章 平成元年度の調査（相川新A遺跡・東相川遺跡）	垣内光次郎・川畑 誠	103
第1節 調査の概要		
第2節 Nトレンチの遺構		
第3節 Nトレンチの遺物		
第4節 Sトレンチ調査		
第5節 小結		
第6章 中相川遺跡の甕の使用痕分析	小林正史	125
写真図版		
昭和61年度の調査		図版 1～26
昭和62年度の調査		27～48
昭和63年度の調査		49～68
平成元年度の調査		69～76

第1章 相川遺跡群の環境

第1節 位置と地理的環境

相川遺跡群は、石川県松任市相川町地内に所在する。白山に源を発する手取川によって形成された、手取川扇状地の扇端部に位置し、標高6～10mを測る。手取川扇状地は、鶴来町を扇頂とする典型的な扇状地形を呈し、等高線は扇頂を中心として同心円状に描かれている。扇状地の東は富樫山地、南は能美山地に接し、扇状地では小規模ながらも安原海岸砂丘が発達している。しかし扇状地末端にあたる徳光付近では、扇状地の高まりが大きいため、海岸砂丘の被覆は認められていない。このことは、かつて手取川が鶴来町から扇状地中央（鶴来駅と松任市徳光町を結ぶ線）付近を流れ、徳光町付近で日本海に注いでいたことを物語る。



第1図 松任市位置図 1/3,000,000

手取川は富樫山地の隆起により南へ移動したと考えられており、その流路跡が現在の七ヶ用水であると伝えられている¹⁾。縄文時代から古墳時代の遺跡が、扇状地の北側に多く分布するのは、手取川の南遷による影響を避けたものと考えられる。

さて、本地域周辺の地形であるが、明治初年に編纂された『皇国地誌』から、当時の相川村の様相をうかがってみたい。

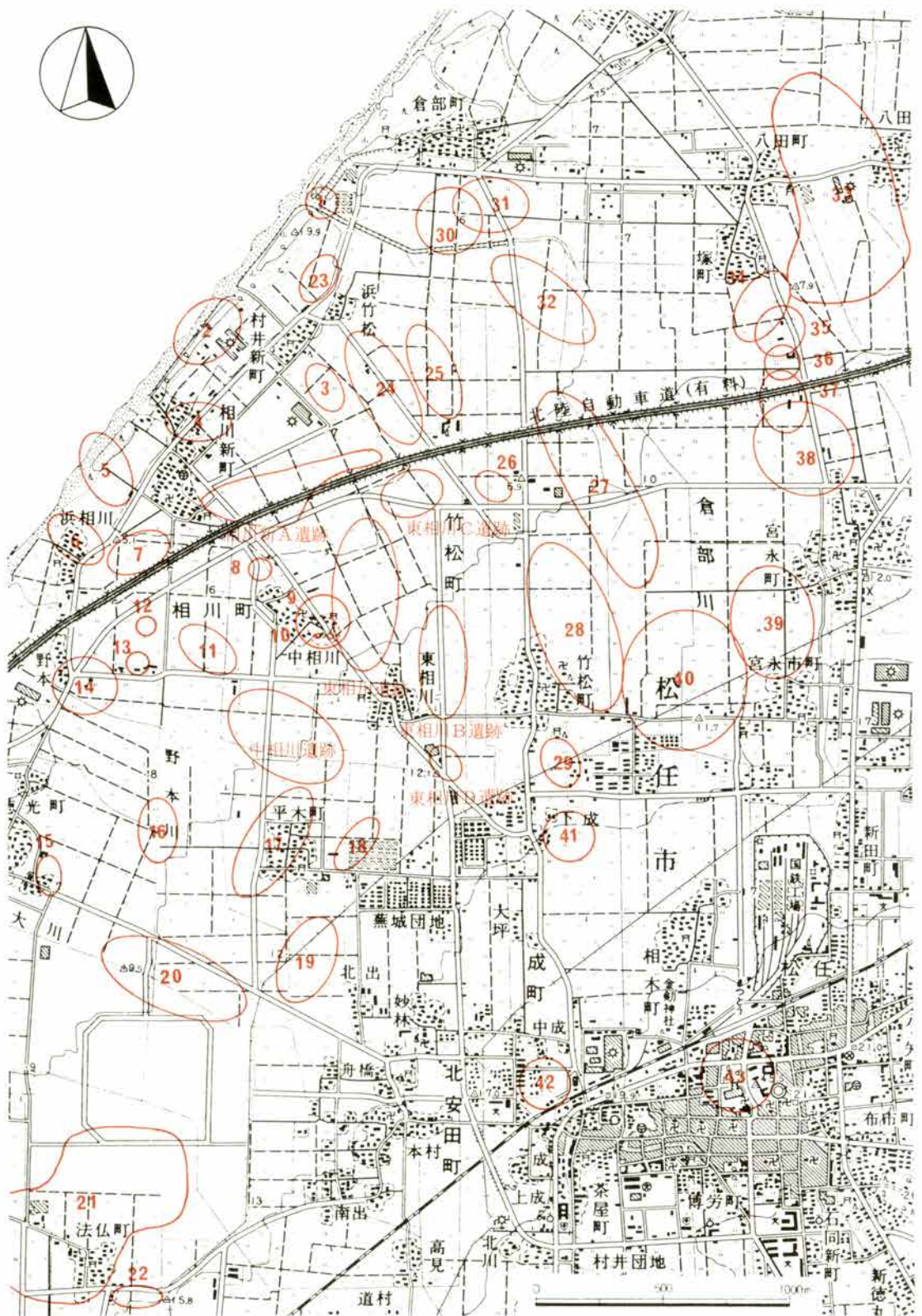
地勢 全土平野 四方田圃ニ続ク 人家四所ニ分ル 中央ニアルヲ本村中垣内ト称ス 枝村ハ
東南ニアルヲ東垣内トシ 西方ニアルヲ松原垣内トシ 西南隅ニアルヲ野本垣内トス
地味 土色黒ク概ネ稲田ニ宜ク 東北湿地ニ属シ 西辺砂ヲ混ス

この記述から本地域周辺の地形は平坦で、黒色土壌がみられるが、東北部は湿地帯をなし、浜相川から野本周辺は砂質土壌が広がっていたことがうかがえる。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺で遺跡が顕在化するのには、縄文時代後・晩期になってからである。一塚遺跡²⁾では、縄文時代の河道跡が検出されており、河道跡の両岸には、縄文時代後期の集落跡が存在していたことが明らかになっている。また八田中遺跡³⁾では、縄文時代後期後半と晩期中葉の土器が、少量であるが出土している。これらの遺跡は、いずれも標高5～10mの地下水自噴地域に分布しており、湧水に恵まれた低地への移住が進んだことを示している。

弥生時代に入ると、八田中、徳光ジョウガチの各遺跡で前期の土器が出土しているが、継起性をもたず、中期の遺跡も少ない。野本遺跡は中期後半の遺跡であり、多量の土器や木製品、植物



第2図 相川遺跡群とその周辺の遺跡 1/25,000

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	現況	種別	時代	備考
1	倉部川遺跡	松任市倉部町	平地・水田	包含地	中世	
2	相川新・雁田川遺跡	竹松町浜竹松	平地・砂丘	"	弥生・古墳	昭和40年防潮堤工事により一部削平。
3	相川新C遺跡	相川新町	平地・水田	"	不詳	
4	村井新遺跡	村井新町	平地・砂丘	"	弥生・平安	
5	浜相川・相川新遺跡	相川新町	"	"	弥生・古墳	昭和40年防潮堤工事により一部削平。
6	浜相川遺跡	相川町	"	"	"	
7	浜相川B遺跡	" "	平地・園地	"	弥生	
8	御手洗川遺跡	" "	平地・水田	"	"	
9	相川館跡	" "	"	館跡	室町	五輪塔出土。
10	中相川1・2号墳	" "	台地・社地	古墳	古墳	加茂神社本殿移建のため削平。
11	御手洗川B遺跡	" "	平地・水田	包含地	弥生後期	
12	浜相川C遺跡	" "	"	"	"	
13	浜相川D遺跡	" "	"	"	"	
14	野本遺跡	" "	"	"	弥生中・後期	
15	徳光ジョウガチ遺跡	徳光町	"	"	弥生前期	
16	平木D遺跡	平木町	"	"	"	
17	平木A遺跡	" "	"	"	"	
18	平木C遺跡	" "	"	"	不詳	
19	平木B遺跡	" "	"	"	弥生・平安	
20	北安田北遺跡	北安田町	平地・宅地	"	縄文～中世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出。
21	法仏遺跡	法仏町	"	"	平安	"
22	法仏南遺跡	" "	"	"	弥生	
23	浜竹松遺跡	竹松町浜竹松	平地・水田	"	弥生～奈良	
24	浜竹松C遺跡	" "	"	"	古墳	
25	浜竹松B遺跡	" "	"	"	"	
26	竹松D遺跡	竹松町	"	"	"	
27	竹松遺跡	宮永町	"	"	弥生・古墳	
28	竹松C遺跡	竹松町	"	"	弥生～中世	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出。
29	竹松E遺跡	" "	"	"	弥生後期	
30	倉部館跡	倉部町	"	館跡	室町	
31	倉部出戸遺跡	" "	"	包含地	弥生・古墳	竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出。
32	倉部B遺跡	" "	"	"	"	
33	八田中遺跡	八田中町	"	"	縄文・弥生 平安～近世	
34	一塚遺跡	一塚町	"	包含地・古墳	縄文～古墳	四隅突出型墳墓や方形周溝墓などを検出。
35	一塚オオミナクチ遺跡	" "	"	包含地	弥生後期	
36	旭小学校遺跡	宮永町	平地・耕地	"	弥生・古墳	玉造りに関連した竪穴住居を検出。
37	宮永遺跡	宮永町	平地・道路	"	弥生～奈良	竪穴住居跡、配石遺構を検出。
38	宮永B遺跡	" "	平地・水田	"	縄文～古墳・中世	
39	宮永坊の森遺跡	" "	"	包含地・寺院跡	弥生・古墳・中世	金属製仏具出土。
40	宮永市遺跡	宮永市町	"	包含地	弥生・平安・中世	
41	源波遺跡	相木町	平地・宅地	"	奈良・平安	
42	出城城跡	成町	平地・水田	城跡	室町	室篋印塔出土。
43	松任城跡	古城町	平地・公園	"	室町・安土桃山	

遺体とともに櫛が出土している。

後期になると、本遺跡周辺の遺跡は急激に増加し、海岸沿いの泥炭層地帯に集中してみられるようになる。泥炭層遺跡と呼ばれる、相川新・雁田川、浜相川・相川新、浜相川、浜相川Bなどの各遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が検出されている。また、砂丘の内側に広がる低湿地帯にも、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、飛躍的に遺跡が増加する。一塚遺跡⁽⁴⁾は、縄文時代～古墳時代にかけての複合遺跡で、弥生時代末期以降は墓域となっていたことが発掘調査により明らかになった。なかでも四隅突出型墳墓の検出は北陸で2例目であり、山陰との関連を示すものとして注目されている。また一塚遺跡周辺には、弥生時代後期～古墳時代にかけての遺跡が集中しており、一つの遺跡群を形成している。その他、本地域をはじめ倉部町、相川町、平木町地内にも弥生時代後期の遺跡が群在する。このように、弥生時代後期に本遺跡周辺の遺跡が増加するのは、扇端部や砂丘内側の低湿地帯が、生産基盤に適していたからであろう。

古墳時代に入ると、安原海岸砂丘の形成により泥炭層遺跡は消滅する⁽⁵⁾が、低湿地帯では継続して遺跡がみられる。しかし古墳の検出例は少なく、中相川古墳と一塚古墳があったことが知られるが、いずれも現存していない。中相川古墳は、中相川の加茂神社境内に径10～15mの円墳が2基あったことが伝えられており、出土遺跡から古墳時代中・後期のものであることが確認されている⁽⁶⁾。

奈良時代になると、本遺跡周辺の遺跡は激減し、扇尖部への立地が進むようになる。このことは、生産活動が、自然湧水を利用する段階から、人口灌漑を前提としたより高度な段階へと移行したことを示す。源波遺跡、北安田北遺跡⁽⁷⁾、法仏遺跡はいずれも扇端部の扇尖寄りに位置する、奈良時代～平安時代にかけての遺跡である。北安田北遺跡からは、竪穴住居跡や掘立柱建物跡がそれぞれ100棟近く検出されており、南方に位置する法仏遺跡とともに、古代の大集落が形成されていたことが明らかになった。

中世に入ると、倉部、徳光、相川、宮永で館跡や寺院跡があったと伝えられているが、考古学的調査は行われておらず、詳細は不明である。また文献によって周囲の村落の成立状況を見ると『源平盛衰記』に双河、浜倉部の名がみえるほか、室町期には北安田保、得光保、宮永郷などの名がみえる。

註(1) 藤則雄「地質上からみた手取川の変遷」『川北村史』 川北村史編さん委員会 1970。

(2) 湯尻修平・安英樹編『松任市一塚イチノツカ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1990。

(3) 久田正弘『八田中遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1988。

(4) 前田清彦『旭遺跡群発掘調査概報』 松任市教育委員会 1990。

(5) 藤則雄「砂丘・埋没林」『金沢周辺の第四系と遺跡』 北陸第四紀研究グループ 1975。

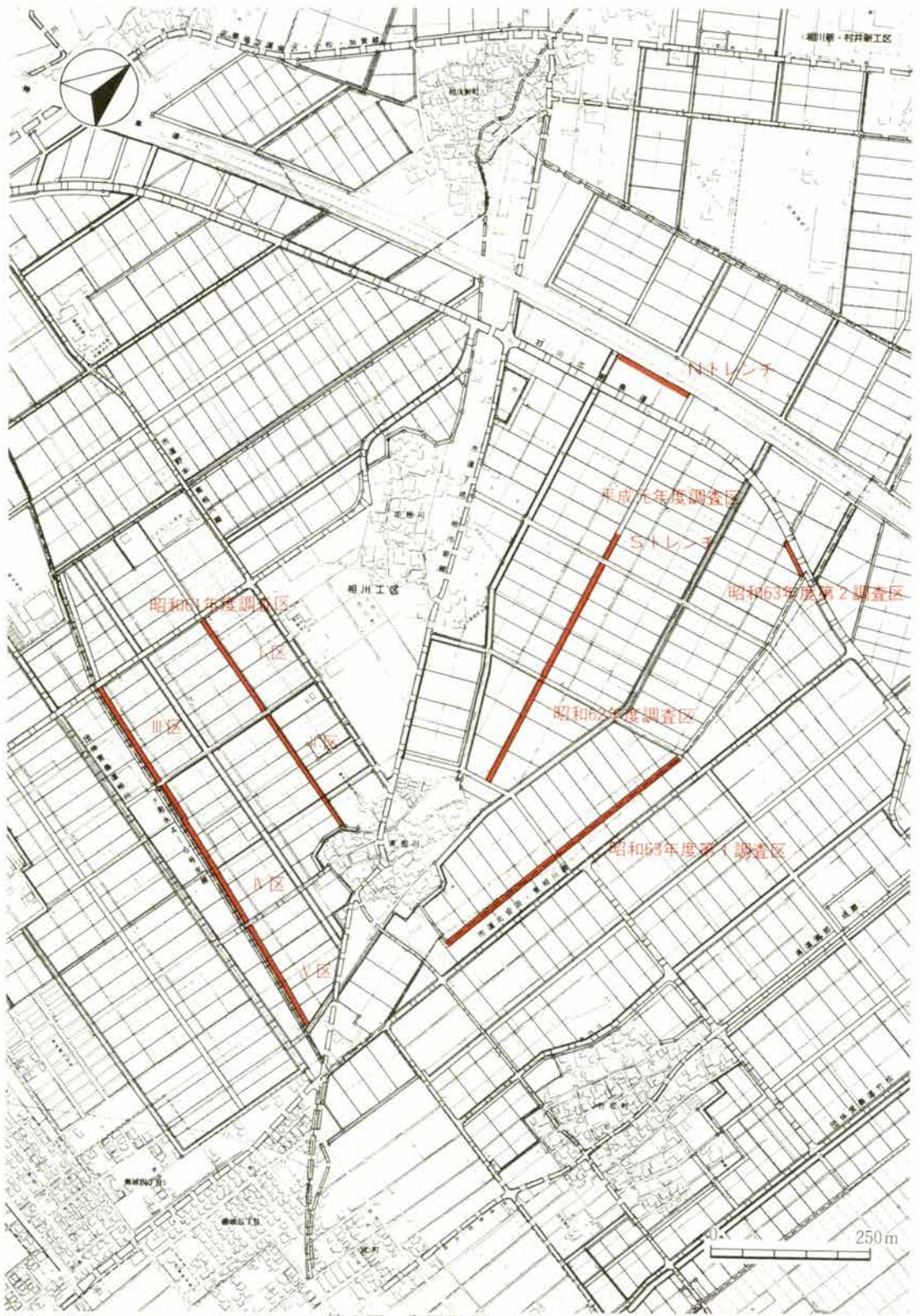
(6) 石川考古学研究会編『加賀三浦遺跡の研究』 石川県教育委員会・松任町教育委員会 1967。

(7) 西野秀和『北安田北遺跡Ⅲ』 石川県立埋蔵文化財センター 1990。

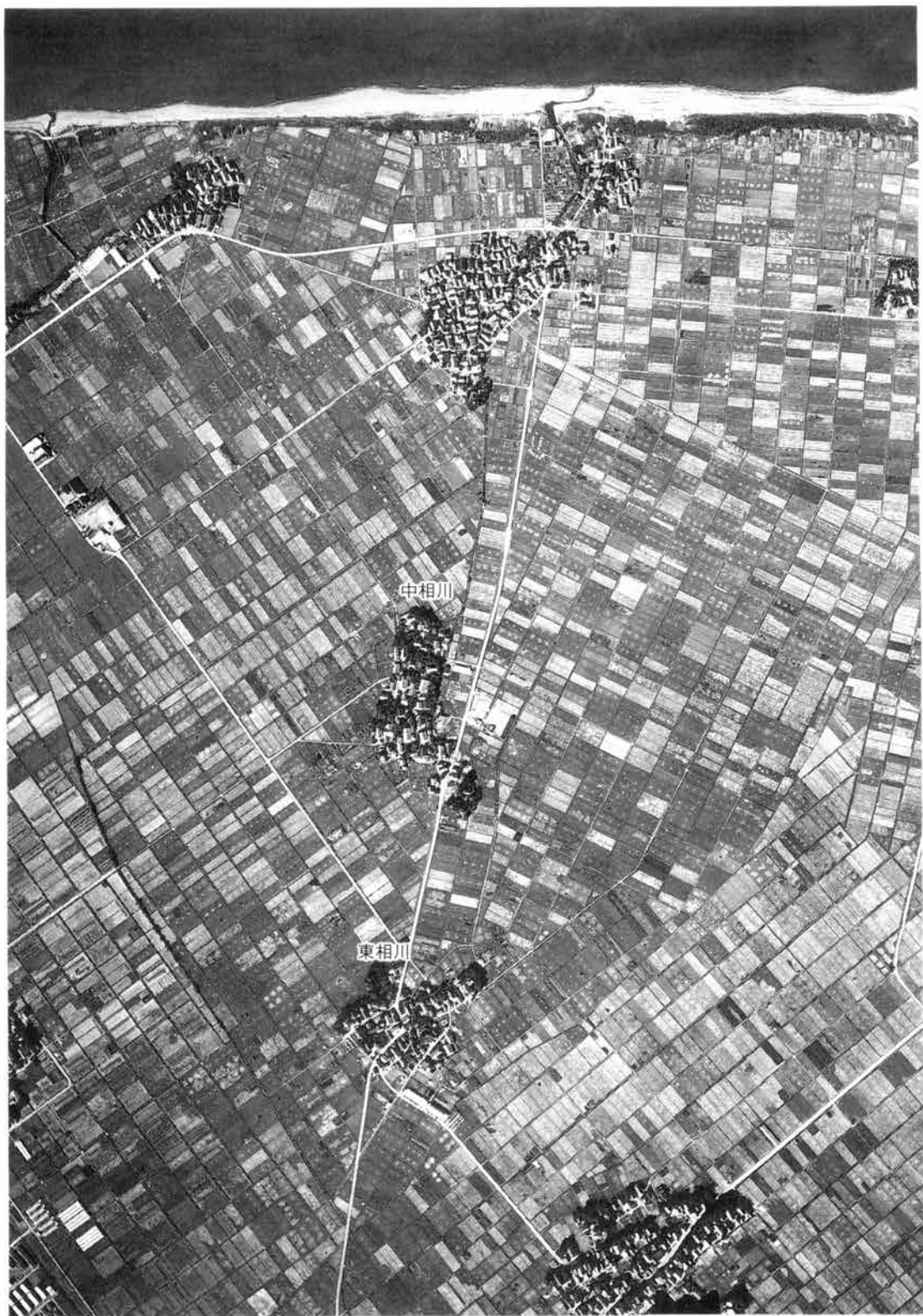
参考文献

若山喜三郎・高澤裕一監修『石川県の地名』 平凡社 1991。

御手洗村史編さん委員会編『御手洗の歴史』 御手洗公民館 1955。



第3図 発掘調査区位置図



相川町周辺の航空写真（昭和44年撮影）

第2章 昭和61年度の調査(中相川遺跡)

第1節 調査の概要

県営圃場整備事業御手洗・出城地区に伴う初年度(昭和61年度)の調査は、松任市相川町東相川地区、東市杵島姫神社裏の北側水田と七ヶ用水沿いの南側水田の排水溝建設予定地が調査の対象になった。調査区は北側水田西から2m×160mをⅠ区(320㎡)、さらに農道をはさんで神社裏までの2m×230m(460㎡)をⅡ区、南側水田西(松任市立北星中学校側)から2m×175m(350㎡)をⅢ区、さらに農道をはさんで次の農道までの2m×240m(480㎡)をⅣ区、2m×180m(360㎡)をⅤ区とし、それぞれ西側より10mごとに小調査区を設定した。調査総面積はその他若干を加えて約2,000㎡におよぶ。現地調査は、8月25日より重機による表土除去作業で始まった。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の順で作業が続けられたが、Ⅰ区の西側、Ⅱ区、Ⅳ区の西側、Ⅴ区が厚い礫層のため遺構・遺物は確認されなかった、8月27日、Ⅳ区東側の水田に遺物が多量に散布しており、工事のため一部破壊を受けていることが判明、早速、松任土地改良事務所と協議の上、破壊部分にトレンチ数本をいれて確認調査を行うことを決めた。9月4日より作業員を動員し、Ⅰ区より遺物包含層掘り下げ、遺構検出作業を開始する。その後、工事の関係で、Ⅱ区・Ⅴ区・Ⅳ区・Ⅲ区の順で調査を実施した。最後のⅢ区で多量の弥生時代の遺物が深いところより出土し、手間取ったものの11月14日には現地作業を終了することができた。遺構はⅠ・Ⅳ区で弥生時代～古墳時代の土坑・溝・ピットが検出された。遺物は先述のⅢ区西側隅を中心にⅠ・Ⅳ区でも弥生土器・土師器が比較的多量に出土し、奈良時代・中近世の遺物もわずかに認められた。

第2節 遺構

(1) Ⅰ区—土坑

1号土坑

Ⅰ—11区で検出された円形の土坑で、上縁径約1.9m、底面径約1.6m、深さ47cmを測る。東半の上縁から32cm下のところに三日月形のテラス面をもつ。覆土は8層からなり、遺物は3層の暗灰褐色粘砂層から土師器が多く出土している。また炭化物も多く含む。

2・3号土坑

1号土坑の東側で重なって検出された方形と思われる土坑で、規模の詳細は不明であるが、深さは2号土坑が9cm、3号土坑が19cmを測る。覆土は2号土坑が2層、3号土坑が6層からなる。遺物は2号土坑が3層の黄灰褐色粘砂層から、3号土坑は5層の暗黄灰色粘砂層からそれぞれ土器が出土しており、2号土坑のほうがやや遺物量が多い。層序関係から3号土坑が2号土坑よりも時期は新しい。

石組土坑

2号土坑のすぐ北西側で検出された隅円方形の土坑で、土坑内には拳大の礫のみが埋め込まれ

ていた。規模は上縁が86cm×86cm、底面が58cm×52cm、深さ44cmを測る。遺物はまったく認められず、時期は不明。

(2) I区-溝

1号溝

I-13区で検出された遺構で、土坑の可能性も考えられる。規模は上縁で長さ226cm、幅42cm、底面で長さ192cm、幅25cm、深さは最も深いところで40cmを測る。主軸方向はN-60°-Wをさす。

2号溝

1号溝の南で平行して検出された溝で、規模は上縁の幅28cm、底面の幅23cm、深さ11cmを測る。

3号溝

I-13区、1・2号溝の東で検出された遺構で、上縁の幅90cm、底面の幅44cm、深さ36cmを測る。遺構は南北方向をさす。覆土は2層からなり、1層は黒褐色粘砂、2層は灰褐色粘砂で、東側から流れ込むように堆積している。遺物は弥生終末～古墳初頭の土器が出土している。

(3) III区遺構

III-1～5区で多量の弥生土器が出土した。遺物が出土したのは溝か自然地形の落ち込み（河川か）と思われる地点で、現地表面から1m～1.4m下の灰白色粘質土層（7層）から特に多く出土した。かなり深い地点で出土したため遺存状態が良好で、完形品も多数見られた。この土層は炭化物を多量に含み、鉄分と思われる茶色の小ブロックを多量に含む。しかし2m幅のトレンチ調査であるため遺構の種別・形態・規模等については不明。

(4) IV区-土坑

0号土坑

IV-3区で検出された長円形の土坑で、長軸226cm、短軸93cm、深さ15cmを測る。

1号土坑

IV-21区で検出された隅円長方形の土坑で、長軸306cm、短軸208cm、深さ23cmを測る。遺構北東隅で5号土坑と切り合っているが、層序関係から1号土坑が新しい。覆土は3層からなる。1層は杯黄褐色粘砂で、炭化物を含むしまりの悪い層。2層はにぶい黄褐色粘砂。3層もにぶい黄褐色粘砂であるがやや暗い。遺物は土師器が出土している。

2号土坑

1号土坑のすぐ東に接して検出された隅円長方形の土坑で、長軸200cm以上、短軸128cm、深さ29cmを測る。覆土は2層からなり、1層はにぶい黄褐色粘砂、2層は灰黄褐色粘砂で炭化物を多く含む。

3号土坑

IV-22区で検出された楕円形の土坑で、長軸約220cm、短軸192cm、深さ45cmを測る。遺物は土師器が出土している。

5号土坑

先述のように1号土坑の北東隅で検出された楕円形の土坑で、長軸130cm、短軸107cm、深さ41cmを測る。覆土は、上層部を1号土坑により破壊されており、2層が確認された。1層は灰黄褐

色粘砂で礫を多量に含む。2層は黄色地山質土ブロック。

7号土坑

Ⅳ-23区で検出された楕円形の土坑で、深さ34cmを測る。覆土はにぶい黄褐色粘質土を中心に黒褐色粘質土や明黄褐色粘質土がわずかに混じる。遺物は土師器が出土している。

(5) Ⅳ区一溝

1号溝

Ⅱ-22区で検出された中世の溝で、上縁幅2.1m、底面幅37cmを測る。主軸方向はほぼ南北をさす。覆土は8層からなる。遺物は珠洲焼や土師質土器が出土している。

※本節を執筆するにあたって石川県立金沢商業高等学校情報システム科3年生東裕恵（松任市相川町）・廣坂幸子（松任市成町）の協力を得た。

（越坂 一也）

第3節 遺物

1. 弥生土器・土師器

本調査で出土した弥生土器、土師器のうち、実測し得たものはⅠ区12点、Ⅲ区133点、Ⅳ区15点の計160点であり、Ⅱ区、Ⅴ区では実測し得るものは出土しなかった。点数の多いⅢ区出土土器については後述することとし、以下Ⅰ区、Ⅳ区の順に報告する。

(1) Ⅰ区出土土器

本調査区から出土した弥生土器・土師器のうち実測し得たものは第2図1～12の12点である。ほとんどが遺構出土品であることから、以下遺構ごとに報告する。法量等については観察表を参照されたい。

Ⅰ-11区1号土坑からは、甕、壺各1点（1・2）、高杯2点（3・4）が出土した。1は受口状口縁系甕、2は（短脚）台付長頸壺、3は体部（杯部）が屈曲する高杯、4はいわゆる有段鉢形高杯である。4は結合器台（装飾器台）となる可能性もある。1、4は胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を、2は金色板状の黒雲母を含んでいる。古墳時代初頭に属するものであろう。

Ⅰ-13区5号土坑からは、甕2点（5・6）、鉢（?）1点（7）が出土した。5は擬凹線文有段口縁系甕、6は無文有段口縁系甕、7は高台状の脚台をもつおそらくは鉢。6は胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいる。7は破片が3号溝からも出土している。弥生時代終末ないしは古墳時代初頭に属するものであろう。

Ⅰ-13区3号溝からは、甕1点（8）、壺あるいは甕の底部片1点（9）が出土した。8は擬凹線文有段口縁系甕であり、胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいる。上記5号土坑出土品（5～7）と大きな時期差は感じられない。

その他包含層からは、器台2点（10・11、Ⅰ-7区）、高杯1点（12、Ⅰ-15区）が出土している。10は受部外面に4条よりなるややラフな擬凹線文を2段に施すもので、短頸壺の口縁部となる可能性もある。11は受部端部に2条の凹線を巡らせたのち、二重の竹管文を施した円形浮文を

配するもので、浮文は2個確認できるが、何個で一組になるのか何箇所に付されるのかは不明である。12は東海系高杯で、胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいる。10・11は弥生時代後期（後半）、12は古墳時代初頭に属するものであろう。

(2) N区出土土器

本調査区から出土した弥生土器・土師器のうち実測し得たものは第6図1～15の15点である。すべて土坑からの出土品であり、以下土坑ごとに報告する。法量等については観察表を参照されたい。

N-21区1号土坑からは、甕（2）、鉢（3）、底部片（1）各1点が出土した。2はくの字口縁系甕、ハケ調整痕のほか外面胴部にタタキ目が認められ、胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいる。3は椀形の小型鉢、小型高杯の可能性もある。1は壺または鉢の底部片、外面はミガキ、内面はナデ調整である。

N-22区3号土坑からは、甕3点（4～6）、鉢4点（7～10）が出土した。4は外面に竹管文を施した有段口縁系甕、胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいる。小片で壺の可能性もある。5（胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含む）は中形、6は小形のくの字口縁系甕、いずれも外面胴部にタタキ目が認められる。7（胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含む）・8はくの字状の口縁をもつ肩の張らない小型鉢、9・10は短い高台状の脚台をもつ小型鉢、いずれもミガキあるいはナデ調整を施している。

N-23区7号土坑からは、甕2点（11・12）、鉢1点（13）、蓋1点（14）が出土した。11・12はくの字口縁系甕、11の外面胴部にはタタキ目が認められる。12は小片である。13はくの字状の口縁をもつやや肩の張る小型鉢、内外面剝離が著しいが精製品である。14は内外面にミガキを施した蓋である。

N-3区0号土坑からは、鉢1点（15）が出土した。（脚）台付で口縁部が外反ぎみに短く立ち上がるものである。欠失する脚端部は比較的大きくラップ状にひらくものと推定される。

以上、本調査区出土土器は、一部弥生時代終末以前に遡るものがあるかもしれないが、大半は古墳時代初頭に属するものと考えられる。

(3) III区出土土器

本調査区から出土した弥生土器のうち、実測し得たものは133点（第9図～第21図1～133）である。1区から3区にかかる溝状遺構（1号溝）は、4区以降立ち上がりが調査区以外へのび、調査区内は、（おそらくは集落縁辺の）溝状遺構に接続する鞍部のなかを進むことになる。遺物（土器）の過半は、1～3区溝状遺構およびその上面の包含層より出土しているが、5区から8区にかけても、断続的にはあるが完形品や大形破片を含む（鞍部下層）土器群が検出されている。9区から17区までは、遺物の出土量は少なく実測し得たものは数点である。

出土弥生土器は、ほとんどが後期後半に属するものと考え、その編年的位置づけや性格等については小結でふれることとし、以下では1区から8区までの溝状遺構および鞍部下層出土土器（101点）を、その出土状況からA～Eの5群に分けて報告し、のち1・2区を中心とする遺物包含層出土土器他（32点）について報告する。なお、個々の土器の法量等については観察表を参

照されたい。

A群土器（1～45） A群土器としたものは、1区から3区にかかる溝状遺構（1号溝）のうち、1区から2区にかけて約13mの範囲で検出された一群である。実測点数は甕15点、壺11点、高杯11点、器台4点、底部片3点、脚（台）部片1点の45点である。

甕（1～15）は、有段口縁の口縁部外面に擬凹線文を施したもの（擬凹線文有段口縁系甕、以下甕A）が10点（1～10）、有段口縁の口縁部内外面を横ナデ調整でしあげるもの（無文有段口縁系甕、以下甕B）が5点（11～15）出土しており、甕Aのうち2、3の外面肩部には波状文が、4～9の同部には刻み目が施される。口径13～14cm前後のもの（8、15）、15～16cm前後のもの（1、3、4、7、9、10、14）、18～19cm前後のもの（2、5、6、11～13）がある。

壺（16～26）は、口径15～16cm前後、器高15cm前後の中の小形（ないしは小の大形）の擬凹線文有段口縁系壺（以下壺A）が5点（16～19、26）、分量、形態等が多様であるが短頸壺あるいは広口壺の口縁～肩部片が5点（20～24）、小形の無文有段口縁脚台付壺が1点（25）出土している。壺Aのうち16、19の口縁部下段には二孔一対の紐通し孔が穿たれており、小片ではあるが26は、外面肩部に二本一組の沈線（3組）とその間に貝殻腹縁による刻み目（2段）を施した装飾性に富むものである。

高杯（30～40）は、杯体部が屈曲し外反する口縁部の端部に面をもつもの（以下高杯A）が3点（30～32）、杯体部に段をもつもの（有段鉢形高杯、以下高杯B）が2点（33、34）、脚部、脚端部片が6点（38～40）出土しているが、38～40の脚端部片は器台の可能性もある。

器台（42～45）は全形を知り得るものはなく、脚部、脚端部片が3点（42～44）、受部片が1点（45）出土しているのみである。そのうち有段状を呈する受部外面に波状文を施した45は、壺の可能性も否定できない。

他に（脚端部）径12.3cmを測る41は、鉢または壺の脚台かと考えられるが、器類を特定できなかった。大まかな観察では、Ⅲ区出土土器のうちこの個体のみ胎土（粘土素地）中に海綿の骨片を含んでいるのが注目される。

B群土器（46～66） B群土器としたものは、1区から3区にかかる溝状遺構（1号溝）と4区以降の鞍部下層出土土器のうち、2区のごく一部から4区にかけて約19mの範囲で検出された一群で、西側の4区出土土器（範囲約9m）は相対的に少なく（5点）、大半（16点）は東側約10mの範囲（2区のごく一部から3区）で出土している。実測点数は甕10点、壺1点、高杯3点、器台4点、鉢1点、底部片2点の21点である。

甕（46～55）は、甕Aが4点（46～49）、甕Bが4点（50、51、53、54）出土している。外面肩部に刻み目を施した52は、甕Bに含めるべきかとも考えたが別系統の可能性もあり分類を保留した。小片の55は、弥生時代中期に属するものであろう。甕Aのうち46、47の外面肩部には波状文が、48、49の同部には刻め目が施される。甕Bのうち50、51、53の外面肩部には列点文あるいは刻み目が施される。口径13～15cm前後のもの（53、54）、15～17cm前後のもの（48～52）、17～18cm前後のもの（46、47）がある。

壺（56）は、くの字口縁の端部外面に面をもつもの1点のみの出土である。胴部内外面に煤、

炭化物が付着しており甕の可能性もあるが、器高（15.0cm）に比して口径（11.5cm）が小さいことなどから壺の多様性のなかで考えておきたい。

高杯（60～62）は、高杯Aが1点（60）、脚部、脚端部片が2点（61、62）出土している。

器台（63～66）は比較的多く出土しているが、形態的には多様性に富んでいる。受け部が（おそらくは脚部も）短い有段状を呈するもの（63）、上下とも有段状を呈するが、受け部のみ比較的発達しているもの（64）、発達した有段状の受け部と脚部をもつもの（65）、受け部端部に外傾する短い付加状の面をもち、ラッパ状脚をもつもの（66）である。

鉢（58）は、口縁部が短く外側へ屈曲する器高5.8cm（推定）の小形品である。

C群土器（67～80） C群土器としたものは、鞍部下層出土土器のうち、5区の西側3m弱の範囲で検出した一群である。実測点数は甕10点、壺1点、高杯1点、脚部片1点、底部片1点の14点である。

甕（67～72、75～78）は、甕Aが7点（67～72、75）、甕Bが3点（76～78）出土している。甕Aのうち67、71、75の外表面肩部には波状文が、70の同部には刻み目が施される。甕Bのうち小形の77の外表面肩部には刻み目が施される。口径11～15cm前後のもの（77、78）、16～17cm前後のもの（69、70、76）、17～22cm前後のもの（67、68、71、72、75）がある。

壺（79）は甕B類似の口縁形態をもつもので、口径16.2cmを測る。

高杯（80）は1点のみの出土であるが、完形品（高杯A）である。

なお、74の脚部片は器類不明であるが、あるいは鉢になるものかもしれない。

D群土器（81～89） D群土器としたものは、鞍部下層出土土器のうち、6区から7区にかけて約14mの範囲で検出した一群である。実測点数は甕3点、壺2点、高杯2点、器台1点、鉢1点の9点である。

甕（81、82、89）は、甕Aが2点（81、89、ともに外表面肩部には刻み目が施される）、甕Bが1点（82）出土している。口径17cm前後のもの（81、82）、30cm前後のもの（89）がある。

高杯（85、86）は2点出土しているが、ともに杯部片（高杯A）である。

器台（87）は脚部片1点のみであるが、有段状を呈する脚端部外面にD類（S字状渦文）スタンプ文を施すものである。

鉢（88）は、短い高台状の脚台をもつ小形（器高5.7cm）のものである。

E群土器（90～101） E群土器としたものは、鞍部下層出土土器のうち、8区約5mの範囲で検出した一群である。実測点数は甕6点、壺1点、高杯2点、鉢1点、有孔鉢1点、底部片1点の12点である。

甕（90～94、96）は、甕Aが5点（90～94、すべて外表面肩部に波状文が施される）、甕Bが1点（96）出土している。口径16～19cm前後のもの（90～94）、27cm前後のもの（96）がある。

壺（97）は口縁部を欠失するもの1点が出土しているが、おそらくは短頸壺であろう。

高杯（99、100）は2点出土しているが、ともに杯部片（高杯A）である。

鉢（95）は、甕B類似の口縁形態をもつもの1点が出土している。

有孔鉢（101）は、径3.0cmの底部に孔（1、焼成前）を穿ったもので、器高15.5cmを測る。

このほか、16区で検出した溝状遺構からは、高杯脚部片（102）が出土している。

遺物包含層等出土土器のうち、実測し得たものは甕6点、壺9点、底部片7点、高杯2点、器台2点、脚部片2点、鉢1点、蓋2点の31点（103～133）である。グリッド別の出土数は、1区10点、2区17点、9区1点、12区1点、グリッド不明（調査区西側）2点となっており、ほとんどは1、2区出土である。これらは、1区から3区にかかる溝状遺構（1号溝）の上面から出土したものであり、前述したA群土器と強い関連性があるものと推定される。以下、器類ごとに報告する。

甕（103～108）は、甕Aが2点（103、104。103の外面部には刻み目が、104の同部には波状文が施される）、甕Bが3点（105～107）出土している。外面肩部に刻み目を施した106は個数、配置ともに不明ながら、口縁（端）部に焼成前穿孔を施している。小片の108は弥生時代中期に属するものであろう。口径13cm前後のもの（107）、16～19cm前後のもの（103～106）がある。

壺（109～117）は、壺Aが2点（109、110）出土しているほか、短頸壺（112、114）、小片ではあるが外面肩部に並行沈線と刻み目を施したもの（117）等、多様な形態のものが出土している。

高杯（125、126）は、杯部片（125、高杯A）、杯体部～脚部片（126）の2点が出土している。

器台（129、130）は、脚端部片（129）、受け部片（130）の2点が出土しているが、後者は受け部外面に並行沈線とD類（S字状渦文）スタンプ文を施している。

このほか、おそらくは高杯と思われる脚部片が2点（127、128）出土しており、形式は異なるものの、ともに外面に並行沈線、D類（S字状渦文）スタンプ文等を施している。

鉢（131）は、甕A類似の口縁形態をもつもの1点が出土している。

蓋は2点（132、133）の出土であるが、133のつまみ部には孔（1、焼成前）が穿たれている。

（4）小 結

以上、本調査で出土した弥生土器、土師器のうち、実測し得た160点について報告してきた。I区（12点）、N区（15点）出土土器については、点数も少なく個別にふれてきたためここであらためてふれることはせず、以下では、Ⅲ－1区～8区溝状遺構（1号溝）および鞍部下層出土土器のうち、明らかに弥生時代中期の所産と考えられる第14図55を除くA～E群土器100点（第9図～第19図1～54、56～101）についてふれる。なお、対象の土器群が概ね弥生時代後期後半（法仏式期）に属すると考えられることは前述したとおりであるが、その細分編年上の位置づけについては、既出土器（細分）編年をめぐる問題が未整理（後述）であるため今回はなしえなかった。それらを不問に付したまま性格、器類、器種、形式構成の順にふれていきたい。

Ⅲ－1区～8区溝状遺構（1号溝）および鞍部下層出土土器100点は、出土状況（地点的なまとまり）からA～Eの五群に分けることができるが、いずれも堅穴、土坑等狭義の集落域の一般的な出土状況とは異なるものである。調査区はおそらくは集落縁辺部に位置するものであろうが、大形破片を主体とし地点的にもまとまって出土していることから、単なる流れ込みとは考えにくく、単一時期かどうかは別として、たとえば集落祭祀に使用した土器群の一括廃棄等強い人為性を想定することもできる。

各群の数量的な内訳は、A群土器45点（範囲13m）、B群土器20点（範囲19m）、C群土器14点

(範囲 3 m)、D 群土器 9 点 (範囲 14 m)、E 群土器 12 点 (範囲 5 m) となり、出土密度 (点数/範囲) は、C 群 4.7、A 群 3.5、E 群 2.4、B 群 1.1、D 群 0.6 の順となる。

器類構成は、全体では甕・壺類 66 点 (甕 43 点、壺 16 点、底部片 7 点)、高杯・器台類 28 点 (高杯 19 点、器台 9 点)、その他 (鉢など) 6 点となる。群ごとの構成は、A 群が甕・壺類 29 点 64% (甕 15 点 33%、壺 11 点 24%、底部片 3 点 7%)、高杯・器台類 15 点 33% (高杯 11 点 24%、器台 4 点 9%)、その他 (鉢など) 1 点 3%、B 群が甕・壺類 12 点 60% (甕 9 点 45%、壺 1 点 5%、底部片 2 点 10%)、高杯・器台類 7 点 35% (高杯 3 点 15%、器台 4 点 20%)、その他 (鉢など) 1 点 5%、C 群が甕・壺類 12 点 86% (甕 10 点 72%、壺 1 点 7%、底部片 1 点 7%)、高杯 1 点 7%、その他 (鉢など) 1 点 7%、D 群が甕・壺類 5 点 55% (甕 3 点 33%、壺 2 点 22%)、高杯・器台類 3 点 33% (高杯 2 点 22%、器台 1 点 11%)、その他 (鉢など) 1 点 12%、E 群が甕・壺類 8 点 86% (甕 6 点 50%、壺 1 点 8%)、高杯 2 点 17%、その他 (鉢など) 2 点 17% となる。

甕は、A (擬凹線文有段口縁系甕)、B (無文有段口縁系甕) を主体とするが、その比率はそれぞれ全体 28 : 14 (2 : 1、保留 1 点)、A 群 10 : 5 (2 : 1)、B 群 4 : 4 (1 : 1、保留 1 点)、C 群 7 : 3 (2.3 : 1)、D 群 2 : 1、E 群 5 : 1 となる。略完形であれば法量 (容量) 別に小形、中形、大形等の分類が可能であり、本来はそれぞれ別器種とすべきであるが、口径のみでは難しい面もあり、小地域、単一時期、形式 (系統) 別の検討と相互比較が必要と考えているため今回は特に分類しなかった。

壺は、各種短頸壺と擬凹線文有段口縁小形壺 (壺 A) を主体とするが、両者は別器種と考えられる。後者の壺 A については、本調査では確認できなかったものの脚台をもつものもあり、もないものも器台とセットをなす可能性がある。

高杯は A (口縁端部有面、杯部単純屈曲)、B (杯部有段、鉢形) を主体とするが、全体では A : B = 9 : 2 (脚部片など不明 8 点) となる。なお器台、鉢ほかについては、出土量自体が少なく多様性に富んでいるため主体的なものを特定できなかった。

以上のような構成が、前述した土器群の性格にかかわるものかどうかは、同時期や前後する時期、周辺および他地域の多様な性格をもつ資料との比較検討が必要であるが、細分編年上の位置が確定できないこと、調査区の制約から各土器群を完掘しておらず、資料の構成比が各土器群を代表していない可能性があることなどから、具体的な検討は類例の増加を待って別の機会におこないたいと考えている。

さて問題の細分編年上の位置づけであるが、現在、加賀地域における弥生時代後期 (前半～後半) ~ 同終末期の土器様式 (型式) は、概ね猫橋式 → 法仏式 → 月影式といった変遷を辿り、橋本澄夫、吉岡康暢、谷内尾晋司、田嶋明人の各氏によって、それぞれ〈猫橋 I 式・II 式〉→〈月影式^{①)}〉、〈猫橋 I 式 = 弥生 V (-1・2) 期〉→〈塚崎 I 式〉→〈猫橋 II 式 = 塚崎 II 式 (古?) = 弥生 VI - 1 期〉→〈月影 I 式・II 式古 (= 月影土壙) = 塚崎 II 式 (新?)・III 式 = 弥生 VI - 2 期〉→〈月影 II 式新 = 弥生 VI - 3 期^{②) ③)}〉、〈猫橋 I 式〉→〈猫橋 II 式 = 塚崎 I 式・II 式古 = 法仏 I 式・II 式〉→〈塚崎 II 式新・III 式 = 月影 I 式・II 式^{④)}〉、〈法仏 II 式 = 弥生終末 I 期〉→〈月影 I 式 = 弥生終末 II₁ 期〉→〈月影 II 式 = 弥生終末 II₂ 期^{⑤)}〉といったかたちで細分編年がなされている。本節

でいう後期後半（法仏式期）とは、大筋では各氏の猫橋Ⅱ式、弥生Ⅵ-Ⅰ期、法仏Ⅰ式・Ⅱ式、弥生終末Ⅰ期にそれぞれ対応するものであるが、型式に付与された概念や基準資料の位置づけ、画期の設定箇所やその評価など、必ずしも一致しているわけではない。というよりむしろ、上述の細分編年自体、それぞれその目的とするところや方法、背景などを異にするためか、随所に無視できない齟齬があるように見え、それらを統合的に理解する作業がほとんどできていないのが実情である。

対象となる加賀地域が小地域の複合体的な様相をもつ可能性についてはかつてふれたことがある⁶⁾が、現在の状況は、単一小地域である程度の時期幅を射程におくことができる出土状況とも良好な後期弥生土器が、依然として塚崎遺跡出土資料等驚くほど少ないこともあってか、資料間の様相差が遺跡、遺構差なのか、時期差、地域差なのかを十分に検証できないまま、前述の研究史をめぐる問題を棚上げしたかたちで、新出資料の圧倒的な増加を背景にいわば一遺跡（調査）一編年といった状況さえ不思議としていないように見える。土器（細分）編年が最低限果たすべき役割の一つは、それが時間の尺度として機能することにあるが、それらは徹底した資料批判と研究史の詳細な検討、なかんづく土器（細分）編年方法の確立をとおしてのみ可能なのだとあらためて感じている。

註(1) 橋本 澄夫 「弥生文化の発展と地域性-北陸-」『日本の考古学』Ⅲ 河出書房 1966 東京。

(2) 吉岡 康暢 「土器編年と遺構の年代」『塚崎遺跡』『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 石川県教育委員会 1976 金沢。

(3) 吉岡 康暢 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁』〔古代編〕六興出版 1991 東京。

(4) 谷内尾晋司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983 金沢。

(5) 田嶋 明人 「土師器の編年 北陸」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣出版 1991 東京。

(6) 栃木 英道 「考察」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987 金沢。

2. 古代土器、瓦質土器、石器

本調査で出土した古代土器は少なく、実測し得たものはわずか2点（第6図16、17）である。16は、Ⅰ-15区遺物包含層より出土した口径16.9cmを測るつまみ部分を欠質した蓋、17は、Ⅰ-16区ピット24より出土した口径14.2cm、器高1.6cmを測る盤、ともに8世紀中頃かそれよりやや下の時期のものであろう。

このほかに、Ⅳ-16区遺物包含層より底径20.6cmを測る瓦質土器（第6図18）が出土している。

石器は、Ⅲ-2区遺物包含層より軽石製品2点（第6図19、20）が出土している。伴出土器から弥生時代後期（後半）にとみなすものであろう。

（栃木 英道）

出土土器観察表凡例

- 番号 各挿図の遺物番号に一致する。
- 出土地点 出土調査区、グリッド、遺構、位置、層位、取り上げ番号等を記した。
- 器類 壺、甕、高杯、器台、鉢（・有孔鉢）、蓋のほか、（底部）、（脚・脚台）の別を記した。他の器類となる可能性のあるものは（ ）つきで記した。
Ⅲ区出土土器の一部に記した甕A、高杯Bなどのアルファベットは形式（系統）にあたるものである。
- 法量 a 壺、甕、高杯、鉢は口径、器台は受部径、蓋はつまみ部の径を記した。
b 壺、甕、鉢は胴部最大径、高杯、器台、（脚・脚台）は脚（台）部最小径、蓋はつまみ部最小径を記した。
c 壺、甕、鉢、（底部）は底径、高杯、器台、（脚・脚台）は脚（台）端部径、蓋は口径を記した。
d 器高を記した。
（上記の数値のうち（ ）つきは推定値、－は計測不能を表している。）
- 色調 外面、内面の順に記した。／のないものは内外面同色である。
- 煤 ○ 煤、炭化物の付着を示す。
- 赤彩 △ 赤彩（痕）を示す。図中にアミで表示したが、不鮮明なものは無表示である。
- 黒斑 □ 黒斑の存在を示す。○×○cmは範囲（縦方向×横方向）を示す。不鮮明なものは無表示である。
- 特記事項 擬凹線文の条数、孔の数・径、文様、調整、その他特記事項を記した。
- 整理 No. 実測図番号に一致する。遺物には黄色で数字のみ注記している。
- 遺存度 図化し得た範囲の横方向への遺存度を示す。部位によって遺存度が異なるものは、その旨他欄に記した。

I区出土土器観察表(第2図1~12)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
1	I-11区 1号土坑	甕	15.4	-	-	-	橙/浅黄橙色		口縁ナデ、海綿骨片含	C003	小片
2	I-11区 1号土坑	台付壺	7.6	16.4	15.2	-	浅黄橙/緑黄	脚孔4径8~12mm、	外口沈線4~5、雲母含	C006	1/4
3	I-11区 1号土坑	高杯	22.8	-	-	-	橙色			C005	~1/4
4	I-11区 1号土坑	(高杯)	20.4	-	-	-	浅黄橙色/橙		海綿の骨片を含む	C188	小片
5	I-13区 5号土坑	甕	14.6	-	-	-	浅黄橙色	外面縦凹線9	内口指頭瓦痕	C008	小片
6	I-13区 5号土坑	甕	16.6	-	-	-	浅黄橙色		口頸ナデ、海綿骨片含	C007	~1/4
7	I-13区 5土・3溝	(脚台)	-	4.2	4.2	-	にぶい褐色		高さ9mmの高台状脚	C009	ほぼ完
8	I-13区 3溝下層	甕	16.6	-	-	-	橙色	○外面、縦凹線8、	内口ナデ、海綿骨片含	C010	小片
9	I-13区 3号溝	(底部)	-	-	4.3	-	黄褐/浅黄橙		外面ハケ→ナデ	C189	ほぼ完
10	I-7区 包含層	器台	23.4	-	-	-	赤褐/にぶい橙色	内面口縁ナデ	外縦凹線4条×2段	C001	小片
11	I-7区 包含層	器台	19.6	-	-	-	浅黄橙色	受端部凹線2	円浮+2重竹管文2~	C002	~1/4
12	I-15区 包含層	高杯	23.6	-	-	-	浅黄橙色	海綿の骨片を含む	内外ハケ→ミガキ	C004	~1/4

N区出土土器観察表(第6図1~15)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
1	N-21区 1土上面	(底部)	-	-	3.5	-	浅黄橙/灰白		内面ナデ	C166	ほぼ完
2	N-21区 1号土坑	甕	17.8	-	-	-	褐灰/灰白色	海綿の骨片を含む	外面胴部タタキ目	C103	~1/4
3	N-21区 1号土坑	(鉢)	11.8	-	-	-	橙色			C101	1/4
4	N-22区 3号土坑	(甕)	18.4	-	-	-	灰白色	○外、外口竹管文	海綿の骨片を含む	C105	小片
5	N-22区 3号土坑	甕	15.9	-	-	-	灰白色	○内外、外胴タタキ	海綿の骨片を含む	C104	~1/4
6	N-22区 3号土坑	甕	12.6	-	-	-	淡赤橙色	口縁、内胴部ナデ	外面胴部タタキ目	C100	1/4
7	N-22区 3土拡張	小型鉢	9.4	7.9	2.8	7.4	浅黄橙色	内面一部褐灰色	海綿の骨片を含む	C096	2/3~
8	N-22区 3号土坑	小型鉢	9.8	8.0	2.6	7.8	橙色		口縁ハケ→ナデ、胴ナデ	C098	3/4~
9	N-22区 3土拡張	小型鉢	11.2	3.6	3.9	6.8	浅黄橙色	外面一部褐灰色	高さ3mmの高台状脚	C099	ほぼ完
10	N-22区 3号土坑	小型鉢	-	3.9	4.3	-	灰白色		高さ4mmの高台状脚	C106	ほぼ完
11	N-23区 7号土坑	甕	14.9	-	-	-	灰白色		外面胴部タタキ目	C109	~1/4
12	N-23区 7号土坑	甕	16.8	-	-	-	浅黄橙/にぶい橙		口縁部ナデ	C110	小片
13	N-23区 7号土坑	小型鉢	8.9	-	-	-	褐灰色		内外面剥離多、ナデ	C107	1/4
14	N-23区 7号土坑	蓋	3.3	2.8	-	-	にぶい橙色		内外面ヘラ磨き	C108	ほぼ完
15	N-3区 0号土坑	台付鉢	13.9	14.4	3.2	-	灰白色		海綿の骨片を含む	C097	1/4~

III区出土A群土器観察表(第9図~第12図1~45)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
1	III-2区 P-26	甕A	15.7	17.0	(2.9)	(21.5)	にぶい黄橙色	○□外面5×10cm	口完、凹7、口内頸外ナデ	C049	1/2
2	III-1区 P-D	甕A	17.7	19.2	-	-	にぶい黄橙色	○外、口頸部完	外口凹8、口縁内頸外ナデ	C164	1/2
3	III-2区 30・39	甕A	15.8	19.0	4.0	23.8	浅黄橙色	○□外面4×4cm	外口凹7、口縁内頸外ナデ	C045	ほぼ完
4	III-1区 P-D	甕A	15.7	20.7	-	-	にぶい黄橙色	□外面7~×13~cm	縦凹線、口縁内頸外ナデ	C028	ほぼ完

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整№	遺存度
5	Ⅲ-1区 P-6	甕A	18.7	22.0	-	-	浅黄橙色	○外面、口縁部完	外口凹7、口縁内頸外ナデ	C034	1/4
6	Ⅲ-1区 下層	甕A	18.4	-	-	-	にぶい黄橙色	○外面	外口凹5、口縁内頸外ナデ	C152	~1/6
7	Ⅲ-2区 P-24	甕A	15.8	16.3	-	-	浅黄橙色	外面擬凹線5条	口縁部内面頸部外面ナデ	C055	1/4
8	Ⅲ-2区 P-F	甕A	13.2	-	-	-	浅黄橙色	○外面	擬凹線5、口縁内頸外ナデ	C030	1/3
9	Ⅲ-1区 P-A	甕A	15.2	15.2	-	-	明黄褐色		擬凹線4、口縁内頸外ナデ	C027	1/3
10	Ⅲ-1区 P-15	甕A	16.3	17.7	-	-	にぶい黄褐色	擬凹線2~→ナデ	口縁内面頸部外面ナデ	C021	ほぼ完
11	Ⅲ-1区 P-9	甕B	18.7	21.0	4.2	27.0	浅黄橙色	○外面	外面口頸部、内口縁ナデ	C032	ほぼ完
12	Ⅲ-2区 P-E	甕B	17.9	20.9	3.5	26.0	浅黄橙色	○□外面9×9cm	口縁部完、口頸部ナデ	C040	3/4
13	Ⅲ-2区 P-E	甕B	17.6	16.8	4.1	20.7	にぶい橙色	○内外面	口頸部ナデ	C016	ほぼ完
14	Ⅲ-1区 P-A	甕B	15.4	14.3	4.3	17.2	にぶい黄橙色	○内外面	口完、口頸部ハケ→ナデ	C029	3/4
15	Ⅲ-2区 P-29	甕B	14.4	-	-	-	にぶい黄橙色	○外面	口頸部ナデ	C050	1/3
16	Ⅲ-1区 P-7	壺A	15.6	16.7	4.2	14.7	淡赤橙色	○△外面、凹7~8	2穴1対4径3mm	C017	ほぼ完
17	Ⅲ-1区 下層	壺A	14.7	-	-	-	浅黄橙色	○外面	外口凹6、口縁内頸外ナデ	C161	1/4
18	Ⅲ-2区 P-F	壺A	16.4	-	-	-	浅黄橙色	○外面	外面口縁部擬凹線5条	C140	1/4
19	Ⅲ-2区 P-31	壺A	15.8	-	-	-	にぶい黄橙色	○外、2穴1径4mm	外口擬凹線8、頸部ナデ	C044	1/4
20	Ⅲ-1区 P-C	壺	20.4	-	-	-	浅黄橙色	外面擬凹線6条	外頸内口頸部ハケ→ナデ	C030	1/4
21	Ⅲ-2区 P-22	壺	14.7	-	-	-	浅黄橙色		外口凹6、外頸内口頸ナデ	C146	~1/4
22	Ⅲ-1区 P-10	壺	11.6	-	-	-	にぶい黄橙色		外ナデ、内面一部ナデ	C145	1/4
23	Ⅲ-1区 P-14	壺	13.0	-	-	-	褐色/浅黄橙		口頸部ハケ→ナデ	C151	1/2
24	Ⅲ-2区 P-17	壺	12.4	-	-	-	浅黄橙色		口縁部ハケ→ナデ	C037	ほぼ完
25	Ⅲ-2区 P-32	壺	12.2	10.8	8.3	13.7	にぶい黄橙色		外面靱土痕2、脚台付	C036	ほぼ完
26	Ⅲ-1区 下層	壺A	-	-	-	-	浅黄橙色		外沈線、貝殻による刻目	C019	小片
27	Ⅲ-1区 P-13	(底部)	-	-	4.0	-	にぶい橙色			C177	1/2
28	Ⅲ-1区 下層	(底部)	-	-	4.3	-	浅黄橙/黒褐			C178	ほぼ完
29	Ⅲ-1区 下層	(底部)	-	-	2.8	-	浅黄橙色		外面ナデ、内面一部ナデ	C176	ほぼ完
30	Ⅲ-1区 P-B	高杯A	26.0	4.6	15.3	19.8	浅黄橙色		胸部内面ハケ・ナデ	C035	ほぼ完
31	Ⅲ-2区 P-35	高杯A	28.2	-	-	-	浅黄橙色	□外面		C147	~1/4
32	Ⅲ-1区 P-13	高杯A	24.0	3.8	-	-	淡褐色		外面煤状炭化物付着	C018	ほぼ完
33	Ⅲ-1区 P-11	高杯B	30.8	-	-	-	浅黄橙色			C013	1/3
34	Ⅲ-2区 P-1	高杯B	27.4	-	-	-	浅黄橙色	△外面		C038	1/4
35	Ⅲ-2区 P-38	高杯	-	4.7	-	-	浅黄橙色	△外、孔4径5mm	胸部内面ハケ→ナデ	C046	ほぼ完
36	Ⅲ-2区 P-29	高杯	-	3.9	-	-	浅黄橙色	孔4径9~10mm	脚部内面ナデ	C150	ほぼ完
37	Ⅲ-1区 A下	高杯	-	3.5	-	-	灰白色	孔4径6~10mm	脚部内面ナデ	C169	ほぼ完
38	Ⅲ-1区 P-10	(高杯)	-	-	15.9	-	浅黄橙色	孔4径4~5mm	内面脚部外面脚端部ナデ	C042	~1/2
39	Ⅲ-1区 P-8	(高杯)	-	-	15.6	-	浅黄橙色	外面脚部沈線5条	孔4径6~8mm	C043	2/3

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No.	遺存度
40	Ⅲ-2区 P-33	(高杯)	-	-	14.8	-	浅黄橙色		内外面磨耗顯著	C047	~1/4
41	Ⅲ-2区 P-39	(脚)	-	2.8	12.3	-	赤橙色		海綿、赤色土塊を含む	C041	ほぼ完
42	Ⅲ-1区 下層	器台	-	-	17.4	-	にぶい黄橙色		内面一部ナデ	C020	~1/4
43	Ⅲ-1区 P-2	器台	-	3.95	-	-	灰白色		孔4径(5)mm	C144	ほぼ完
44	Ⅲ-1区 P-12	器台	-	4.0	-	-	橙色		2孔3組径3~7	C031	ほぼ完
45	Ⅲ-1区 下層	(器台)	-	-	-	-	橙色/ にぶい黄色		△外面	C011	1/8

Ⅲ区出土B群土器観察表(第13図~第14図46~66)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No.	遺存度
46	Ⅲ-4区 下層	甕A	18.0	-	-	-	にぶい黄橙色		外口凹6、口縁内頸外ナデ	C084	1/4
47	Ⅲ-3区 P-58	甕A	17.2	-	-	-	浅黄橙/橙色		外口凹5、口縁内頸外ナデ	C074	1/4
48	Ⅲ-3区 P-43	甕A	17.4	(16.2)	-	-	にぶい褐色		口縁部3/4	C063	1/4
49	Ⅲ-3区 P-57	甕A	16.4	(17.0)	-	-	にぶい褐色		○外面	C065	1/4
50	Ⅲ-4区 P-67	甕B	16.7	20.0	2.9	24.7	浅黄橙色		○外面	C082	1/2~
51	Ⅲ-4区 P-63	甕B	14.4	-	-	-	橙色		口縁部3/4	C088	1/2
52	Ⅲ-3区 P-55	甕	16.0	-	-	-	橙色		頸部以下1/3	C071	1/6
53	Ⅲ-3区 下59	甕B	14.5	12.5	-	-	にぶい黄橙色		○外面	C073	1/4
54	Ⅲ-3区 P-53	甕B	13.2	11.7	4.0	12.5	浅黄橙色		○外面	C068	ほぼ完
55	Ⅲ-3区 下層	甕	-	-	-	-	浅橙色			C079	小片
56	Ⅲ-3区 P-52	壺	11.5	16.0	2.0	15.0	にぶい橙色		○□外面8×12cm	C064	3/4
57	Ⅲ-3区 P-56	(底部)	-	-	4.4	-	灰白/灰褐色		○外面	C184	ほぼ完
58	Ⅲ-4区 P-65	(底部)	-	-	3.2	-	浅黄橙色			C187	ほぼ完
59	Ⅲ-2区 P-J	鉢	10.4	10.1	(1.4)	(5.8)	浅黄橙色			C014	ほぼ完
60	Ⅲ-3区 下層	高杯A	26.0	3.8	16.8	(19.0)	浅黄橙色		孔4径9mm	C086	1/2
61	Ⅲ-3区 P-44	高杯	-	-	12.8	-	浅黄橙色		孔4径10mm	C066	2/3
62	Ⅲ-3区 下層	高杯	-	-	16.2	-	浅黄橙色		△外面	C139	~1/2
63	Ⅲ-3区 下層	器台	18.1	-	-	-	浅黄橙色		外脚凹5、孔1~径8~13mm	C059	~1/4
64	Ⅲ-3区 P-49	器台	24.7	(3.8)	15.6	(18.5)	にぶい黄橙色		内外断面漆状のもので補修	C070	2/3
65	Ⅲ-4区 下層	器台	27.7	-	17.6	-	灰白色		内外面部分的に黒褐色	C141	~1/4
66	Ⅲ-3区 45・48	器台	22.3	5.0	17.6	(17.8)	浅黄橙色		脚部完	C067	1/2

Ⅲ区出土C群土器観察表(第15図~第16図67~80)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No.	遺存度
67	Ⅲ-5区 P-73	甕A	18.0	-	3.9	-	浅黄橙色		外口凹6~7、口縁内頸外ナデ	C078	3/4
68	Ⅲ-5区 P-72	甕A	17.6	21.1	3.2	(25.0)	浅黄橙色		外口凹6、口縁内頸外ナデ	C083	1/2
69	Ⅲ-5区 P-69	甕A	15.8	16.0	4.0	18.4	浅黄橙/灰褐		○□外4×7cm	C095	ほぼ完
70	Ⅲ-5区 P-70	甕A	15.6	-	-	-	浅黄橙色		○外面	C085	2/3

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
71	Ⅲ-5区 P-69	甕A	16.6	21.5	3.2	26.8	浅黄橙色	○外面	外凹6~7、口縁内 頸外ナデ	C168	ほぼ完
72	Ⅲ-5区 P-77	甕A	18.5	17.1	-	-	淡黄色	○外面	外凹8~9、口縁内 頸外ナデ	C091	3/4
73	Ⅲ-5区 P-72	(底部)	-	-	3.6	-	にぶい橙色	○外面	外面ハケ、内面ケ ズリ	C129	ほぼ完
74	Ⅲ-5区 P-71	(脚)	-	-	10.8	-	浅黄橙色		孔4径5~6mm、 内磨耗	C077	ほぼ完
75	Ⅲ-5区 P-69	甕A	22.1	24.0	3.0	30.0	にぶい橙色	○内外面	外口凹14、口内頸 外ナデ	C081	3/4~
76	Ⅲ-5区 P-75	甕B	16.2	17.0	3.8	20.5	浅黄橙色	○内面、口縁部完	口頸部(ハケ→) ナデ	C170	3/4
77	Ⅲ-5区 P-72	甕B	14.5	13.5	-	-	にぶい黄橙色	○内外面	口頸部ナデ	C075	ほぼ完
78	Ⅲ-5区 P-77	甕B	11.4	12.2	2.2	13.0	浅黄橙色	□外面8×7cm	口頸ナデ、胴下半 1/2	C076	ほぼ完
79	Ⅲ-5区 P-76	壺	16.2	-	-	-	浅黄橙色	○外面	口頸部内外面ナデ	C087	1/4
80	Ⅲ-5区 P-73	高杯A	26.8	3.6	14.4	17.8	橙色	△外、内杯赤彩痕	孔4径7~9mm、 磨耗	C167	ほぼ完

Ⅲ区出土D群土器観察表(第17図~第18図81~89)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
81	Ⅲ-6区 P-オ	甕A	17.4	20.0	4.6	25.8	灰白/褐灰色	○内外面、口縁完	外口凹4、内口縁外 頸ナデ	C080	3/4
82	Ⅲ-6区 P-イ	甕B	17.2	20.4	-	-	浅黄橙色	○内外面	口縁部ナデ、口縁 部完	C171	3/4
83	Ⅲ-6区 P-ウ	壺	10.9	18.2	4.4	23.1	橙/にぶい橙	○外面	口縁部ナデ、口~ 肩完	C172	1/3
84	Ⅲ-6区 P-ア	壺	19.4	-	-	-	浅黄橙色		口縁部3/4	C058	ほぼ完
85	Ⅲ-7区 P-ク	高杯A	22.6	-	-	-	浅黄橙色		内外面剝離顯著	C092	ほぼ完
86	Ⅲ-6区 P-カ	高杯A	29.0	-	-	-	浅黄橙色		口縁端部1/4	C093	1/2
87	Ⅲ-6区 P-エ	器台	-	4.2	-	-	灰白色	孔4、径9~15mm	スタンプ文他、下 位1/4	C060	ほぼ完
88	Ⅲ-6区 下層	鉢	7.7	2.4	3.0	5.7	灰白色	高台状脚高さ7mm	脚台内外ナデ、口 縁1/2	C090	ほぼ完
89	Ⅲ-7区 P-ク	甕A	30.4	-	7.0	-	灰白色	底部1/2	凹8、内口縁外頸ナ	C102	1/3

Ⅲ区出土E群土器観察表(第18図~第19図90~101)

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
90	Ⅲ-8区 P-コ	甕A	17.4	21.1	4.4	24.8	にぶい黄橙色	○内外面	外口凹9、内口縁外 頸ナデ	C173	ほぼ完
91	Ⅲ-8区 P-A	甕A	17.1	19.0	-	-	にぶい黄橙色	○内外、凹7~8	内口~肩外頸~ナ デ	C175	3/4~
92	Ⅲ-8区 下層	甕A	19.4	22.1	4.9	26.5	にぶい橙色	○外面	外口凹9、内口縁外 頸ナデ	C057	1/2
93	Ⅲ-8区 P-コ	甕A	16.8	-	-	-	灰白/浅黄橙	○外面	外口凹6、内口縁外 頸ナデ	C117	ほぼ完
94	Ⅲ-8区 P-コ	甕A	15.8	17.0	-	-	灰黄褐/灰白	○外面	外口凹3~8、内口 外頸ナデ	C094	ほぼ完
95	Ⅲ-8区 P-コ	鉢	21.0	-	-	-	浅黄橙色	○内外面		C089	~1/4
96	Ⅲ-8区 下層	甕B	24.2	27.8	6.0	33.0	にぶい橙色	○外面	口縁部ナデ	C174	3/4
97	Ⅲ-8区 下層	壺	-	17.4	2.9	-	灰褐色	○外面	外面肩部ナデ	C062	3/4
98	Ⅲ-8区 下層	(底部)	-	-	3.5	-	にぶい橙色	○内外面		C015	2/3
99	Ⅲ-8区 下層	高杯A	23.2	-	-	-	浅黄色	△内面口縁端部	外面磨耗	C138	~1/4
100	Ⅲ-8区 下層	高杯A	27.4	-	-	-	にぶい黄橙色	○内外、△内外面		C133	~1/8
101	Ⅲ-8区 下層	有孔鉢	27.6	-	3.6	15.5	浅黄色	□?外面2内面1	外面磨耗、内面口 縁ナデ	C072	1/2

Ⅲ区遺物包含層他出土土器（第20図～第21図102～133）

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
102	Ⅲ-16区 溝状遺構	高杯	-	-	14.8	-	灰白色	裾部～1/2	孔4径17～18mm	C111	ほぼ完
103	Ⅲ-2区 包含層	甕A	18.7	-	-	-	灰白色	○外面	外口凹7、口縁内類外ナデ	C149	1/8
104	Ⅲ-9区 包含層	甕A	18.8	-	-	-	浅黄橙色	○外面	外口凹7、口縁内類外ナデ	C069	1/6
105	Ⅲ-1区 包含層	甕B	17.8	18.3	-	-	にぶい橙色	○外面	口縁部ナデ	C023	2/3
106	Ⅲ-2区 包含層	甕B	16.3	-	-	-	にぶい橙色	○外、孔1～径3～5	外口類内ロナデ	C048	1/3
107	Ⅲ-2区 包含層	甕B	12.8	13.2	-	-	浅黄橙色	○外面	外口～肩内ロナデ	C052	1/2
108	Ⅲ区 西側包含層	甕	-	-	-	-	淡橙色		口縁端部刻目、ハケ	C113	小片
109	Ⅲ-2区 包含層	壺A	15.2	-	-	-	にぶい黄橙色	○外面	外口擬凹線6→ミガキ	C051	2/3
110	Ⅲ-1区 包含層	壺A	15.6	-	-	-	にぶい黄橙色		外口擬凹線5	C153	1/6
111	Ⅲ-2区 包含層	壺	15.8	-	-	-	浅黄橙色	△外、内口縁部		C157	～1/8
112	Ⅲ-2区 包含層	壺	13.6	-	-	-	浅黄橙色		外擬凹線3、内口類ナデ	C148	～1/2
113	Ⅲ-1区 包含層	壺	17.9	-	-	-	浅黄橙色		外口擬凹線4、内外磨耗	C142	1/2
114	Ⅲ-1区 包含層	壺	14.2	-	-	-	にぶい黄橙色		外口凹7、外類内ロナデ	C143	1/4
115	Ⅲ-2区 包含層	壺	12.2	-	-	-	にぶい黄橙色			C160	1/4
116	Ⅲ-2区 包含層	壺	8.2	-	-	-	にぶい黄橙色	△外、内口縁部	外口沈1、内類以下ナデ	C158	～1/2
117	Ⅲ-2区 包含層	壺	-	-	-	-	橙/にぶい橙		外面沈線、刻目	C056	小片
118	Ⅲ-1区 包含層	(底部)	-	-	3.4	-	灰褐/灰白色	○外面	外底ナデ	C179	ほぼ完
119	Ⅲ-2区 包含層	(底部)	-	-	2.8	-	浅黄橙色	○外面	外底ナデ	C162	ほぼ完
120	Ⅲ-2区 包含層	(底部)	-	-	2.5	-	にぶい橙色	○外面	外底ナデ	C156	ほぼ完
121	Ⅲ-2区 包含層	(底部)	-	-	3.2	-	浅黄褐色	○外面		C154	ほぼ完
122	Ⅲ-2区 包含層	(底部)	-	-	2.7	-	浅黄橙色	○内外面	外底ナデ	C163	ほぼ完
123	Ⅲ-1区 包含層	(底部)	-	-	3.3	-	黒褐/浅黄橙		内外面磨耗	C182	ほぼ完
124	Ⅲ-2区 包含層	(底部)	-	-	5.8	-	浅黄橙色	□外底5×6cm	外側面磨耗、底ナデ	C155	ほぼ完
125	Ⅲ-2区 包含層	高杯A	31.3	-	-	-	灰白色			C159	1/8
126	Ⅲ-1区 包含層	高杯	-	3.75	15.4	-	浅黄橙色	孔4径5～6mm	内杯ミガキ、脚ナデ	C024	ほぼ完
127	Ⅲ-1区 包含層	(脚)	-	-	-	-	灰白色	孔4径8～9mm	スタンプ文他	C026	1/4
128	Ⅲ-1区 包含層	(脚)	-	-	17.4	-	にぶい黄橙色		スタンプ文、沈(凹)線	C025	1/8
129	Ⅲ-1区 包含層	器台	-	-	17.7	-	にぶい橙色		外脚擬凹線10、内ナデ	C022	1/4
130	Ⅲ-2区 包含層	器台	-	-	-	-	浅黄橙色		スタンプ文、沈(凹)線	C053	小片?
131	Ⅲ-12区 包含層	鉢	17.0	13.3	-	-	にぶい橙色		外口凹9、内外面磨耗	C061	～1/4
132	Ⅲ-2区 包含層	蓋	2.4	2.9	11.5	3.6	浅黄橙色	□外面1.5×4cm		C054	1/2
133	Ⅲ区 西側包含層	蓋	3.6	3.2	-	-	灰白色		つまみ部孔1径5～6mm	C112	ほぼ完

第1表 中相川遺跡（昭和61年度調査）土層土色一覧①（Ⅰ・Ⅱ、Ⅴ区）

<p>第1図 A-B (Ⅰ区)</p>	<p>第3図 A-B (Ⅱ区)</p>
<p>①黄灰色砂質土（炭化物を少量含む） ②暗黄灰色砂質土 ③灰褐色粘性砂質土（礫を含む、炭化物・遺物を多く含む） ④灰褐色砂質土（黄白色砂ブロックを含む） ⑤灰褐色砂質土</p>	<p>①褐灰色粘砂（礫を多量に含む） ②灰黄褐色粘質土 ③暗灰褐色粘質土（砂質が強い） ④濁灰色粘質土 ⑤灰色粘土 ⑥黒灰色粘土 ⑦暗灰色強粘土</p>
<p>第1図 C-D (Ⅰ区)</p>	<p>第3図 C-D (Ⅴ区)</p>
<p>②暗黄灰色砂質土 ③灰褐色粘性砂質土（礫を含む、炭化物・遺物を多く含む） ④灰褐色砂質土（黄白色砂ブロックを含む） ⑤灰褐色砂質土 ⑦灰褐色砂質土（黄白色砂ブロックを少量含む） ⑧灰褐色砂質土（黄白色砂ブロック混入）</p>	<p>①耕土 ②淡黄灰色粘質土（床土） ③濁灰色粘質土 ④濁暗灰色粘質土（小礫を含む）</p>
<p>第1図 E-F (Ⅰ区)</p>	<p>第3図 E-F (Ⅴ区)</p>
<p>①暗黄灰色砂質土 ②暗黄灰色砂質土（やや黄色味をおびる） ③黄灰褐色粘性砂質土（遺物を含む） ④黒褐色粘性砂質土 ⑤暗黄灰色粘性砂質土（炭化物をわずかに含む） ⑥黄色土（地山質土）ブロック</p>	<p>①耕土 ②淡黄灰色粘質土（床土） ③濁灰色粘質土 ④濁暗灰色粘質土（小礫を含む） ⑤灰黄褐色粘質土 ⑥濁灰褐色粘質土 ⑦暗灰褐色強粘質土 ⑧淡灰黄褐色粘砂</p>
<p>第1図 G-H (Ⅰ区)</p>	<p>第3図 G-H (Ⅴ区)</p>
<p>①・③・⑥黒褐色粘性砂質土 ② 暗灰褐色粘性砂質土（礫含む） ④・⑧ 灰褐色粘性砂質土 ⑤ 灰褐色粘性砂質土（黄色ブロック混入） ⑦・⑨・⑩灰黄褐色粘性砂質土 ⑩ 灰褐色粘性砂質土（炭化物を含む） ⑫ 灰褐色粘性砂質土（炭化物を多く含む）</p>	<p>①耕土 ②淡黄灰色粘質土（床土） ③濁灰色粘質土 ④濁暗灰色粘質土（小礫を含む） ⑥濁灰褐色粘質土 ⑨灰色粘質土</p>
<p>第1図 I-J (Ⅰ区)</p>	<p>第3図 I-J (Ⅴ区)</p>
<p>①耕土 ②淡黄灰色粘質土（床土） ⑩濁灰褐色粘質土（小礫、范鉄を含む） ⑪濁黄灰褐色粘質土</p>	<p>①耕土 ②淡黄灰色粘質土（床土） ⑩濁灰褐色粘質土（小礫、范鉄を含む） ⑪濁黄灰褐色粘質土</p>

第2表 中相川遺跡（昭和61年度調査）土層土色一覧②（N区）

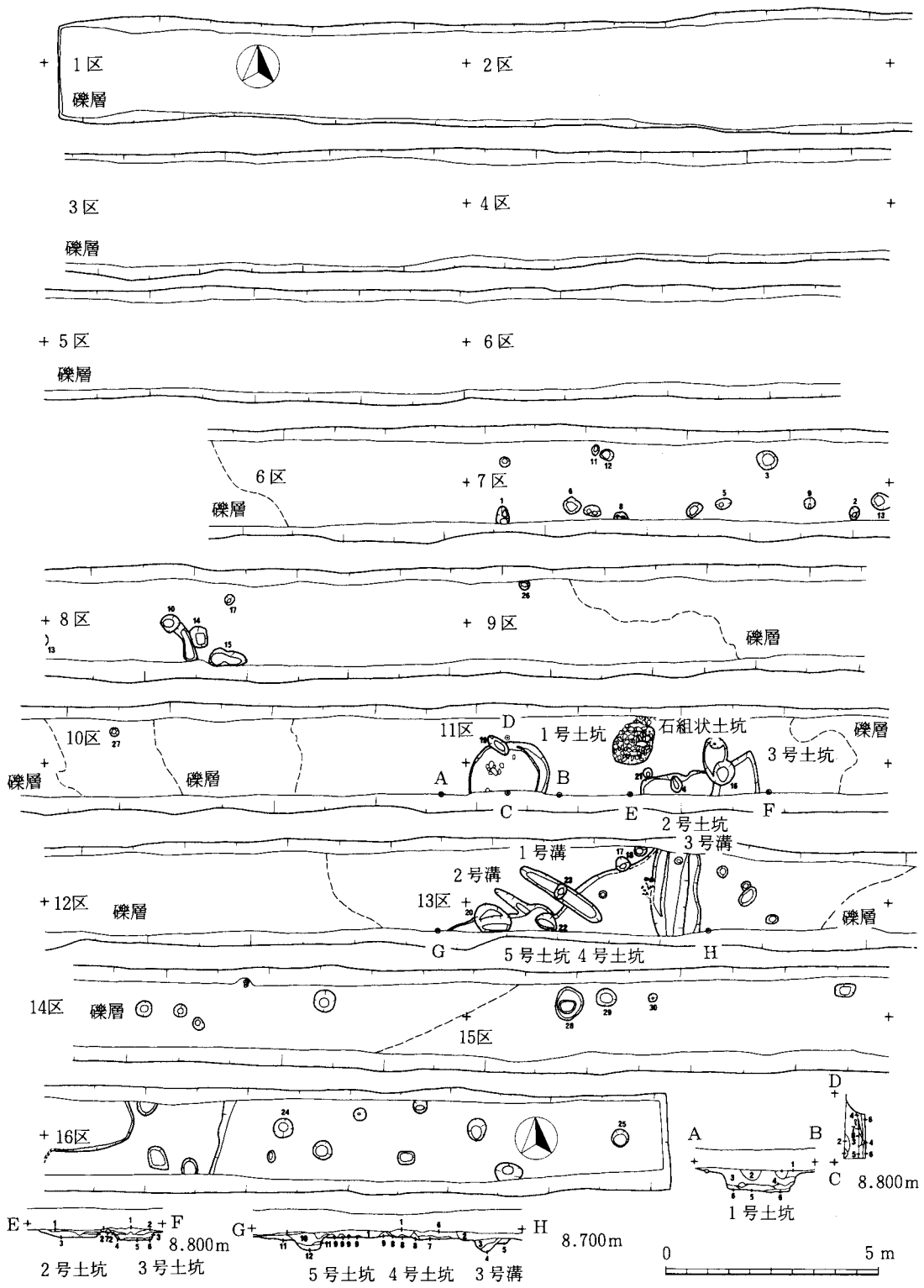
第4図 A-B、C-D (N区)	第5図 C-D (N区)
①耕土 ②明黄褐色粘質土（床土、10YR 7/6） ③黒褐色粘質土（2.5Y 3/1） ④濁灰黄色粘質土（2.5Y 4/1） ⑤灰色じゃてつ（10Y 6/1） ⑥緑灰色砂（7.5GY 6/1） ⑦オリーブ灰色砂（10Y 6/2） ⑧灰白色粗砂（10Y 7/1） ⑨明緑灰色砂（10GY 7/1） ⑩緑灰色砂（10GY 6/1） ⑪暗緑灰色粗砂（10GY 4/1） ⑫明青灰色砂（10BG 7/1）	① 耕土 ② 明黄褐色粘質土（床土、10YR 7/6） ③ 黄褐色粘質土（10YR 5/8） ④ 灰色粘質土（10Y 7/1） ⑤ 灰白色粘質土（5Y 7/2） ⑥ 暗オリーブ褐色粘質土（土器を含む、2.5Y 3/3） ⑦ 黄橙色粘質土（10YR 7/8） ⑧ 暗褐色粘質土（10YR 3/4） ⑨・⑫黒色粘質土（10YR 2/1） ⑩ 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2） ⑪・⑬灰色粘砂（10Y 6/1） ⑫ 灰黄色強粘質土（2.5Y 7/2） ⑭ 暗灰黄色粘土（2.5Y 4/2） ⑮ 灰色砂（10Y 4/1） ⑯ 灰色粘土（10Y 4/1） ⑰ 灰オリーブ色粘土（5Y 4/2） ⑱ 暗オリーブ灰色粘土（2.5GY 4/1） ⑲ 黒褐色強粘質土（2.5Y 3/2） ⑳ 暗褐色粘質土（10YR 3/3） ㉑・㉒にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3） ㉓ 黒褐色粘質土（10YR 2/3） ㉔ 黒色粘質土（10YR 2/1） ㉕ 褐色粘質土（10YR 4/6） ㉖ オリーブ褐色粘質土（2.5Y 4/3） ㉗ 黒褐色粘質土（2.5Y 3/1） ㉘・㉙黒褐色粘質土（2.5Y 3/2） ㉚ 暗灰黄色粘質土（2.5Y 4/2）
第4図 E-F、G-H (N区)	⑮ 灰色砂（10Y 4/1） ⑯ 灰色粘土（10Y 4/1） ⑰ 灰オリーブ色粘土（5Y 4/2） ⑱ 暗オリーブ灰色粘土（2.5GY 4/1） ⑲ 黒褐色強粘質土（2.5Y 3/2） ⑳ 暗褐色粘質土（10YR 3/3） ㉑・㉒にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3） ㉓ 黒褐色粘質土（10YR 2/3） ㉔ 黒色粘質土（10YR 2/1） ㉕ 褐色粘質土（10YR 4/6） ㉖ オリーブ褐色粘質土（2.5Y 4/3） ㉗ 黒褐色粘質土（2.5Y 3/1） ㉘・㉙黒褐色粘質土（2.5Y 3/2） ㉚ 暗灰黄色粘質土（2.5Y 4/2）
①～④は、第4図A-B①～④と同じ ⑰灰褐色礫（7.5YR 4/2） ⑱濁褐色粘質土（10YR 4/6） ⑲暗褐色礫（10YR 3/3）	第5図 E-F、G-H (N区)
第4図 I-J (N区)	①灰黄褐色粘性砂質土（10YR 4/2、炭化物を含む、しまりが弱い） ②にぶい黄褐色粘性砂質土（10YR 4/3） ③にぶい黄褐色粘性砂質土（10YR 5/4） ④灰黄褐色粘性砂質土（10YR 4/2、河原石を多量に含む） ⑤灰黄褐色粘性砂質土（10YR 4/2、炭化物を含む） ⑥黄色地山質土ブロック
第4図 I-J (N区)	第5図 A-B (N区)
①耕土 ③黒褐色粘質土（2.5Y 3/1） ⑬暗緑灰色粘質土（10GY 4/1） ⑭濁灰色強粘質土（自然木混、10Y 5/1） ⑮オリーブ黒色粘土（自然木多量混入、5Y 2/2） ⑯浅黄色砂質土（7.5Y 7/3）	①・②・④は、第5図I-Jと同じ ③暗褐色粘質土（10YR 3/3）
第5図 I-J (N区)	
①耕土 ②明黄褐色粘質土（床土、2.5Y 7/6） ③黒褐色粘質土（10YR 2/3） ④黒色粘質土（10YR 2/1） ⑤黒色強粘質土（2.5Y 2/1） ⑥褐色粘質土（10YR 4/6） ⑦黒褐色粘質土（2.5Y 3/2） ⑧にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3） ⑨明黄褐色粘質土（10YR 6/6）	

第3表 中相川遺跡（昭和61年度調査）土層土色一覧③（Ⅲ区）

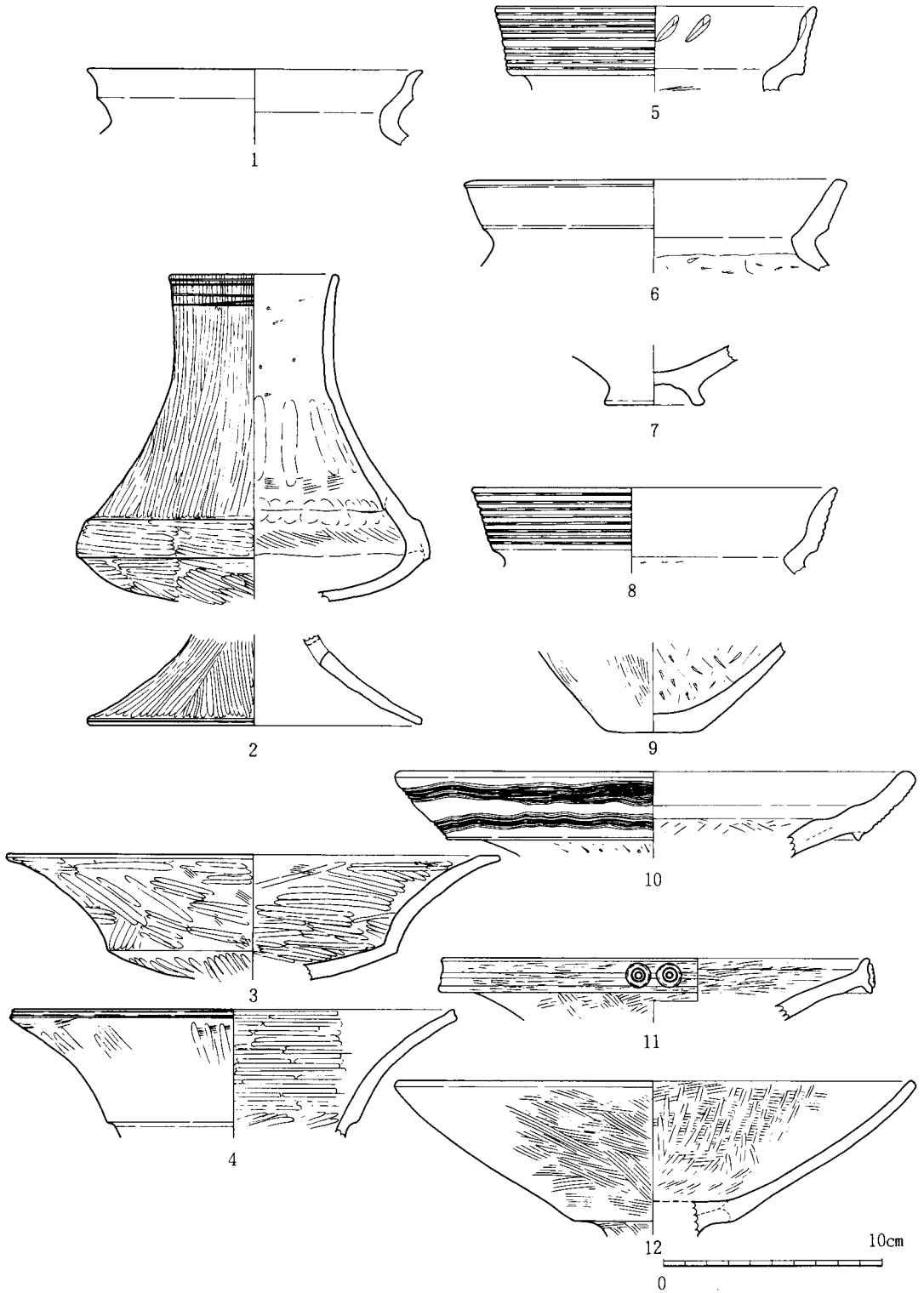
第7図 A-B (Ⅲ区)	第7図 G-H (Ⅲ区)
① 耕土 ② 黒色粘性砂質土 ③ にぶい黄褐色粘性砂質土 ④ 褐灰色粘砂 ⑤ 黒色粘質土（遺物をわずかに含む） ⑥ 暗灰白色粘質土（遺物をわずかに含む） ⑦ 灰白色粘質土（茶色の小ブロック（鉄分？）、炭化物、遺物を多量に含む） ⑧ 灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む）	①～⑧は、第7図A-B①～⑧と同じ ⑨ 灰黄色粘土（完形土器を多量に含む） ⑩ 暗灰褐色粘質土 ⑪ 粗い砂 ⑫ オリーブ黄色砂 ⑬ 灰黄褐色砂 ⑭ 浅黄色砂 ⑮ 褐灰色砂 ⑯ 褐灰色粘砂 ⑰ 灰白色砂 ⑱ 黒色色砂 ⑲ 黒褐色粘砂 ⑳ 黄色砂
第7図 C-D (Ⅲ区)	㉑ 淡黄色粘質土 ㉒ 黄灰色粘質土 ㉓ 暗灰黄色砂 ㉔ 灰白色粘土 ㉕ 黄灰色砂 ㉖ 黄灰色粘砂 ㉗ 黒褐色粘土
①・③ 灰白色粘土 ② 褐灰色粘土 ④ 褐灰色粘土（炭化物、遺物を多量に含む） ⑤ 褐灰色粘性砂質土（炭化物は含まず、地山質土ブロックを含む） ⑥ 灰褐色粘性砂質土	第8図 A-B (Ⅲ区)
第7図 E-F (Ⅲ区)	①～⑤は、第7図A-B①～⑤と同じ ⑧ 灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨ 灰黄色粘土（完形土器を多量に含む） ⑩ 黒褐色粘質土 ⑪ 浅黄色粗砂 ⑫ 黄灰色粘砂 ⑬ 黒褐色粘砂（灰色が強い） ⑭ 黄灰色粘質土 ⑮ 黄色粘砂 ⑯ 灰白色粘砂 ⑰ 黄灰色粘土 ⑱ 灰白色粘砂（粘性が強い） ⑲ 灰黄色粗砂 ⑳ 黄色粘土 ㉑ 黄色砂 ㉒ 灰白色粘土（白味が強い） ㉓ 黄灰色粗砂
第7図 I-J (Ⅲ区)	
① 褐灰色粘土（炭化物を多量に含む、土器片を含む） ② 灰白色粘性砂質土（炭化物をわずかに含む、下部に土器片を含む） ③ 黒色粘土（遺物はほとんど含まない）	

第4表 中相川遺跡（昭和61年度調査）土層土色一覧④（Ⅲ区）

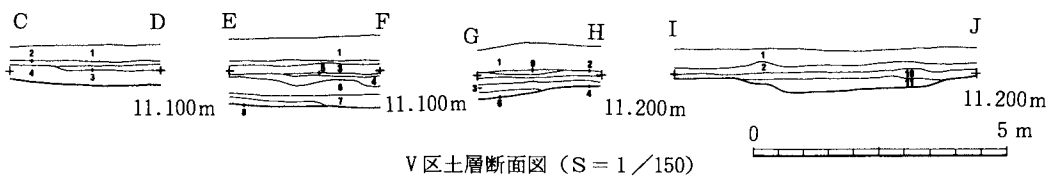
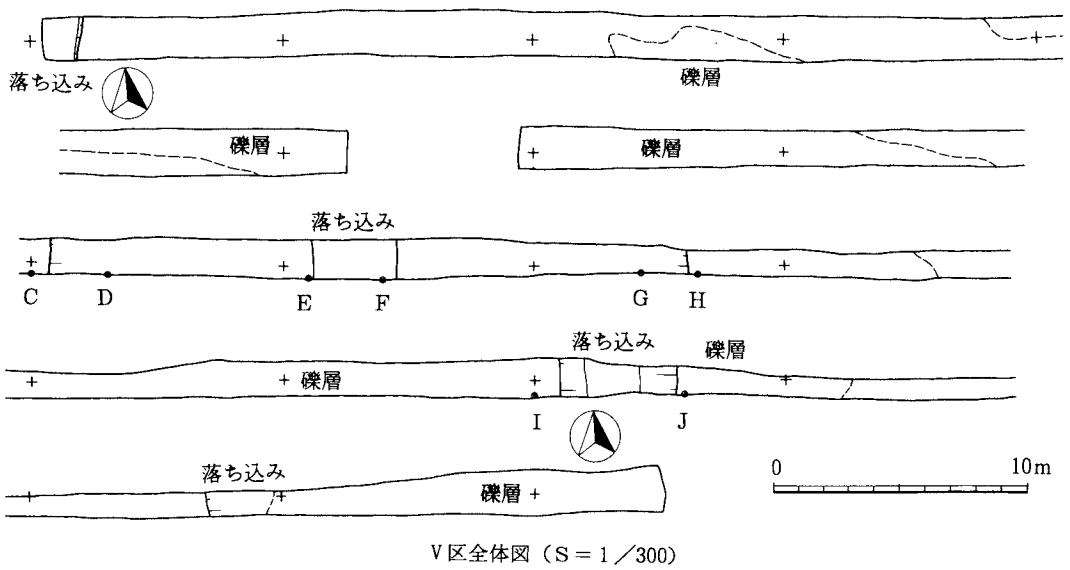
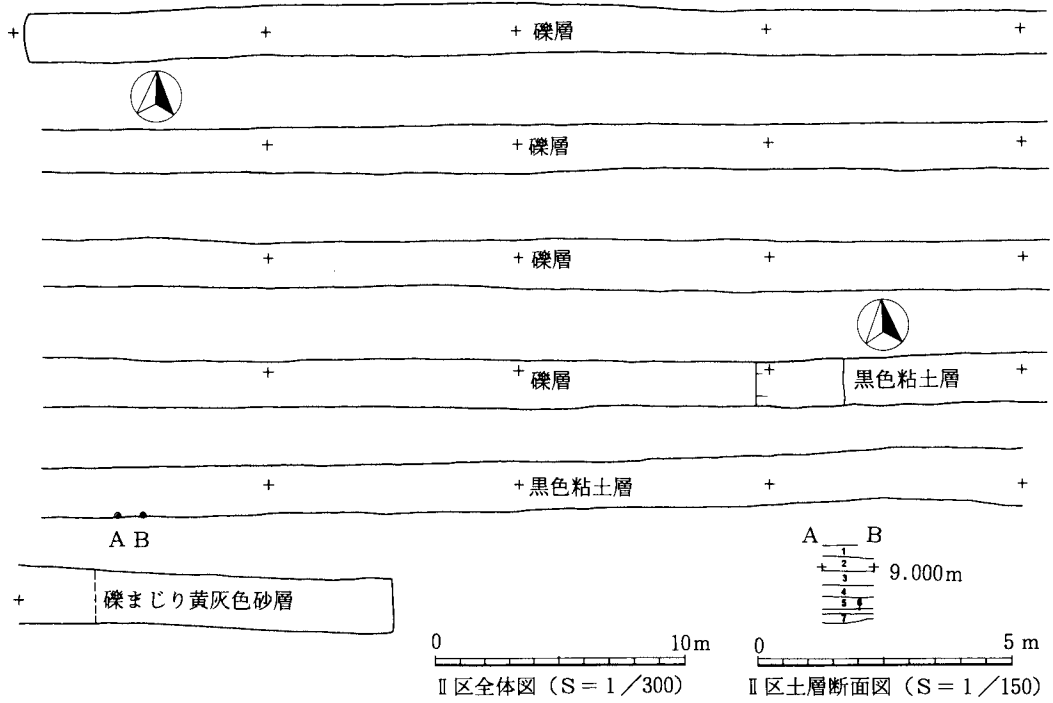
<p>第8図 C-D (Ⅲ区)</p>	<p>第8図 I-J (Ⅲ区)</p>
<p>①耕土 ②黒色粘性砂質土 ③にぶい黄褐色粘性砂質土 ④褐灰色粘砂 ⑤黒色粘質土（遺物をわずかに含む） ⑥暗灰白色粘質土（遺物をわずかに含む） ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨灰黄色粘土（完形土器を多量に含む） ⑩黄灰色粘質土 ⑪灰色粘土 ⑫褐灰色粘砂 ⑬灰白色粘砂 ⑭灰白色粘砂（やや白味が強い） ⑮灰白色粘土（白味が強い） ⑯灰白色粘土（鉄分を含む） ⑰灰白色砂（微砂、鉄分を多量に含む）</p>	<p>①～⑥は、第8図C-D①～⑥に同じ ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨灰白色粘土（白味が強い） ⑩灰褐色粘土</p>
	<p>第8図 K-L (Ⅲ区)</p>
	<p>①～③は、第8図C-D①～③に同じ ⑤黒色粘質土（遺物をわずかに含む） ⑦灰白色粘質土（茶色の小ブロック（鉄分？）、炭化物、遺物を多量に含む） ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨灰褐色粘土</p>
<p>第8図 E-F (Ⅲ区)</p>	<p>第8図 M-N (Ⅲ区)</p>
<p>②～⑥は、第8図C-D②～⑥に同じ ⑦灰白色粘質土（茶色の小ブロック（鉄分？）、炭化物、遺物を多量に含む） ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨灰黄色粘土（完形土器を多量に含む） ⑩明褐灰色粘砂 ⑪灰黄色粘砂 ⑫灰白色粘土（やや白味が強い） ⑬灰白色粘土（白味が強い）</p>	<p>①～⑥は、第8図C-D①～⑥に同じ ⑦褐灰色粘質土 ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む）</p>
<p>第8図 G-H (Ⅲ区)</p>	<p>第8図 O-P (Ⅲ区)</p>
<p>②・③、⑤、⑧は、第8図のC-Dに同じ ⑦灰白色粘質土（茶色の小ブロック（鉄分？）、炭化物、遺物を多量に含む） ⑨灰黄色砂 ⑩黄灰色粘砂 ⑪褐灰色粘砂（鉄分を多く含む） ⑫褐灰色粘砂</p>	<p>①～⑤は、第8図C-D①～⑤に同じ ⑧灰色粘土（まれに遺物、わずかに炭化物を含む） ⑨灰黄褐色粘質土 ⑩浅黄色粘砂 ⑪灰白色粘土 ⑫灰白色粘土（白味が強い）</p>



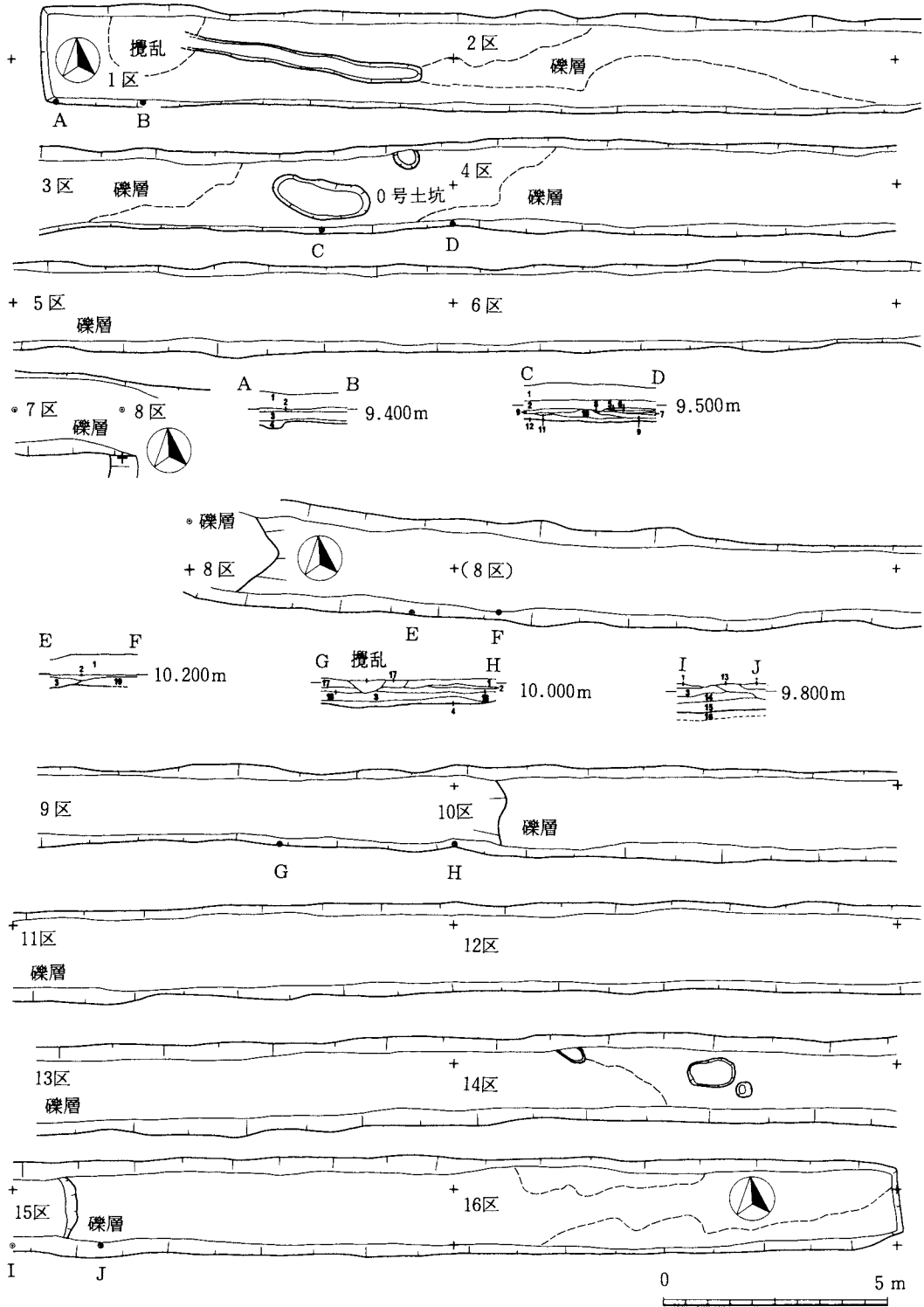
第1图 1区調査区全体図、土層断面図 (S = 1/150)



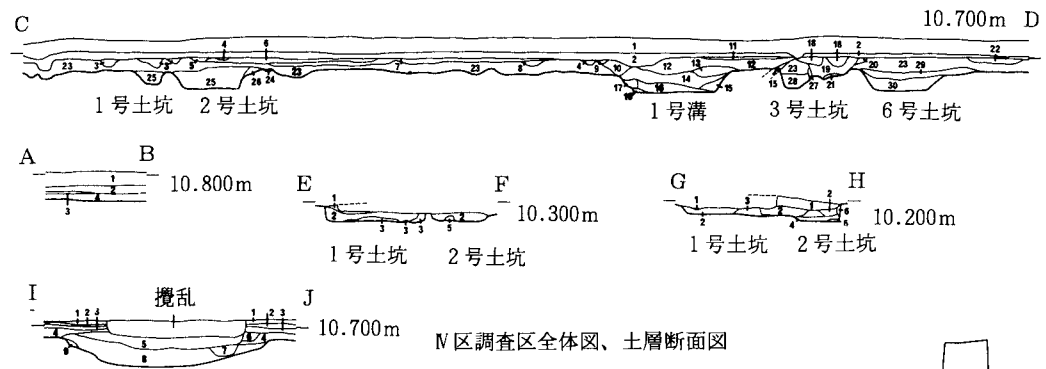
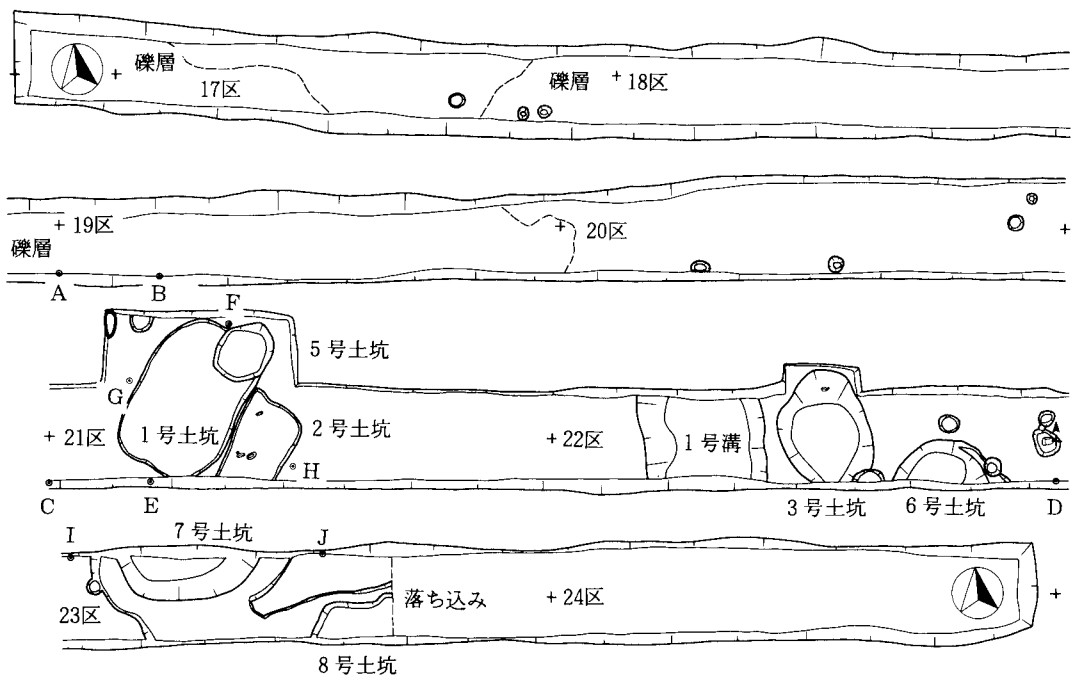
第2图 Ⅰ区出土土器 (S=1/3)



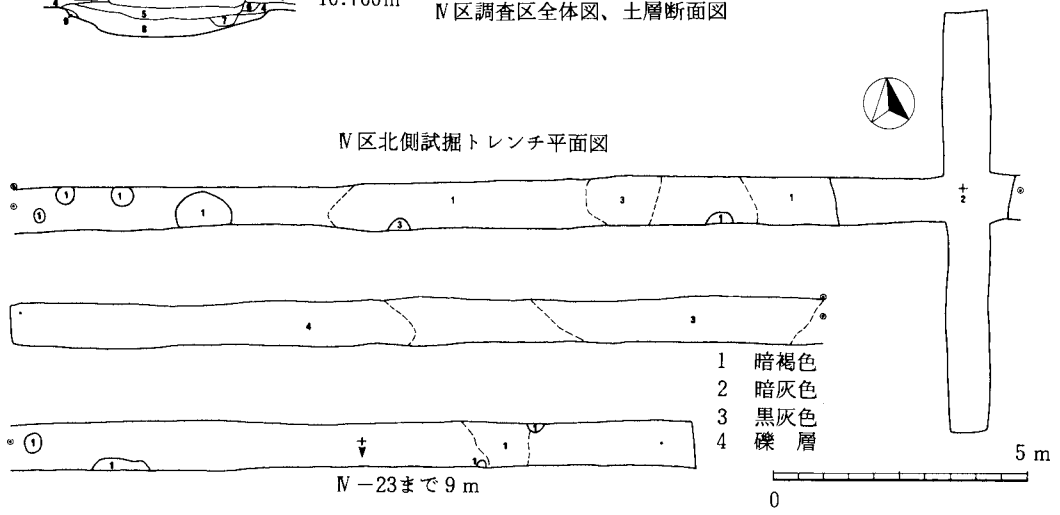
第3図 II・V区調査区全体図 (S = 1/300)、土層断面図 (S = 1/150)



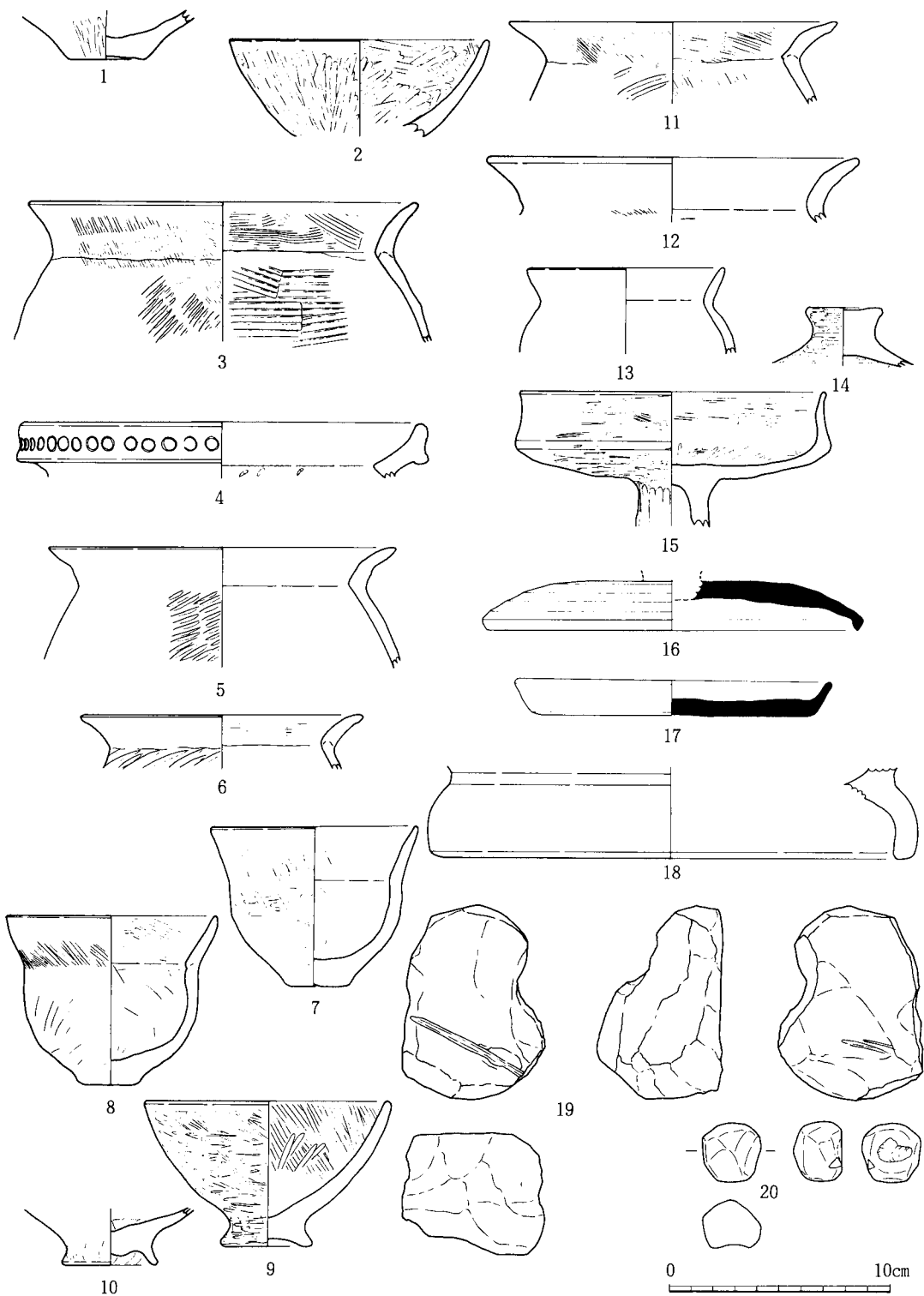
第4図 N区調査区全体図、土層断面図1 (S = 1/150)



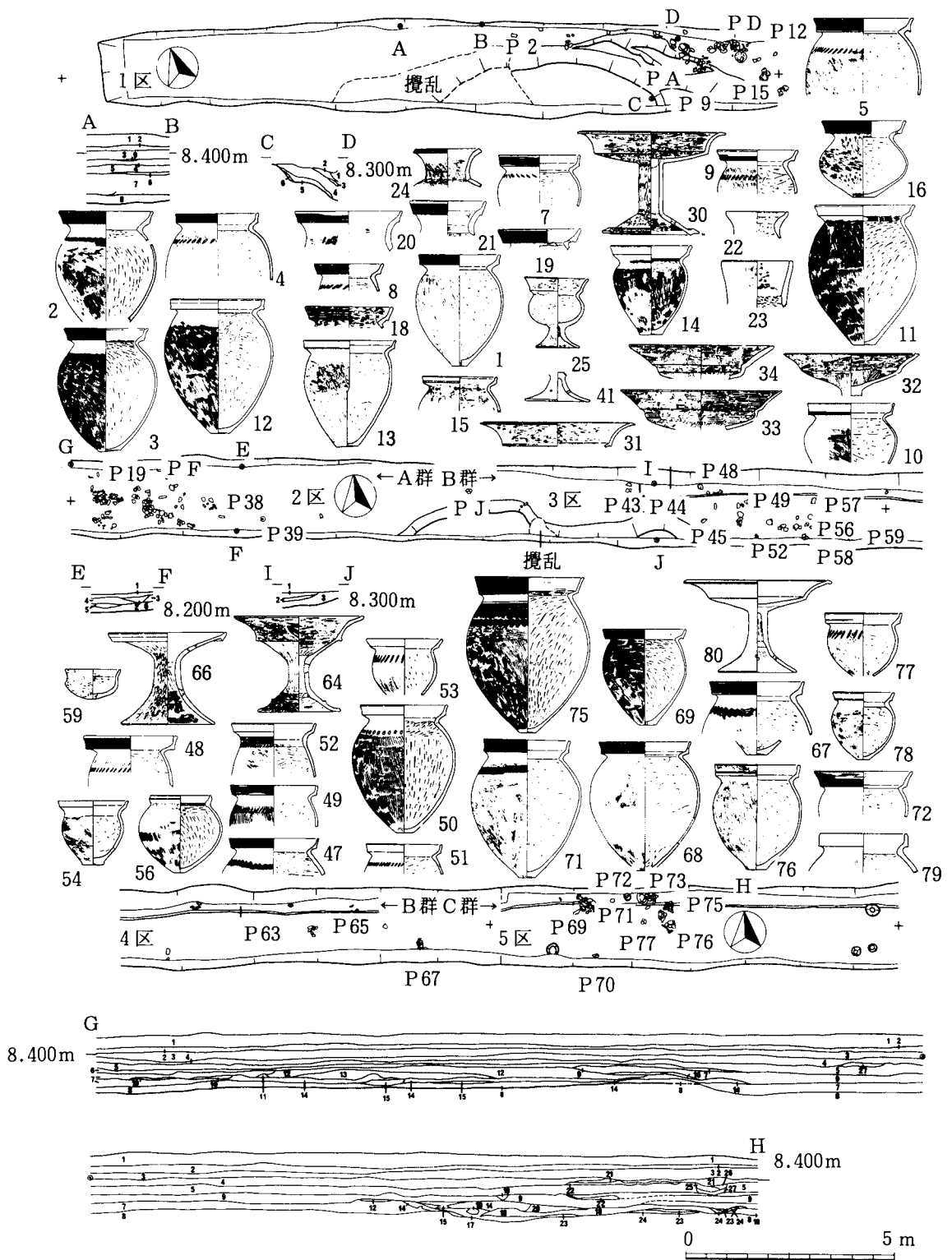
IV区調査区全体図、土層断面図



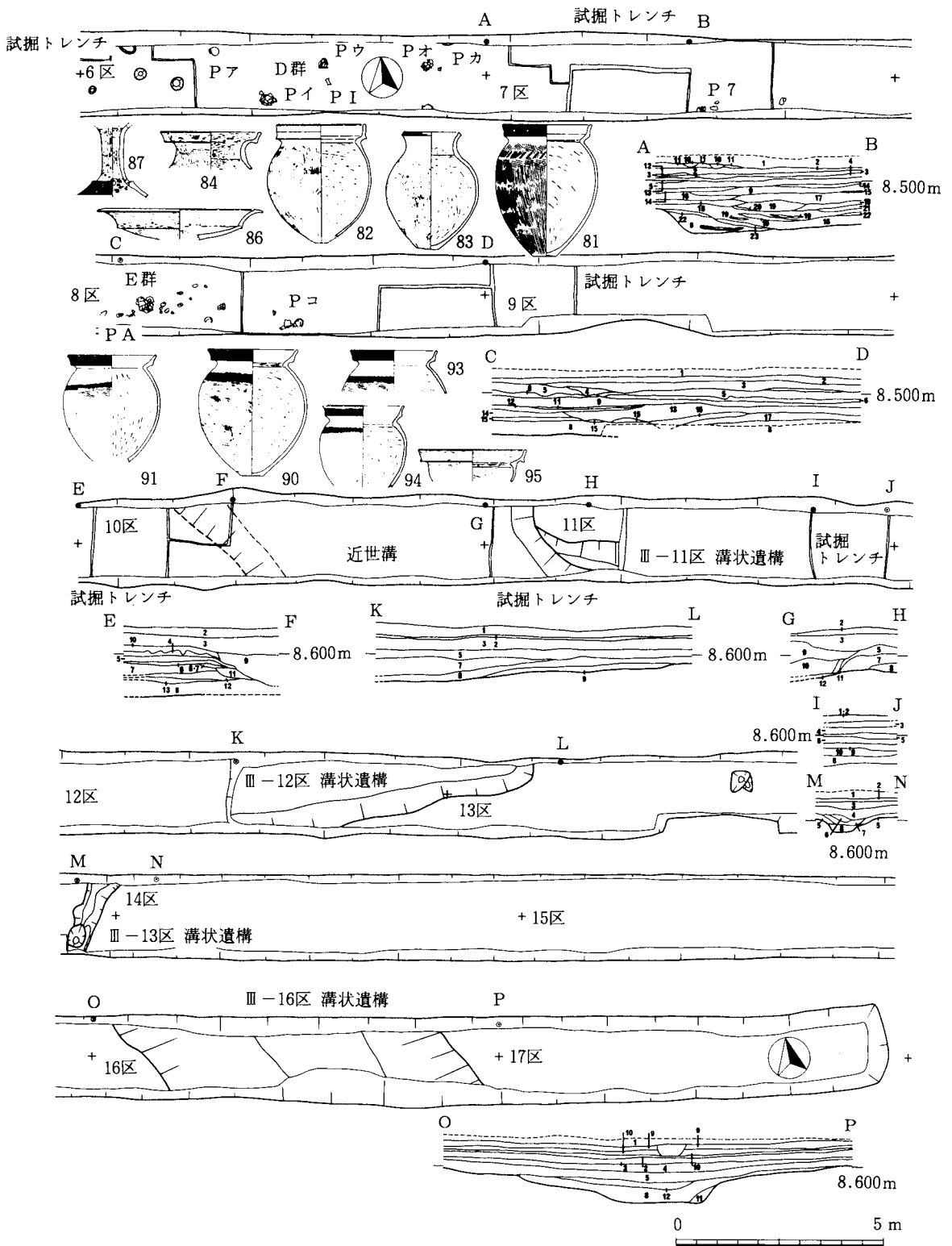
第5図 IV区調査区全体図、土層断面図2 (S = 1/150)



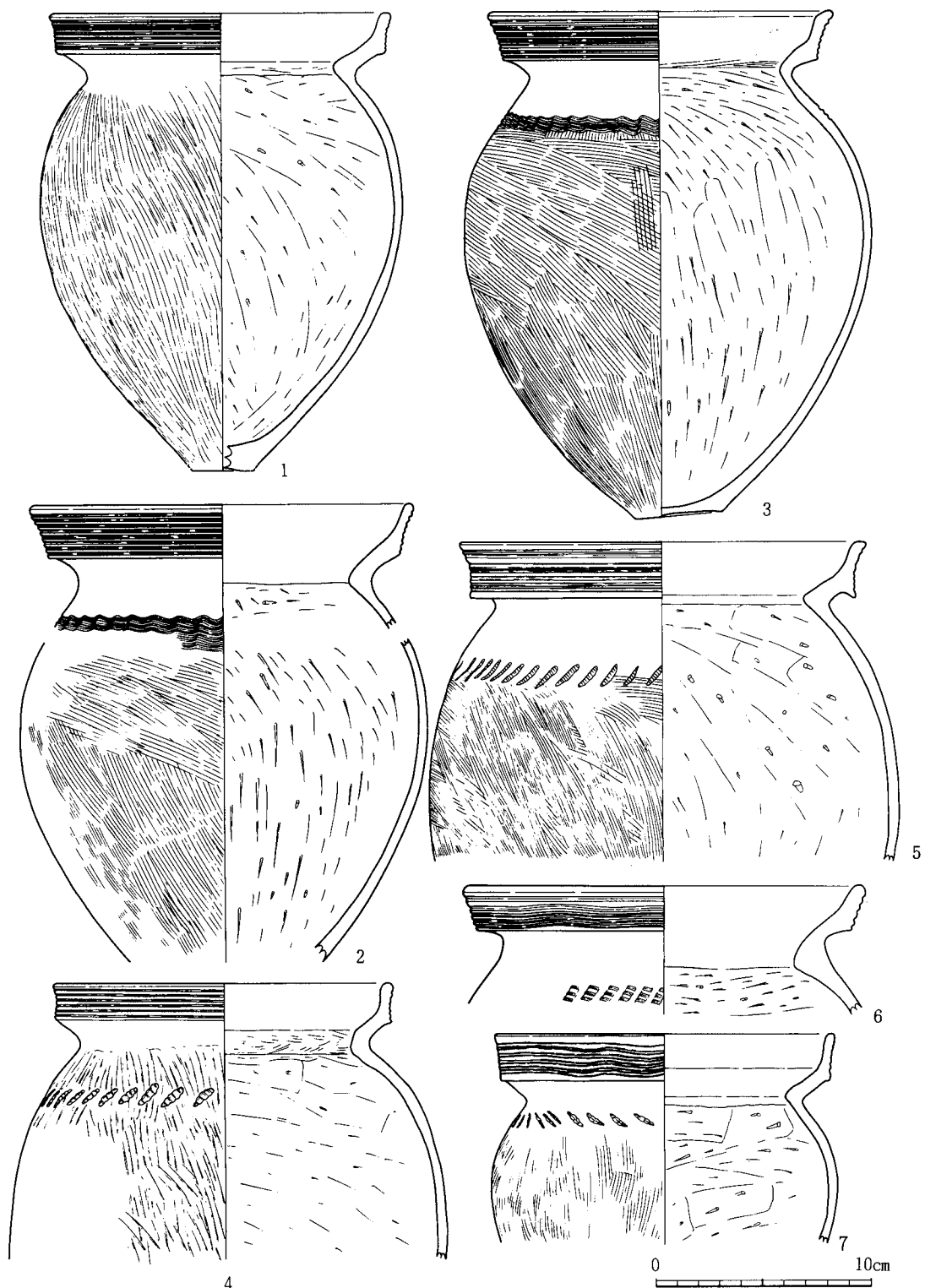
第6图 N区出土土器(1~15、18)、I区出土須惠器(16、17)、Ⅲ区出土石器(19、20)(S = 1 / 3)



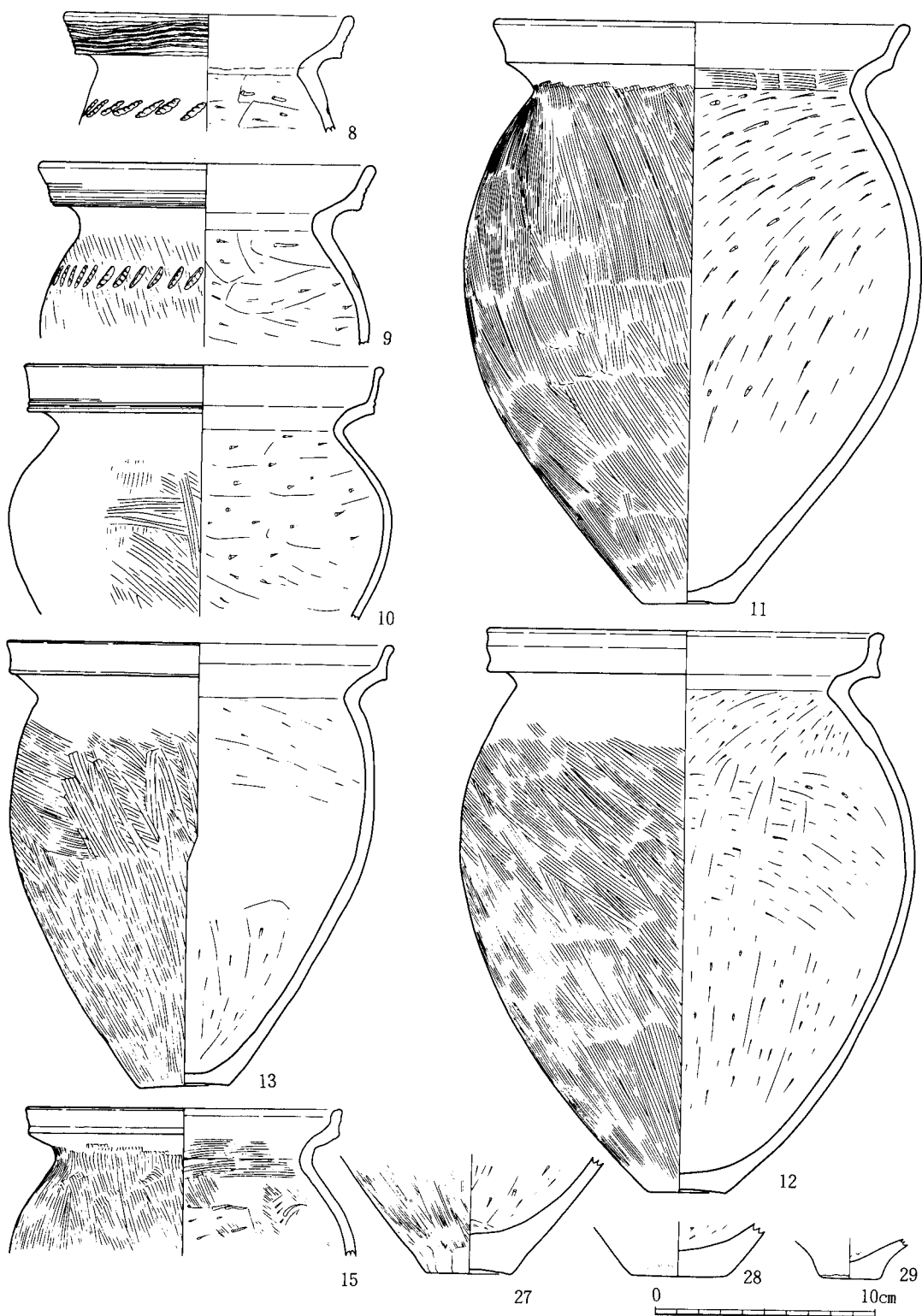
第7图 Ⅲ区調査区全体図、土層断面図1 (S = 1/150)



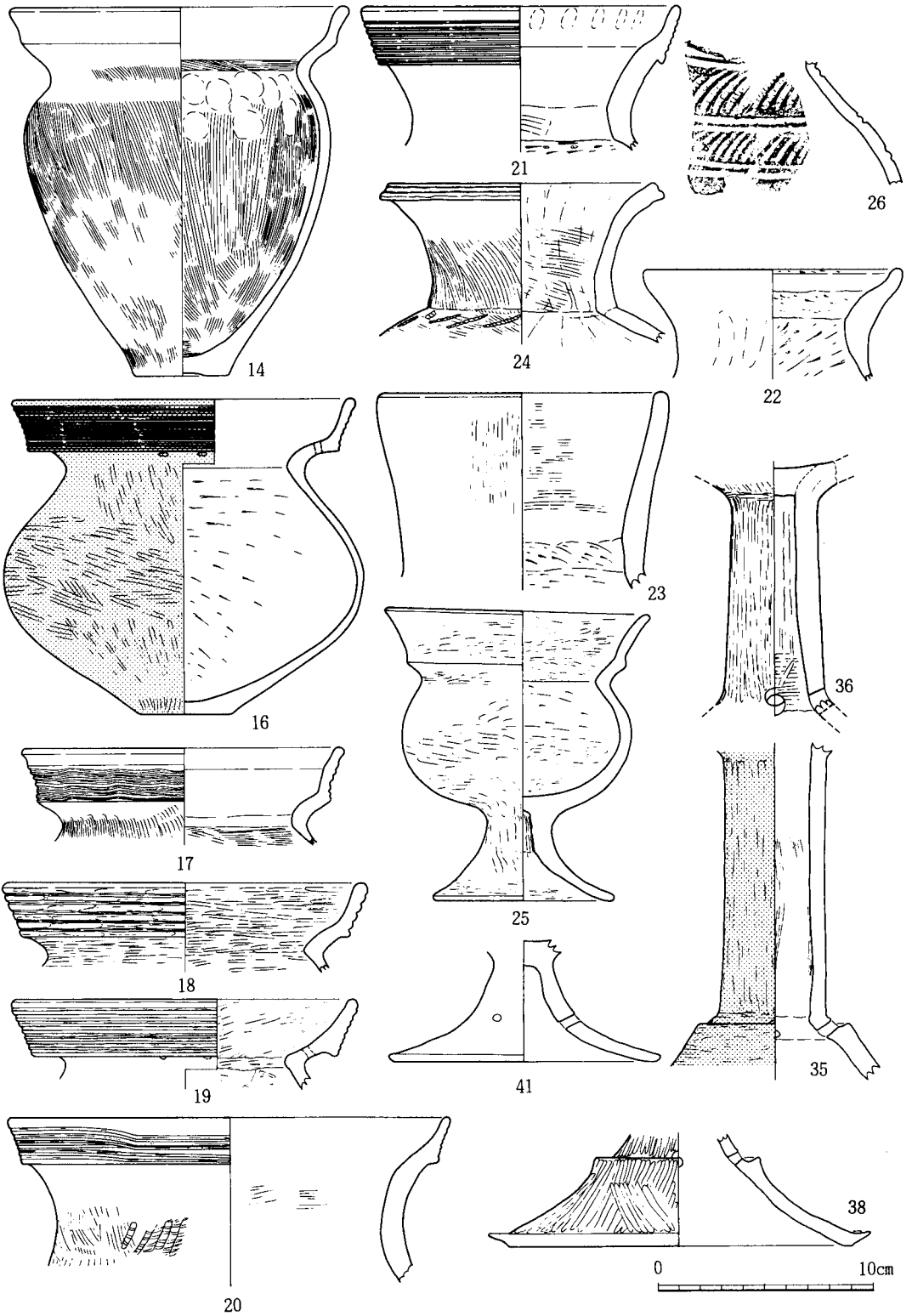
第8図 III区調査区全体図、土層断面図2 (S=1/150)



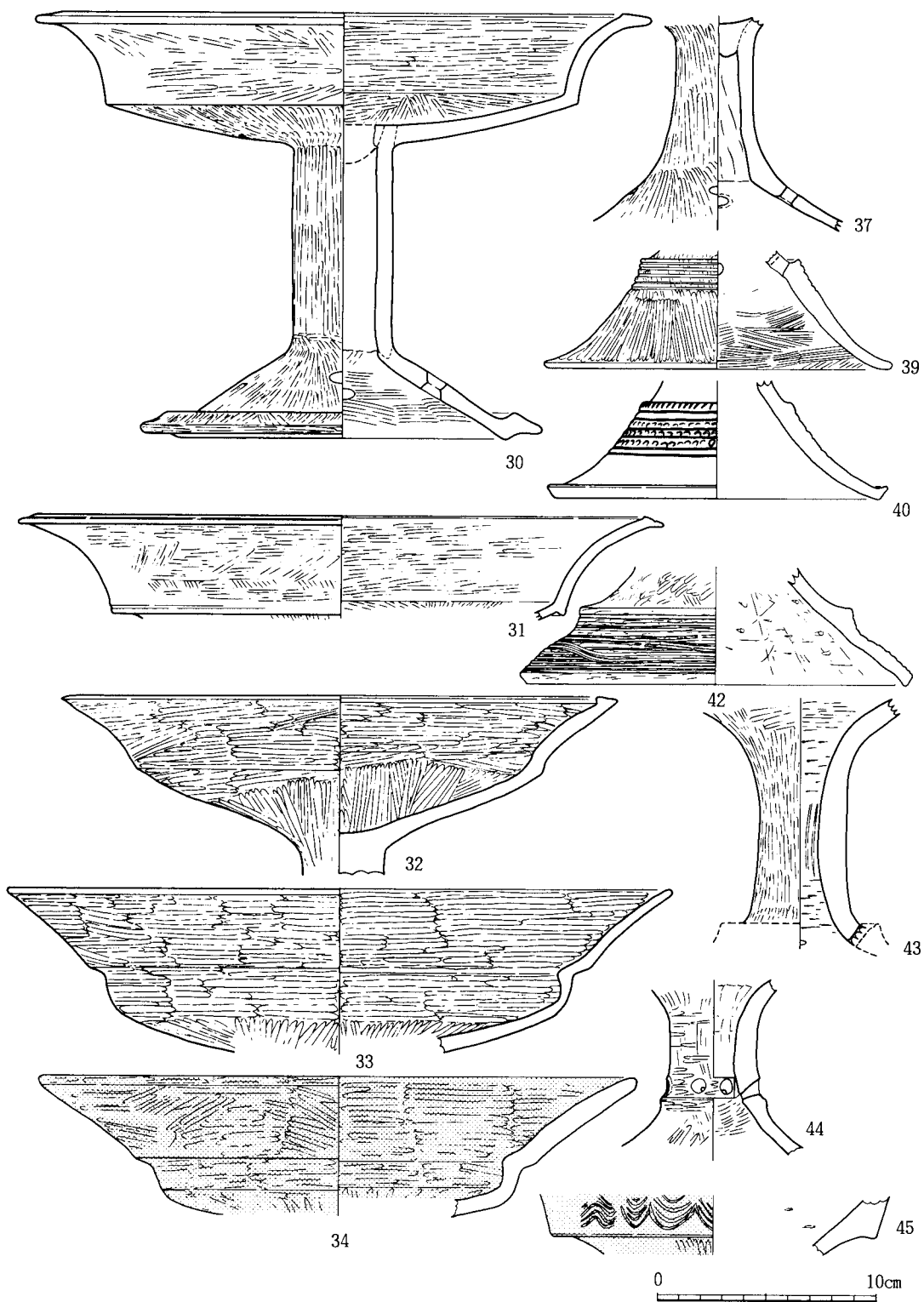
第9图 Ⅲ区出土A群土器1 (S=1/3)



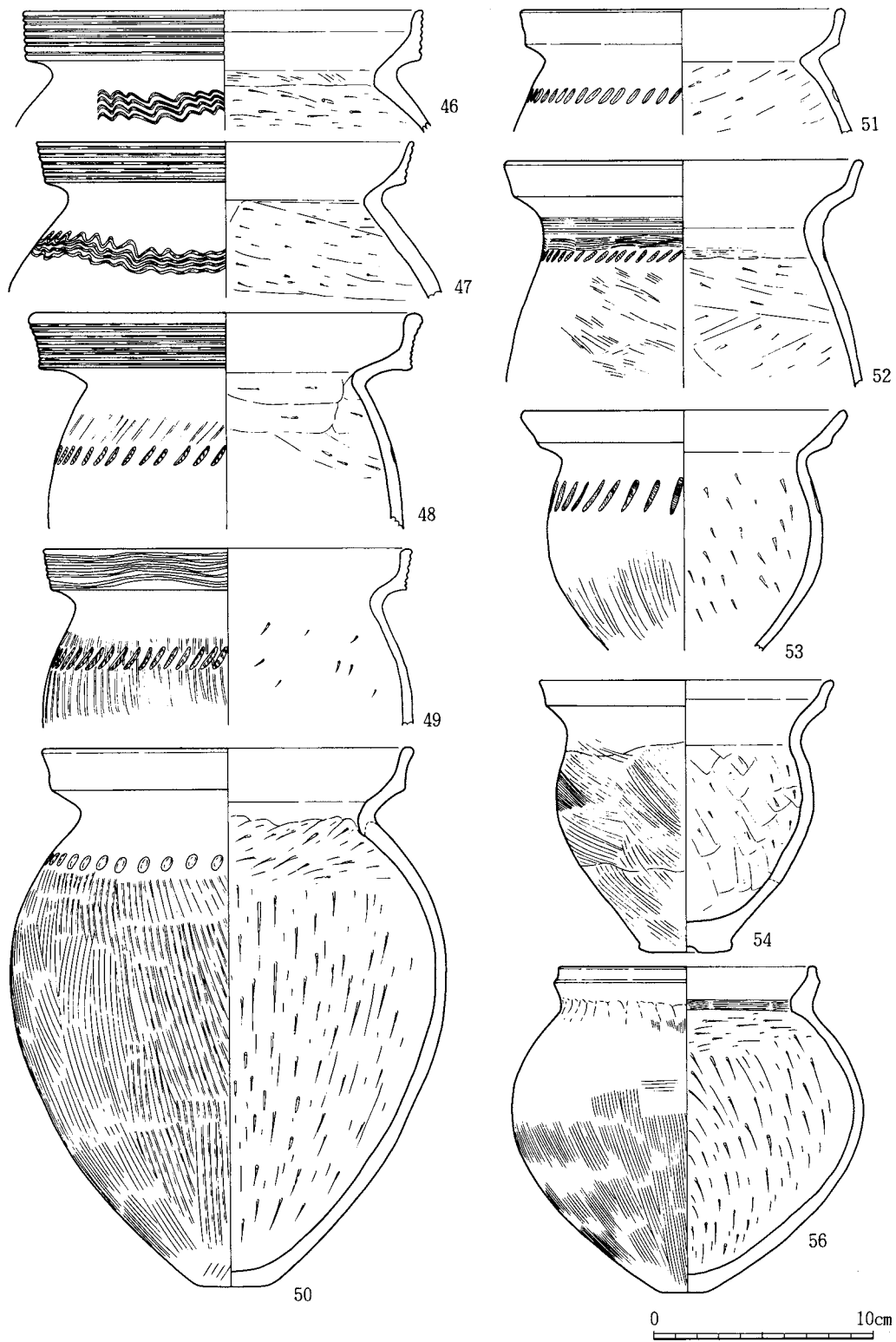
第10图 Ⅲ区出土A群土器2 (S = 1 / 3)



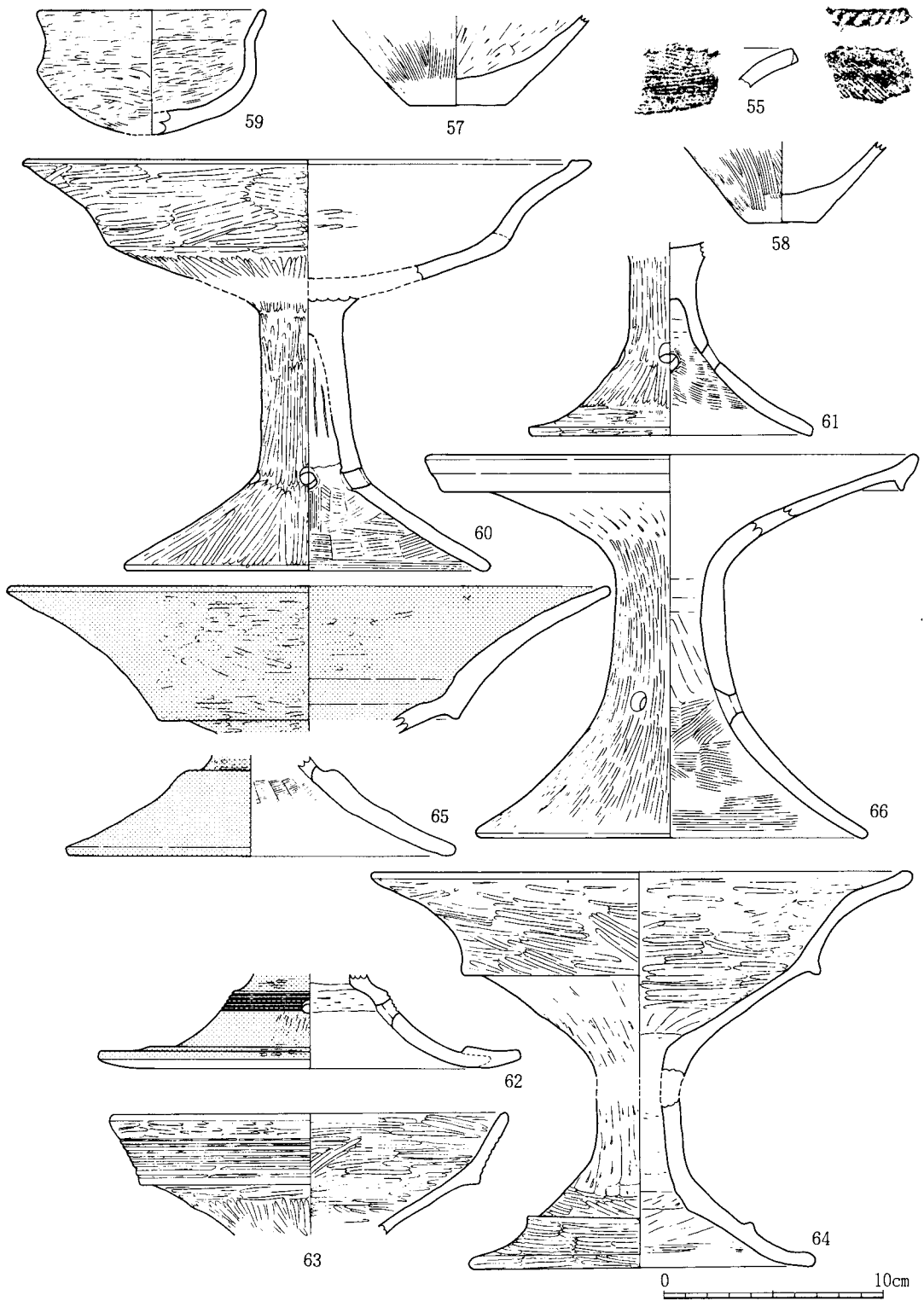
第11图 Ⅲ区出土A群土器3 (S=1/3)



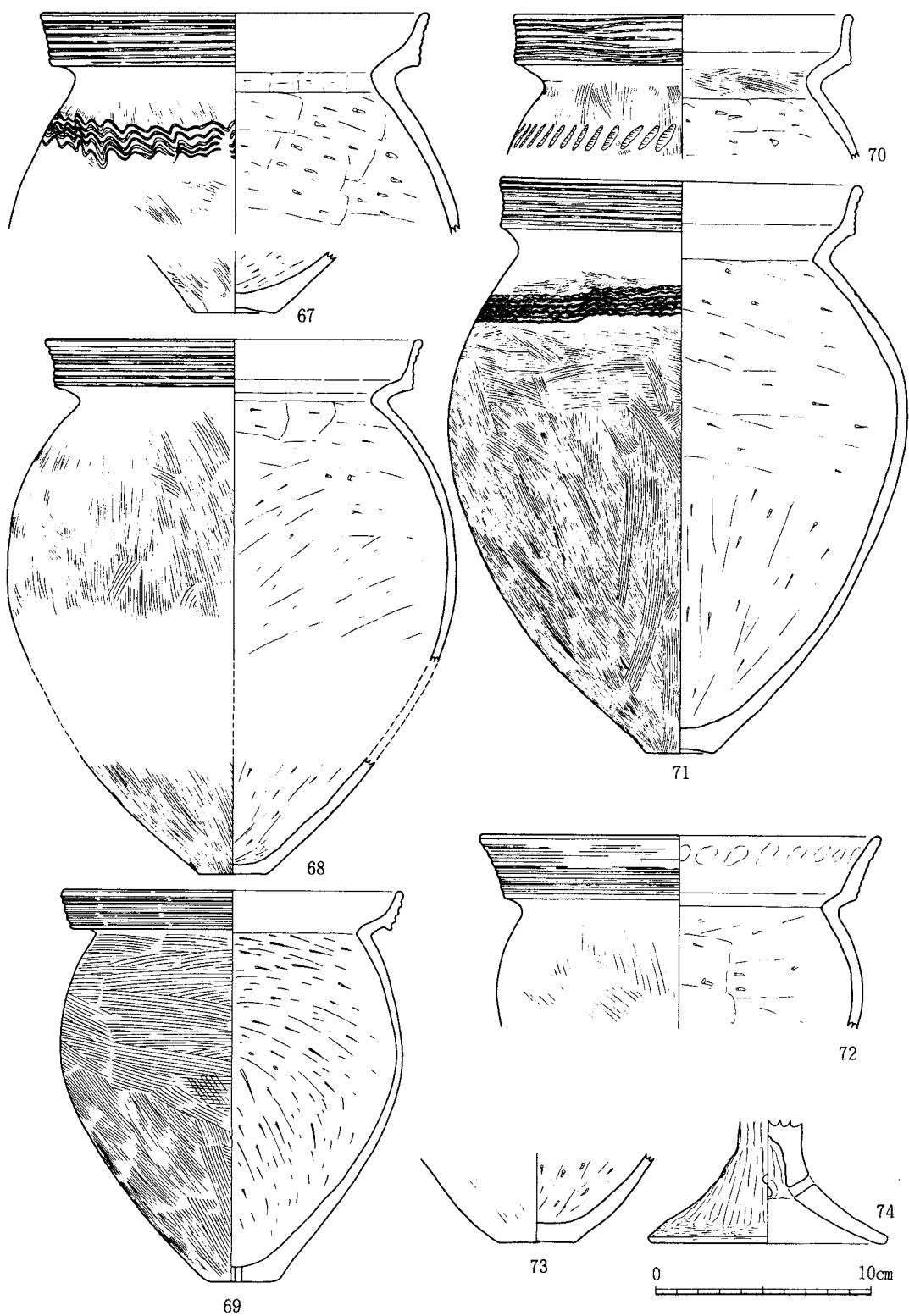
第12图 Ⅲ区出土A群土器4 (S=1/3)



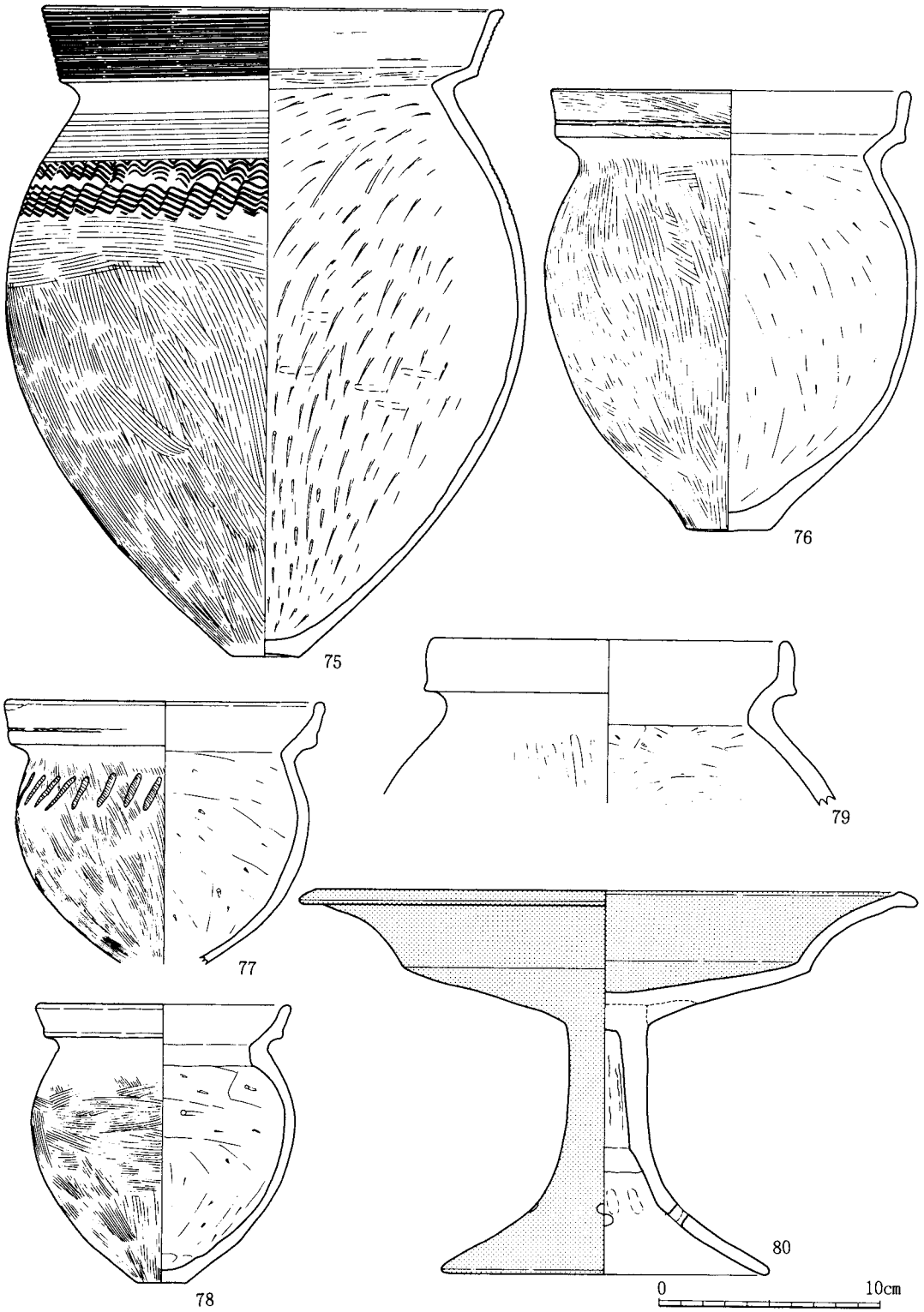
第13图 Ⅲ区出土B群土器1 (S = 1 / 3)



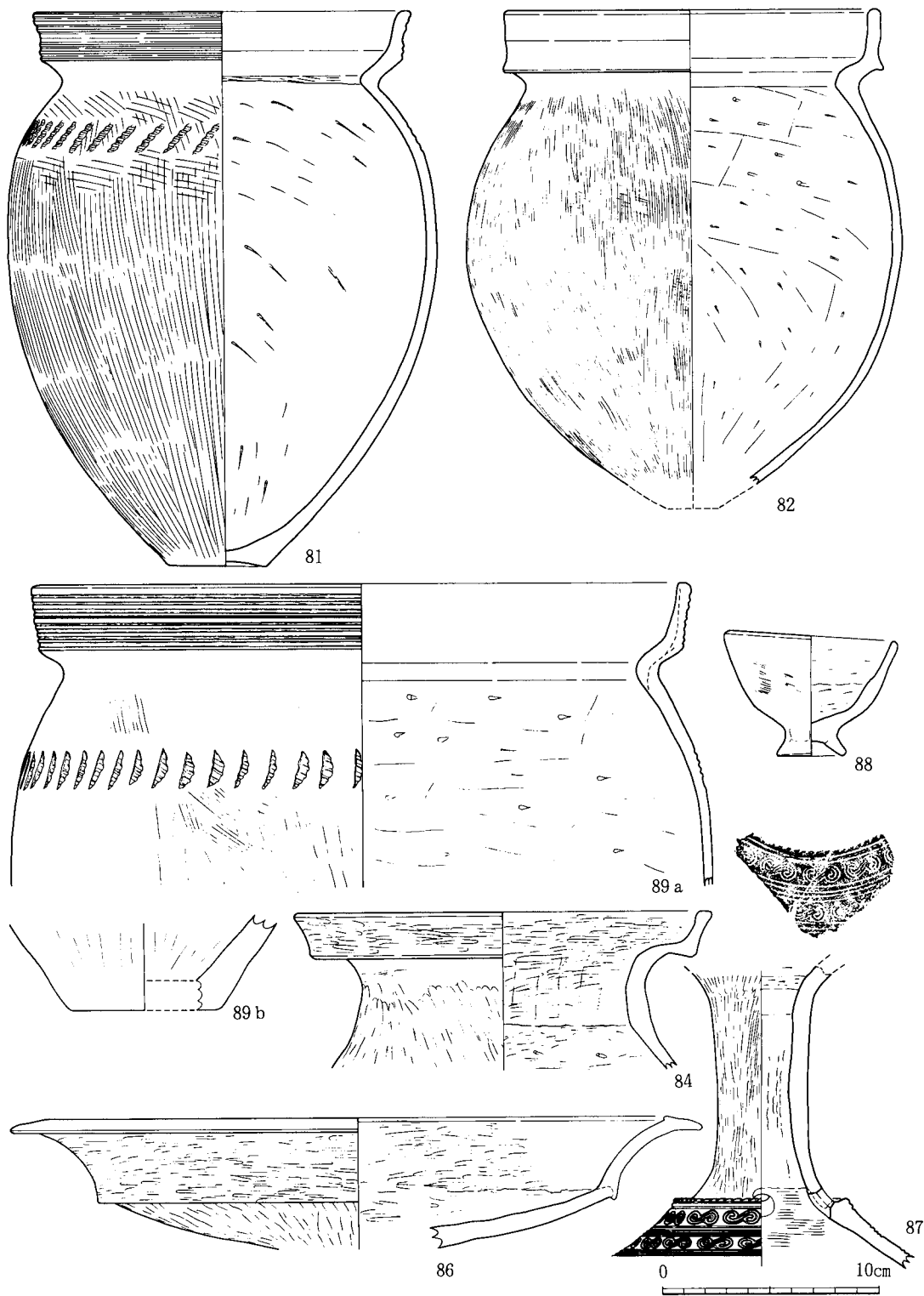
第14图 Ⅲ区出土B群土器2 (S=1/3)



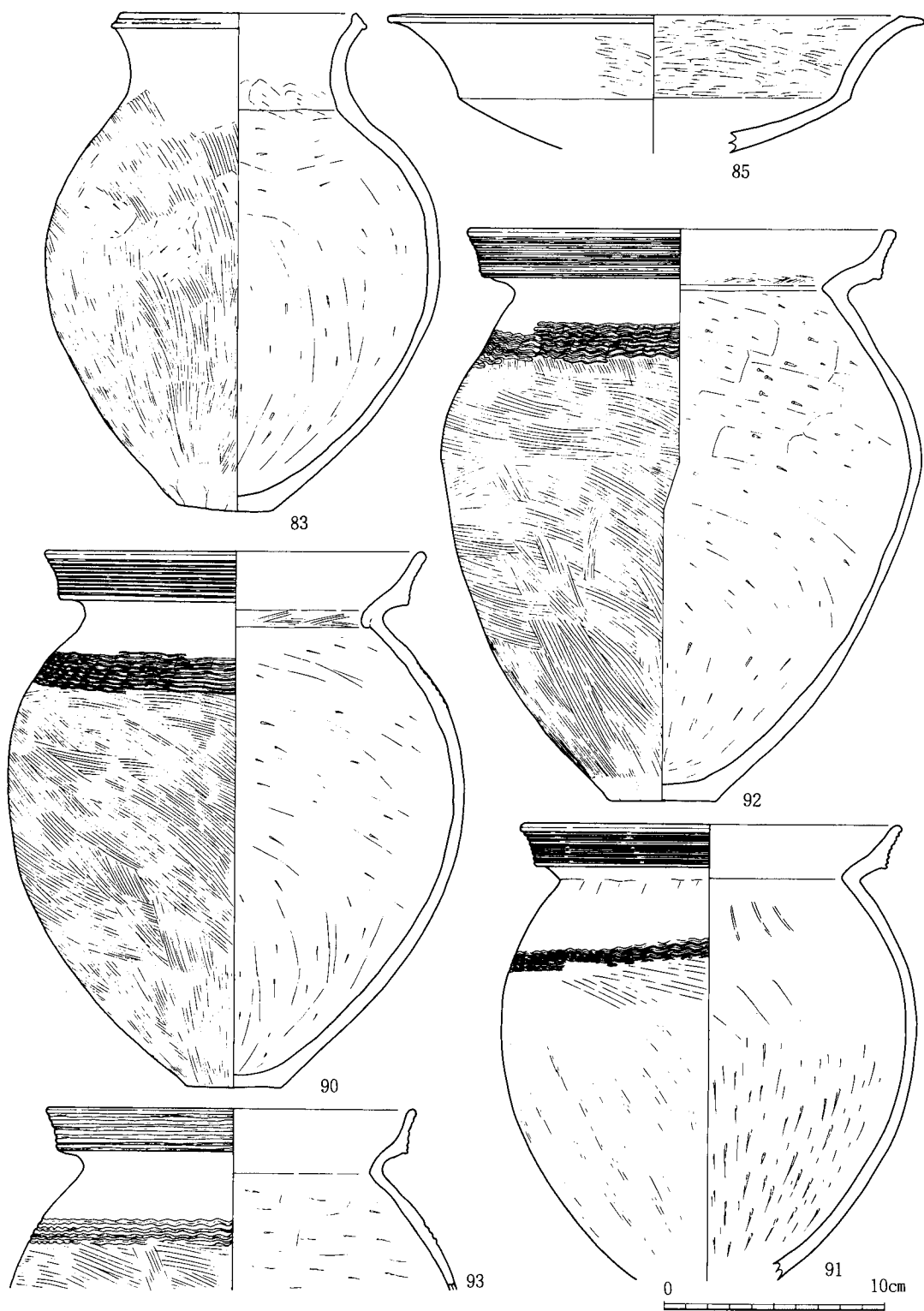
第15图 Ⅲ区出土C群土器1 (S = 1 / 3)



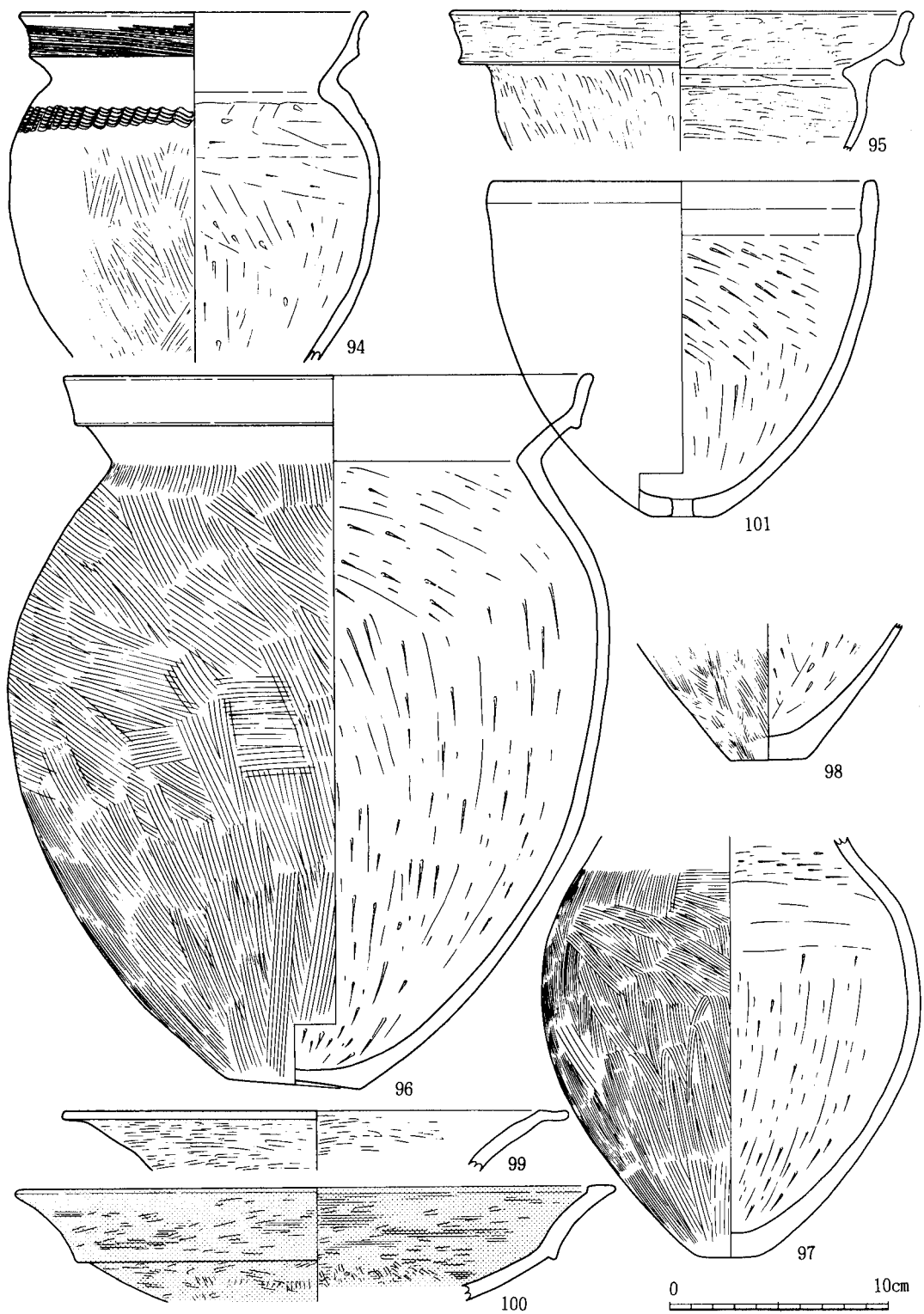
第16图 Ⅲ区出土C群土器2 (S=1/3)



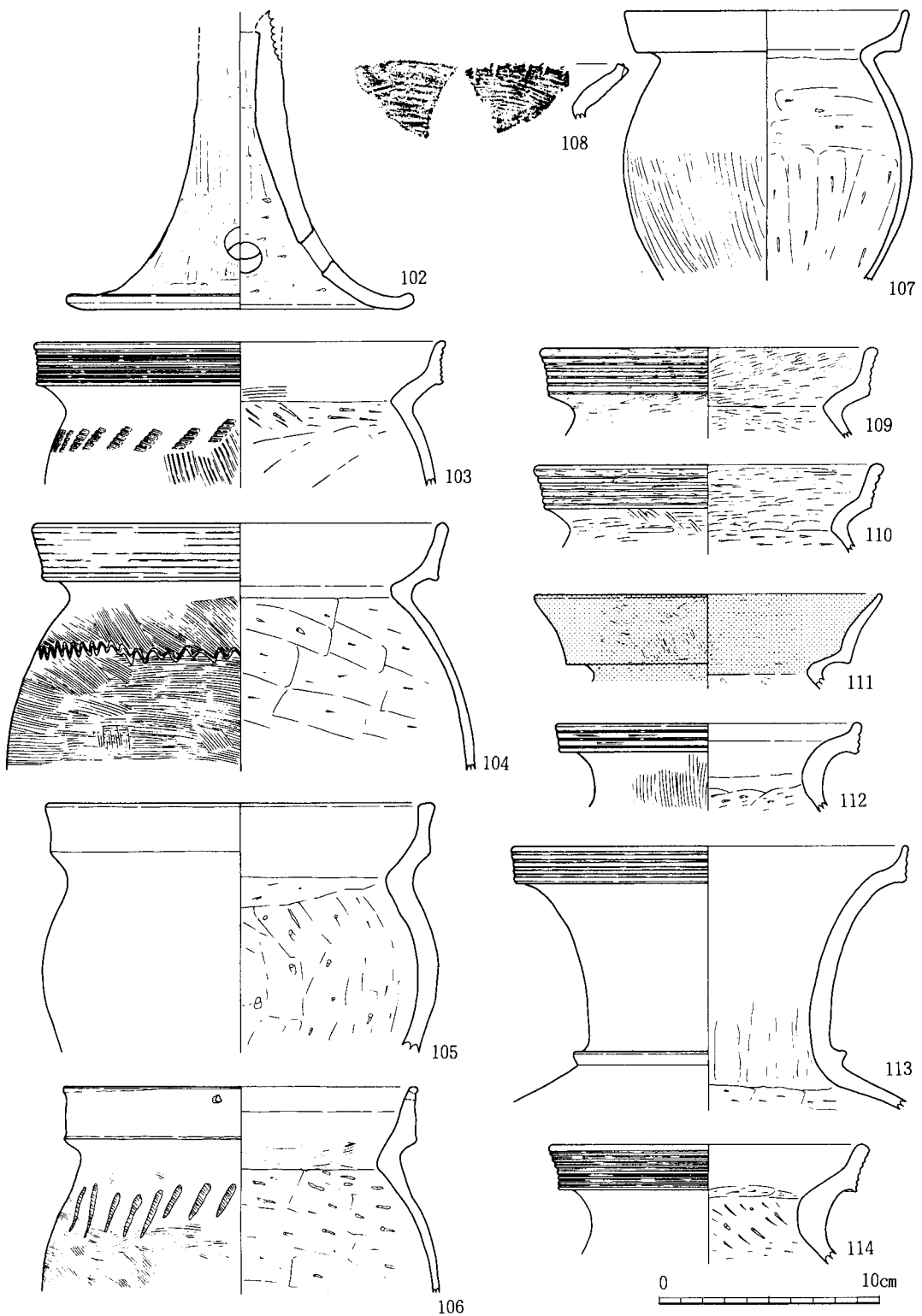
第17图 Ⅲ区出土D群土器1 (S=1/3)



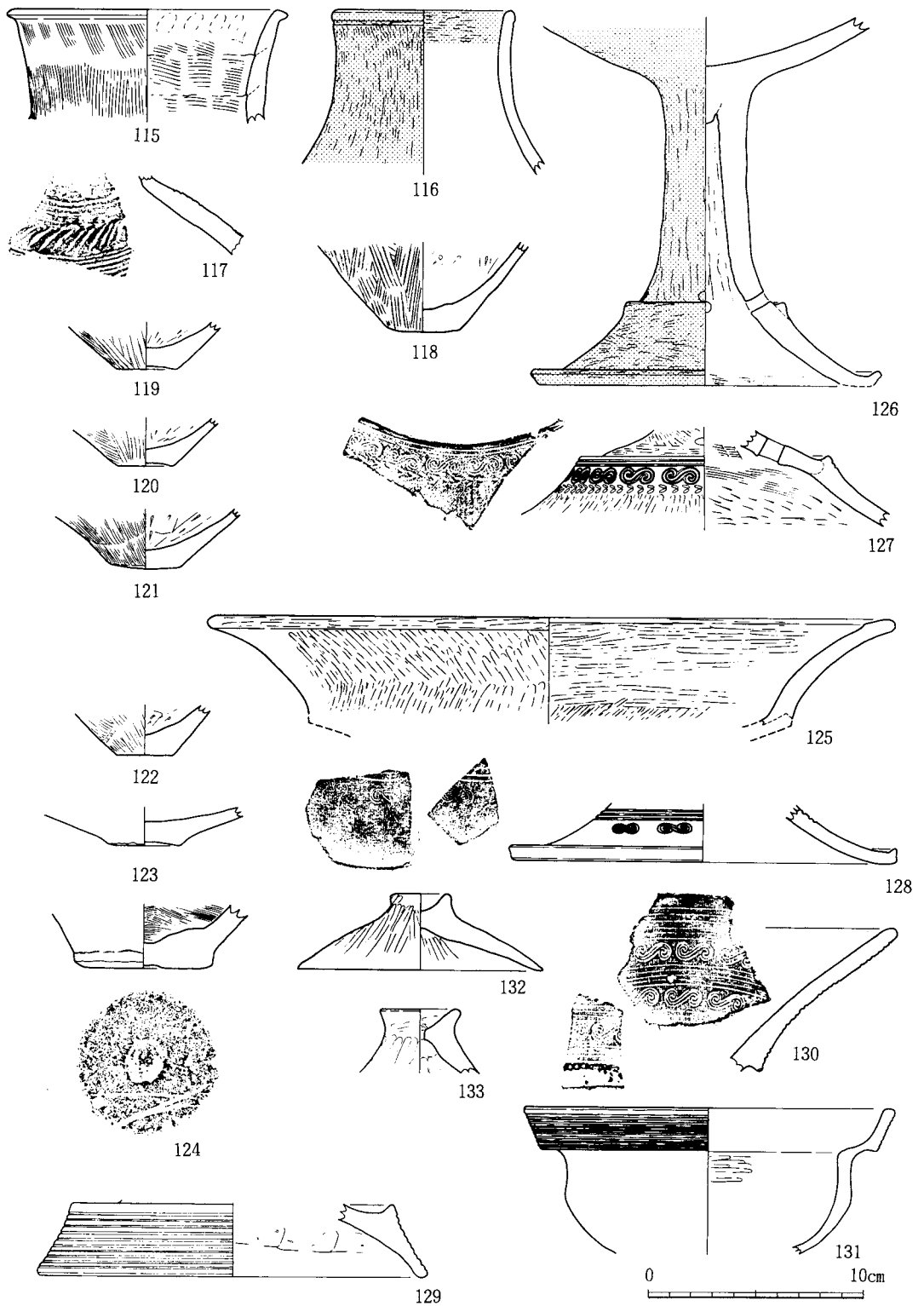
第18图 Ⅲ区出土D群土器2 (83·85)、E群土器 (90~93) 1 (S=1/3)



第19图 Ⅲ区出土E群土器2 (S=1/3)



第20图 Ⅲ区遺物包含層等出土土器1 (S = 1 / 3)



第21图 III区遺物包含層等出土土器 2 (S = 1 / 3)

第3章 昭和62年度の調査(東相川遺跡)

第1節 調査の概要

県営圃場整備事業御手洗・出城地区に伴う昭和62年度の調査は、相川町東相川地区、相河加茂神社裏の水田が対象となった。調査区はH-6号排水溝建設予定地にあたる2m×500mの1000㎡で、南から10mおきに0区から36区に設定した。現地調査は7月6日から9月14日(8月20日に実質的調査は終了)にかけて実施された。しかし、この年は梅雨明けが8月7日と例年より大幅に遅れたためそれまで作業は一進一退の状態であった。また当初、0区より調査を行う予定であったが、工事業者の都合により26区から行うことに変更されたため調査区と遺構番号の関係がおかしいものになってしまった。

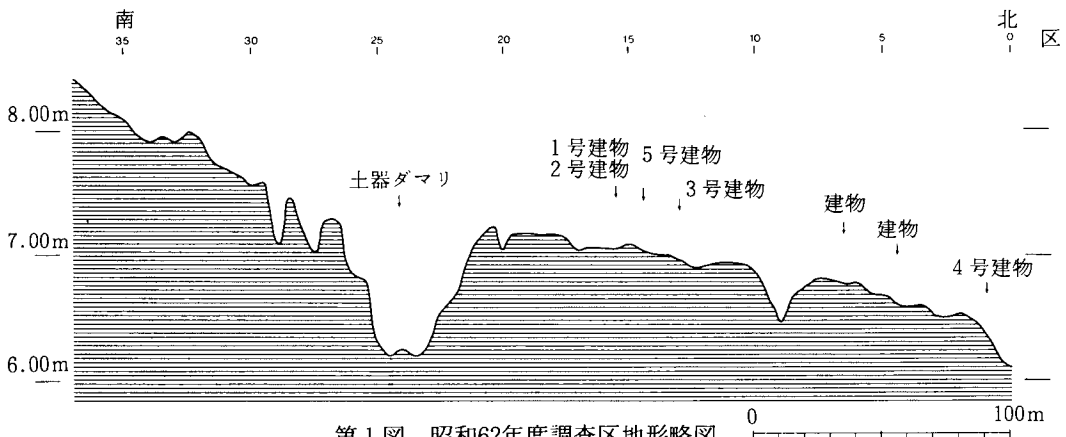
周辺には相河神社の前に地名の由来である「御手洗泉」跡の石碑が建立されており、これが御手洗川の源泉となり相川の港まで流れ込んだといわれている。また調査区の小字名に「トノノホリ」や「テラダ」、「シオガリ」などがあり、当初は中世や製塩に関する遺跡の存在が考えられた。しかし、予想に反して奈良時代の遺物が多量に出土し(23・24区包含層を中心に)、遺構も7世紀代を中心とするの掘立柱建物5棟、土坑10基、溝16条が検出された。この他、中世～近世の陶磁器、銅銭(『元符通宝』)、製塩土器もわずかながら出土している。遺構について、掘立柱建物はその規模を確認するため必要に応じて調査区を拡張したが、土坑・溝等についてはその形態・規模・時期等の内容が不明確なものが多い。したがって次の「遺構」では掘立柱建物を中心に報告する。

第2節 遺 構

(1) 掘立柱建物

1号建物

調査区中央の15・16区で検出された2間(4.2m)×1間(2.9m)、床面積12.2㎡の小型の建物。2号建物の中で検出され、主軸方向もほぼ同じN-54°-Wを測る。柱間寸法は、桁行が2.1



第1図 昭和62年度調査区地形略図

m、梁行は2.9m。柱穴掘方はいずれも約60cmの略円形で、深さは25～30cmを測る。

2号建物

1号建物を取り囲むかたちで検出された4間(7.0m)×3間(5.1m)、床面積35.7㎡の比較的大型の建物。主軸方向はN-48°-Wを測る。柱間寸法は桁行・梁行ともに約1.7m。柱穴掘方は約60～70cmの略円形、長円形であるが、角柱は約80cmとやや大きく、形状も略方形を呈する。深さは25～35cmを測る。また東側梁列の北から2・3(ピット38)番目の柱穴、西側梁列北から2番目の柱穴(ピット34)、南側桁列東から2・3(ピット40)番目の柱穴には10cm×20cm大の礫が検出された。この他に西側梁列の北から3(ピット33)・4(ピット27)番目の柱穴から柱根が検出された。本遺構の柱穴覆土は黒褐色粘質土で、1～2cm角の炭化物、地山質土ブロックを多量に含み、焼土(焼けた粘土ブロック)や焼けた木片も検出された。ピット27・34などから須恵器の蓋・高杯が出土している。

3号建物

12・13区で検出された2間(4.0m)×2間(3.0m)の総柱建物で、床面積12.0㎡を測る。主軸方向はN-43°-Wで、東側桁列の北側の並びに柱穴3基が検出され、本建物との関連(倉庫群など)が考えられる。柱間寸法は桁行が2.0m、梁行は1.5m。柱穴掘方は50～70cmの略方形、深さは10～20cmを測る。

4号建物

調査区の南端0・1区で検出された4間(5.1m)×3間(3.0m)、床面積23.0㎡を測る。主軸方向は1号建物と同じN-54°-W。柱間寸法は桁行が1.3m、梁行は1.5m。柱穴掘方は50～60cmの略円形、略方形で、深さは30～40cmを測る。東桁列の北から1(ピット83)・2(ピット84)番目の柱穴、北側桁列の西から2番目の柱穴(ピット86)、西側桁列の北から2番目の柱穴(ピット88)からは2号建物と同じような礫を検出している。また南側梁列の西から2(ピット90)・3(ピット91)番目の柱穴から柱根とその下に礫を検出した。遺物は西側桁列の南から2番目の柱穴(ピット85)からは製塩土器、3番目の柱穴(ピット89)から砥石が出土している。

5号建物

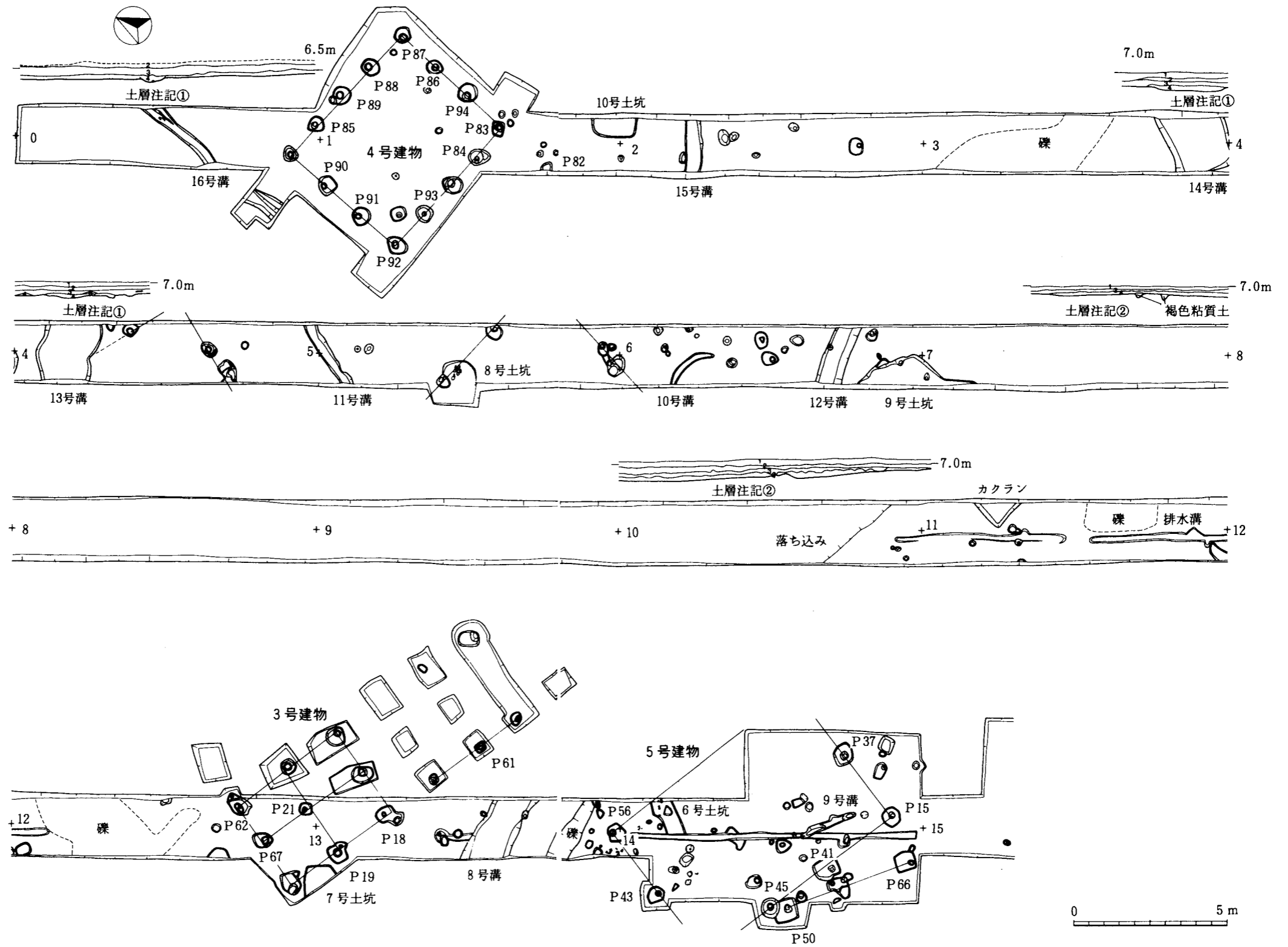
13・14区で検出された3間(7.6m)×2間(4.8)、床面積36.5㎡の本遺跡最大規模の建物。しかし本建物は調査終了後に図面上で発見されたため調査区を拡張しその全容を明らかにすることはできなかった。主軸方向は1・4号建物と同じN-54°-Wで、これらの建物は同時期のものと考えられる。柱間寸法は桁行が2.5m、梁行は2.4m。柱穴掘方は60cm程度の略方形で、深さは20～30cmを測る。

(2) 土 坑

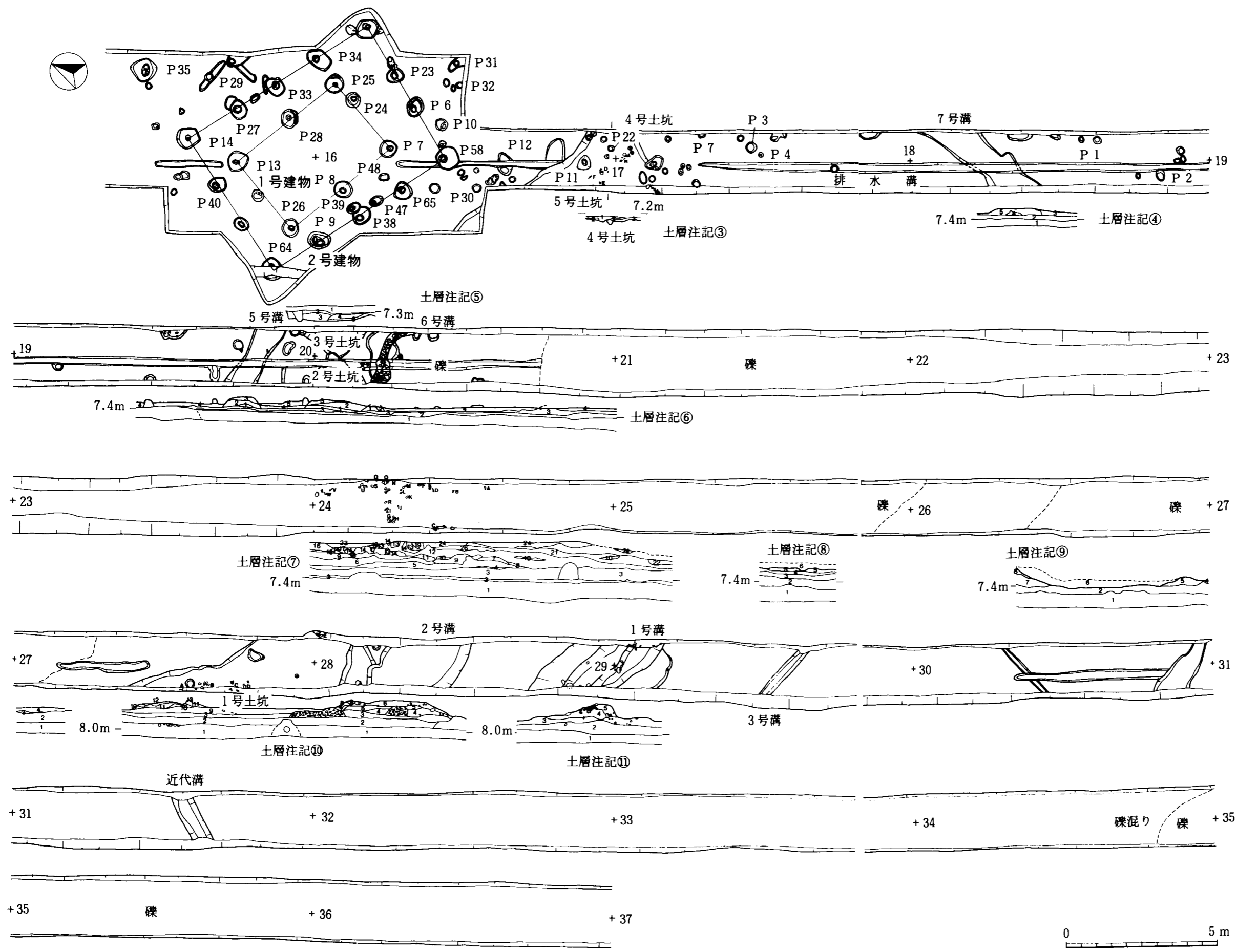
土坑は10基検出されたが先述のとおり形態・規模等については不明確なものが大半を占める。ここでは遺物が出土した遺構のみを紹介するにとどめる。

1号土坑

27区で検出された楕円形の土坑で、竪穴住居の可能性も考えられる土師器を多量に含む黒褐色粘質土層の下で検出された。規模等は不明であるが、深さ22cmを測る。覆土は4層からなる。1



第2図 遺構実測図(1)



第3図 遺構実測図(2)

土層注記①

1. 耕土
2. 包含層
3. 間層
4. 黒褐色土 10YR 3/2 粘質土、炭化物を多く含む
明黄褐色粘土ブロックを含む
5. 黄褐色粘砂 10YR 5/6

土層注記②

1. 灰黄褐色粘質土 (10YR 6/2) 耕土
2. 黒色粘質土 (10YR 2/1) (古墳~奈良の遺物包含層)
灰白色、黄橙色粘土ブロックを含む
炭化物含む
3. 灰白色粘性砂質土層 (10YR 8/1)
黄橙色粘土ブロックを含む、しまり悪い
4. 褐灰色粘質土 (10YR 4/1)
非常に粘性が強い。弥生後期?の遺物をわずかに含む、黄橙色粘土ブロックを含む

土層注記③

[4号土坑]

1. 黒褐色粘質土 10YR 2/2
炭化物を多量に含む
遺物を多く含む
2. 灰黄褐色粘砂 10YR 5/2
砂の粒は粗い
3. 黒褐色粘質土 10YR 3/2

土層注記④

[7号溝]

1. 灰黄褐色粘砂 (耕土) 10YR 5/2
2. にぶい黄橙色粘砂、礫を含む (客土) 10YR 7/3
3. 黒褐色粘質土 10YR 3/2
4. にぶい黄橙色粘質土 10YR 6/3
5. 黒褐色粘質土 10YR 2/2

土層注記⑤

[3号土坑]

1. 耕土 灰黄褐色粘砂 10YR 6/2

2. 黒褐色粘質土 10YR 3/2 炭化物を含む
3. 灰黄褐色粘砂 10YR 6/2 "
4. 褐灰色粘砂 10YR 5/2 "
5. 褐灰色粘砂 10YR 6/1 "
遺物を多く含む
礫を含む

土層注記⑥

1. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (農道盛土)
2. 灰黄褐色粘質土 10YR 6/2 (耕土)
3. 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 (客土)
4. 黒褐色粘質土 10YR 3/2 炭化物 } 含む
遺物 }
5. にぶい黄褐色粘砂 10YR 5/3
[2号土坑]
- ① 灰黄褐色粘砂 10YR 5/2
- ② 褐灰色粘質土 10YR 5/2
- ③ " 10YR 4/1
粘性が強い

[5号溝]

- ① 明黄褐色粘質土 10YR 6/6 粘性が強い
- ② 褐灰色粘質土 10YR 6/1 "
- ③ 褐灰色粘土 10YR 6/1 黄橙色粘土ブロック含む

[6号溝]

- ① 灰黄褐色粘砂 10YR 5/2
- ② " 10YR 4/3

土層注記⑦

1. 灰黄褐色粘質土 10YR 5/2 (農道の盛土)
2. にぶい黄橙色粘質土 10YR 7/3
3. 灰黄褐色粘質土 10YR 6/2 炭化物、礫含む
4. 灰黄褐色粘砂 10YR 6/2
5. 褐灰色粘砂 10YR 5/1 炭化物含む
6. " " 10YR 4/1 5層より粘性強い、炭化物含む
7. " " 10YR 6/1 5、6層に比べて粘性強い
8. " " 10YR 5/1 5層に比べ砂質が強い
9. " 砂層 10YR 6/1

10. 浅黄橙色砂ブロック 10Y R 8 / 3
11. 褐灰色粘質土 10Y R 4 / 1
12. " 粘砂 10Y R 5 / 1 浅黄橙色の砂ブロック含む
13. 黒褐色粘質土 10Y R 3 / 1 須恵器多量含む
しまり悪い、炭化物を含む
14. 褐灰色粘質土 10Y R 6 / 1 須恵器多量含む、しまり悪い
15. 灰褐色粘砂 10Y R 4 / 1
16. 灰黄褐色砂層 10Y R 6 / 2
17. 灰白色粘砂 10Y R 7 / 1
18. 浅黄色砂層 2.5Y 7 / 3
19. 褐灰色粘質土 10Y R 6 / 1 非常に粘性が強い
20. " 粘砂 10Y R 4 / 1 自然木、須恵器を多量に含む、しまりが悪い
21. 黄灰色粘砂 2.5Y 6 / 1
22. 黒褐色粘質土 10Y R 1.7 / 1
遺物を含む
23. 灰色粘土 5 Y 6 / 1
24. 浅黄色砂層 5 Y 7 / 3

土層注記⑧

1. 灰黄褐色粘質土 10Y R 5 / 2 農道の盛土
2. にぶい黄橙色粘質土 10Y R 6 / 3 礫を多く含む
3. " "
4. 灰黄褐色粘質土 10Y R 4 / 2
5. 黒褐色粘質土 10Y R 2 / 2
遺物を含む
6. 礫層

土層注記⑨

1. 灰黄褐色粘質土 農道の盛土 10Y R 5 / 2
2. にぶい黄橙色粘質土 10Y R 6 / 3 礫を多く含む
3. 灰黄褐色粘質土 10Y R 4 / 3
4. にぶい黄橙色粘砂 10Y R 5 / 3
5. 黒褐色粘質土 10Y R 2 / 2 弥生土器含む
6. 礫層
7. 褐灰色粘質土 10Y R 5 / 1 礫を含む

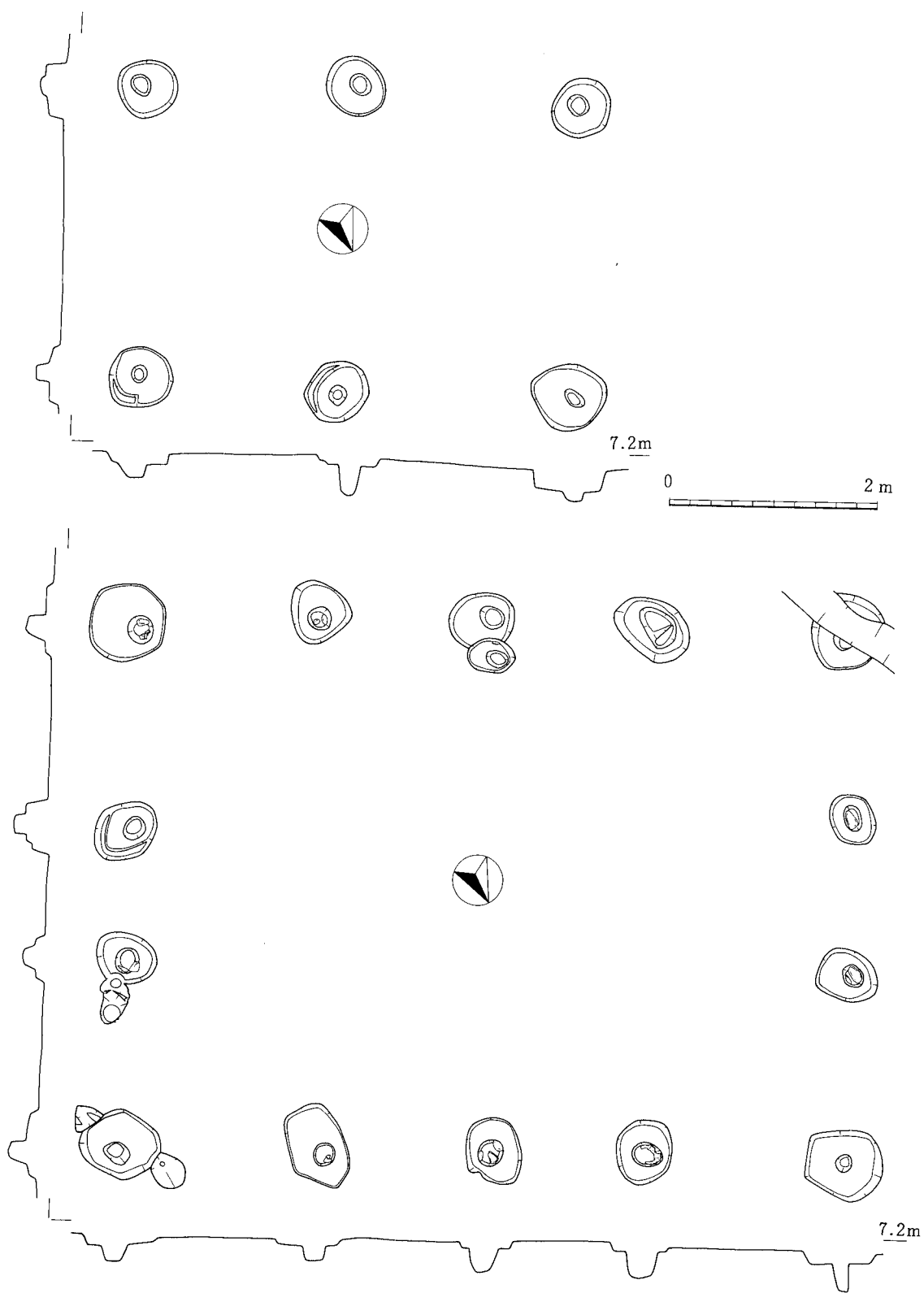
8. にぶい黄色粘質土 2.5Y 6 / 3
(地山質土)

土層注記⑩

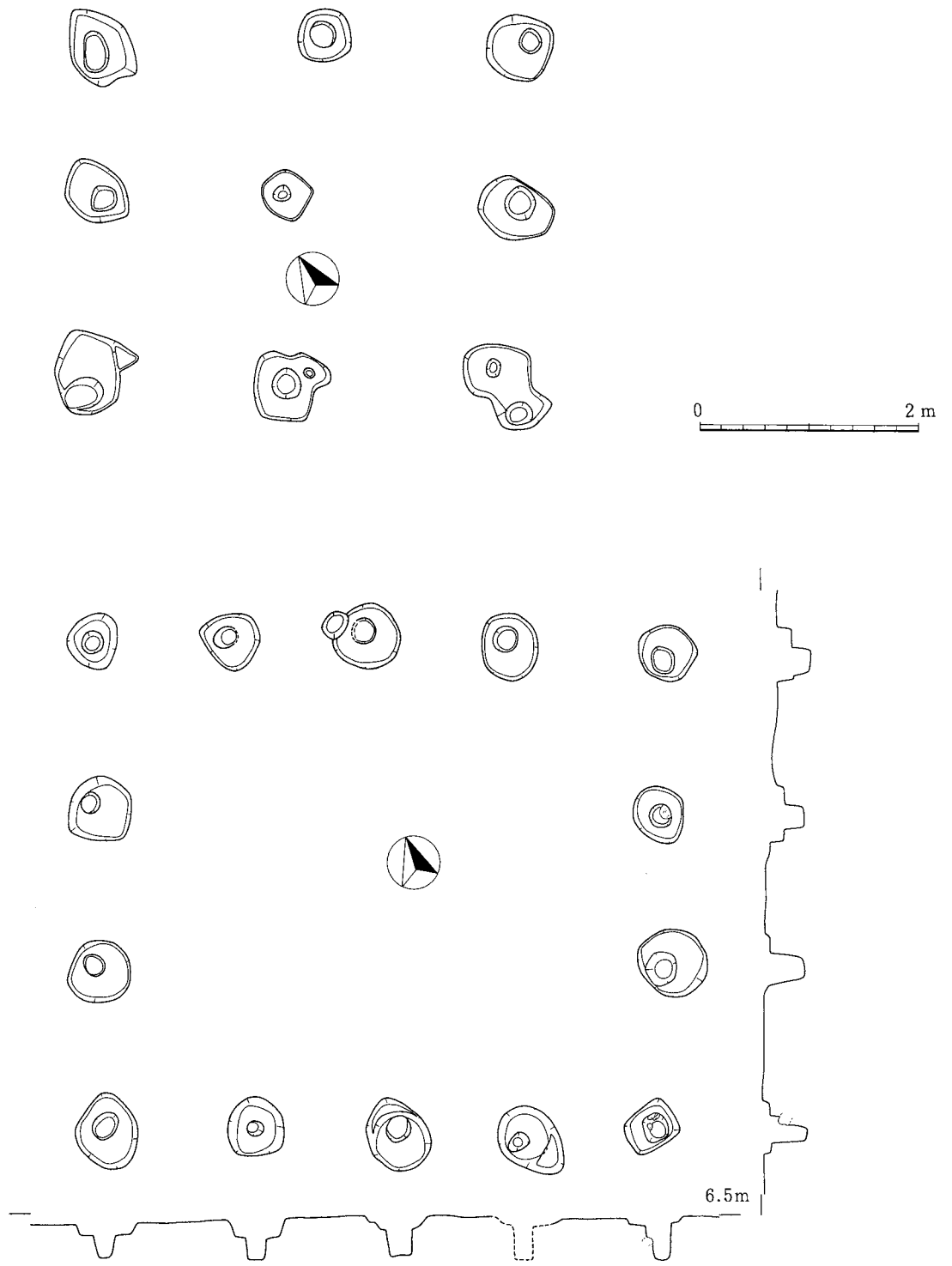
1. 農道盛土(暗褐色粘砂) 10Y R 3 / 3
2. 耕土(にぶい黄褐色粘質土) 10Y R 5 / 3
3. にぶい黄色粘砂 10Y R 5 / 4
4. 灰黄褐色粘砂 炭化物わずかに含む 10Y R 6 / 2
5. 灰黄褐色粘質土 10Y R 5 / 2
6. にぶい黄褐色砂 10Y R 5 / 3
7. 灰黄褐色粘砂 10Y R 5 / 2 地山ブロックを含む
8. 褐灰色粘質土 10Y R 5 / 1
9. 黒褐色粘質土 弥生土器を包含する
炭化物を多量に含む
10. 黒褐色粘質土 地山質土との混土層
11. にぶい黄褐色粘質土 10Y R 7 / 4
黒褐色土をシミ状に含む
鉄分と思われる茶色の粒子を多く含む
炭化物、遺物をわずかに含む
12. 黒褐色粘砂 10Y R 3 / 1
地山質土を含む
炭化物、遺物をわずかに含む
13. 灰黄褐色砂 10Y R 4 / 2
土器、小礫を含む

土層注記⑪

1. 農道盛土(暗褐色粘砂) 10Y R 3 / 3
2. 耕土(にぶい黄褐色粘質土) 10Y R 5 / 3
3. にぶい黄色粘砂、礫を含む 10Y R 5 / 4
4. 灰黄褐色粘質土 10Y R 6 / 2
珠洲焼出土、礫を多く含む
炭化物を含みしまり良
5. 灰黄褐色砂 10Y R 5 / 2
礫を多く含む



第4図 掘立柱建物跡（上：1号建物跡、下：2号建物跡）



第5図 掘立柱建物跡（上：3号建物跡、下：4号建物跡）

層は黒褐色粘質土で、地山質土が混入している。2層はにぶい黄褐色粘質土で上の黒褐色土がシミ状に堆積する。また鉄分と思われる茶色の粒子を多量に含む。3層は黒褐色粘砂で地山質土を含む。1～3層は土器・炭化物をわずかに含む。4層は灰黄褐色砂で土器・小礫を含む。

2号土坑

19・20区で2号土坑と接して検出された隅円方形と思われる中世の土坑。規模は不明であるが、深さ21cmを測る。覆土は3層からなる。1層は灰黄褐色粘砂。2・3層は褐灰色粘質土で、3層は2層に比べて暗く、粘性が強い。遺物は土師質土器の皿が出土している。

3号土坑

19・20区で2号土坑と接して検出された隅円方形と思われる土坑。規模は不明であるが、深さは17cmを測る。覆土は3層からなり、1層は灰黄褐色粘砂。2・3層は褐灰色粘砂。すべての層に炭化物を含み、3層は遺物を多く含み、礫もみられる。

4・5号土坑

16・17区で検出された土坑で、調査時は土器の出土状況から2基の土坑として扱ったが、形態・規模等が不明であり、土器の時期が同じであることから一括して扱う。また本遺構は竪穴住居の可能性も考えられる。覆土はほぼ3層からなる。1層は黒褐色粘質土で、土器・炭化物を多量に含む。2層は灰黄褐色粘砂で、砂の粒は粗い。3層は黒褐色粘質土。土器は土師器の甕・碗等が出土している。

8号土坑

5区で検出された円形に近い形態の土坑で、長径約125cm、深さ7cmを測る。覆土は褐灰色粘質土の単層。遺物は弥生土器が出土している。

9号土坑

6・7区で検出された方形に近い形をされるとと思われる土坑で、深さ10cmを測る。覆土は褐灰色粘質土の単層。遺物は土師器の甕が出土している。

10号土坑

1・2区で検出された隅円方形で長径155cm、深さ5cmを測る。覆土は黒褐色粘質土の単層。遺物は製塩土器が出土している。

(3) 溝

溝は16条検出された。規模の内訳は上縁の幅2m前後のものが3条、1m前後のものが5条、20～50cm程度のものが7条からなる。溝も遺物が出土したものを中心に報告する。

1号溝

28・29区で検出された中世の溝で、上縁幅76cm、底縁幅32cm、深さ33cmを測る。覆土は2層からなる。1層は灰黄褐色粘質土で、炭化物を含むしまりのよい土層である。礫を多く含み、珠洲焼が数点出土している。2層は灰黄褐色砂で礫を多く含む。

13号溝

4区で検出された溝で、上縁幅195cm、底縁幅165cm、深さ8cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で炭化物を多く含み明黄褐色の粘土ブロックも含む。遺物は須恵器の甕・横瓶等が出土している。

14号溝

3・4区、13号溝の北側に隣接して検出された溝で、土坑の可能性も考えられる。規模は上縁幅174cm、底縁幅174cm、深さ13cmを測る。覆土は13号溝とまったく同じ黒褐色粘質土。遺物は土師器の甕・鍋等が出土している。

(越坂 一也)

第3節 遺物

1. 弥生時代

本調査区から出土した弥生土器のうち、実測し得たものは22点（第6図～第8図1～22）である。ほとんどは後期後半法仏式期に属するものと考えられるが、遺構出土品は7点（1～7）と少なく、他の15点が包含層出土であるため、いわゆる伴出関係から個別土器の時期を推定するには難しい状況がある。器類構成は壺2点、甕11点、高杯2点、器台2点、高杯あるいは器台の脚1点（27区1号土坑、1）、鉢1点、注口土器1点、底部穿孔土器底部片2点であり、甕が半数をしめる。遺構出土品も複数の土器を実測し得たのは5区8号土坑（3～6）のみであり、同土器については後述するとして、以下器類ごとに若干の説明を加える。法量等については観察表を参照されたい。

壺は、9区下部包含層出土底部片（9）と24区最下層出土装飾広口壺（21）の2点がある。おそらくは長胴短頸壺と思われる9は、胎土（粘土素地）中に海面の骨片を含んでいる。21の広口壺は、6条の擬凹線文を付した口縁端部に竹管文を施した円形浮文3個一組を4箇所配するものである。

8号土坑出土品を除く甕は7（17区ピット3）、8（9区）、10～12（11区）、17・18（24区）、22（27区、いずれも包含層）の8点を実測し得た。有段口縁擬凹線文系甕は7・8、10、12の4点であり、概して口縁部は短い。無文有段口縁系甕は17、くの字口縁系甕は11の各1点のみであり、他の2点（18、22）は受口状口縁系甕である。10・11、17・18の4点の外面には煤の付着が認められる

高杯は、14区6号土坑出土脚部片（2）と14区拡張区包含層出土杯部片（15）の2点がある。15の内面は全面赤彩であるが、外面に残る痕跡からはそれが全面的なものか部分的なもの（赤彩文様等）かは判断しかねる。器台は、13区（包含層）出土受部片（13）と14区拡張区包含層出土杯部片（16）の2点を実測し得た。13の受部外面2段の文様は、擬凹線文というよりはハケ状具痕に近く、浅く細い単位の不明瞭なものである。（16の脚端部外面下位についても同様）。なお、16は径が図よりもやや小さくなり、壺の脚台となる可能性もある。

このほか、13区拡張区包含層から注口土器の注口部（14）、24区最下層から底部穿孔土器底部片2点（19・20、全体形不明）が出土している。14は注口部断面に漆状のものが付着しており、同部分を補修しているものと思われる。19・20の穿孔は焼成後と考えたが確証を欠く。

5区8号土坑からは、甕3点（4～6）、鉢1点（3）が出土している。5は口縁部外面上下部に沈線が巡るが、それを含まずべて無文有段口縁系のものである。3は平底をもつと考えられる

が台付きの可能性もある。4は長胴の中形甕で外面には煤が付着し肩部に列点が巡る。胴部下位を欠くが他はほぼ完形である。5・6はともに大形の甕で、法量、器形、調整等が類似する。いずれも二分の一程度の遺存度であるが、土坑自体の掘り込みが浅く5の破片が包含層からも出土していることから、本来は完形品であった可能性がある。合わせ口甕棺のような用途も考えられよう。

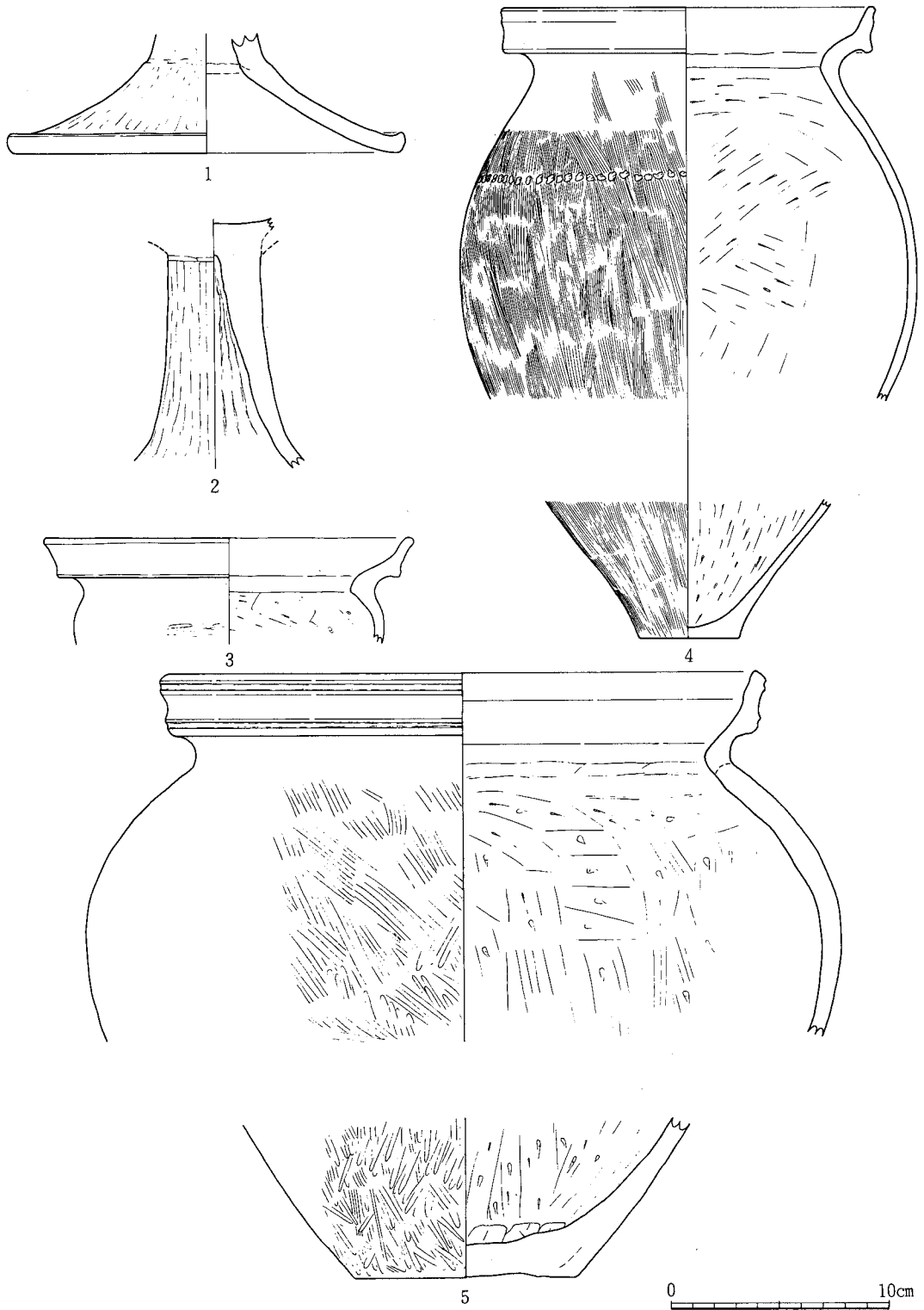
(栃木 英道)

弥生土器観察表凡例

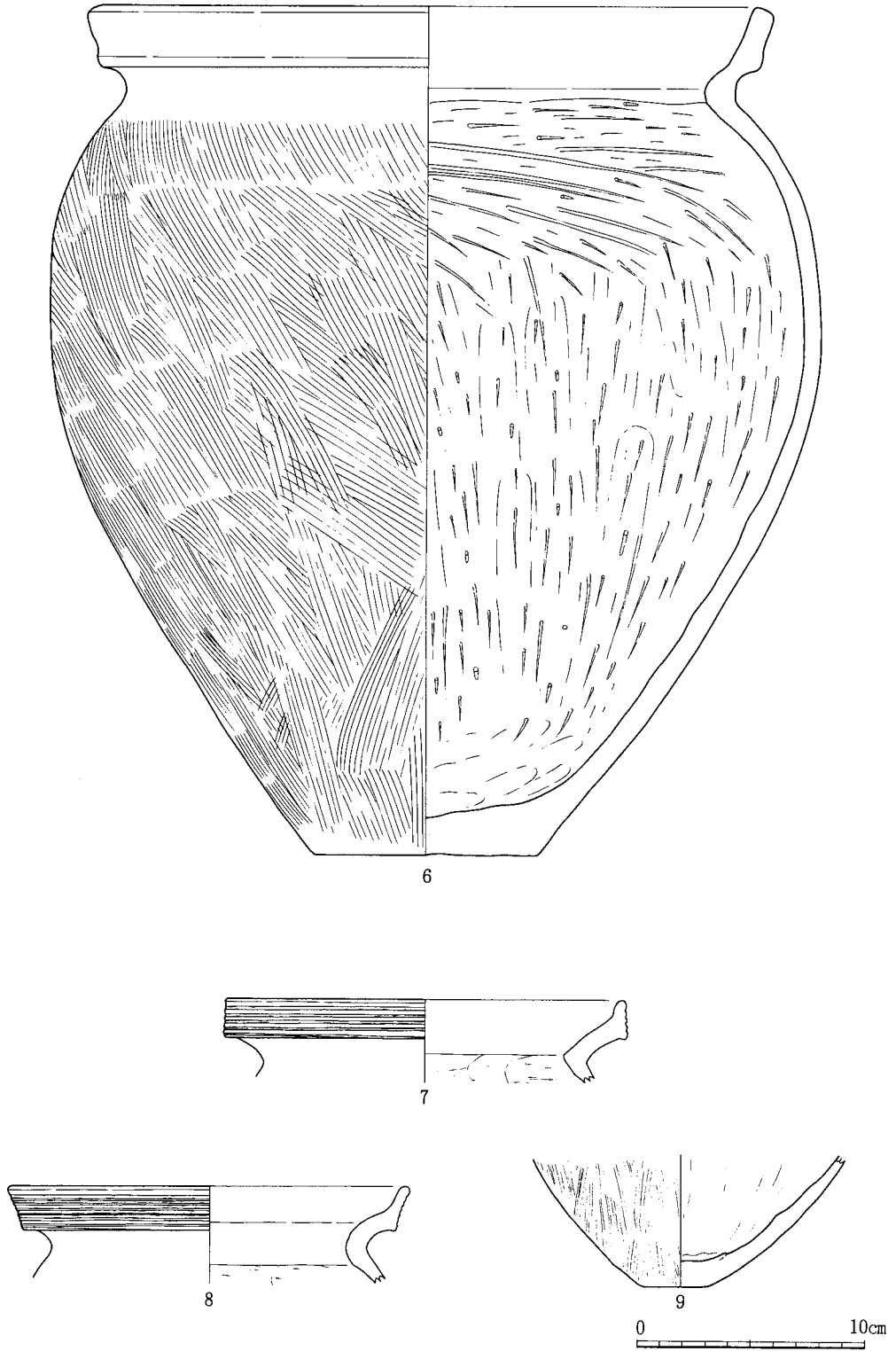
- 番号 各挿図中の遺物番号に一致する。 不能を示す。
- 出土地点 出土グリッド、遺構、位置、層位、取り上げ番号等の記した。 色調 外面、内面の順に記した。／のないものは内外同色。
- 器類 壺、甕、高杯、鉢、器台のほか、(底部)、(脚)、(注口)の別を記した。 煤 ○ 煤、炭化物の付着を示す。
赤彩 △ 赤彩有り。図中アミで表示(不鮮明なものは無表示)。
- 法量 a 壺、甕、高杯、鉢は口径、器台は受部径を記した。 黒斑 □ 黒斑有り。○×○cmは範囲(縦方向×横方向)を示す。
b 甕、鉢は胴部最大径、高杯は脚部最小径を記した。 特記事項 擬凹線文の条数、孔の数・径等を記した。
c 壺、甕、(底部)は底径、器台、(脚)は脚端部径を記した。 整理 No. 土器(黄色で数字のみ注記)実測図番号に一致する。
d 器高を記した。 遺存度 図化し得た範囲の横方向への遺存度を示す。
() つきは推定値、-は計測

第1表 第6～7図1～22弥生土器観察表

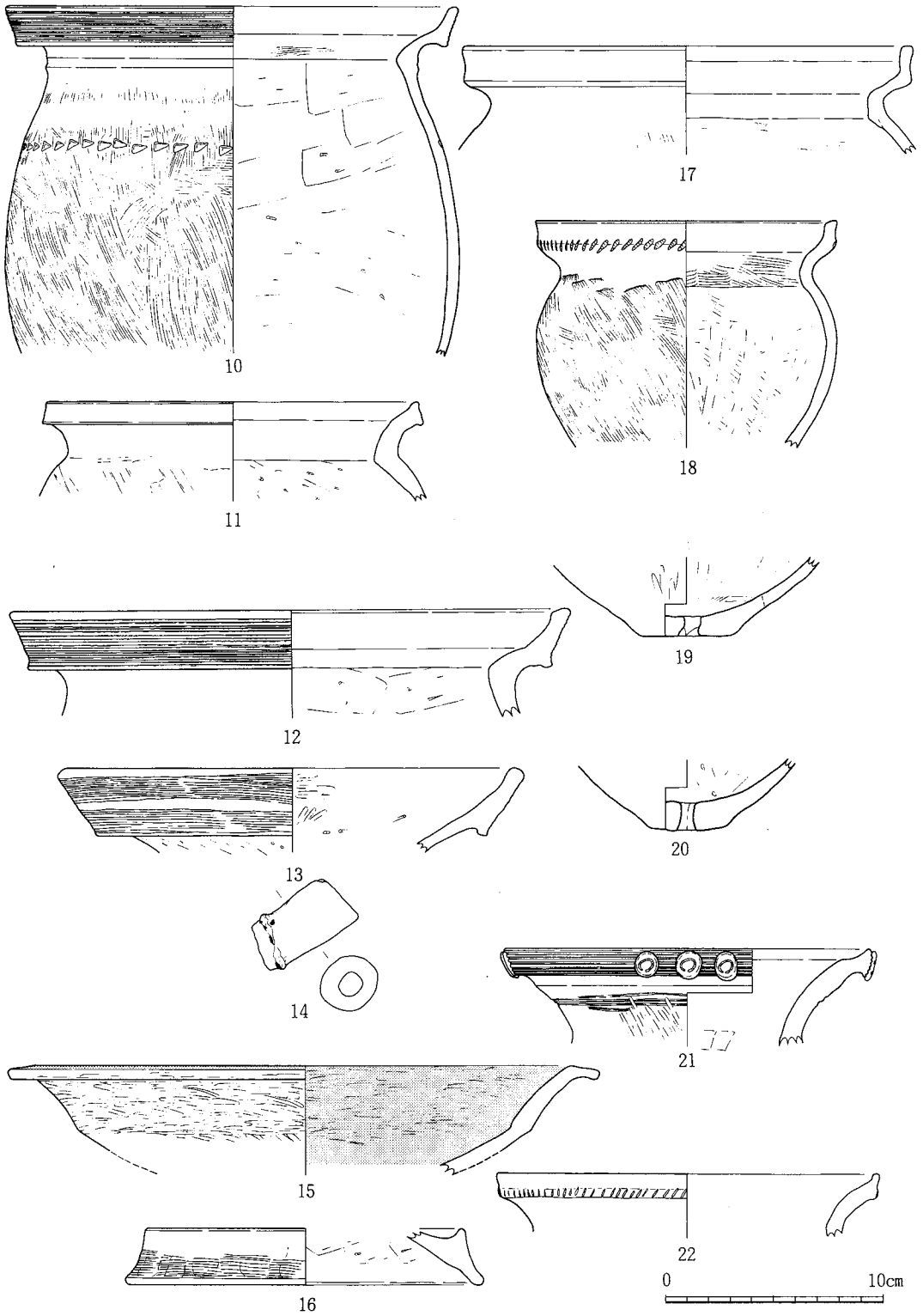
番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No.	遺存度
1	27区 1号土坑D	(脚)	-	-	17.6	-	浅黄橙色		内面磨耗	C134	1/3
2	14区 6号土坑②	高杯	-	4.2	-	-	にぶい橙色			C124	ほぼ完
3	5区 8号土坑③	(鉢)	16.9	14.3	-	-	浅黄橙色		外磨耗、内口縁ナデ	C130	～1/4
4	5区 8号土坑③	甕	16.9	21.0	4.6	30.0	浅黄橙色	○外面	口縁部ナデ	C165	ほぼ完
5	5区 8号土坑②	甕	27.2	34.9	10.3	-	浅黄灰/淡黄	□外底部α×11cm	ロナデ、包含層含む	C132	約1/2
6	5区 8号土坑②	甕	29.1	34.3	9.9	38.0	にぶい黄褐色	□外底部11×10cm	口縁ナデ、1/4以下遺存	C166	胴1/2
7	17区 pit 3	甕	17.8	-	-	-	浅黄橙色		擬4～5、外頸内ロナデ	C121	1/4
8	9区 下部包含層	甕	17.8	-	-	-	橙色		擬凹線7、外頸内ロナデ	C128	～1/4
9	9区 下部包含層	(壺)	-	-	2.8	-	暗黄灰色/灰		海綿の骨片を含む	C190	2/3
10	11区付近西側表採	甕	20.6	21.0	-	-	にぶい橙/橙	○外面	擬凹線8、外頸内ロナデ	C125	1/3



第6图 弥生土器（1：1号土坑、2：6号土坑、3～5：8号土坑）



第7図 弥生土器（6：8号土坑、7：ピット3、8・9：包含層）



第8図 弥生土器（10～22：包含層他）

番号	出土地点	器類	a	b	c	d	色調 外/内	○煤△赤彩□黒斑	特記事項	整No	遺存度
11	11区付近西側表採	甕	17.1	-	-	-	浅黄橙色	○外面	口縁部ナデ	C126	1/4
12	11区付近西側表採	甕	25.8	-	-	-	にぶい黄橙色		擬15~16、外頸内口ナデ	C127	~1/4
13	13区	器台	20.8	-	-	-	淡赤橙/ にぶい橙			C122	小片
14	13区拡張区包含層	(注口)	-	-	-	-	にぶい橙色	断面漆状のもので補修	外面磨耗、内面ナデ	C123	ほぼ完
15	14区拡張区包含層	高杯	25.0	-	-	-	浅黄橙色	△内、外文様?	□外面口縁3×10cm	C119	1/2
16	14区拡張区包含層	(器台)	-	-	16.4	-	にぶい橙色		壺脚台の可能性あり	C120	~1/4
17	24区 最下層	甕	20.6	-	-	-	にぶい橙色	○外面	口縁部~頸部ナデ	C186	1/2
18	24区 最下層	甕	13.8	13.8	-	-	にぶい橙色	○外面	外口~頸、内口ナデ	C136	1/2
19	24区 最下層	(底部)	-	-	4.0	-	浅黄/灰黄色	底部焼成後穿孔?	孔径9~10mm	C181	ほぼ完
20	24区 最下層	(底部)	-	-	3.3	-	浅黄橙/淡橙	底部焼成後穿孔?	孔径8~9mm	C180	1/3
21	24区 最下層	壺	16.8	-	-	-	浅黄橙色	擬凹線6、内口ナデ	円浮+竹管文3×4	C185	1/2
22	27区 包含層	甕	17.6	-	-	-	浅黄橙色		外面ナデ、内面磨耗	C135	~1/4

2. 古 代

古代の遺物は各区から出土したが、遺構中からのものはごく極かであり、大半は包含層からの出土品である。以下では、遺構分布にしたがい0~9区、10~20区、21区~の3区間に分けて述べていく。

0~9区 遺構では0~1区に4号建物跡が、4~6区に柱穴らしいピットが存在する。

須恵器蓋杯は、古墳時代以来の伝統をひく杯H類(23~31)が主体である。小片が多いため法量は不確かであるが、蓋では口径11.1~12.8cm、身では口径10.6~11.4cmを測る。産地は南加賀地域のもが主体を占めるが、23と29は能登地域からのものと推定される(23は押水・高松窯ないしは羽咋窯、29は押水・高松窯)。天井部ないしは底部にロクロケズリのあるものは、23と29のみであり、その有無が産地差を反映している。

土師器では内面黒色の碗44や高杯45~47があり、甕類はいずれも非ロクロ調整の製品である。口縁端部が内湾ぎみとなって先端を小さく上方につまみあげたような手法(a手法)の49、54~57、59、62などは7世紀前半代に特徴的なものである。一方口縁部が外反し、内面にロクロヒダ目状の凹凸を顕著に残す手法(b手法)51~53は7世紀でも後半~8世紀初頭にみられるものである。その他同期には外反してロクロヒダ目を残さない手法(c手法)のものも存在する。

製塩土器(64~66)はすべて棒状尖底のタイプである。胎土は赤色粒を多く含む軟かい質感で松任平野の7世紀末頃に主体的な細砂粒を多く含むものとはやや異質である。このほか周辺部からは細片がかなり出土している。

1区の4号建物P89からは琥珀の塊(長1.8cm、重1.34g)1点が出土した。表面は平滑であるが穿孔等の加工は認められない。

土器の時期は各器種とも7世紀前半を主体とし、5~7区などで7世紀中葉~後半に下るもの(32~35、38、40、46、48、51~53)を少量含んでいる。32は内面に漆状の薄膜が付着する。

10～18区 本地区には12～14区に3号・5号建物、15～16区に1号・2号建物が存在し、その周辺部からは多くの土器が出土した。2号建物の柱穴からは76・85が、建物南の4・5号土坑からは67・98・99・104・105などが出土した。5号建物の柱穴からは111が出土した。

須恵器杯H類(67～75)はいずれも南加賀・辰口窯産とみられるもので、切り離し後回転ヘラケズリ調整したものはない。高杯は伝統無蓋タイプの脚無透の86、碗形の84・85(押水・高松産)がある。はそうは注口下部が突出するもので内部に円孔の抜き取り塊が入っている。7世紀前半代のものを中心とする。碗形杯部の高杯84・85は後半に下るものであろう。その他、大甕・横瓶94～96も7世紀前半代のものがみられる。

有蓋の杯G・A類(76～80、82・83)では、法量が小さく肉厚の76・77は、7世紀中葉に遡るが、他は後半代に位置付けられる。杯B90は7世紀末とみられる。その他8世紀前半代とみられる89・91、同後半代の92・93がある。91は内底面に黒色光沢を有する漆が付着する。くろめられたものの可能性がある。漆面は凹凸があることから、漆塗土器ではなく、パレット的な小分け容器として使用されたものであろう。93は墨書土器で外底面に「廣十」とある。

土師器では、須恵器杯H蓋67とともに4・5号土坑から出土した内黒の碗98・99、a手法の口縁形態の104・105は7世紀前半に位置付けられる。赤彩や暗文を有する碗100～102、b手法の甕106～108、c手法の109は7世紀後半～8世紀初頭とみられる。100は斜放射の2段暗文を施す深身の碗で、飛鳥地域の土師器杯Aに対比できる器形であろう。110の口縁部も7世紀後半に存在するものであるが本例の器形は不詳である。111は近江系甕で、松任市上二口遺跡や野々市町末松遺跡など、現在のところ手取川扇状地の遺跡で7世紀末の時期に集中して確認されている。

113は甌の把手で先端部を陽物風に仕上げている。頂部はヘラで切り込みを入れ、小さな穴をあけている。7世紀代とみられる。

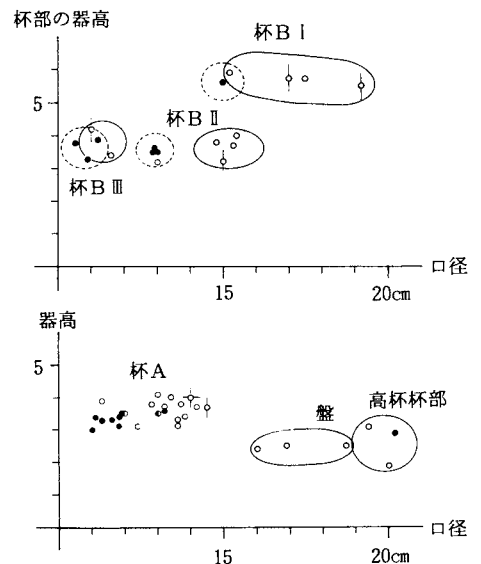
103は8世紀半ば～後半と考えられる。

22～25区 21区から地形が南へ低く傾斜し、23～24区が最も深くなるが、25区から再び礫層があらわれて高くなる。この落ちこみの24区を中心に25区にかけて、土器が集中して出土した。大半は8世紀後半の須恵器食膳具類であり、同期の土師器食膳具・煮炊具類は小片がほとんどで図化できるものは極少ない。その他、弥生時代後期前半～同後半の土器がこの落ちこみから出土している。

以下、これらの土器群を一定のまとまりとして各器種ごとに検討する。

実測したものは須恵器全出土品中、個体数で8割を越えると目算される。口縁部遺存のものは細片を除いてほとんど図化されている。

食膳具の法量分布を示したのが第9図である。蓋杯



第9図 土器ダマリ出土土器の法量と器種分類
(白丸：南加賀・辰口窯産、黒丸：押水・高松窯産、半黒：末窯産)

(有台杯)は杯部の器高が5cm代と深身で、口径15~20cmの杯BⅠ、杯部高3cm代で口径13~15cm代と偏平器形の杯BⅡ、杯部高3cm代で口径11.0cm前後と相対的に深身となる杯BⅢに法量分布のまとまりを持つ。これらは、平城宮での研究成果から、当時の人々が使い分け、呼び分けていたことが明らかにされている(西弘海1976「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集』V奈良国立文化財研究所)。これらは何も都の特殊な官人用食器のみにあてはまるのではなく、法量分化による器種の分化が、当時の食器構成の理念として各地域の生産・消費の場でそれぞれの形で具現されていった。ここでは器種分化の具体的な検討は行えないが、加賀市篠原遺跡の例(北野博司・池野正男1989「北陸における須恵器生産」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会)などを参考にすると、加賀地域にもあてはめうることから器種として個々を捉えておきたい。

器種構成比(実測個体中)は、杯蓋(杯BⅠ:3、杯BⅡ:3、杯BⅢ:2)を除くと、杯BⅠが6(10.5%)、杯BⅡが8(14.0%)、杯BⅢが7(12.3%)、杯Aが26(45.6%)、盤が3(5.3%)、高杯が3(5.3%)小壺・甕・その他が4(7.0%)となる。この段階で杯B蓋が身よりも少ないのは特異な例かもしれない。杯B全体では36.8%で杯Aよりもやや少ない。小松市矢田野向山1号窯、同二ツ梨横川1号窯、加賀市篠原遺跡、辰口町後山谷2号窯など8世紀代のデータを各報告書からよみとると、両者はおおよそ同率か杯Bがやや少ない程度である。

第15~17図は、各器種を産地別に並べてみた。115~121、124~130、136~140、145~148、150~160、162~164、173・174、176~179が南加賀・辰口窯産、135・149・161が末窯産、122・123、131~134、141~144、165~172、175が押水・高松窯産とみられた。各産地別の比率は、それぞれ66.2%(44)、4.6%(3)、29.2%(19)となる。盤と壺・甕は南加賀・辰口窯で占められるが、杯類では各器種とも3割程度の押水・高松窯産をほぼ均等に含んでいる。

編年的には、加賀地域の二ツ梨横川1号窯や箱宮5号窯第3床の段階のものが多く、その後の段階のものも含む。8世紀第3~第4四半期の土器群と考えられる。押水・高松窯産の土器についても編年の位置には矛盾がないと思う。

ここで杯類の各器種の産地別の法量を比較してみる(第9図)。蓋杯では各器種とも押水・高松窯産に対して、南加賀・辰口窯産の法量の大きいことがわかる。それは下段図の杯Aではさらに顕著である。

ただこの法量グラフは複数時期のものを含んだものであり、該期が偏平器形から深身器形へ、また法量の小型化という流れの中にあることから、前後の段階をあわせたものであることに注意しておかなければならない。しかし、いずれにしても両窯跡群を比較した場合、同一時期の同一器種でも法量差があることは明確と言えよう。

この土器群には墨書土器が6点あり、いずれも杯の外底面に「×」(ないしは「+」)と記している。器種別では杯BⅡ・Ⅲが2点、杯Aが4点、産地別では南加賀窯・辰口窯産が3点、末窯産が1点、押水・高松窯産が2点である。155はやや時期が下る可能性はあるが、他はほぼ同一時期とみられる。169と170は土器の胎土・焼き・器形・ヘラ記号、および墨書の筆致がよく類似している。その他にも、145・146・150など同時焼成→供給が想定される例がある。墨書は16区で出

土した「廣十」と関連のあるものか。

3. 中・近世

中・近世の土器類はコンテナ1箱分である。当該期の明確な遺構として捉えられたものはほとんどなく、土器も小片が大半である。出土土器は12世紀後半～18世紀代まではほぼ連綿と続いている。

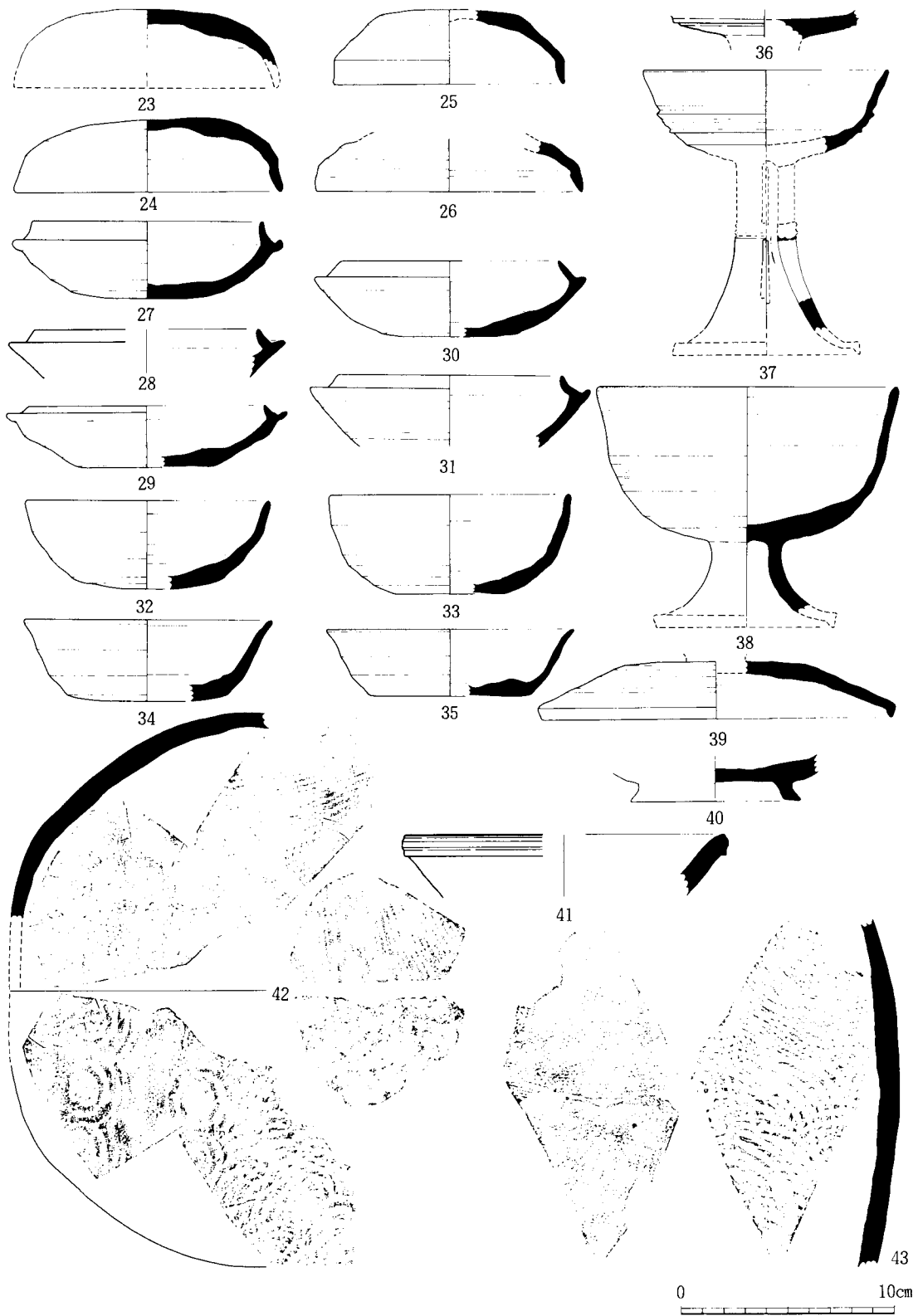
このうち13世紀代ものは28～31区、14～17区などで出土しており、前者では1号溝がこの時期の遺構とみられる。図示したものでは187の加賀の甕口縁部があり、他に珠洲の鉢や青磁などが出土している。14世紀代の土器は量は少ないが188の加賀甕などがある。

15世紀～16世紀初めの遺物は比較的多く、180・181の土師皿、182～184の青磁碗・皿・盤、185の白磁八角杯、186の瀬戸天目茶碗などがある。その他にも珠洲の鉢や越前の鉢、中国製の染付碗等が出土している。遺物は0～1区、5～10区、14～20区の3地点に集中性がある。

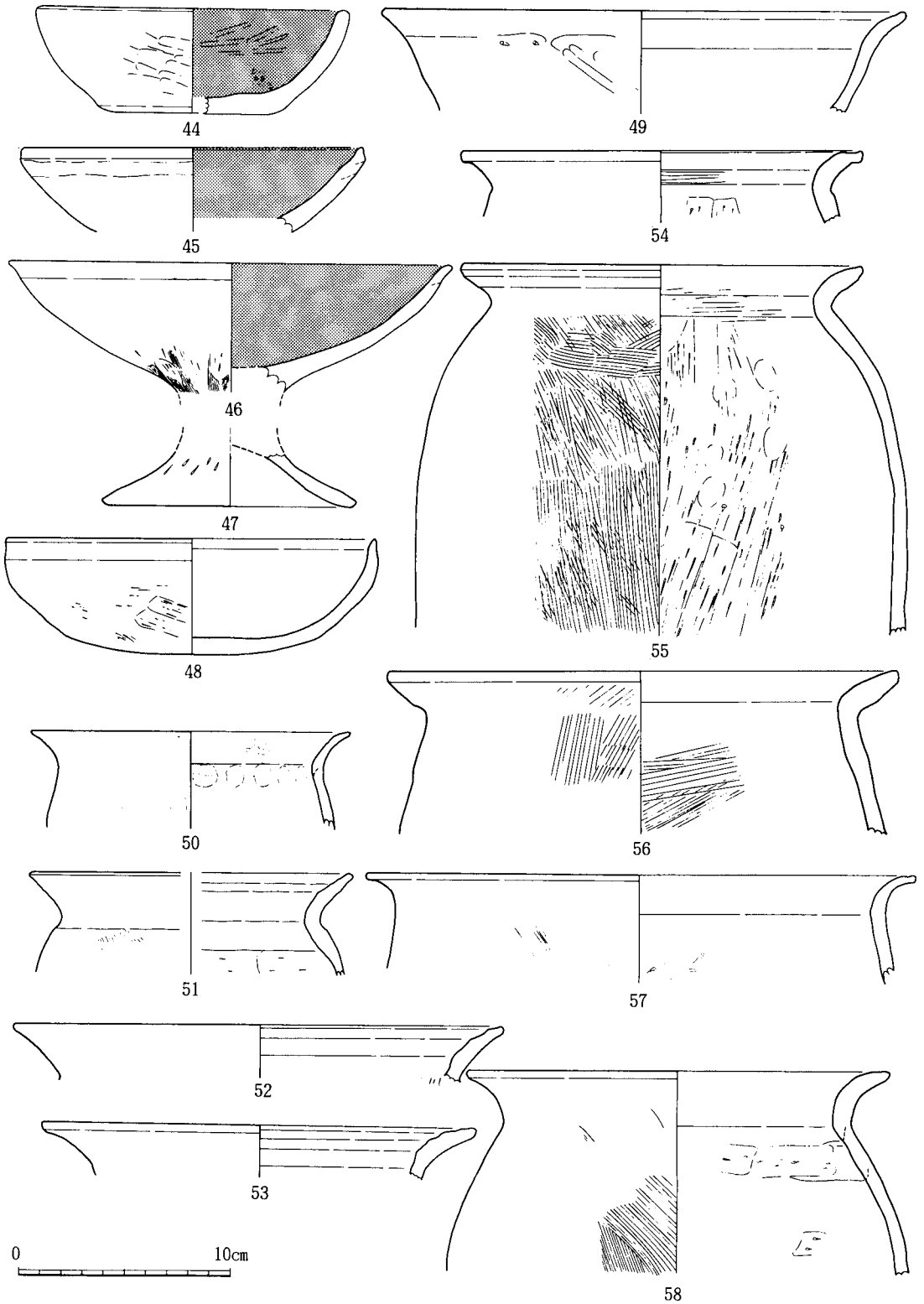
近世では189・190の肥前系陶器や磁器、越前甕が出土した。遺物は0・1区と13～19区に比較的多い。

中・近世陶磁器には漆の付着した破片がいくつか見られた。そのうち、185は白磁の外底面に漆で「※」を書いている。他は瀬戸の灰釉碗の内面に小さく付着したもの1点を除いて、いずれも接着に使われたもので6点が確認された。内訳は、13世紀前半の珠洲鉢が1点、13世紀頃の青磁碗1点、14～15世紀の珠洲鉢1点、15世紀の青磁碗1点、同期の中国製染付碗1点、17～18世紀の瀬戸花瓶？1点である。今回の調査で得られた中近世陶磁器は破片数で122点（中世：近世は2：1の割合）ある。漆により接着された破片は全体の5%にあたる。

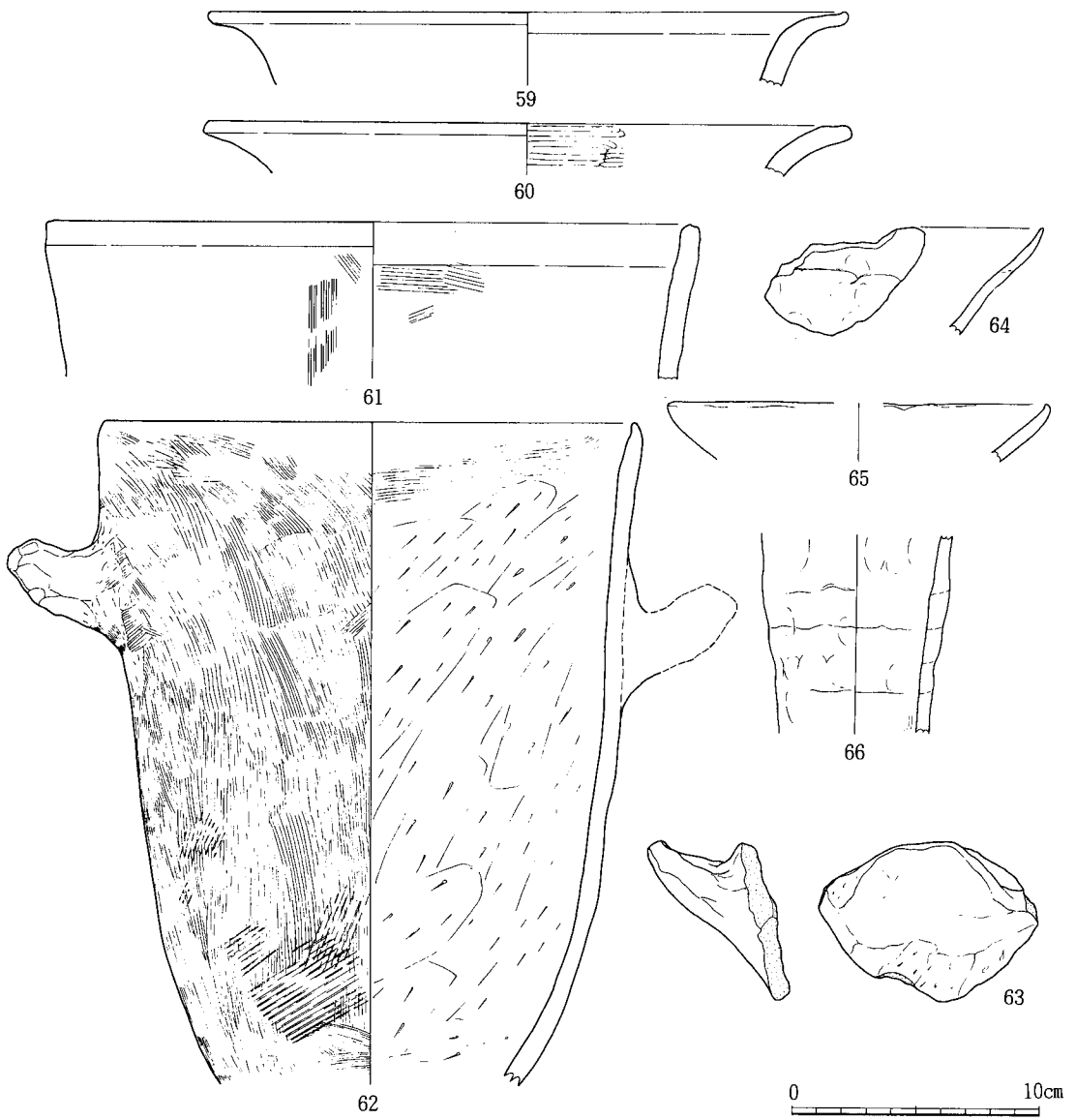
（北野 博司）



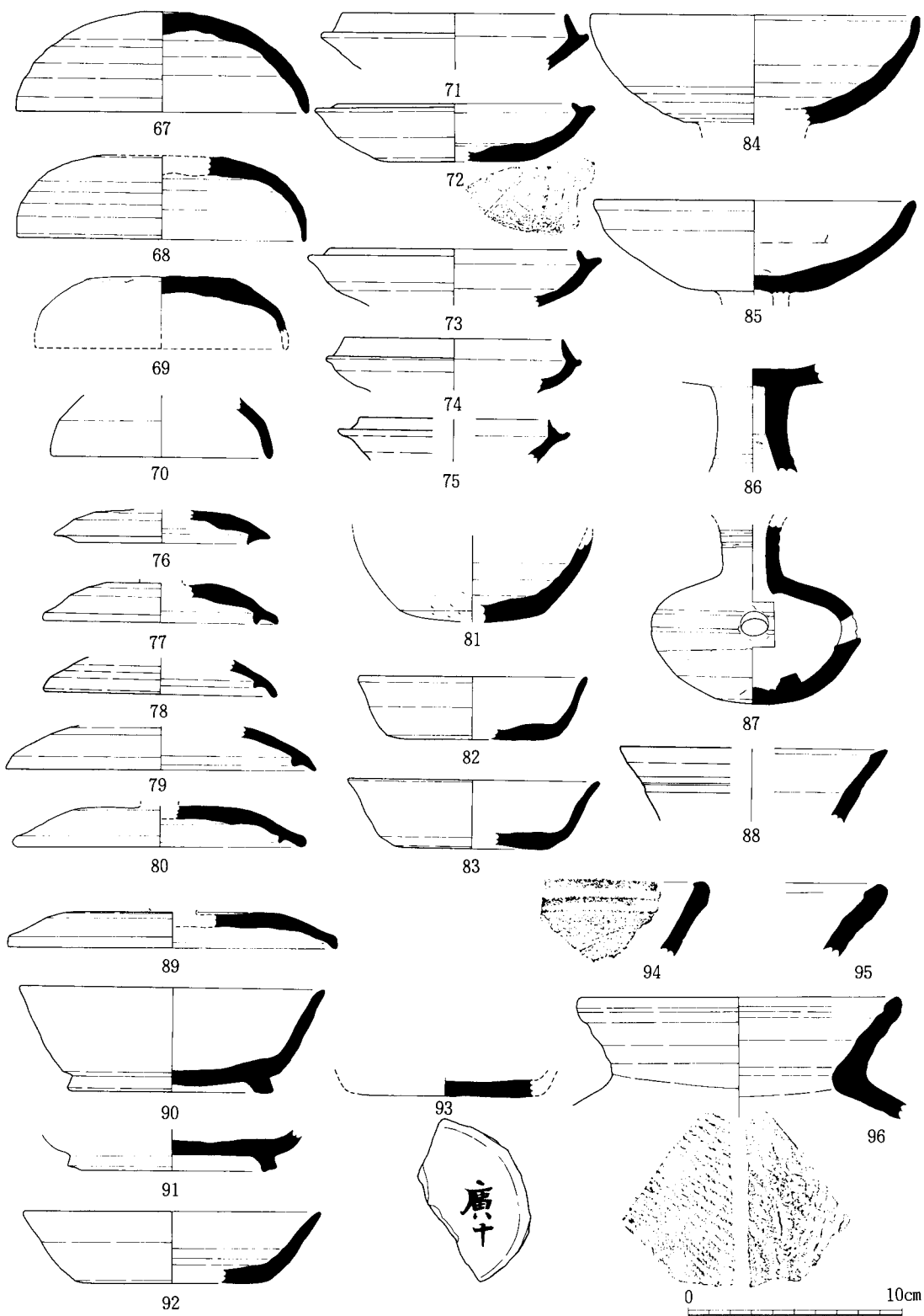
第10図 出土遺物（0～9区）



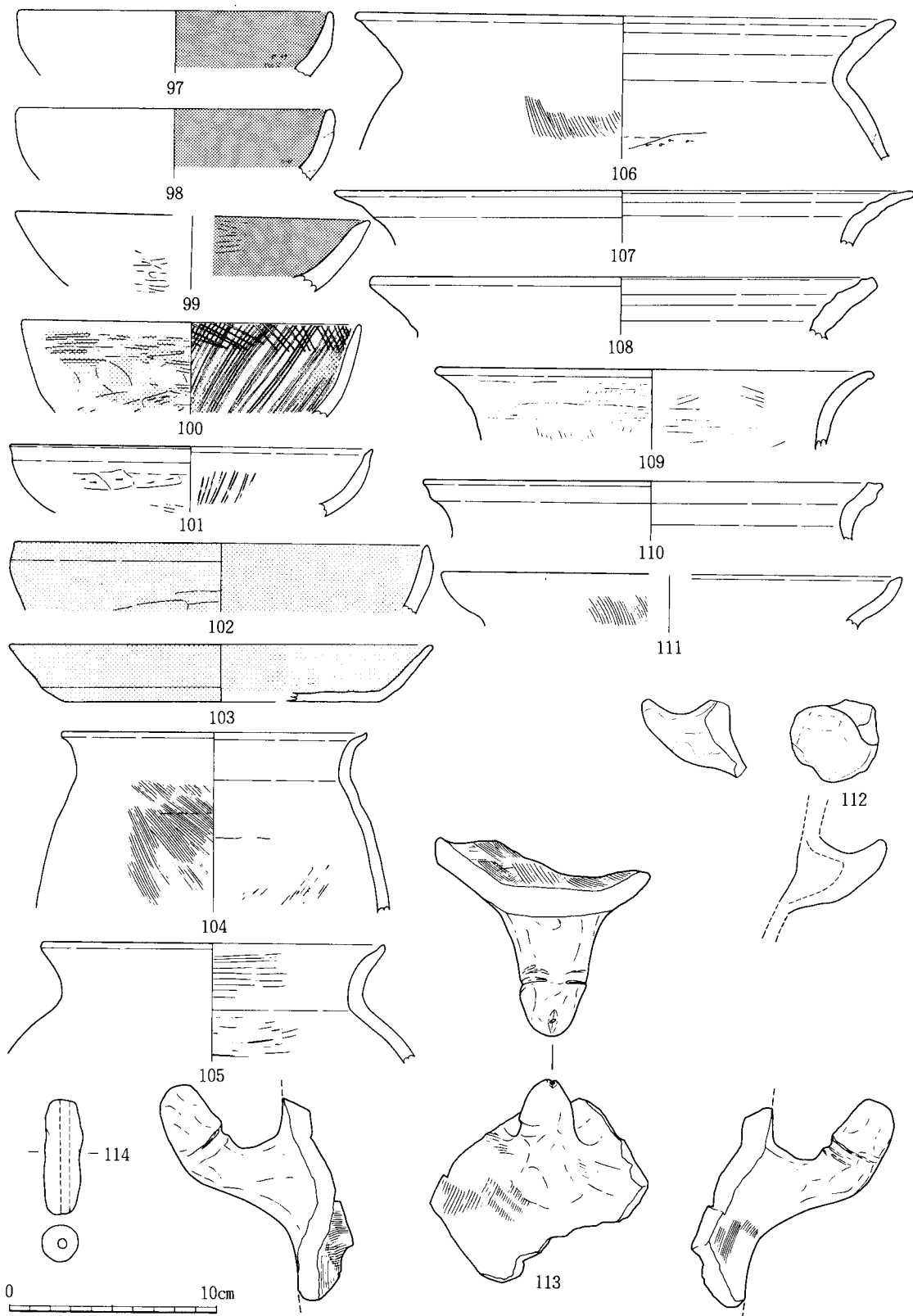
第11図 出土遺物 (0~9区)



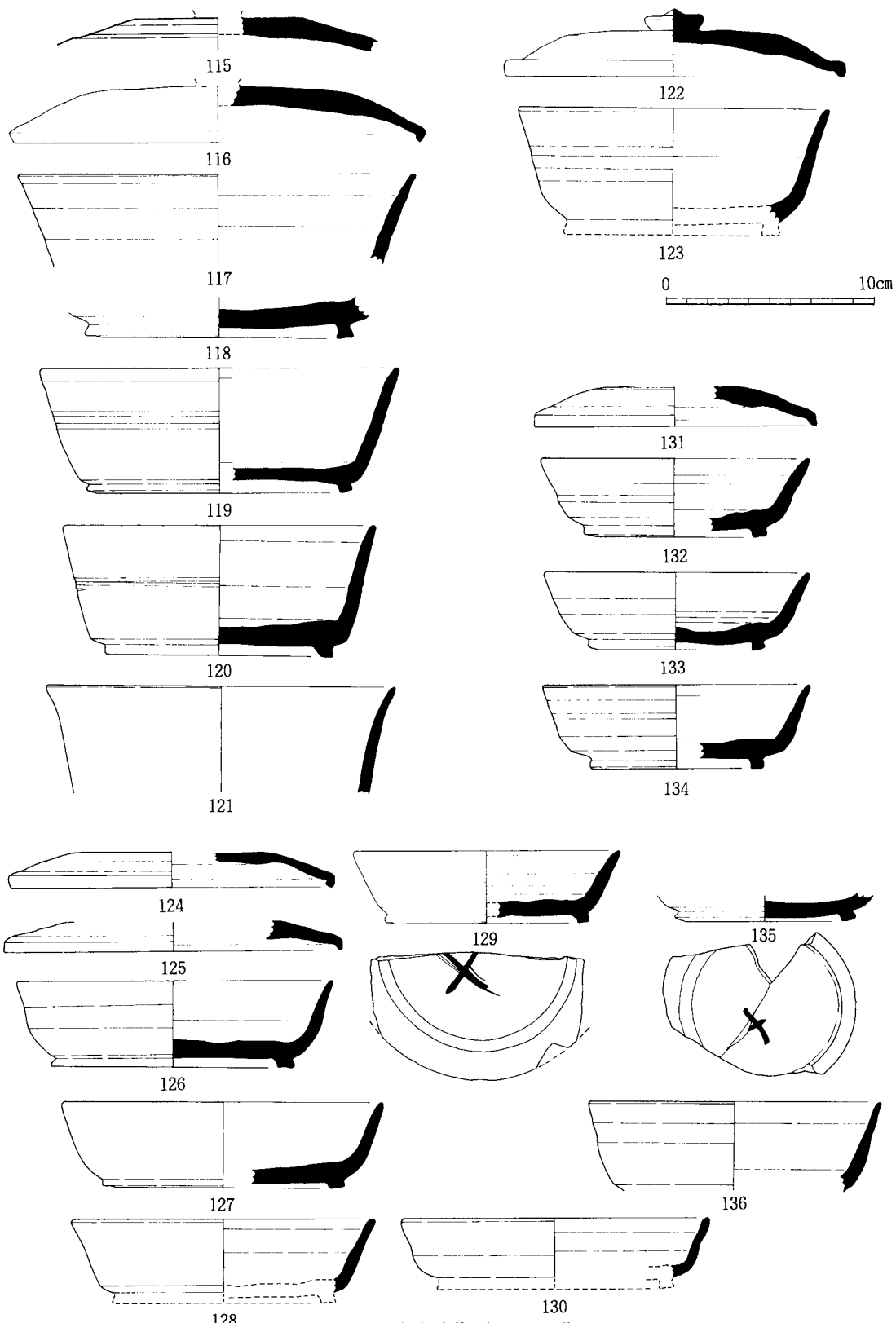
第12図 出土遺物（0～9区）



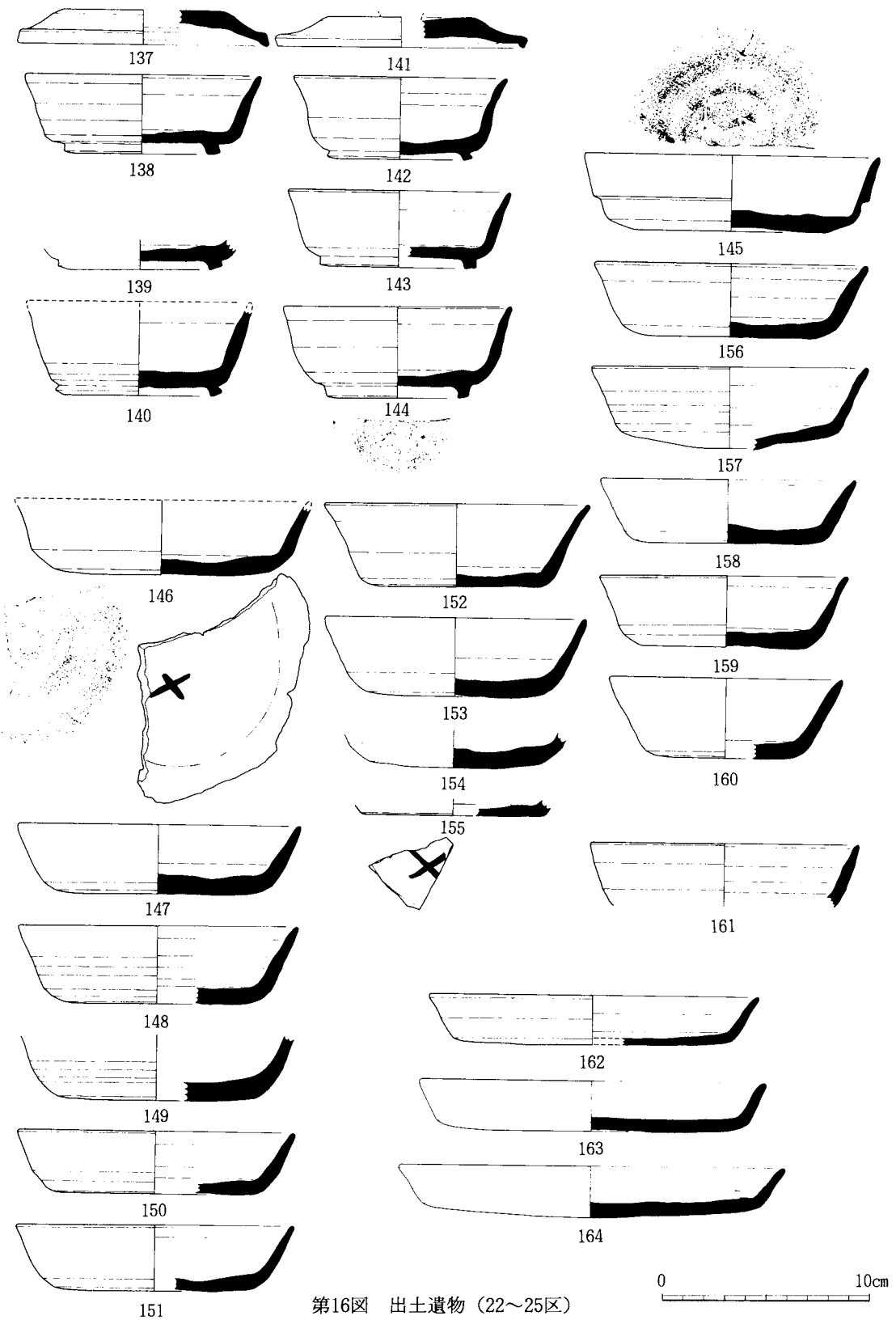
第13図 出土遺物 (10~18区)



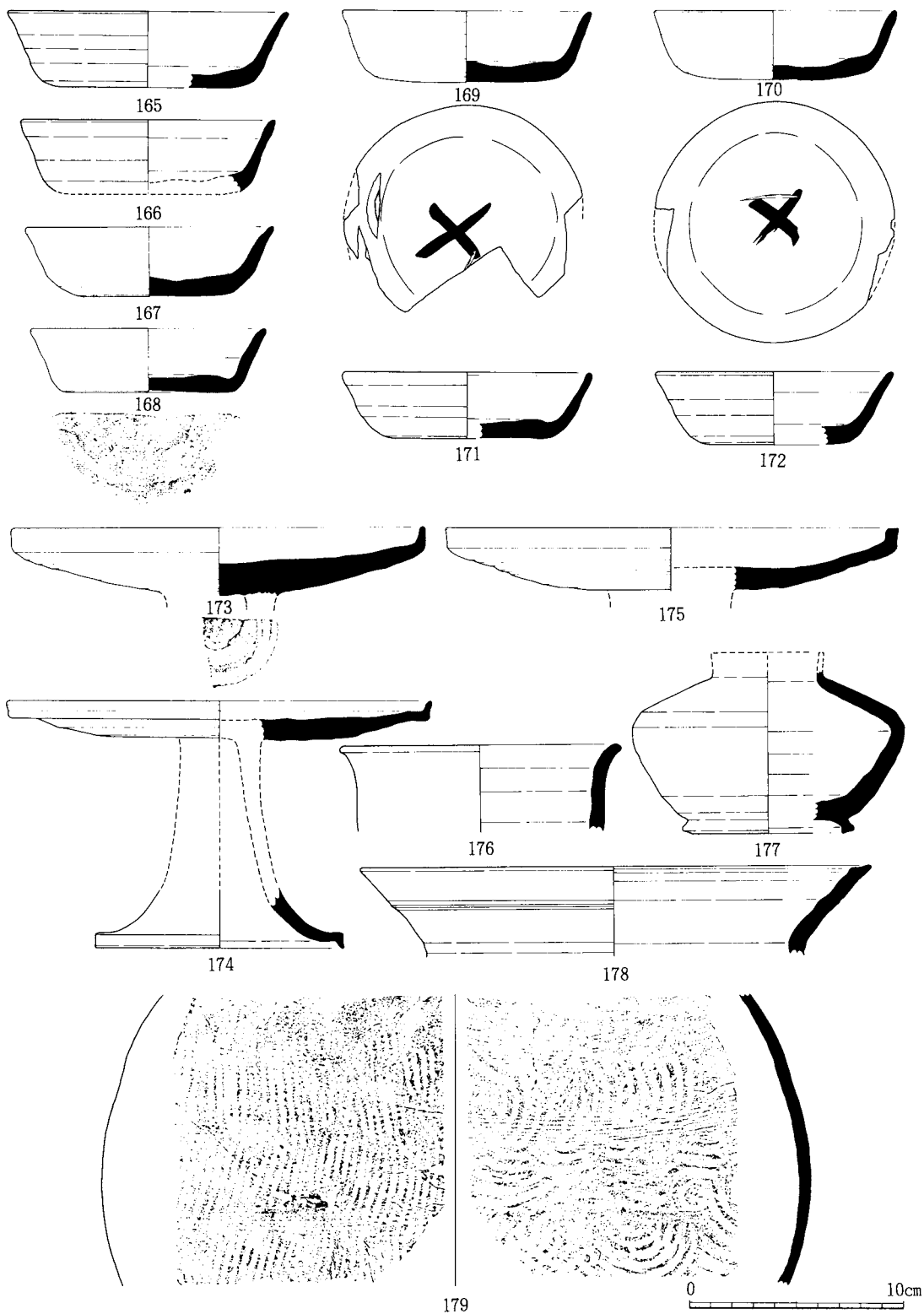
第14图 出土遺物 (10~18区)



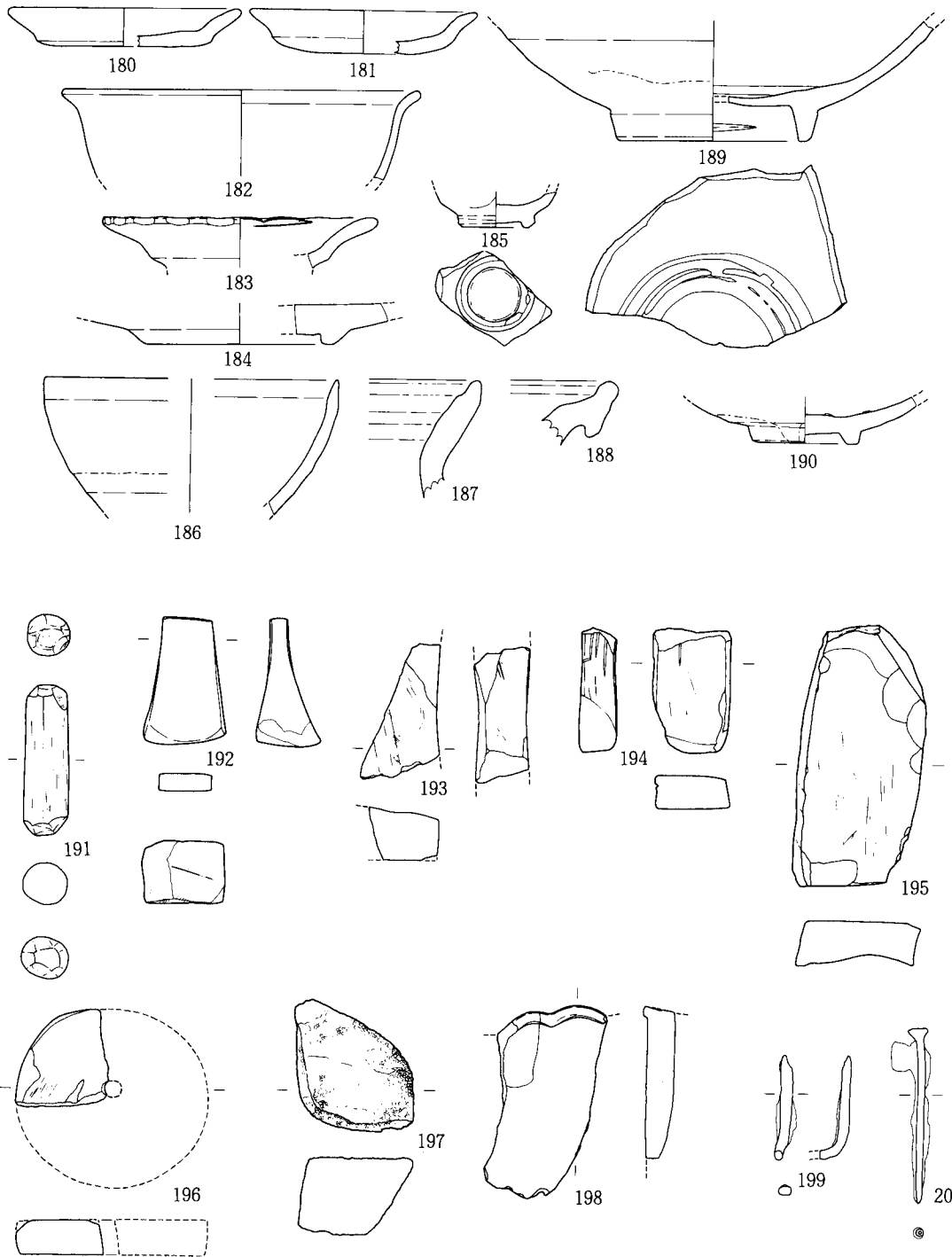
第15図 出土遺物 (22~25区)



第16图 出土遺物 (22~25区)



第17图 出土遺物 (22~25区)



第18図 出土遺物（中近世土器、石製品、鉄製品）

第2表 古代～中近世の遺物観察表

番号	出土地点	器種	法量 (mm)	胎土	その他	番号	出土地点	器種	法量 (mm)	胎土	その他
23	2区	須恵器 蓋	A:12.7	E	天井部ロクロ ケズリ	52	6区	土師器 甕	A:23.0		
24	3区	須恵器 蓋	A:12.8 H:3.6	B		53	6区	土師器 甕	A:20.6		
25	6区 P-65	須恵器 蓋	A:11.1 H:3.5	A		54	2区	土師器 甕	A:17.0		
26	4区	須恵器 蓋	A:12.8	B		55	0区 下部	土師器 甕	A:19.0 M:23.2		
27	0区下部 1区、2区	須恵器 杯H	A:11.1 B:7.3,H:3.7	B		56	7区 9土坑	土師器 甕	A:24.2		
28	1区 P-82	須恵器 杯H	A:10.8	A		57	4区	土師器 甕	A:26.0		
29	1区東拡張区 1区、2区	須恵器 杯H	A:11.4,B:6.5 H:3.0	D	底部ロクロケ ズリ	58	0区	土師器 甕	A:20.0		
30	6区	須恵器 杯H	A:10.6 H:3.6,B:6.7	A		59	3区 4溝	土師器 鍋	A:26.0		口縁部内面ミ ガキ
31	6区	須恵器 杯H	A:10.8	A		60	2区	土師器 甕?	A:26.4		
32	6区	須恵器 杯G	A:11.7 H:4.2,B:7.3	B		61	7区	土師器 甕	A:26.8		
33	5区	須恵器 杯G	A:11.6 B:5.3,H:4.7	A	内面漆付着	62	0区 下部	土師器 甕	A:22.3 M:21.0		左右把手の高 さがズレル
34	6区	須恵器 杯A	A:11.8 B:7.6,H:3.9	B	蓋付	63	8区	土師器 甕把手			
35	6区、7区	須恵器 杯A	A:11.8 B:7.8,H:3.2	B	蓋付	64	0区、1区 P-85	土師器 製塩土器			
36	4区	須恵器 高杯		B		65	3区包、 土坑10	土師器 製塩土器	A:15.0		
37	3区、4区	須恵器 高杯	A:11.5	B		66	0区、1区	土師器 製塩土器	M:7.0		
38	0区 下部	須恵器 台付鉢	A:14.7	A		67	17区 4・5号土坑A	須恵器 蓋	A:13.8 H:4.7		B
39	0区	須恵器 蓋	A:16.7	BA		68	16区 拡張区	須恵器 蓋	A:13.6 H:4.0		B
40	0.1区 排土中	須恵器 杯B	B:8.0	B		69	16区 拡張区	須恵器 杯H	A:11.9 H:3.4		B
41	4区	須恵器 横瓶	A:15.2	B	同一個体	70	10区	須恵器 蓋	A:10.4		B
42	4区 13溝	須恵器 横瓶		B		71	17区	須恵器 杯H	A:10.7		B
43	3区、4区、 5区、13溝	須恵器 甕		B	断面・拓本天 地逆	72	10区	須恵器 杯H	A:11.5 B:7.8,H:2.7		A
44	0区 下部	土師器 碗	A:14.8 B:7.4,H:5.0			73	11区	須恵器 杯H	A:12.0		A
45	4区	土師器 高杯	A:16.2			74	10区 拡張区	須恵器 杯H	A:10.5		BA
46	4区	土師器 高杯	A:21.0			75	14区 拡張区	須恵器 杯H	A:9.1		B
47	2区	土師器 高杯	B:12.0			76	15区拡張区 P-27	須恵器 蓋	A:10.2		DA
48	1区東側 拡張区	土師器 碗	A:17.5 B:6.7,H:5.5			77	10区	須恵器 蓋	A:12.1		B
49	0区、1区 排土中	土師器 鉢か鍋	A:24.7			78	15区 拡張区	須恵器 蓋	A:11.0		B
50	3区 14溝	土師器 甕	A:15.0			79	15区 拡張区	須恵器 蓋	A:14.6		B
51	6区	土師器 甕	A:15.3			80	12区 拡張区	須恵器 蓋	A:13.9		B
											外底ヘラ記号 「×」
											2号建物

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	その他
81	16区	須恵器	B:7.0	A D	
82	16区	須恵器 杯A	A:10.9 H:3.0	A	蓋付
83	16区 拡張区	須恵器 杯A	A:12.0 B:7.4,H:3.2	B	蓋付
84	16区 拡張区	須恵器 高杯	A:15.4	B	
85	15区 P-34	須恵器 高杯	A:15.1	D	2号建物
86	15区 拡張区	須恵器 高杯		B	
87	11区	須恵器 はそう	M:9.8	B	注口下部突出
88	13区	須恵器 横瓶	A:12.5	B	
89	15区	須恵器 蓋	A:15.5	A	
90	16区 拡張区	須恵器 杯B	A:14.4 B:9.7,H:4.9	B	
91	14拡張区	須恵器 杯B	B:9.8	A	内底漆付着
92	14拡張区	須恵器 杯A	A:14.0	B	
93	16区 拡張区	須恵器 杯A		B	
94	15区 拡張区	須恵器 甕		A	
95	16~18区 表採	須恵器 甕		B	
96	15区、15区拡張区、16~18区、20区	須恵器 横瓶	A:15.2	B A	破片多数
97	13区	土師器 碗	A:15.3		
98	16区 4-5号土坑	土師器 碗	A:15.4		
99	16-17区 4-5号土坑	土師器 碗	A:17.2		
100	15区、16区 拡張区	土師器 碗	A:16.4		赤彩、斜放射 2段暗文
101	16区 P-12	土師器 碗	A:17.5		暗文
102	16区 拡張区	土師器 碗(鉢)	A:20.0		赤彩
103	15区	土師器 盤	A:19.5		赤彩
104	16区 4-5号土坑 D	土師器 甕	A:14.7		
105	17区 4-5号土坑 B	土師器 甕	A:16.6		
106	16区 拡張区	土師器 甕	A:26.0		
107	16区 拡張区	土師器 甕	A:27.8		
108	15区 拡張区	土師器 甕	A:24.5		
109	16区	土師器 甕	A:21.1		
110	15区	土師器 甕	A:22.0		

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	その他
111	13-14区 P-56	土師器 甕	A:22.1		5号建物
112	15区 拡張区	土師器 把手			
113	16区	土師器 把手			
114	14区拡張区	土師器 土鍾	長:5.6,径:1.8 重:17.8g		
115	24区 下層N	須恵器 蓋			B
116	24区	須恵器 蓋	A:20.3		A
117	24区 下層P	須恵器 杯B	A:19.4		B
118	24区	須恵器 杯B	B:13.1		B
119	26区	須恵器 杯B	A:17.5 B:12.9,H:6.1		B
120	24区 下層G・H	須恵器 杯B	A:15.2 B:11.1,H:6.3		B
121	24区	須恵器 杯B	A:17.0		A
122	24区 下層C	須恵器 蓋	A:16.5 H:3.3		D
123	24区	須恵器 杯B	A:15.0		D
124	24-25区	須恵器 蓋	A:15.8		B 断面縞状
125	24区	須恵器 蓋	A:16.4		B
126	25区 下層X	須恵器 杯B	A:15.7 B:11.8,H:4.2		A
127	24区 下層A	須恵器 杯B	A:15.7 B:11.8,H:4.3		A
128	24区	須恵器 杯B	A:14.8		A
129	24区 下層P	須恵器 有台杯	A:13.1 B:10.0,H:3.5		A 墨書「×」
130	24区	須恵器 杯B	A:15.0		B
131	24-25区	須恵器 蓋	A:13.7		D
132	24区	須恵器 杯B	A:13.0 B:8.9,H:3.8		D
133	24区 下層B	須恵器 杯B	A:12.9 B:8.6,H:3.8		D
134	24区	須恵器 杯B	A:13.0 B:8.4,H:4.0		D
135	24区 下層L	須恵器 有台杯	B:8.7		C 墨書「×」
136	24区 包	須恵器 杯A?	A:14.1		B
137	25区	須恵器 蓋	A:12.3		B
138	24区 下層O	須恵器 杯B	A:11.6 B:7.6,H:3.9		A
139	24区	須恵器 杯B	B:8.0		B 外底クロロケ ズリ
140	25区	須恵器 杯B	B:8.0		B

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	その他
141	24区	須恵器 蓋	A:12.4	D	
142	24区 下層E	須恵器 杯B	A:10.5 B:7.1,H:4.1	D	
143	24区	須恵器 杯B	A:11.0 B:7.7,H:3.7	D	
144	22・25区	須恵器 杯B	A:11.2 B:7.0,H:4.5	D	外底へラ記号
145		須恵器 杯A	A:14.2 B:9.4,H:3.7	A	内底へラ記号「×」、体部外面に稜あり
146	24区 下層N	須恵器 杯A	B:10.5	A	墨書「×」、内底へラ記号「×」
147	24区	須恵器 杯A	A:13.8 B:10.0,H:3.4	B	
148	24区	須恵器 杯A	A:13.7 B:9.0,H:3.8	B	
149	24区 下層K	須恵器 杯A	B:9.8	C	
150	24区・25区	須恵器 杯A	A:13.6 B:9.9,H:3.1	A	
151	24区	須恵器 杯A	A:13.6 B:9.8,H:3.3	B	
152	24区	須恵器 杯A	A:13.0 B:8.6,H:4.1	B	
153	24区 下層U	須恵器 杯A	A:12.8 B:8.8,H:3.8	B	
154	24区 下層C	須恵器 杯A	B:8.4	B	
155	25区	須恵器 杯A	B:9.0	B	墨書「×」
156	24区	須恵器 杯A	A:13.2,H:3.6 B:10.3	B	
157	24区 下層R	須恵器 杯A	A:13.4 B:10.4,H:4.0	B	
158	24区 下層F	須恵器 杯A	A:12.4 B:9.2,H:3.1	B	
159	24区 下層I	須恵器 杯A	A:11.95 B:8.0,H:3.5	B	
160	24区 下層J	須恵器 杯A	A:11.3 B:7.6,H:3.9	B	
161	24区	須恵器 杯A?	A:13.0	C	
162	24区 最下層	須恵器 盤A	A:16.1 B:13.6,H:2.4	B	
163	24区 下層U	須恵器 盤A	A:16.9 B:15.1,H:2.4	AB	
164	24区 最下層	須恵器 盤A	A:18.8 B:16.4,H:2.5	A	
165	24区 下層L	須恵器 杯A	A:13.2 B:9.8,H:3.6	D	
166	24区	須恵器 杯A	A:11.9 B:8.6	D	169・170に類似
167	24区 下層M	須恵器 杯A	A:11.6 B:7.3,H:3.3	D	
168	24区	須恵器 杯A	A:11.0 B:8.1,H:3.0	D	へラ記号
169	24区	須恵器 杯A	A:11.8 B:8.9,H:3.4	D	墨書「×」、へラ記号「-」
170	24区 下層D・W	須恵器 杯A	A:11.3 B:8.8,H:3.2	D	墨書「×」、へラ記号「-」

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	胎土	その他
171	24区	須恵器 杯A	A:11.9 B:8.0,H:3.1	D	
172	24区	須恵器 杯A	A:11.1 B:7.0,H:3.4	D	
173	24区 下層V	須恵器 高杯	A:19.5	BA	
174	24区 下層C	須恵器 高杯	A:20.0 B:11.2	B	
175	22区 下層	須恵器 高杯	A:21.3	D	
176	22区 下層	須恵器	A:13.3	B	
177	22区下層 25区	須恵器 壺	B:8.0 M:12.2	B	
178	24区	須恵器 甕	A:24.0	B	
179	24区 下層S.T.U	須恵器 甕		A	
180	6区	土師器 小皿	A:10.3,B:7.8 H:1.7		
181	8区	土師器 小皿	A:10.2,B:8.2 H:2.0		
182	1区 上部	青磁 碗	A:16.0		
183	7区 表土	青磁 輪花皿	A:12.0		
184	10区 表土	青磁 盤	B:8.3		
185	20区	白磁 八角杯	B:3.5		
186	10区	瀬戸 天目茶碗	A:13.1		
187	31区 近代溝	加賀 甕			
188	16区	加賀 甕			
189	14区 表採	唐津	B:8.6		
190	16区~18区 表採	唐津	B:4.7		
191	0区拡張区		長:3.4,径:0.9		
192	1区拡張区	砥石	長:5.7,巾:3.6 厚:小0.8大2.9		
193	1区 P-89	砥石	長:6.1,巾:3.5 厚:2.4		
194	9区	砥石	長:5.5,巾:3.4 厚:2.5		
195	11区	砥石	長:11.7,巾:5.8 厚:2.0 直径:8.6 厚:1.6 中心穴:0.75		
196	8区	はずみ車	長:5.7,巾:5.3 厚:3.5		
197	20区	軽石			
198	9区 上部	石硯	長:8.6,巾:4.8 厚:1.4		
199	15区拡張区	鉄	長:4.7,径:0.4		
200	16区西拡張区 ビット	鉄釘	長:8.0,径:0.4 頭部径:0.9		

第4章 昭和63年度の調査 (東相川B遺跡、東相川C遺跡)

第1節 調査の経緯

遺跡の発見 遺跡の発見は、県営ほ場整備事業御手洗・出城地区東相川工区に係る埋蔵文化財分布調査による。本センターが昭和61年10月2日に実施し、東相川の北側から中相川の東側の水田地帯に弥生時代後期～奈良・平安時代の遺跡が広範に分布していることが確認された。

事前協議 県松任土地改良事務所と遺跡の保護について協議を行い、面工事箇所は盛土等により遺跡に影響を及ぼさないこととし、排水路敷のみ約1,200㎡を発掘調査の対象とすることとした。

発掘調査 昭和63年7月26～29日に事前準備を行い、8月1日から現地調査に入った。第1調査区は9月9日に調査を終了、第2調査区は9月12日に終了し、13日に現地から撤収した。現地調査は実働21日、作業員延べ140人を費やした。

調査担当：北野博司 調査補助：西谷昌司

作業員 山静子、山信子、東みどり、東陽子、小田たか子、木下成子、松本初枝、上田美智子、福田久子、北村加代子、藤田美和子、藪端信治

出土品整理 遺物の洗浄、記名・分類・接合、実測、トレースは、昭和63年度(洗浄)、平成2年度(その他)に、(社)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

報告書 平成4年1～3月に実施した。図版作成等で大藤雅男、藤田美和子の協力を得た。

第2節 調査の概要

地形 遺跡の現況は平坦な水田地帯で、第1調査区南端が標高10.2m、北端が7.7mとゆるやかに北に傾斜する。第2調査区は標高約6.5mを測る。調査により明らかとなった旧地形についても大差はないが、第1調査区27～28区付近と北端部の48区付近に大きな落ちこみがある(第1図)。

調査区 調査区は2ヶ所あり、南側を第1調査区(延長約500m)、北側を第2調査区(周約60m)とした。排水路のセンター杭を基準に幅2mの調査区を設定し、第1調査区の基点は、No.24杭を新農道のセンターとし、南北に10m間隔に基準杭を設置した。竪穴住居跡を検出した地点では部分的に拡張し、規模の確認に努めた。第2調査区は、南側からくる排水路が西へ折れる屈折点のセンターから1.5m西を基点0とした。

層序 調査地の基本層序は以下のとおりである。1層が耕土、2層が旧耕土・床土で各区に普遍的に存在する。3層は黒色粘質土で25区以北にある。4・5層が灰褐色土で中世期のものと推定される。調査区南半部ではこの前後に黄色の粘質土薄層が散在する。6層は黒灰褐色シルトで

古代の遺物包含層、7層は黄灰褐色シルトで弥生時代～古墳時代前期の遺物包含層となっている。地山は大部分の地点で灰黄褐色シルトであるが、南端部の0～2区、北半の33～36区は礫層が露呈している。地表から遺構検出面までは、平均して50～70cmの深さがあった。

第3節 第1調査区の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

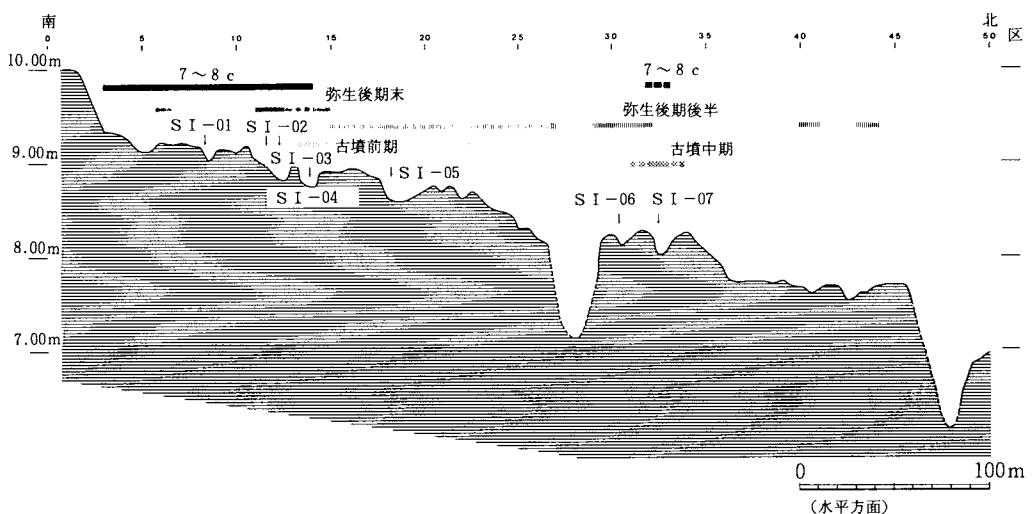
SI01 8区で検出し、調査区を拡張して1棟を完掘した。平面プランは3.6×3.0mの長方形で、検出面からの深さは0.20mを測る。主軸はN7°W。掘立柱建物跡より新しい。埋土は地山ブロックを多量含む黒灰褐色土で、不規則な土層堆積から埋め戻された可能性が考えられる。床面は中央付近がやや固くしまるものの貼床はなく、柱穴も検出されなかった。

住居の南辺東側には造りつけのカマドがある。煙出しは壁を溝状に掘削したもので、袖は加工した川原石（右）と凝灰岩切石（左）、及び土器片を芯に地山の黄灰色シルトで構築する。袖の中央には川原石を縦に埋め込んで支脚が設けられ、頂部には土器片が伏せられていた。支脚の周囲15×22cmの範囲に焼土が集中し、そこからカマド前面に炭化物質層が広がっている（破線の範囲）。右軸の横には住居壁に沿って径約40×50cm、深さ20cmのピットが検出された。カマドのある南辺の西側には壁に沿って小ピットがあり、住居の入口に関連した施設とみられる。

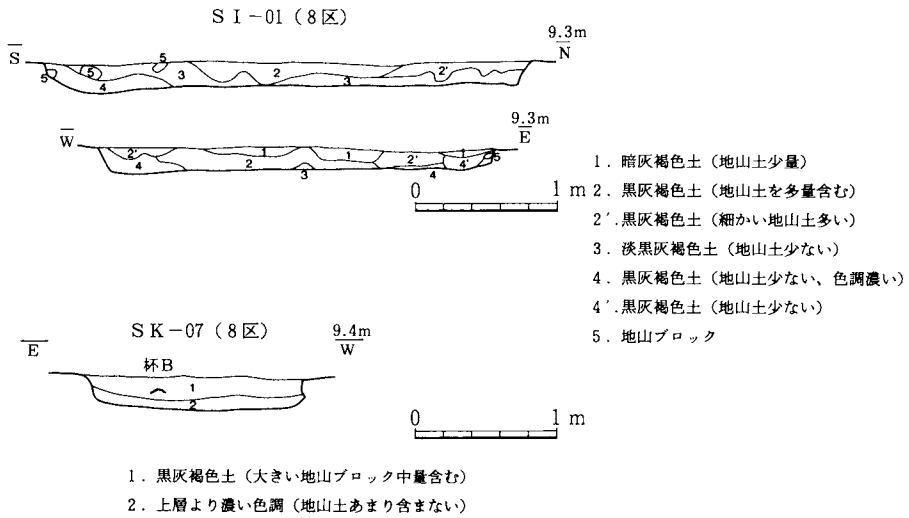
時期は、埋土中およびカマド周辺から出土した土器からみて、8世紀半ば頃と考えられる。

SI02 11区で検出、拡張により大半を調査した。規模は約6.4×6.0m、検出面からの深さは0.10～0.20m。主軸方位はN28°W。方形掘り方の柱穴をもつ掘立柱建物跡より新しい。

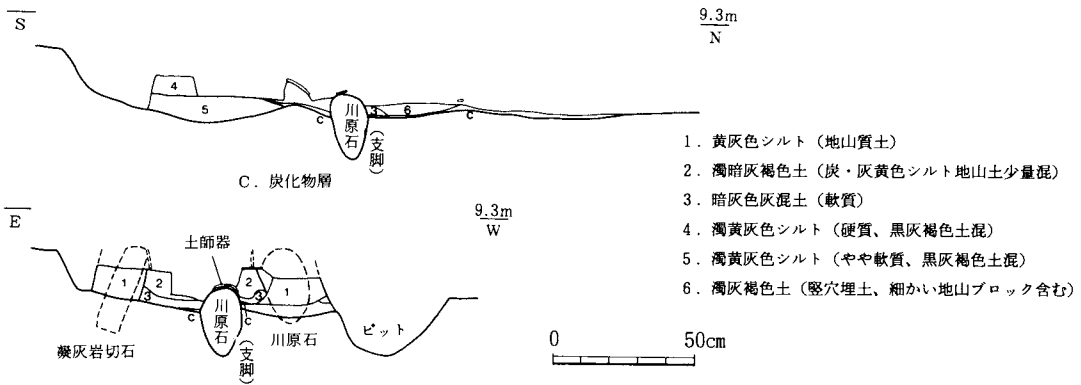
床面の周囲には壁に沿って不整形な溝が巡る。深さは0.1～0.3mと均一ではなく、内部には小ピットがある。主柱穴は4本あり、不整円形で径50～60cm、深さは27～44cm。柱間は3.0, 2.8×



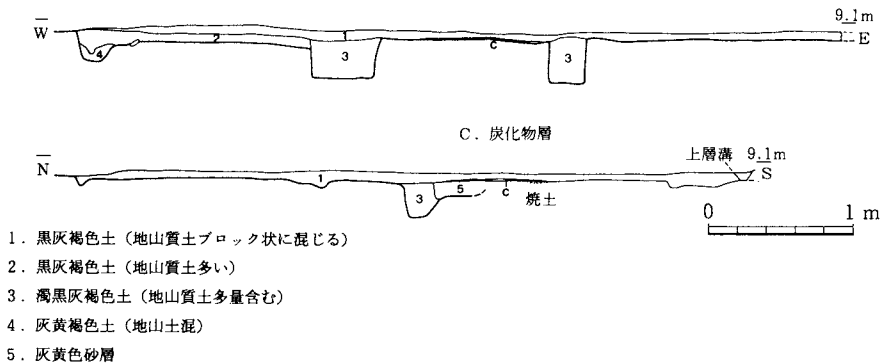
第1図 第1調査区地形略図と遺構分布



第2図 S I - 01、S K - 07 土層断面図



第3図 S I - 01カマド土層断面図



第4図 S I - 02 土層断面図

2.3,2.2m。

主柱間の中央には、2ヶ所床面が焼土化した部分があり、その周囲1.6×1.2mの範囲に炭片が散布している。

カマドは南辺の東側に付され、右袖の西側には70～40cm、深さ30cmの楕円形ピットがある。袖は床面を掘り残し、その部分に凝灰岩の切石を立てて埋め込んでいる。袖の中央壁よりには円礫の割石を、割れ面を上へ向けて埋め込み、支脚としている。カマドの前面には、西側に片寄って炭灰層が散布する。正面に主柱穴の1本が存在するためであろう。煙出しの構造は未調査のためわからない。

遺物は、カマド周辺から土師器を中心に出土した他、前面の炭層付近から製塩土器片（棒状尖底型）が1点出土した。なお同タイプの製塩土器は34区付近の旧河道中からも1点出土している。竪穴の時期は7世紀第4四半期と考えられる。

本遺構の周辺にはSK09、SK10、SK12といった方形プランの竪穴状の遺構がある。いずれも7～8世紀の土器を出土したが住居跡と特定できるものはなかった。

S103 12区で検出。方形プランで主軸はN約58°W。検出面からの深さは約0.2mを測る。東壁沿いの柱穴は深さ28cmで主柱穴の可能性はある。その西側の調査区壁にかかるピットもこの竪穴内のものであるが、その他は古代のものである。P53からは8C後半代の杯A（103）が出土した。本竪穴の時期は層位からは弥生～古墳時代のものであり、出土遺物は土器の細片が多い中で、弥生時代終末期一月影式土器が見られることから該期の可能性が高い。

S104 13～14区で検出。方形プランで主軸はN約41°W。検出面からの深さは約0.25m。No.13+8.4mに主柱穴とみられる深さ35cmのピットがあり、4本主柱と考えられる。北壁沿いは約10cm低く溝状となっている。遺物は、東壁際床面から扁平な台石（45）と小型器台（27）が、西壁沿いの中央床面から編物石の可能性のある棒状礫（46～49）が、東壁よりの埋土中から砥石（52）が出土した。その他、埋土中から布留系甕形土器が出土しており、古墳時代前期後半頃の時期に比定できる。

なお、S104の南にあるSD11からは、S104同様の棒状礫（50）や布留系の土器が多数出土しており、両者は同時期の関連遺構の可能性はある。

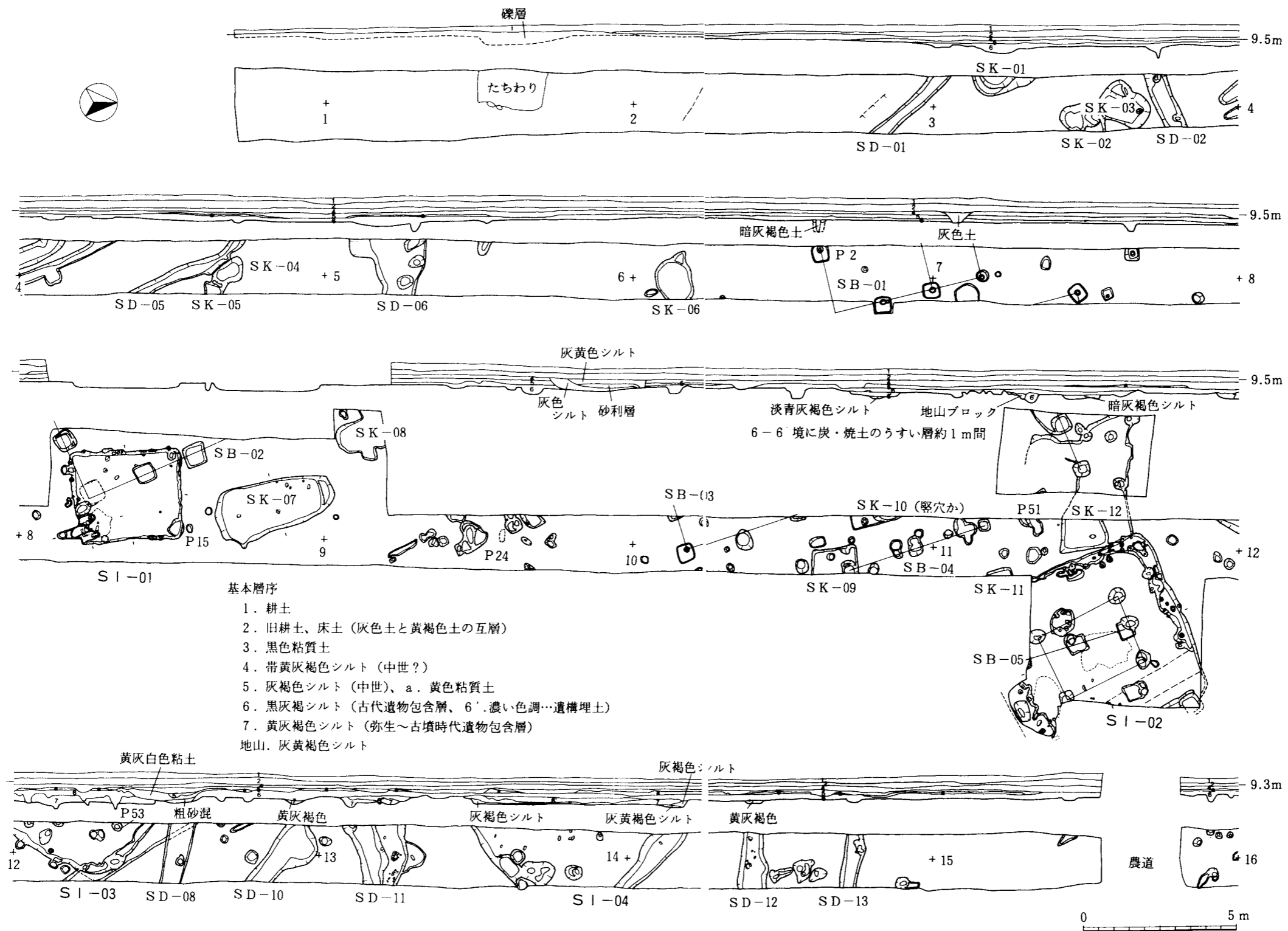
S105 17～18区。方形プランで主軸はN約9°W。検出した一辺は約5.6m、深さは0.08～0.13mと浅い。弥生時代後期の法仏式土器が埋土中から出土しており該期の遺構と考えられる。

S106 30区。方形プランで、検出面からの深さは0.10～0.15m。第7層を埋土とする。主柱は不明。出土遺物は、弥生時代後期の土器の小片がある。

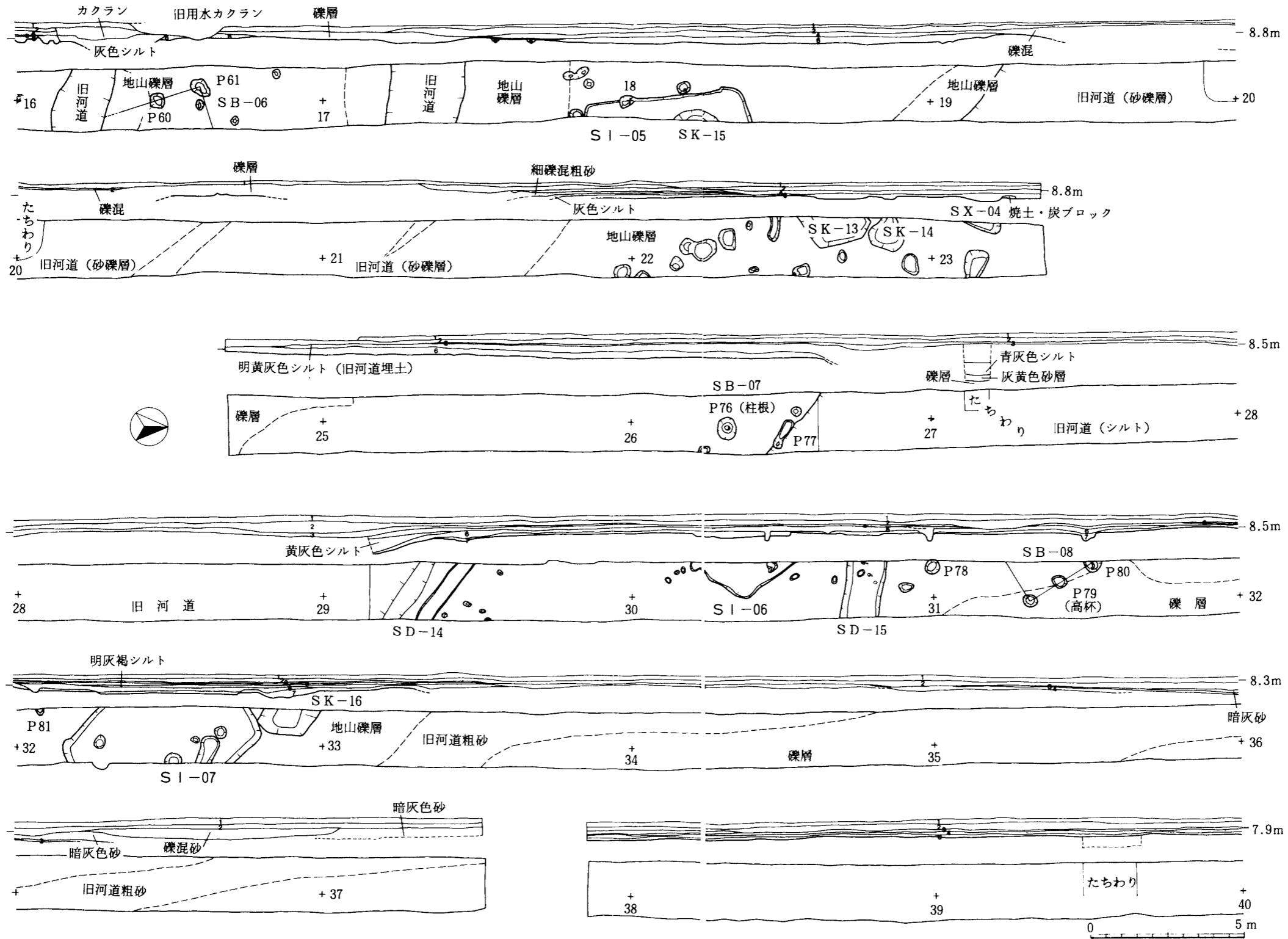
S107 32区。約5.8×4.2mの長方形プランで、検出面からの深さは0.09～0.13m。主軸はN43°W。4本主柱とみられ、コーナー近くに2個のピットを検出した、径約40cm、深さ18cmと24cmである。床面から、須恵器はその破片（53）と土師器甕（61）が出土した。その他、埋土中から土師器片が比較的多く出土している。時期は古墳時代中期である。

2. その他の遺構

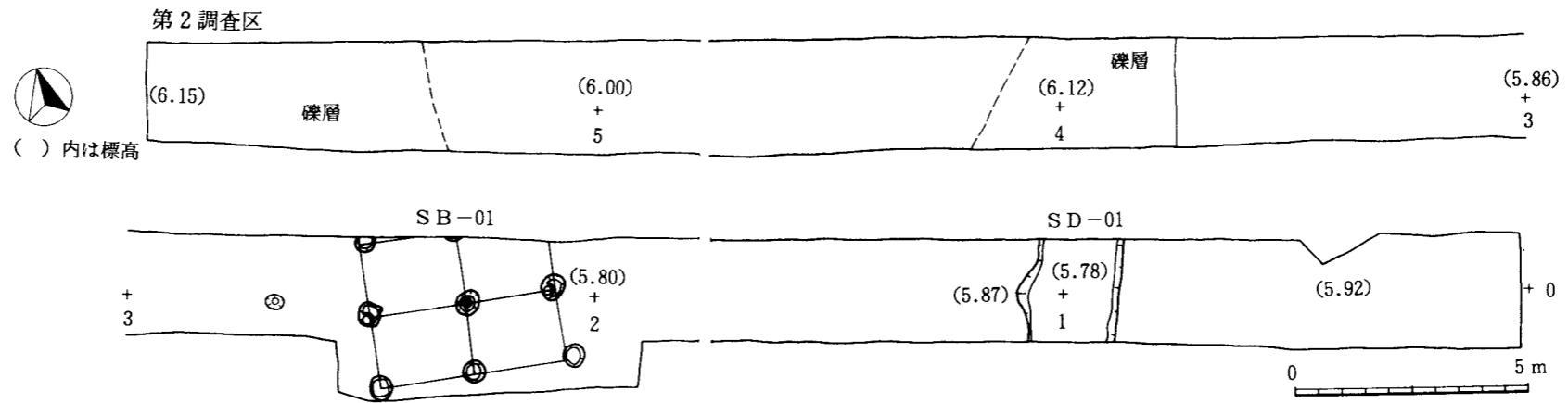
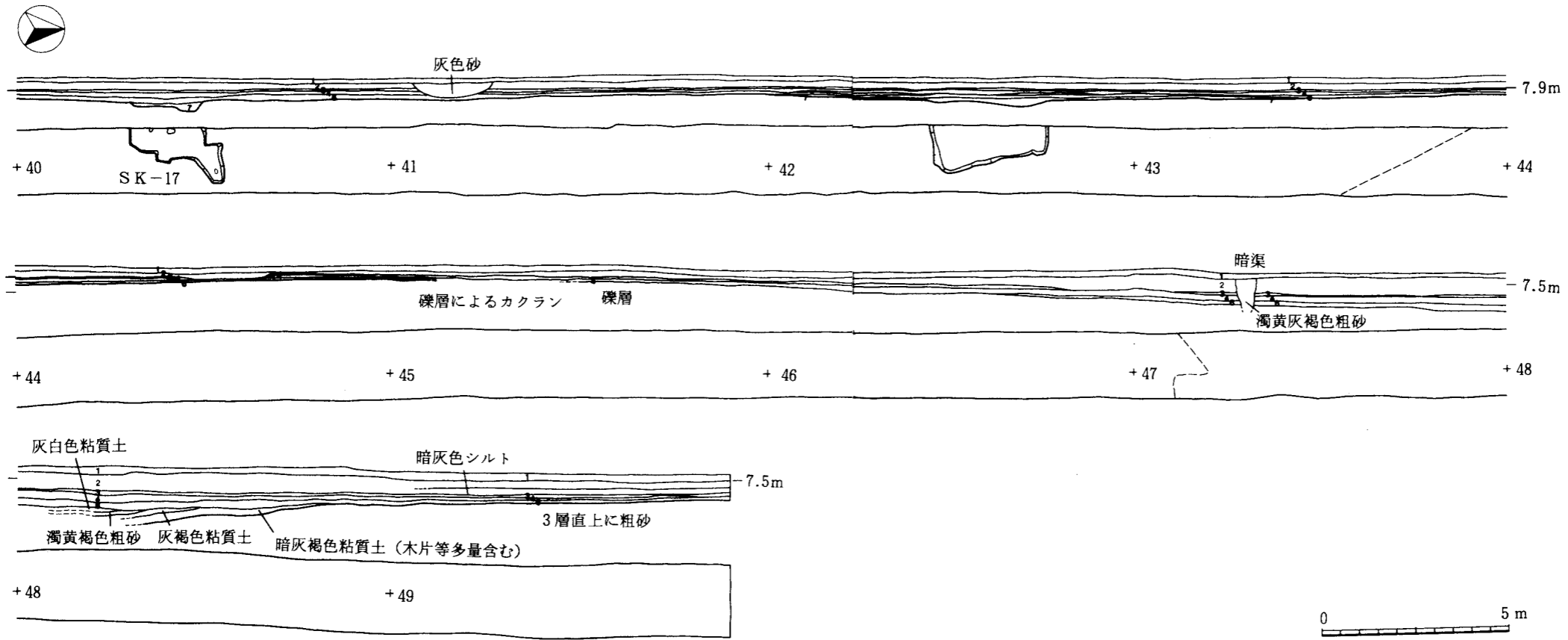
SK06 6区。1.5×1.25m、深さ0.23mの土坑。埋土は地山土の混じる暗灰褐色土で、最下層に



第5図 遺構図・土層断面図 (0~15区)



第6図 遺構図・土層断面図 (16~39|x)



第7図 遺構図・土層断面図(40~49区)、第2調査区遺構図

2～3cmの黒灰色の灰層が存在する。弥生時代終末一月影式土器が出土した。

SB01 P2から赤彩土師器の細片が出土した。7～8世紀代と考えられる。主軸はN16°W。柱間は梁間が160cm、桁行が210cm。柱穴は方形プランであるが、北端のピットは円形で他とは異なる。No.7+4.7mの方形ピットも建物の柱穴とみられる。

SB02 8区。8世紀半ば頃のS101よりも古い建物跡で、主軸はN27°W。柱穴は一辺約70cmの方形で、深さ20～27cm。柱間は南北方向が1.8m、東西が2.1mを測る。

SK07 8区。4.0×1.8m、深さ0.24m。埋土は黒灰褐色土で、土器片は比較的多く出土した(70～80)。時期は7世紀第4四半期。

SK08 9区。SK07の北西にある不整形な土坑。深さは約8cmと浅い。7世紀末頃の土器に混じって製塩土器が1点(83)出土した。

SB03 10区。方位はN21°W。柱穴掘り方は、一辺約60cmでNo.10+3.7mのピットを除いて方形である。柱間は1.9m。時期不明。

SB04 10～11区。方位はN21°W。柱穴掘り方は一辺約50cmの略方形で、柱間は2.35m。時期不明。

SB05 11区拡張区でS102と重複する。柱穴は一辺約60cmの方形掘り方を持ち、柱根部は張り出して設けられる。方位はN20°W。柱間は南北が2.0m。東西が2.2mを測る。時期は7世紀第4四半期のS102より古い。なお、拡張部北東隅にも一辺65cm、深さ35cmの方形掘り方のピットがあり、別の建物跡が存在すると予想される。

SD10 12～13区。S104の項で述べたSD11と同様、布留式期の遺構とみられる。深さは10cm。

SD12 14区。幅約1.0m。深さ20cmの溝状遺構で弥生時代終末一月影式期の土器が出土した。

SB16 16区。方位はN22°W。柱穴掘り方は不整形で径50cm、深さ20～26cm。柱間は1.4m。

SB07 26区。P76は円形で径70cm、深さ52cm。内部には径20cmの柱根が約30cm遺存していた。埋土の土質からは弥生時代～古墳時代のもものとみられる。北側には旧河道に切られたP77があり、ここからは弥生時代後期の土器(10・11)が出土している。

SD15 30区。幅1.2m、深さ6～10cm。弥生時代後期半ば頃の土器が出土した。

SB08 31区。方位はN34°W。柱穴は径40～50cm、深さ12～20cm。柱間は1.1m。P79から弥生時代後期半ば頃の高杯形土器の杯部が2個体(1・2)出土した。P80からは管玉の未製品(3)が出土した。

SK17 40区。不整形のプランの土坑で、深さは約10cm、北側が一段深く約30cmとなる。弥生時代後期後半の土器が出土した。

43区土器だまり 明瞭な遺構は検出できなかったが、弥生時代後期後半の土器がまとまって出土した。

第4節 第2調査区の遺構と遺物

SB01 2区。2間以上×2間で、方位はN2°E。柱穴は径約50cmの円形で、深さ約30cm前後。柱間は東西が2.1m、南北が1.5mを測る。遺物は各柱穴から弥生時代後期～古墳時代初頭の土器

細片が出土したのみで、建物の帰属時期は特定しがたい。

SD01 1区。幅約1.8m、検出面（削平）からの深さ約10cmの溝状遺構。砂層の埋土中から、古墳時代初頭の土器片が比較的多く出土した。

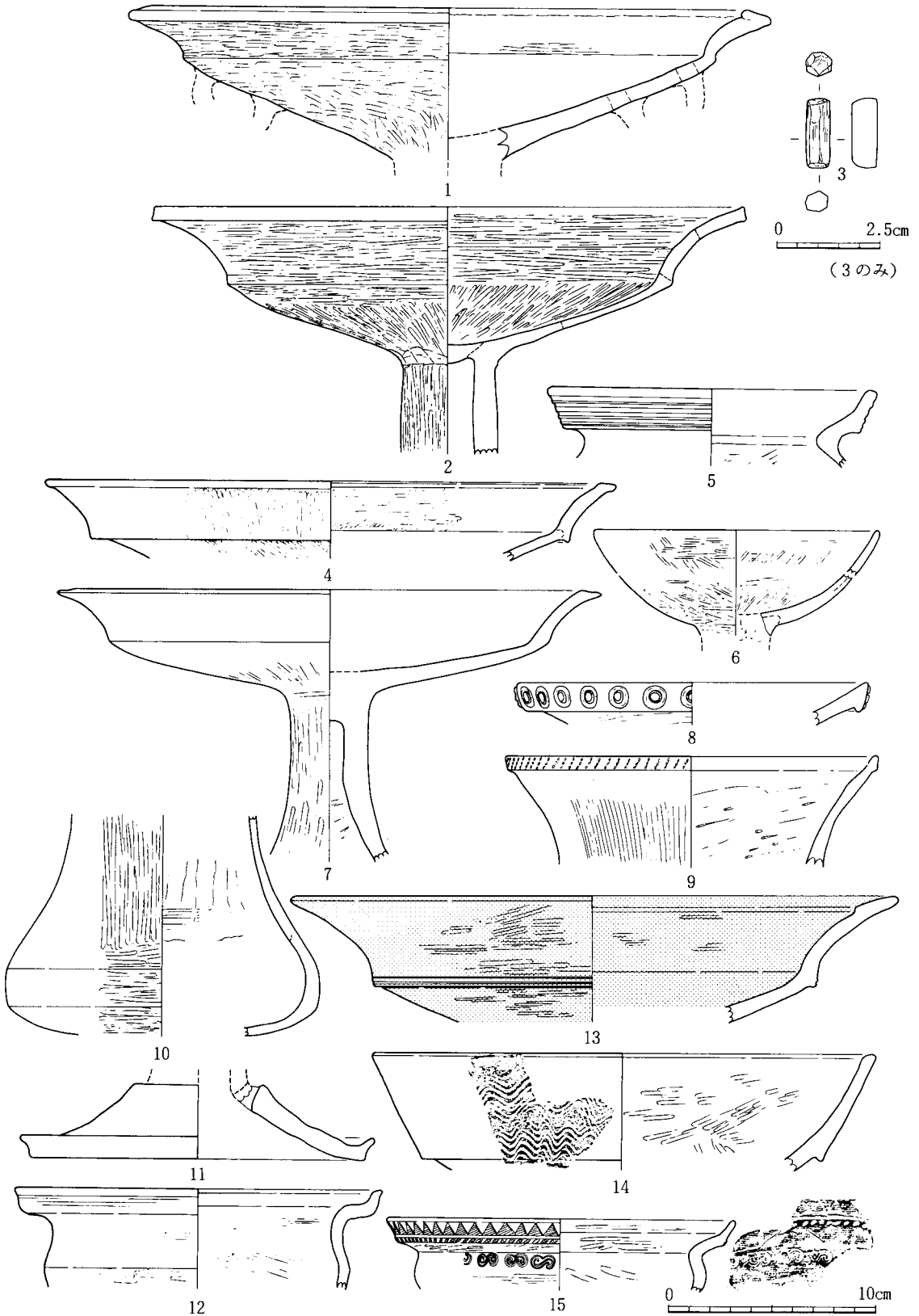
第2調査区は遺構面がすでに削平を受けており出土遺物は少なかったが、遺構検出中に出土した土器は、SD01と同様の時期のものが主体であり、該期の遺構が周辺に分布するものと予想される。

第5節 小 結

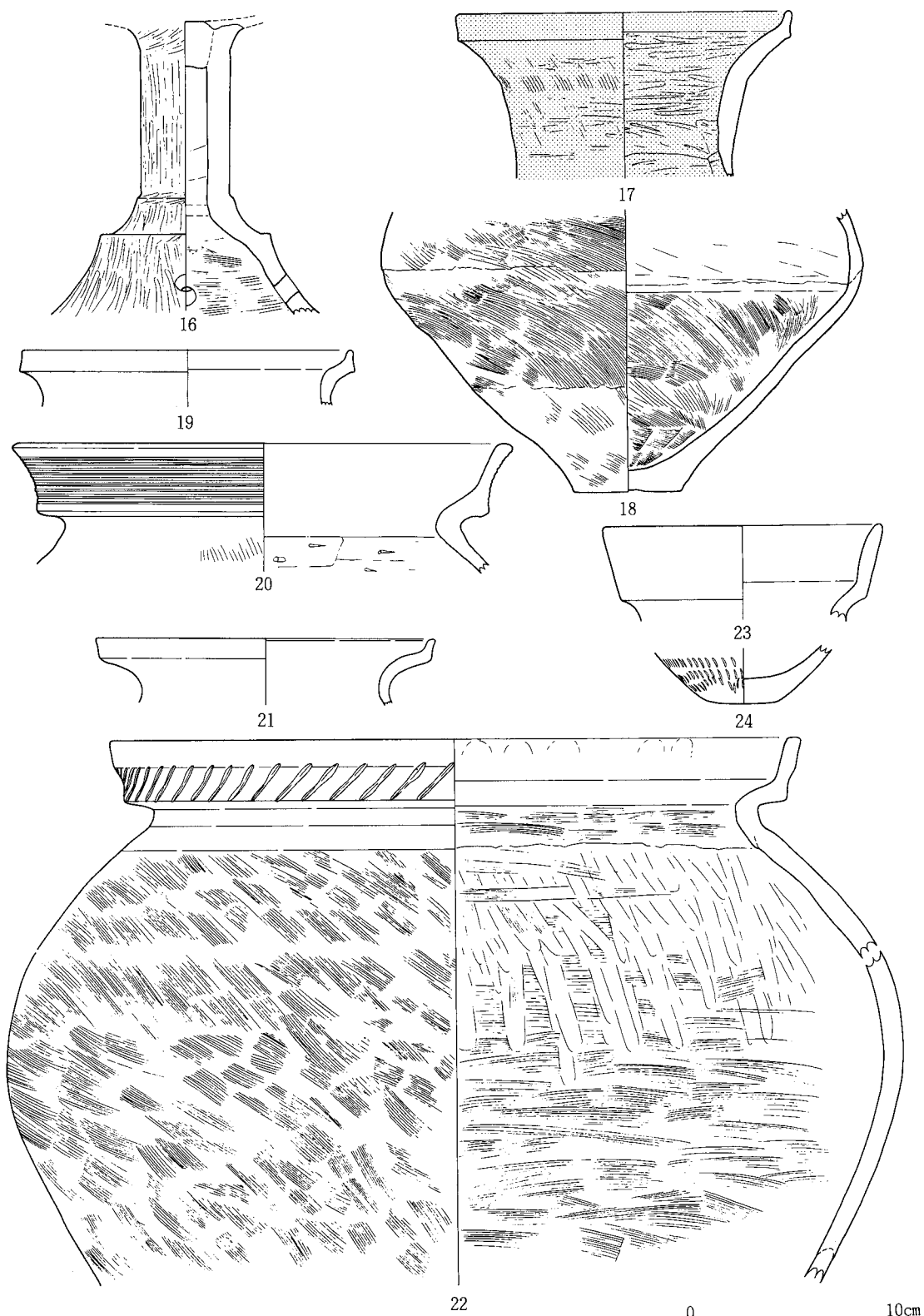
昭和63年度の調査では2つの地区を調査した。いずれも幅2mと限られた範囲のため各時期の遺構の面的広がりには不明な点が多いものの、広範な地区での遺跡のあり方（立地、時期、性格等）については多くの情報を得ることができた。

第1調査区では、各時期の7棟の竪穴住居跡と8棟以上の掘立柱建物を検出し、それぞれの段階での集落遺跡であることを確認した。建物跡は、弥生時代後期半ば、同後期後半、同後期終末、古墳時代前期、同中期、7世紀末、8世紀半ば～後半、と最低でも7段階にわたっている。さらに第2調査区では、古墳時代初頭の遺構も確認しており、この周辺で弥生時代後期から奈良時代まではほぼ連続と人々の生活が営まれてきた様子が窺える。また、第1調査区に近い平成元年度調査区からは、古墳時代初頭と同中期末～後期にかけての遺構・遺物が検出されている、この他、相川地区には、松任平野では例の少ない古墳群（5C）が存在する。

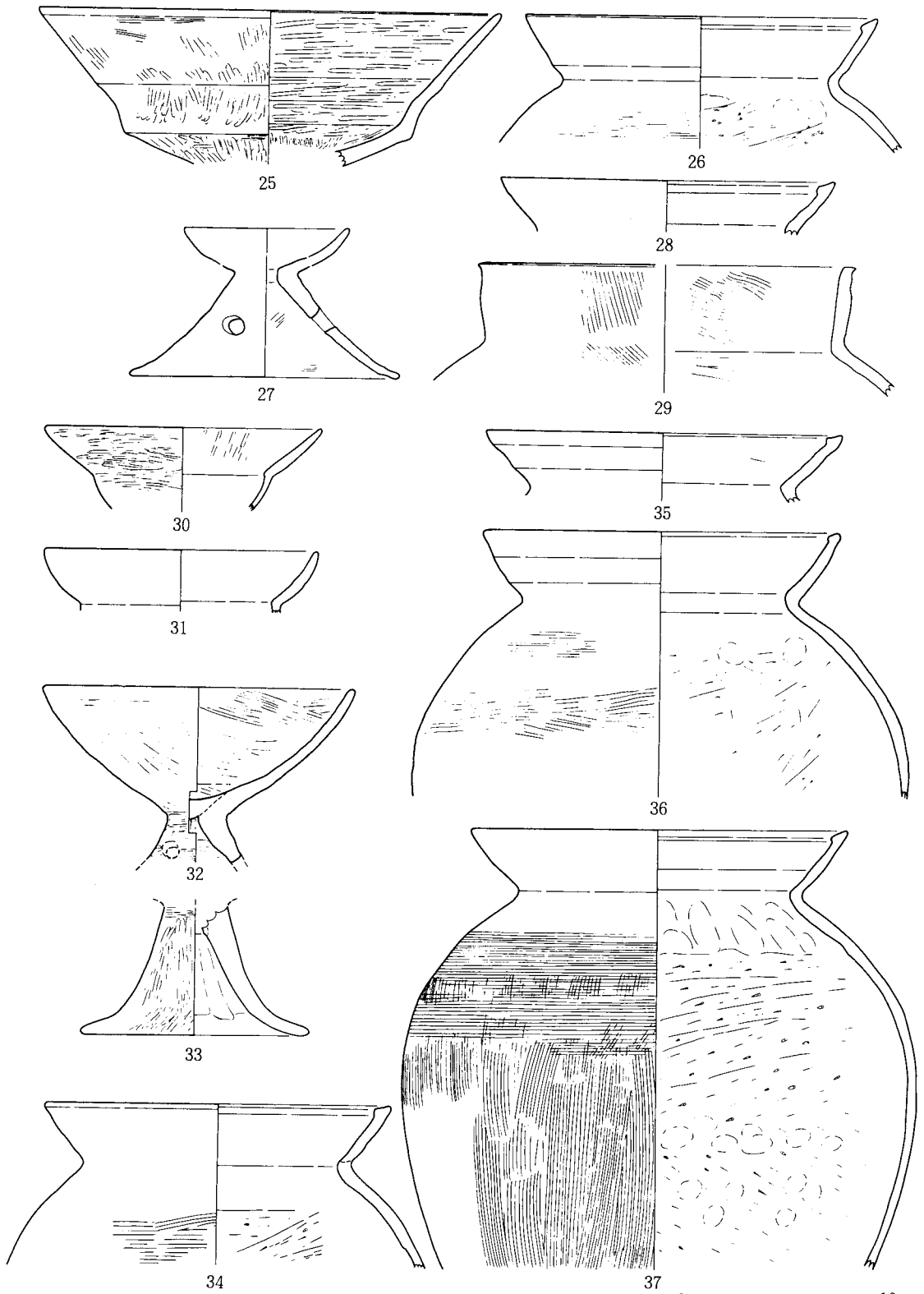
これらから総合的にみるならば、相川周辺は弥生時代後期以降、奈良時代まで継続的に集落が営まれるような松任平野内でのひとつの中核的な地域であったことが明らかであろう。その各時期ごとの遺跡の歴史的意義については、ここでは触れられないが、松任平野の歴史を明らかにする上での重要な鍵を握っている遺跡群であることは疑いない。



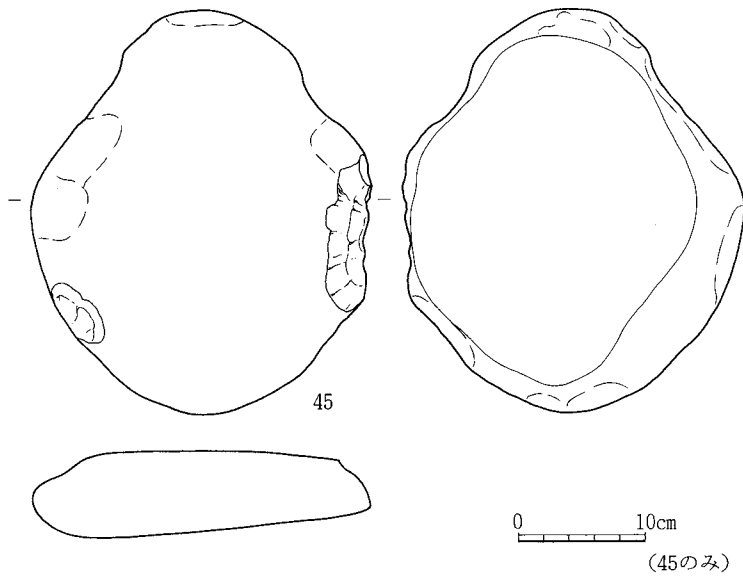
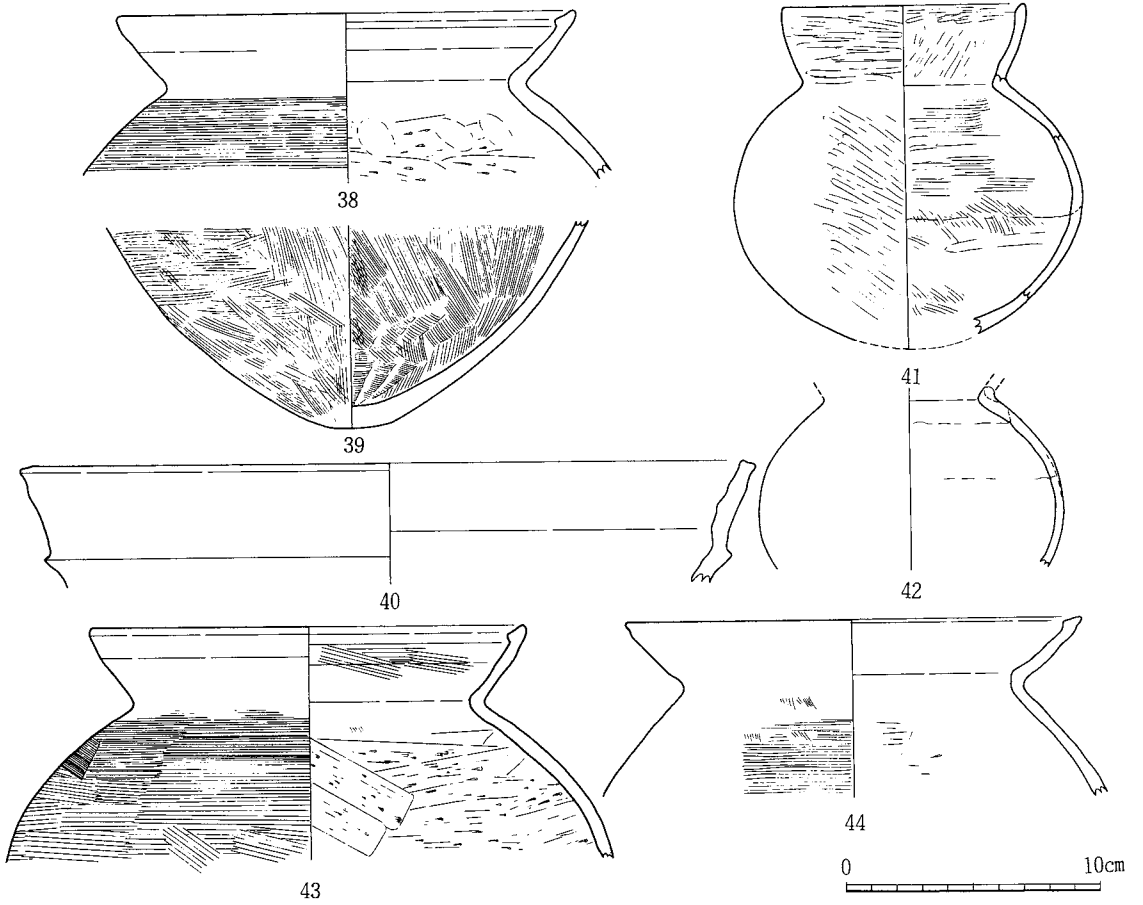
第8図 出土遺物（弥生時代1）



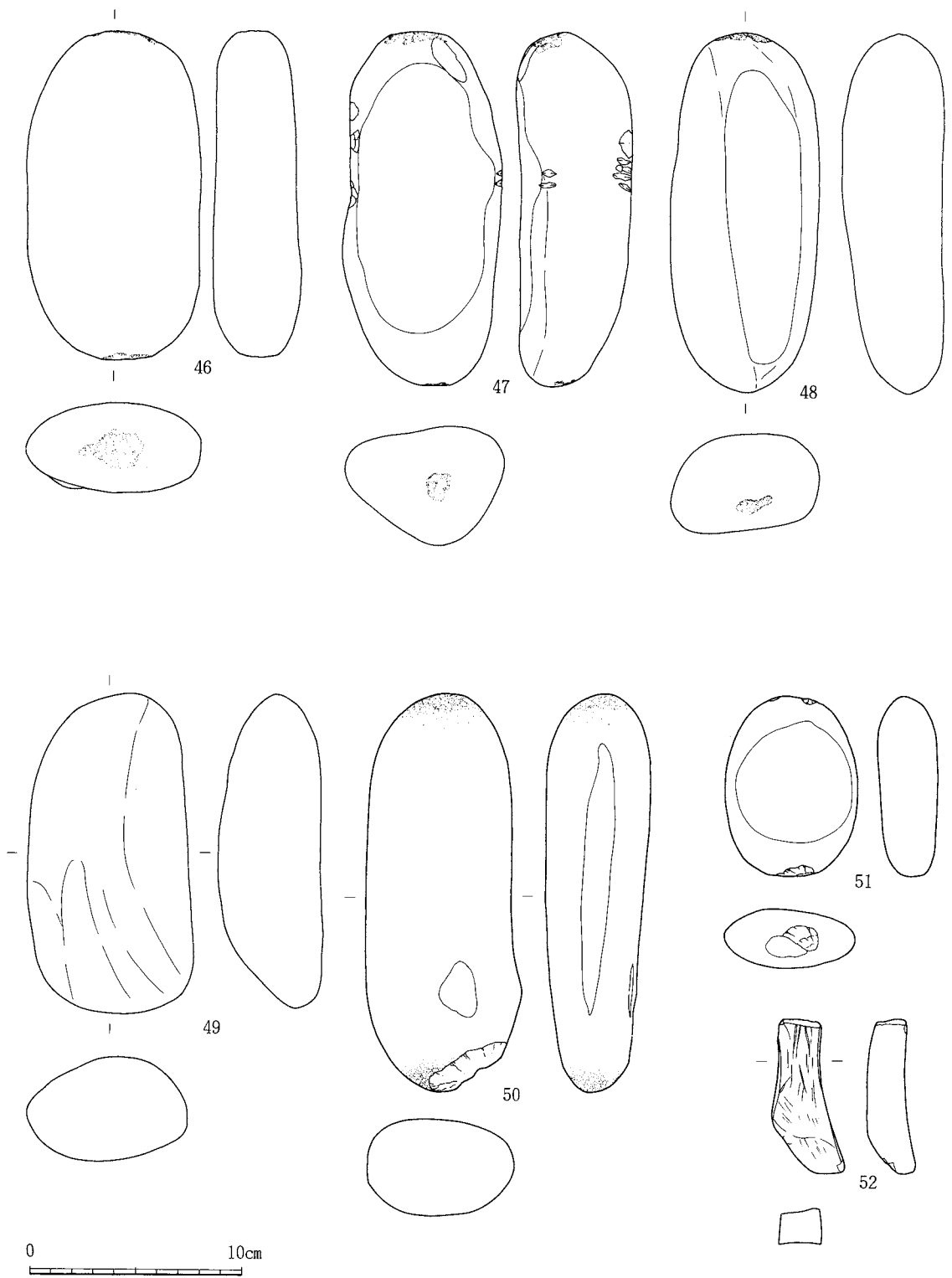
第9図 出土遺物（弥生時代2）



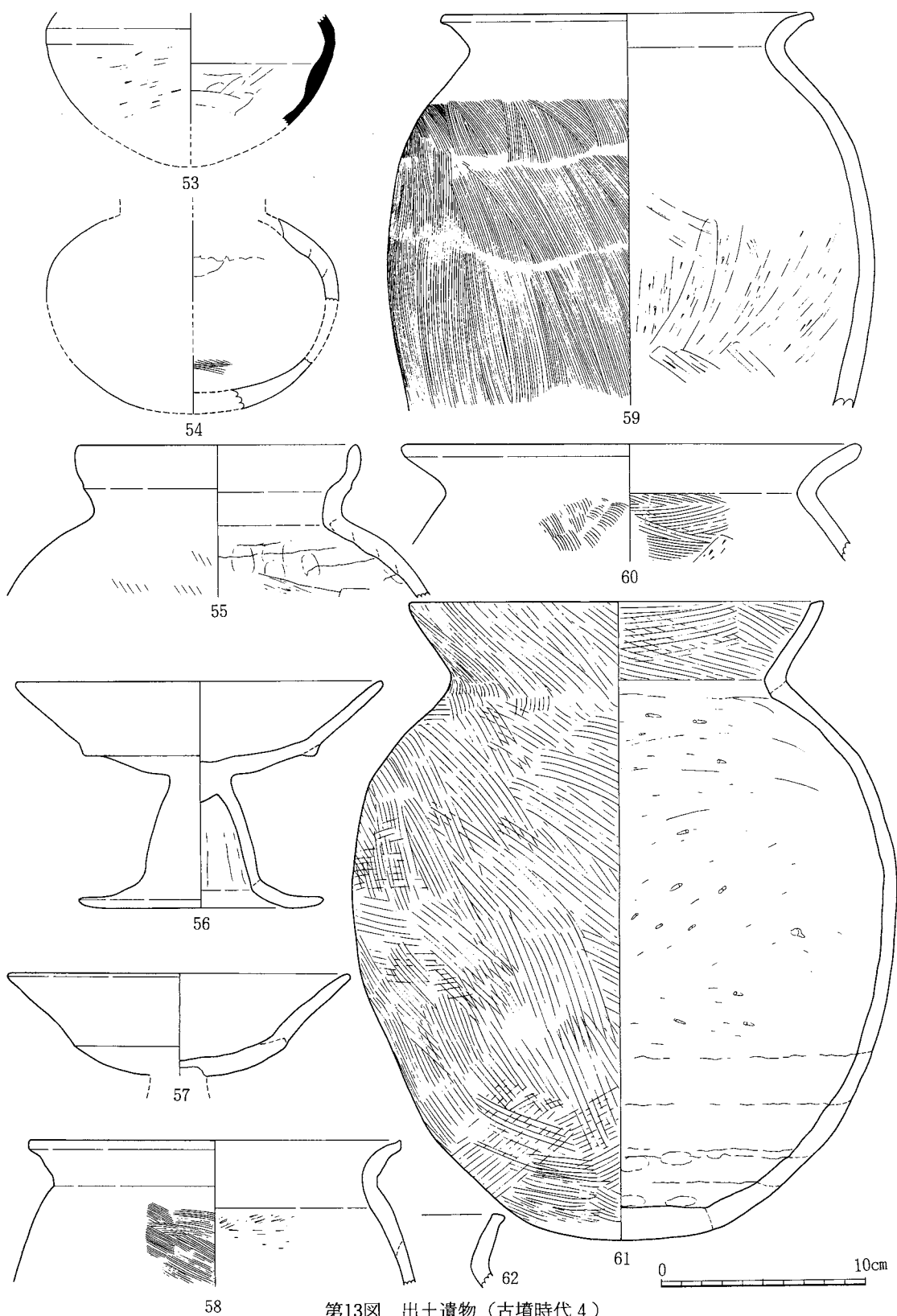
第10図 出土遺物（古墳時代1）



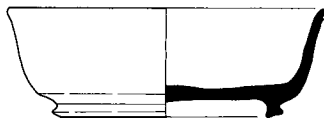
第11図 出土遺物（古墳時代2）



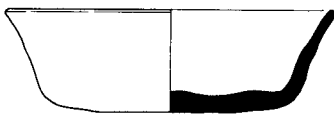
第12図 出土遺物（古墳時代3）



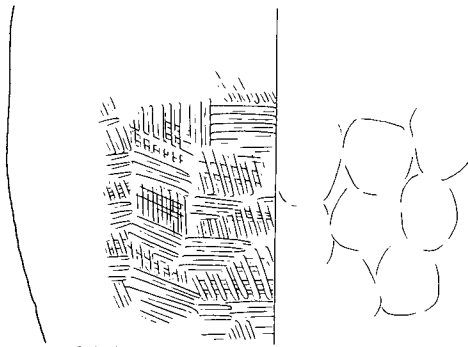
第13図 出土遺物（古墳時代4）



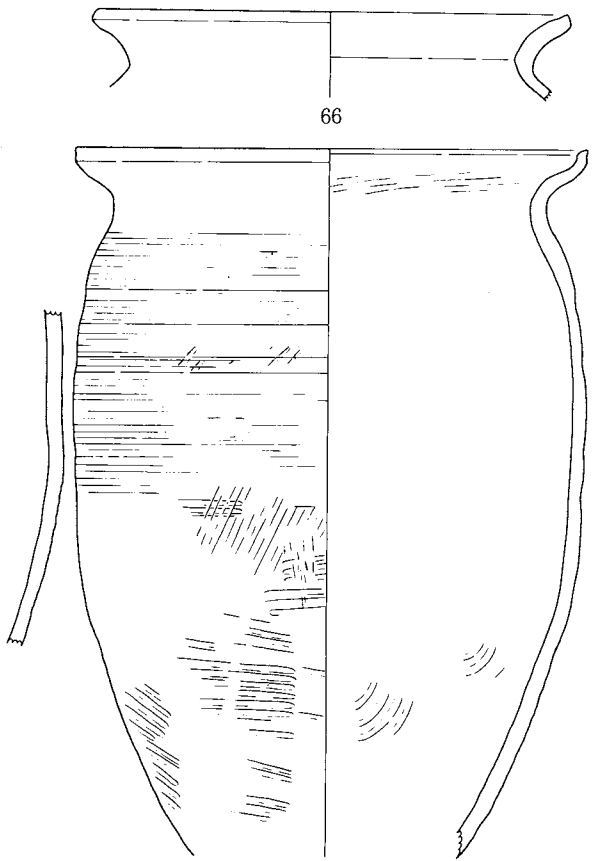
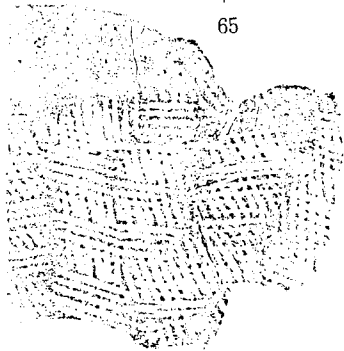
63



64

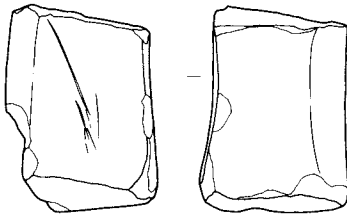


65

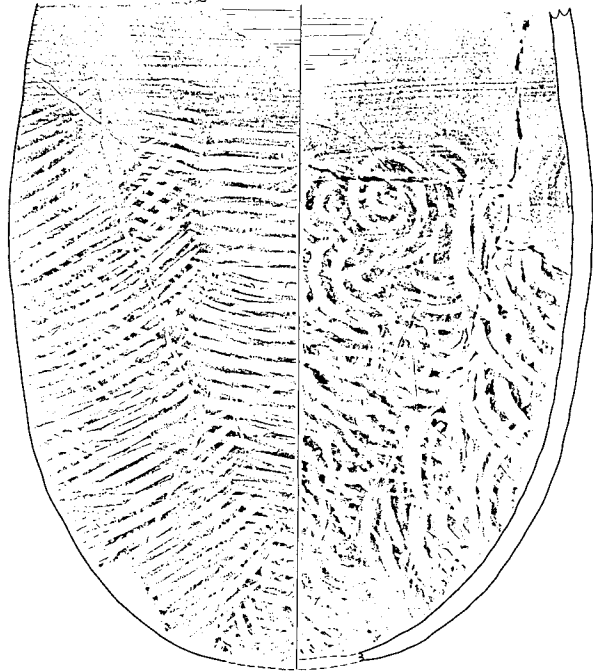
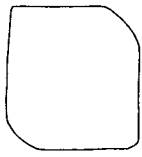


66

67

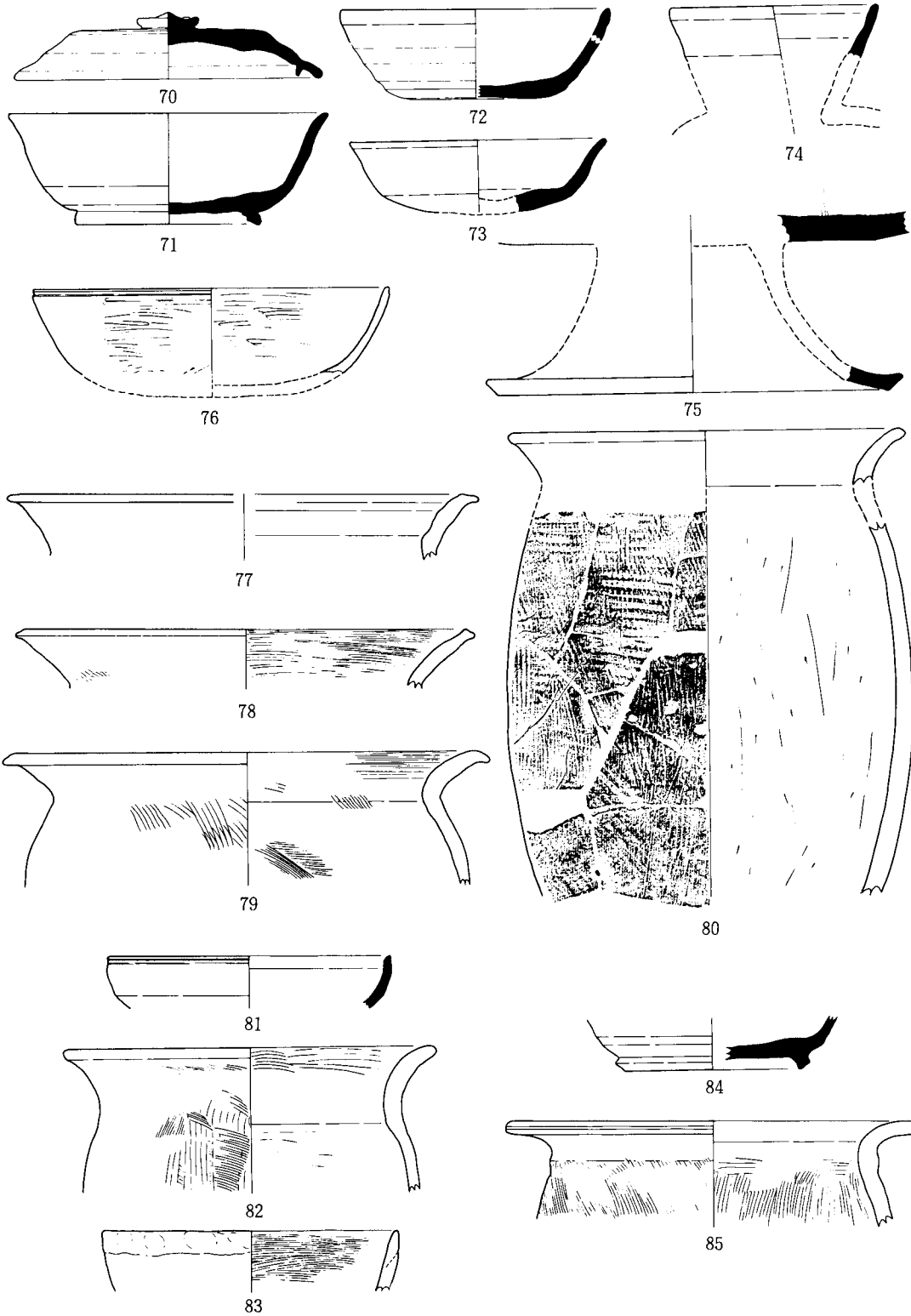


69



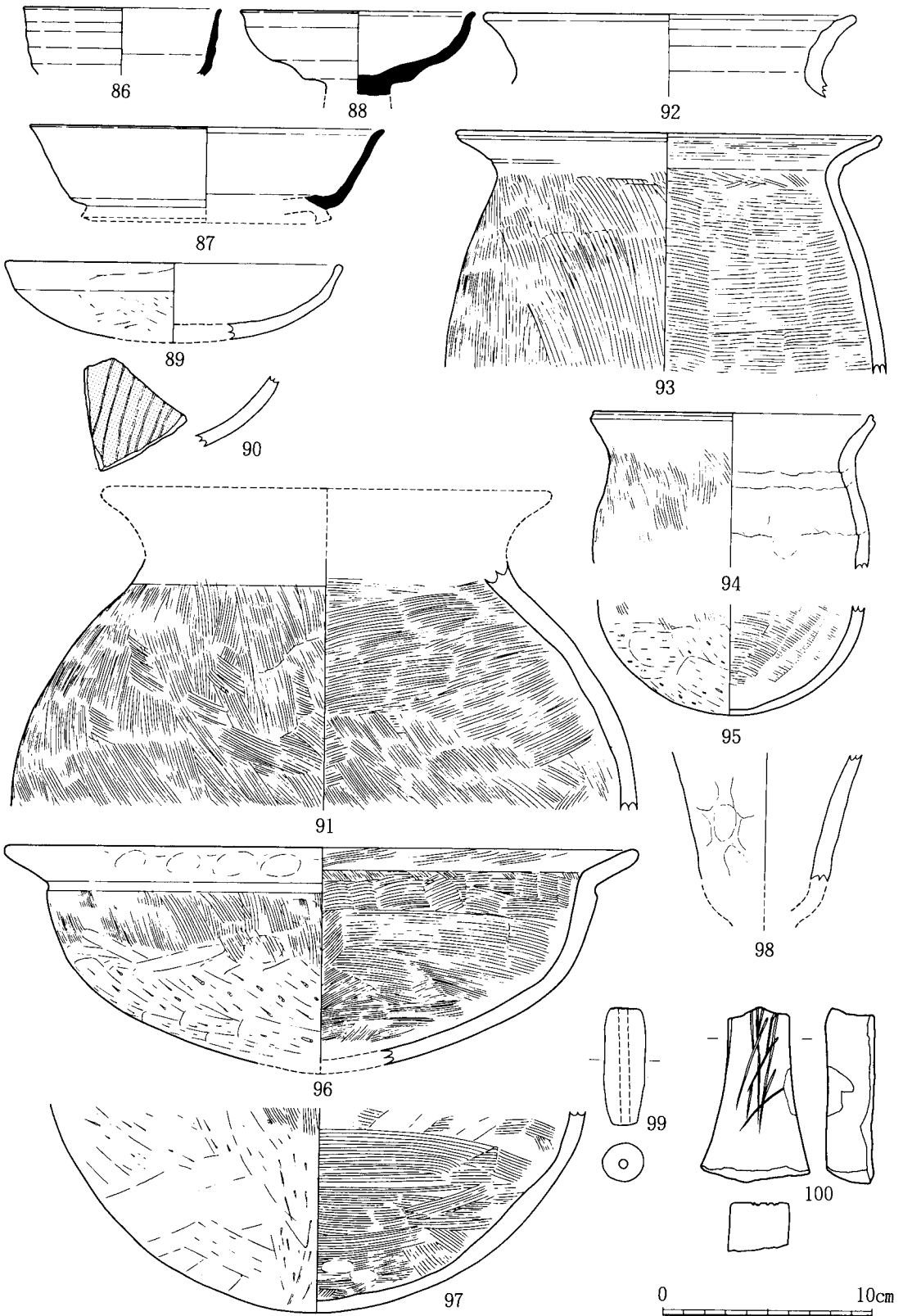
0 10cm

第14図 出土遺物（飛鳥・奈良時代1） 68

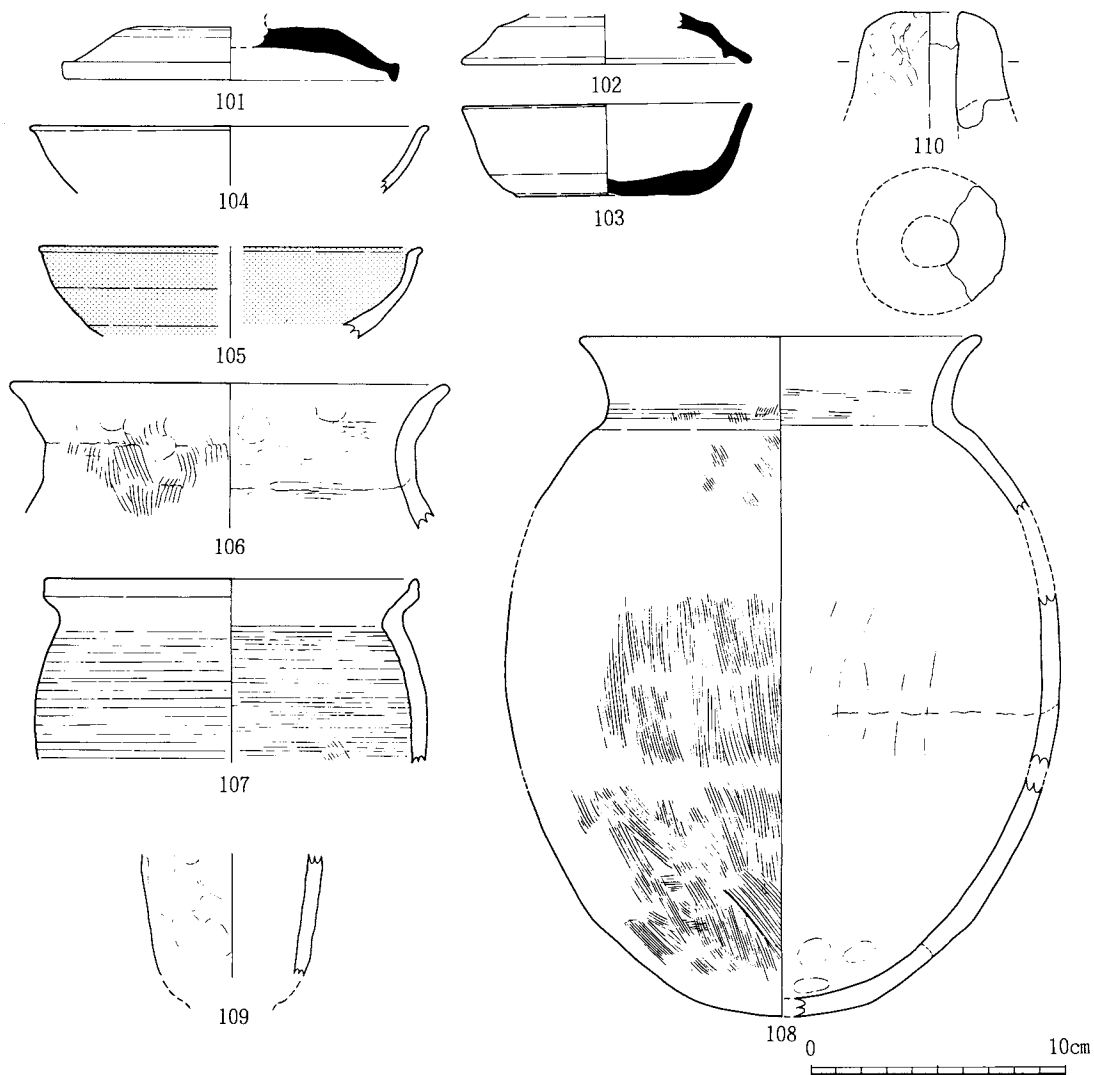


70-80
3K7

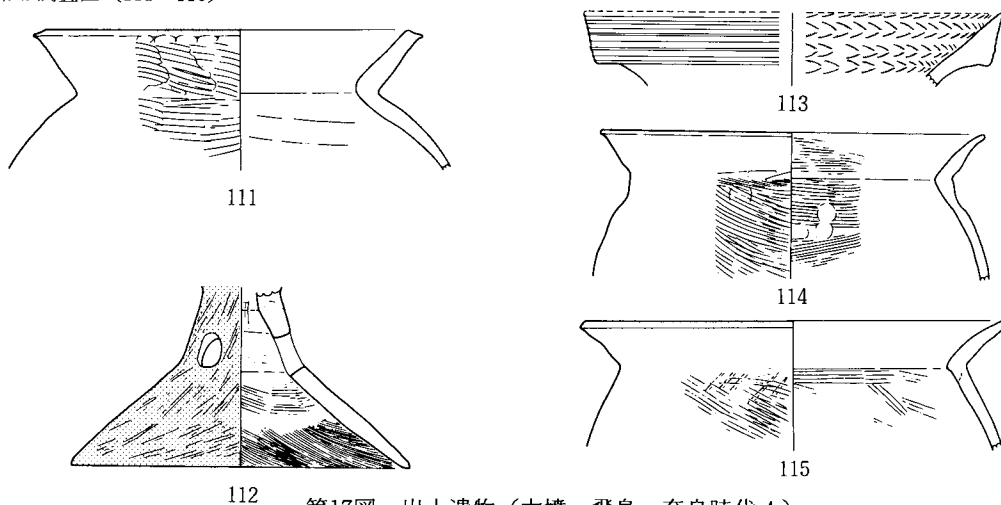
第15図 出土遺物（飛鳥・奈良時代2）



第16図 出土遺物（飛鳥・奈良時代3）



第2調査区 (111~115)



第17図 出土遺物 (古墳・飛鳥・奈良時代4)

昭和63年度の調査（東相川B、C遺跡）

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整等	その他	番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整等	その他
1	31区 P-79	弥生土器 高坏	A:31.4			30	13区 SD-11	土師器 小型 丸底鉢	A:13.4		
2	31区 P-79	弥生土器 高坏	A:29.0			31	13区 SD-11	土師器 小型 丸底鉢	A:13.2		
3	31区 P-80	管玉の 未製品	L:1.64 W:0.60			32	13区包 SD-11	土師器 高坏	A:15.0		
4	SD-15	弥生土器 高坏	A:28.0			33	13区 SD-11	土師器 高坏	B:11.0		
5	SD-15	弥生土器 甗	A:16.0			34	SI-07 掘 埋土	土師器 甗	A:16.6		
6	SD-15 25区包	弥生土器 高坏	A:13.8			35	13区 SD-11	土師器 甗	A:17.0		
7	SI-07 南半	弥生土器 高坏	A:26.6			36	13区 SD-11	土師器 甗	A:17.0		
8	SI-07 上面包	弥生土器 器台	A:17.0			37	13区 SD-11	土師器 甗	A:18.0 M:23.7		
9	SI-07 北半	弥生土器 壺	A:18.1			38	13区 SD-11	土師器 甗	A:18.3		
10	26区 P-77	弥生土器 壺	M:15.3			39	13区包 SD-11	土師器 甗	A:2.0		
11	26区 P-77	弥生土器 高坏	B:17.3			40	13区 SD-11	土師器 甗	A:29.2		
12	26区包	弥生土器 甗	A:18.0			41	13区包 SD-11	土師器 小壺	A:9.6, H:(13.6)、 M:13.7		
13	18区 SI-05	弥生土器 高坏	A:29.6			42	13区 SD-11	土師器 小壺			
14	18区 SI-05	弥生土器 壺?	A:24.6			43	13区包	土師器 甗	A:17.4		
15	15区包	弥生土器 鉢	A:17.0			44	22区台	土師器 甗	A:18.0		
16	43区 土器ダマリ	弥生土器 高坏				45	13区 SI-04床	台石	L:32.2, W:27.2, H:7.0		
17	43区 土器ダマリ	弥生土器 壺	A:16.0			46	13区 SI-04床	棒状礫 (編物石 か)	L:15.5, W:8.2, M:4.2		
18	43区 土器ダマリ	弥生土器 壺	M:23.0 B:5.2			47	13区 SI-04床	"	L:16.8, W:6.5, H:5.6		
19	43区 土器ダマリ	弥生土器 甗	A:15.8			48	13区 SI-04床	"	L:17.1, W:8.9, H:4.7		
20	43区包	弥生土器 甗	A:23.8			49	13区 SI-04床	"	L:15.2, W:7.6, H:4.95		
21	40区 SK-17	弥生土器 甗	A:16.2			50	13区 SD-11	"	L:18.8, W:7.4, H:4.6		
22	40区 SK-17	弥生土器 甗	A:33.0 M:(43.0)			51	13区 SI-04北壁	礫	L:8.5, W:6.2, H:2.8		
23	14区 SD-12	弥生土器 甗	A:13.2			52	13区 SI-04埋土	砥石	L:7.3, W:3.4, H:1.7		
24	14区 SD-12	弥生土器 甗	B:3.5			53	SI-07 床面	須恵器 はそう	M:14.2		
25	SI-03と上 層の黄色溝	土師器 高坏	A:22.3			54	SI-07南 埋土	土師器 壺	M:14.4		
26	SI-03か SI-04	土師器 甗	A:16.8			55	32区含 SI-07南	土師器 壺	A:14.1		
27	SI-04床面	土師器 器台	A:8.0, B:13.0, H:7.2			56	SI-07南	土師器 高坏	A:18.1, H:11.2, B:12.0		
28	SI-04(南) 埋土	土師器 甗	A:16.0			57	SI-07北	土師器 高坏	A:16.8		
29	SI-04(北) 埋土	土師器 甗	A:18.0			58	32区 SI-07上面	土師器 甗	A:18.4		

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整等	その他
59	SI-07 上面	土師器 甕	A:18.3 M:24.0		
60	SI-07 埋土	土師器 甕	A:22.6		
61	SI-07 床面	土師器 甕	A:20.3, H:31.7, M:26.8		
62	SI-07 南	土師器 甕			
63	SI-01 ③	須恵器 坏B	A:12.6, B:9.1, H:4.3		
64	SI-01 ①	須恵器 坏A	A:13.0, B:9.2, H:4.1		
65	SI-01 カマド⑩、⑫	土師器 甕	M:21.2		
66	SI-01 SW区埋土	土師器 甕	A:18.8		
67	SI-01 カマド⑬	土師器 甕	A:20.1 M:20.2		
68	SI-01 カマド⑧~⑪	土師器 甕	M:22.9		
69	SI-01 ④	砥石	L:8.2, W:5.8, H:5.7		
70	SK-07 ①	須恵器 蓋	A:14.3 H:3.1		
71	SK-07⑤ SK-08	須恵器 坏B	A:14.8, B:8.6, H:5.2		
72	SK-07③ N区、S区	須恵器 坏A	A:12.7, B:6.8, H:4.2		
73	SK-07 アゼ、N区	須恵器 坏A	A:12.1, B:8.6, H:3.4		
74	SK-07 N区埋土	須恵器 平瓶	A:9.6		
75	SK-07	須恵器 承盤			
76	SK-07 検出面	土師器 碗	A:16.6 H:(5.1)		
77	SK-07 S区	土師器 甕	A:22.0		
78	SK-07 S区	土師器 甕	A:21.4		
79	SK-07 S区埋土	土師器 甕	A:22.7		
80	SK-07 N区埋土	土師器 甕	A:18.5		
81	SK-08	須恵器 碗	A:13.2		
82	SK-08	土師器 甕	A:17.4		
83	SK-08	土師器 製塩土器	A:13.9		
84	8区P-15 9区	須恵器 坏B	B:9.0		
85	9区 P-24	土師器 甕	A:19.4		
86	SI-02 SW	須恵器 坏A	A:9.4		
87	SE-02 P-H	須恵器 坏B	A:9.2		
88	SI-02 NE区	須恵器 高坏	A:11.4		

番号	出土地点	器種	法量 (cm)	調整等	その他
89	SI-02 カマド周辺	土師器 碗	A:(16.3)		
90	SI-02 NW区	土師器 碗			
91	SI-02カマ ド、SE区、 P-C	土師器 カマド?	M:30.4		
92	SI-02 NW区	土師器 甕	A:17.8		
93	SI-02 カマド灰穴	土師器 甕	A:20.4		
94	SI-02 黄色溝	土師器 小甕	A:13.6		
95	SI-02、カ マド支脚上、 灰穴	土師器 小甕			
96	SI-02、カ マド支脚、カ マド周辺、灰 穴	土師器 埴	A:30.6 H:16.0		
97	SI-02、カ マド支脚、灰 穴	土師器 埴			
98	SI-02 SE区隅	土師器 製塩土器			
99	SI-02 SE区	土鏝	L:5.7, W:1.94, g:24.2		
100	SI-02 11区	砥石	L:8.5, W:5.2, H:2.4		
101	10,11区 包含層	須恵器 蓋	A:13.3		
102	11区 P-51	須恵器 蓋	A:11.6		
103	12区 P-53	須恵器 坏A	A:11.6, B:7.6, H:3.6		
104	SK-12	土師器 碗	A:15.8		
105	SK-12	土師器 碗	A:15.2		
106	11区 SK-12	土師器 甕	A:17.4		
107	SK-03	土師器 甕	A:14.8		
108	SI-02、カ マド周辺、灰 穴、NE、NW、 SE灰、10区 P-32	土師器 甕	A:16.0 M:22.0 H:26.9		
109	33区 以北 旧河道	土師器 製塩土器			
110	12区	フイゴ羽 口			
111	第2調査区 SD-01	土師器 甕	A:15.4		
112	第2調査区 SD-01	土師器 高坏	B:13.4		
113	第2調査区 1区南	土師器 壺	A:16.5		
114	第2調査区 1区南坵	土師器 甕	A:15.2		
115	第2調査区 1区南坵	土師器 甕	A:16.9		

第5章 平成元年度の調査 (相川新A遺跡、東相川遺跡)

第1節 調査の概要(第1図)

平成元年度における御手洗・出城地区東相川工区内の県営ほ場整備事業は、松任市相川町地内(通称中相川)で、集落の北側を並行して走る高速道路北陸自動車道と石川広域道の沿道約10haの水田が事業対象地となった。この事業対象地内での埋蔵文化財は、北陸自動車道の建設に伴う分布調査で発見され、その一角が昭和44年に調査された相川新A遺跡と、事業対象地よりも南方に広がる東相川遺跡の二遺跡が知られていた。二遺跡とも前年度(昭和63年度)の分布調査で、遺物包含層の広がりを確認していた。

発掘調査に先立ち当センターと石川県松任土地改良事業所の協議により、各遺跡内を通過する位置に施工される予定の排水路部分を調査範囲とし、田面と用水路部分の遺跡範囲に関しては、削平工事を行わず盛土施工で遺跡の保存を計ることが合意された。現地における発掘調査は、ほ場整備事業の工事に先行して、平成元年度(1989)5月31日から6月31日にかけて実施した。調査面積は相川新A遺跡と東相川遺跡の二箇所で約350㎡を測る。調査に係わる費用は、県農林水産部耕地整理課および文化庁の負担による。

なお、発掘調査の便宜上から相川新A遺跡の調査区をNトレンチ、東相川遺跡の調査区をSトレンチとして作業を進めたので、本報告もN・Sトレンチの呼称を使用するものである。

Nトレンチの相川新A遺跡は、北陸自動車道を中心とする標高5.5m前後の水田下に広がる遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡や溝・土坑等の遺構が検出され、良好な集落遺跡であることが確認された。一方、Sトレンチの東相川遺跡は、Nトレンチの南方約250mに位置し、標高6.7mの水田下に広がる遺跡で、検出された遺構は、全て中世以降の不整形な溝状以降だけで、Sトレンチの南方に広く分布し、昭和63年度に発掘調査が実施された東相川遺跡の縁辺部と考えられる調査区である。

平成元年5月31日に開始した発掘調査は、まずNトレンチから着手して、6月下旬にSトレンチの調査を実施した。また、発掘調査を進めるのに際しては、地元の相川町と相川新町の工区長や有志の方々の参加・協力を得ている。

第2節 Nトレンチ(相川新A遺跡)の遺構(第2・3図)

1. 調査区の位置と層序

相川新A遺跡の発掘調査区であるNトレンチは、事業予定地の北端を東西に走る北陸自動車道の南側敷設される排水路の予定地に設定した。その位置は北陸自動車道の建設時に一部の調査が実施された地点の南側にあたる。



第1図 調査区位置図 (S = 1 / 3000)

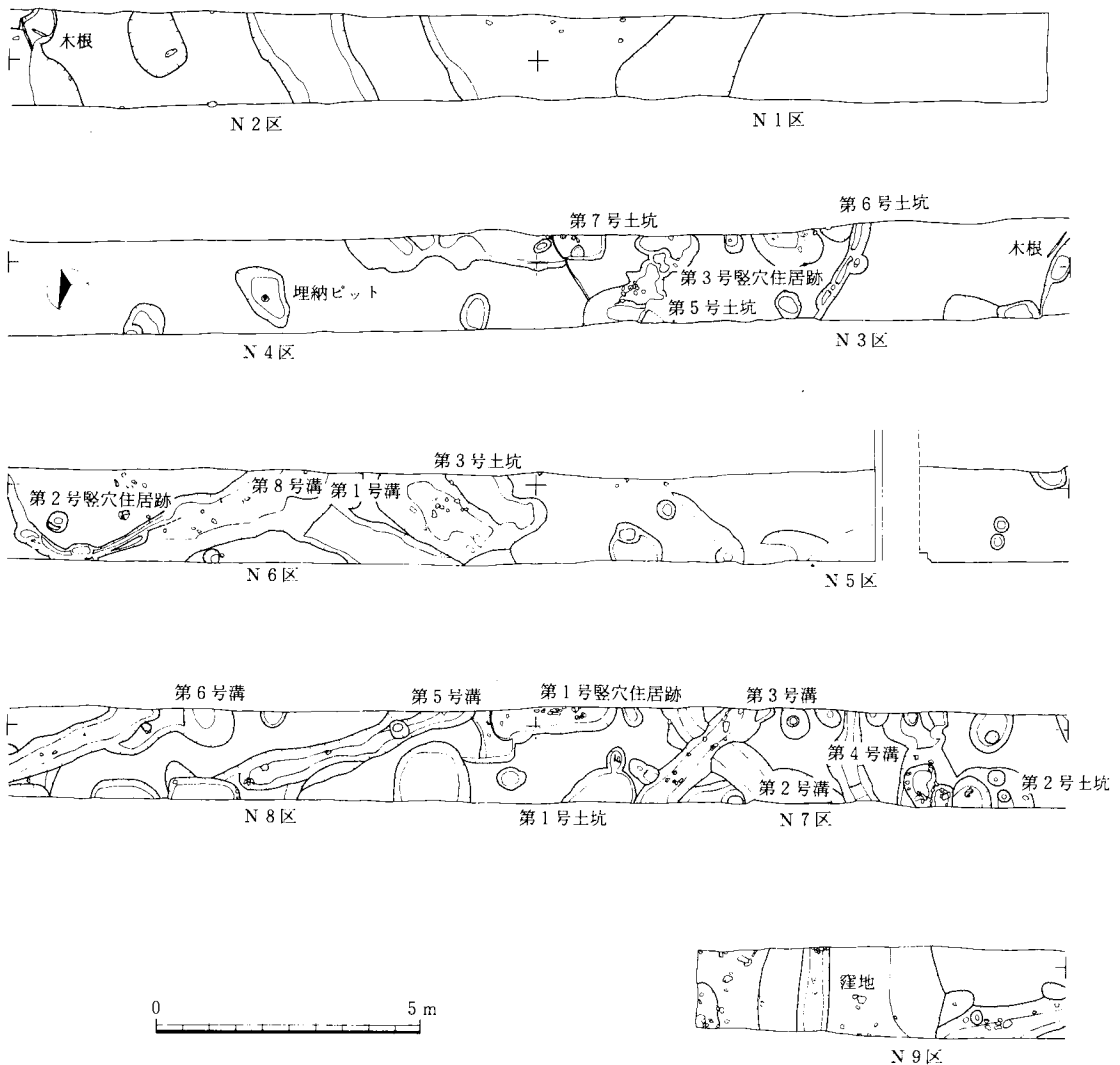
遺跡の周辺は、手取川扇状地の扇端部に位置する水田地帯で、水稻の単作水田が広がる。いずれも昭和40年代の前半には場整備が実施された水田で、標高は5.7m前後を測る。田面の規模は660㎡(200歩)を基本面積とする水田区画で占められる。そして、周辺の地形は長年の耕作と明治以降実施された数次のは場整備により旧地形が失われ、かつてはいたる所で見られたであろう扇状地特有の島状地形や泉などの地形の起伏は認められない。

Nトレンチの調査区は、幅2m・東西の長さ135mで設定したが、調査区を横断する現況の排水路と農道は、調査対象から除外したために、調査区は大きく3ブロックに分かれる形となった。調査区内の区割りは、調査区の西端を起点としてN1からN14区まで行った。遺構は主にN2～

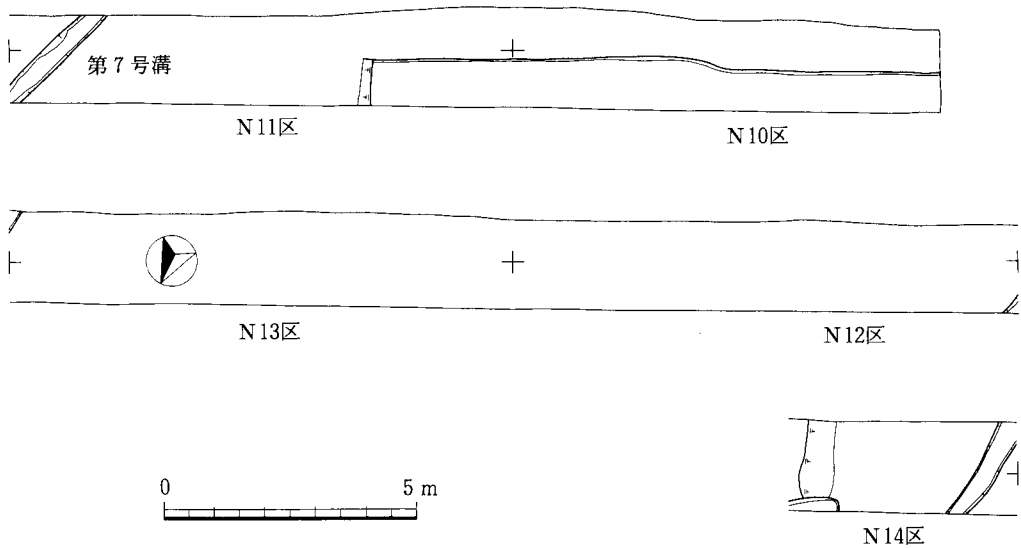
N 9区内で確認された。他方、Nトレンチの南方向約250mの排水路予定地には、Sトレンチの調査区を幅2m・南北の長さ43mで設定した。調査区内の区割りは、調査区の北側を起点としてS 1からS 5区まで行った。遺構はS 1～S 3区で確認された。

Nトレンチの南壁で観察された基本層序は、概ね次のとおりである。

- 第1層……褐灰色砂質土層（耕作土）
- 第2層……黄灰色砂質土層（床土）
- 第3層……灰色粘質土層（旧耕作土）
- 第4層……黒褐色粘土層（遺物包含層）
- 最5層……灰褐色砂質土層（遺構覆土）
- 第6層……淡黄色砂質土層および砂礫層（地山）



第2図 調査区全体図1 (N 1～9区) (S = 1 / 150)



第3図 調査全体図2 (N10~14区) (S = 1 / 150)

土層の中で第1~3層は、各区とも30~40cmの厚さで水平に堆積するが、第4層の遺物包含層は、第6層の地山の変化に伴い土層厚と土質が変化する。調査区内のN1・N4・N5区では、地山は扇状地通有の砂礫層で、他の淡黄色砂質土層の地山に比べ隆起している。また、第5層の遺物覆土も地山土の混込量により土色に変化が認められる。

Nトレンチは大きく西側のN1~N4、中央のN5~N9、東側のN10~N14区の三地区に分かれるが、東側のN10~N14区の地区は、全域が旧地形の鞍部と考えられ、遺跡はN2~N9区に広がるということが知られたので、西側から遺構の分布を概観したい。

調査区の西端に位置するN1区では、地山の砂礫層が荒く島状の隆起を呈する。遺構の検出は無い。次のN2~N4にかけては、地山が淡黄色砂質土層で、不整形な第3号竪穴住居跡を中心に4基の土坑(第4~7号)などが分布する。N4・5区では、地山が細かい砂礫層に変化したピットなどの小遺構が見られた。

中央の調査区は、多くの遺構が密集する状況で検出され、本遺跡の中心であることが知られた。

N6~N8区にかけては、第1・2号竪穴住居跡の他に、不整形で大形の土坑や調査区を斜行する溝が分布する。各遺構の年代は、古墳時代の前・後期がそれぞれ認められるが、溝を中心として、古墳時後期の遺構が主体である。また、N9区で検出された窪地は、東側調査区の鞍部にいたる傾斜地で、古墳時代後期の土器が多く流れ込んでいた。

2. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は古墳時代のものを3基検出したが、全容が知り得る遺構は無い。

第1号竪穴住居跡（第4図）

N7・8区の南壁に位置する。長さ210m、深さ22cmを測り、規模と形状に問題を残すが、地山が淡黄色砂質土で、床面の状況が良好なために竪穴住居跡と推定した。覆土は灰褐色砂質土層を主体として、上面より多くの土器が出土している。時期はⅡ期に比定される。

第2号竪穴住居跡（第4図 図版70）

N6区で第1・8号溝に切られた状況で検出した。長さ310cm、深さ22cmを測り、北側で幅14cm前後の壁溝が確認された。地山は淡黄色砂質土であるが、床面は同色の粘土でしまりが強い。深さ20cmの支柱穴があり、竪穴住居跡の平面形は隅丸方形を呈すると考えられた。覆土は遺物包含層の黒褐色粘土層で、遺物の混入は少ない。なお、床面より出土した土師器の甕と器台の年代観からⅠ期に比定される。

第3号竪穴住居跡（第4図 図版70）

N3区で4基の土坑と切り合う状況で検出した。長さ590cm、深さ14cmを測り、両側の壁部と南壁の土層断面で、壁溝が確認され竪穴住居跡と推定した。床面に穿れたピットは、深さ22cmを測り支柱穴の可能性が高い。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。覆土は薄い遺物包含層に似た暗褐色粘土層を主体とする。出土遺物は少なく時期の比定は困難である。

3. 溝

Nトレンチ全域で11条の溝を検出したが、報告する溝は第1～8号溝の8条である。

第1号溝（第4図）

N6区の第2号竪穴住居跡の上面に位置する。上幅が76～90cmと一定せず不整形である。深さは22cmを測り、溝底の傾斜から東方向へ流下していた溝と考えられる。覆土は暗灰色粘土を主体とし、出土遺物から時期はⅢ期に比定される。

第2号溝（第5図）

N7区で第3号溝に切られた状況で検出された。上幅が80cm前後、深さ15cm前後と一定せず不整形な溝である。覆土は灰褐色砂質土を主体とするが、遺物の出土は少ない。

第3号溝（第5図）

N7区で第2号溝を切る溝である。上幅が70～76cm、深さ3～40cmを測る。溝は南側が深みを増し、南方向へ流下していた溝と考えられる。覆土は黄灰色砂質土で、内部より土師器の甕や石片が出土しⅠ期に比定される。

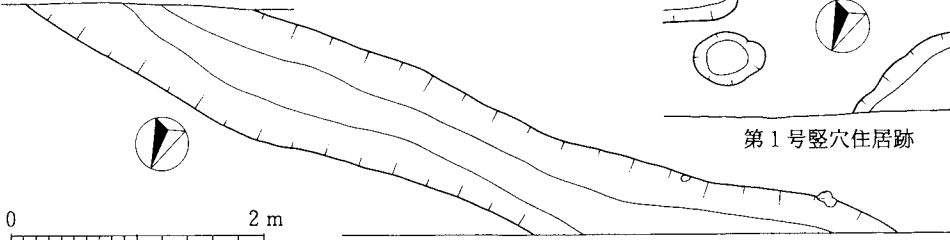
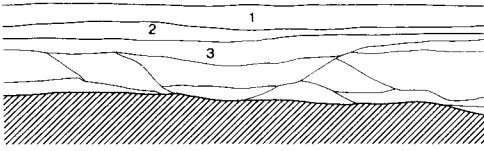
第4号溝（第5図）

N7区の調査区をほぼ直交する溝である。上幅と深さの両面でバラツキ、溝と認定するには疑問が残る遺構である。覆土は灰褐色であるが、遺物の出土は無い。

第5号溝（第5図 図版72）

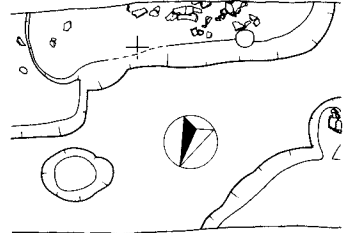
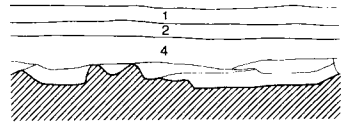
N8区で第6号溝と平行に走る溝である。上幅は56～80cmと変化するが、深さは15cm前後を測る。流下する方向は不明であるが、覆土は黒褐色粘質土と灰褐色砂質土からなり、出土遺物から

5.80m



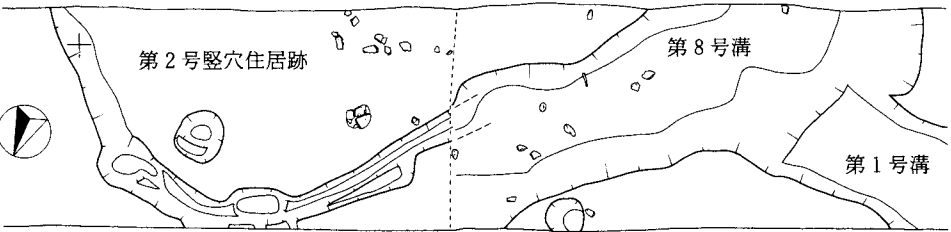
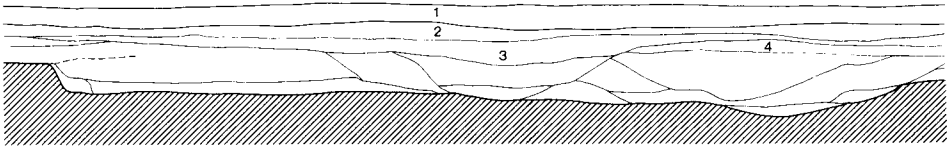
第1号溝

5.80m



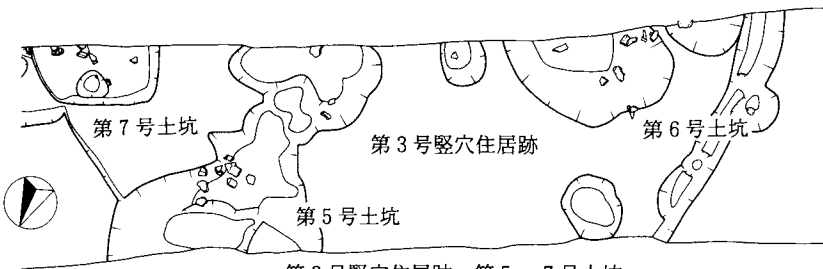
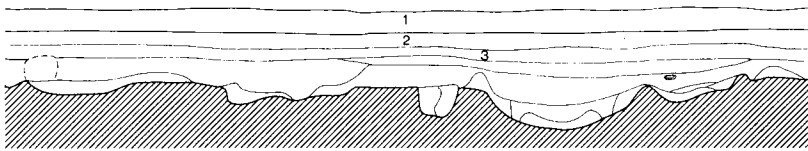
第1号竖穴住居跡

5.80m



第2号竖穴住居跡、第1・8号溝

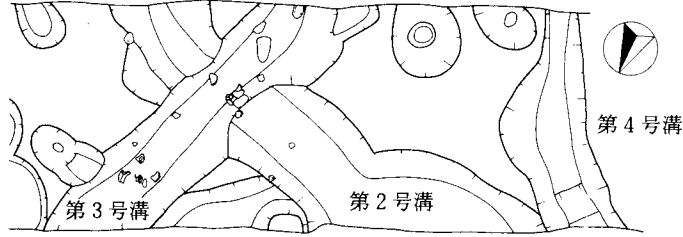
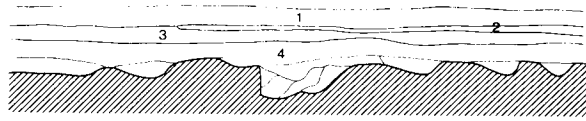
5.80m



第3号竖穴住居跡、第5~7号土坑

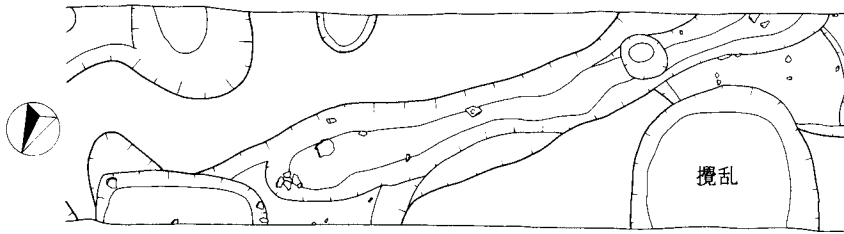
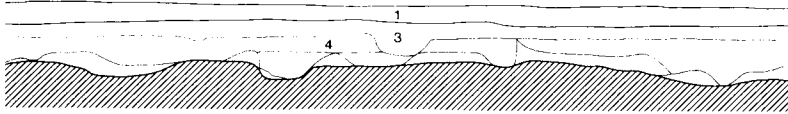
第4図 遺構実測図1 (S = 1/60)

5.80m



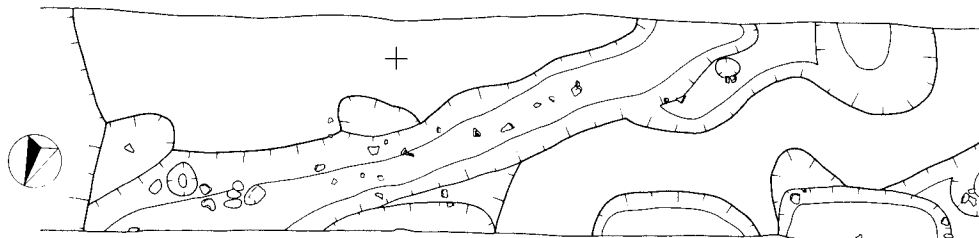
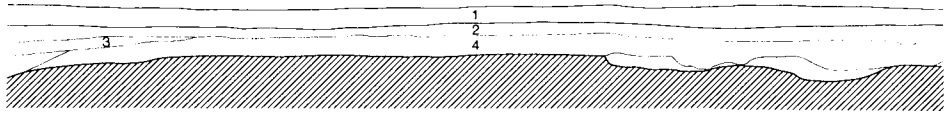
第2～4号溝

5.80m

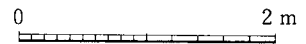


第5号溝

5.80m



第6号溝



第5図 遺構実測図2 (S = 1/60)

Ⅱ期に比定される溝である。

第6号溝（第5図 図版72）

N8・9区に位置し、N9区の窪地斜面へ流下していたと考えられる溝である。上幅は60～70cmで、深さ10～15cmを測る。覆土は灰褐色砂質土を主体として、内部より土師器や石片などが出土した。時期は第5号溝や窪地と同時期のⅡ期に比定される。

第7号溝

旧地形の鞍部と推定されるN11区に位置する。上幅は50cm前後で一定であるが、深さは10cm前後と浅い。覆土は不明で、溝方向が第5・6号溝に近い。

第8号溝（第4図）

N6区で第2号竪穴住居跡を切る状況で検出された。上幅は96～110cmと波打ち、深さは16cm前後を測る。溝の流下方向は不明で、覆土は黒褐色を主体とする。時期はⅡ期に比定される。

4. 土坑

土坑はNトレンチ全域で7基検出したが、竪穴住居跡と同様に全容が知り得る遺構は無く、法量・形態の両面でも安定した様相は認められない。

第1号土坑はN7区の第3号溝の脇に位置する。規模や覆土の点で疑問が残る遺構である。第2号土坑はN7区の第4号溝の脇に位置する。二基の小型土坑が切り合った遺構で、深さ32cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、上半より多くの土師器が出土しⅡ期に比定される。

第3号土坑はN6区に位置し上半を第1号溝に切られる。不整形ながらも最も大型の土坑で、平面形は楕円形を呈し深さ18cmを測る。覆土は濁淡黄色砂質土で、内部より土師器の甕・高坏と東海系の壺などが出土し、第2号竪穴住居跡と同時期のⅠ期に比定される。

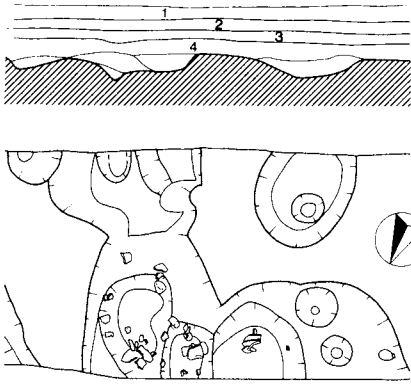
第4～7号土坑は、N3・4区で地山が淡黄色砂質土層の地点に群集する土坑群である。特に、第5～7号土坑の三基は、第3号竪穴住居跡と切り合う土坑で、いずれも略半円形で検出されたが、長径はバラツキ110～170cmを測る。各土坑とも覆土内から多くの土師器が出土し時期が推定される。第5・6号土坑はⅡ期、第7号土坑はⅠ期に比定される。なお、第7号土坑は、第3号竪穴住居跡に共伴する可能性が高い。

5. 埋納ピット・窪地

埋納ピットは、地山が細かい砂礫層であるN4区に位置する。周囲にはピットなどの小遺構が分布する。埋納ピットの法量は、短径76cm、長径132cm、深さ13cmで、ピットのほぼ中央に土師器の直口壺が正位に置かれていた。覆土は小砂利を多く含む灰色粘土で、蓋などの付属物は認められなかった。時期は直口壺の年代観からⅡ期に比定されると考えている。

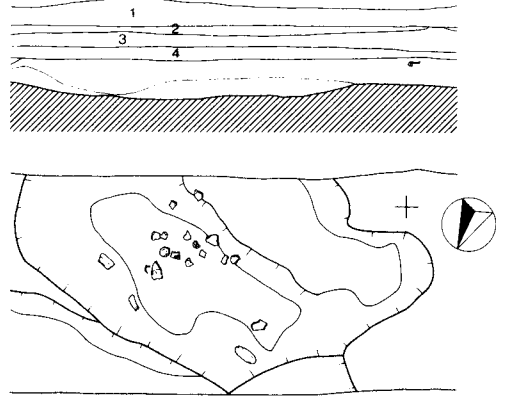
窪地とは、N9区で検出された旧地形の傾斜地を指す。この傾斜地は、N5～9区へと連なる淡黄色砂質土層の地山が、旧地形で集落の東側に広がるであろう低湿地状の鞍部へと下る部分で、上方の集落側から多くの土器片が流れ込んでいた。傾斜地の俯角は約10度と緩やかで下方の底近くに上幅58cmの浅い溝状遺構が走る。覆土は地山の直上に濁明灰色砂層が多量の土師器片と石片を包含して堆積する。その上に積もる黒褐色粘粘質土層では、土器片の混入が激減するのに伴い草状の植物遺体が含まれる。土器の年代は、Ⅱ期が主体となる。（垣内光次郎）

5.80m



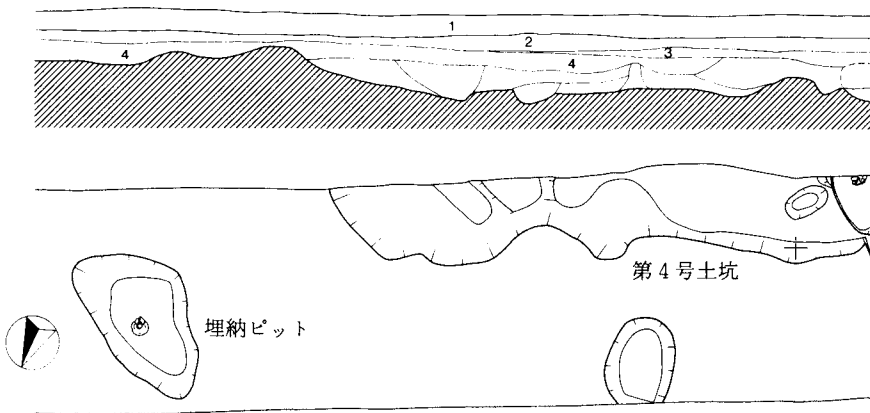
第2号土坑

5.80m

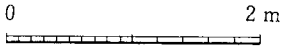


第3号土坑

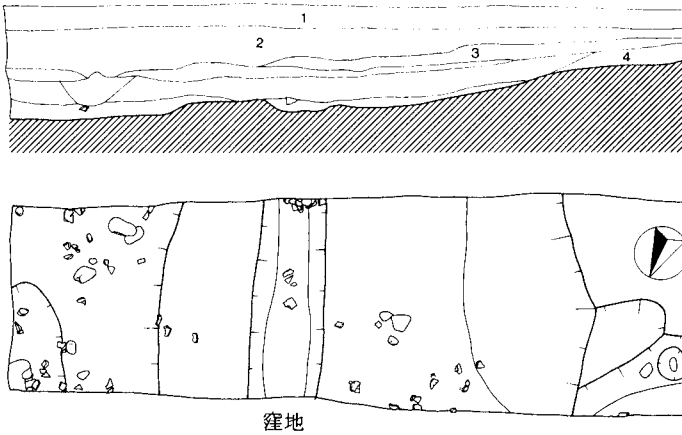
5.80m



第4号土坑、埋納ピット



5.80m



窪地

第6図 遺構実測図3 (S=1/60)

第3節 Nトレンチの遺物

本遺跡より出土した遺物は大きく3時期に分けられる。Ⅰ期は古墳時代前期前葉（古府クルビ式を中心とした時期）で、第2号竪穴住居跡、第2・3・6号溝、第3・7号土坑出土遺物などが相当する。Ⅱ期は古墳時代後期（宮地式を上限とした時期）であり、第1号竪穴住居跡、第5・8号溝、第5・6号土坑、窪地、埋納ピット出土遺物などがそれにあたる。またⅢ期は中世以降と考えられ、溝より若干の遺物が出土した。

1. 竪穴住居跡出土遺物（第7図）

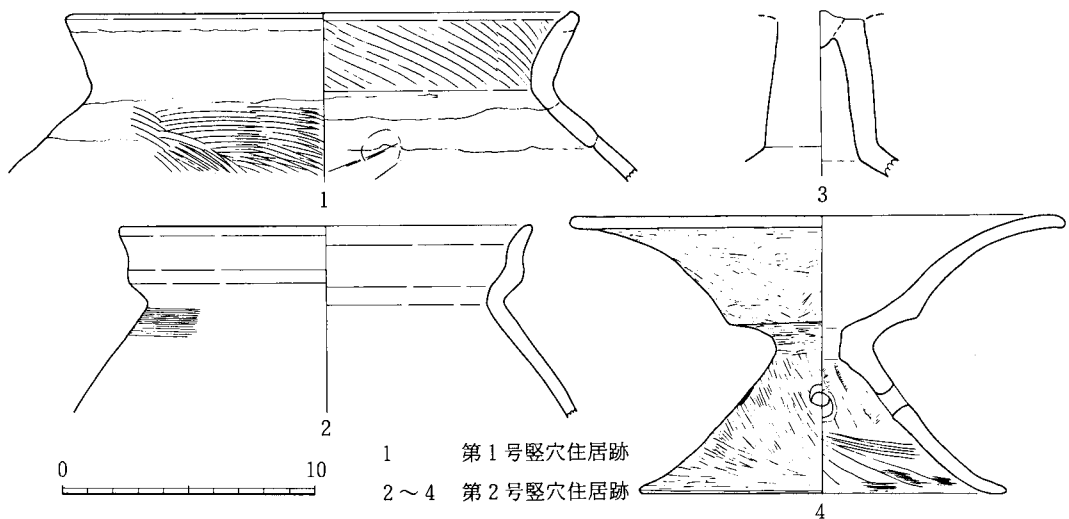
第1号竪穴住居跡覆土出土遺物1は土師器甕である。口縁端部をかなり平坦に仕上げ、胴部内面に粘土紐の接合痕が残る。口縁部内面および胴部外面に粗いハケ調整を施す。Ⅱ期に位置づけられる。

第2号竪穴住居跡出土遺物のうち、2は床面出土の在地系の土師器有段口縁の甕である。口縁部下端が肥厚、屈曲し、端部はやや外反する。胴部外面にハケ調整を施す。胎土中に海綿骨針を含む。3は土師器高杯脚部である。摩耗のため調整不明。覆土中より出土し、第2号竪穴住居跡と切り合う第8号溝につく可能性が高い。4は床面出土の土師器器台である。赤橙色を呈し、口径19.5cm、器高11.2cmを測る。脚部4ヶ所に穿孔をおこない、外面にミガキ調整を施す。胎土中に海綿骨針を含む。3を除きⅠ期に位置づけられる。

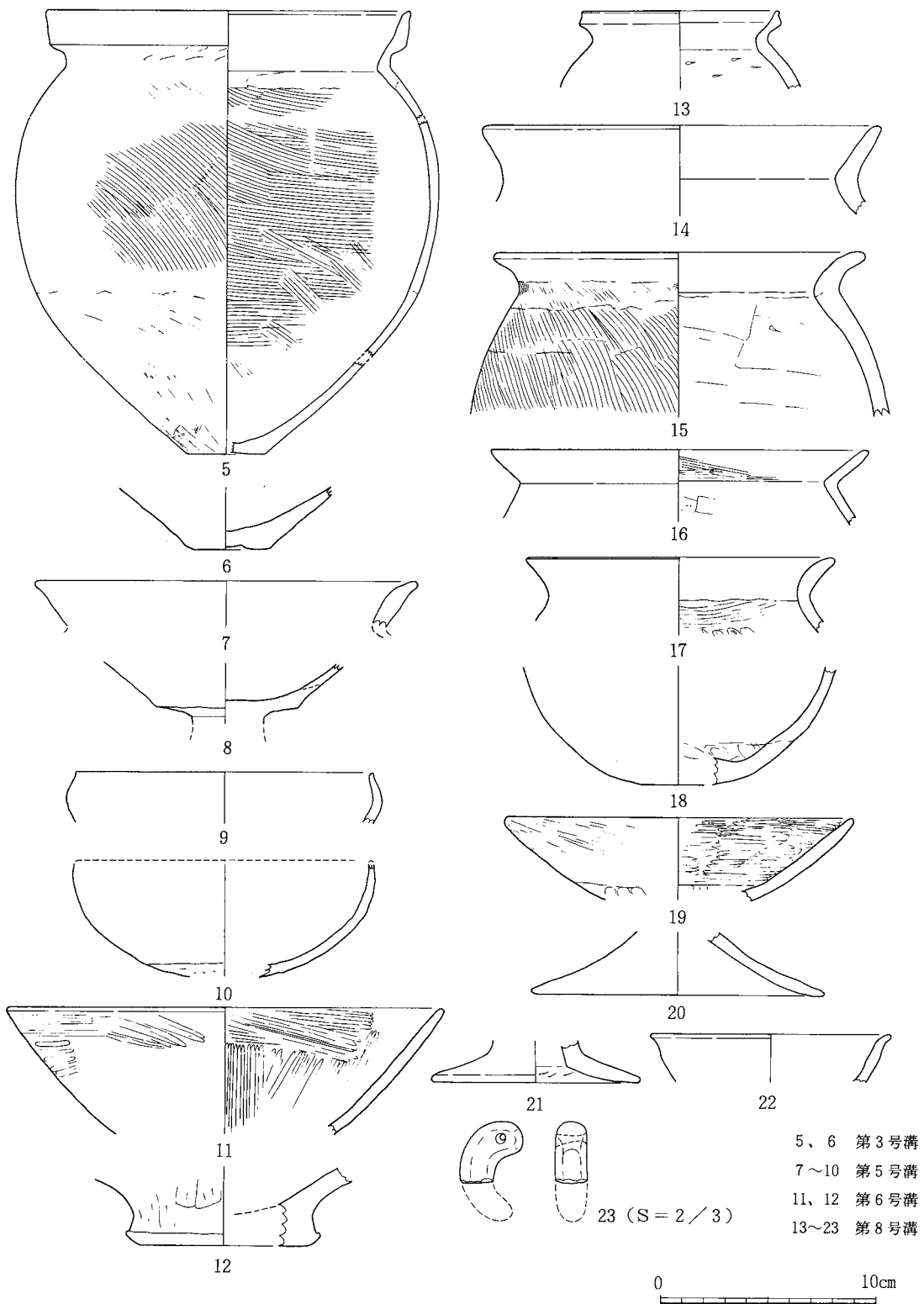
2. 溝出土遺物（第8図）

第3号溝は覆土より遺物が出土した。5は在地系の土師器有段口縁の甕である。口縁端部は内傾して面を取る。胴部内外面ともにハケ調整をおこない、外面下半にケズリ調整を加える。6は土師器壺底部と思われる。底部外側が凹み、輪状に呈する。

5号溝覆土出土遺物のうち7は土師器甕である。口径18.0cmを測り、口縁端部をやや外反させる。8は土師器高杯で浅黄橙色を呈する。杯部は大きく外側に開く。9、10は土師器碗である。



第7図 Nトレンチ第1、2号竪穴住居跡出土遺物実測図（S=1/3）



5、6 第3号溝
 7~10 第5号溝
 11、12 第6号溝
 13~23 第8号溝

23 (S = 2 / 3)

0 10cm

第8図 Nトレンチ溝出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

9は口径13.8cmを測る。10は底部外面にケズリ調整を施す。8を除きⅡ期に位置づけられる。

第6号溝覆土出土遺物のうち11は土師器高杯である。浅黄茶色を呈し、内外面ともにミガキ調整を施す。また外面の一部に明橙色の化粧土が塗付される。12は土師器壺底部である。底部やや台状を呈し、外面に板状工具によりタテ方向のナデ調整をおこなう。外面に煤付着。

第8号溝覆土出土遺物のうち13は土師器小型壺である。明橙色を呈し、口径8.8cmを測る。口縁端部を上方につまみあげる。14～18は土師器甕である。14はにぶい橙色を呈し、胎土中に海綿骨針を含む。15の胴部外面は粗いハケ調整、内面はケズリ調整を施す。16の頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に外側に開く。17は胴部内面ハケ調整の後、ケズリ調整を加える。18は底部で、外面に煤が付着している。19～21は土師器高杯である。19は口径16.2cmを測り、内外面ともにミガキ調整をおこなう。胎土中に海綿骨針を含む。22は土師器碗である。口径11.2cmを測り、口縁部やや外反する。23は透明感のある白色を呈した勾玉である。石材は玉髓と考えられる。口径約1.5mmの孔を片側から穿つ。13、19、20はⅠ期、その他はⅡ期と考えられる。

3. 土坑出土遺物（第9～11図）

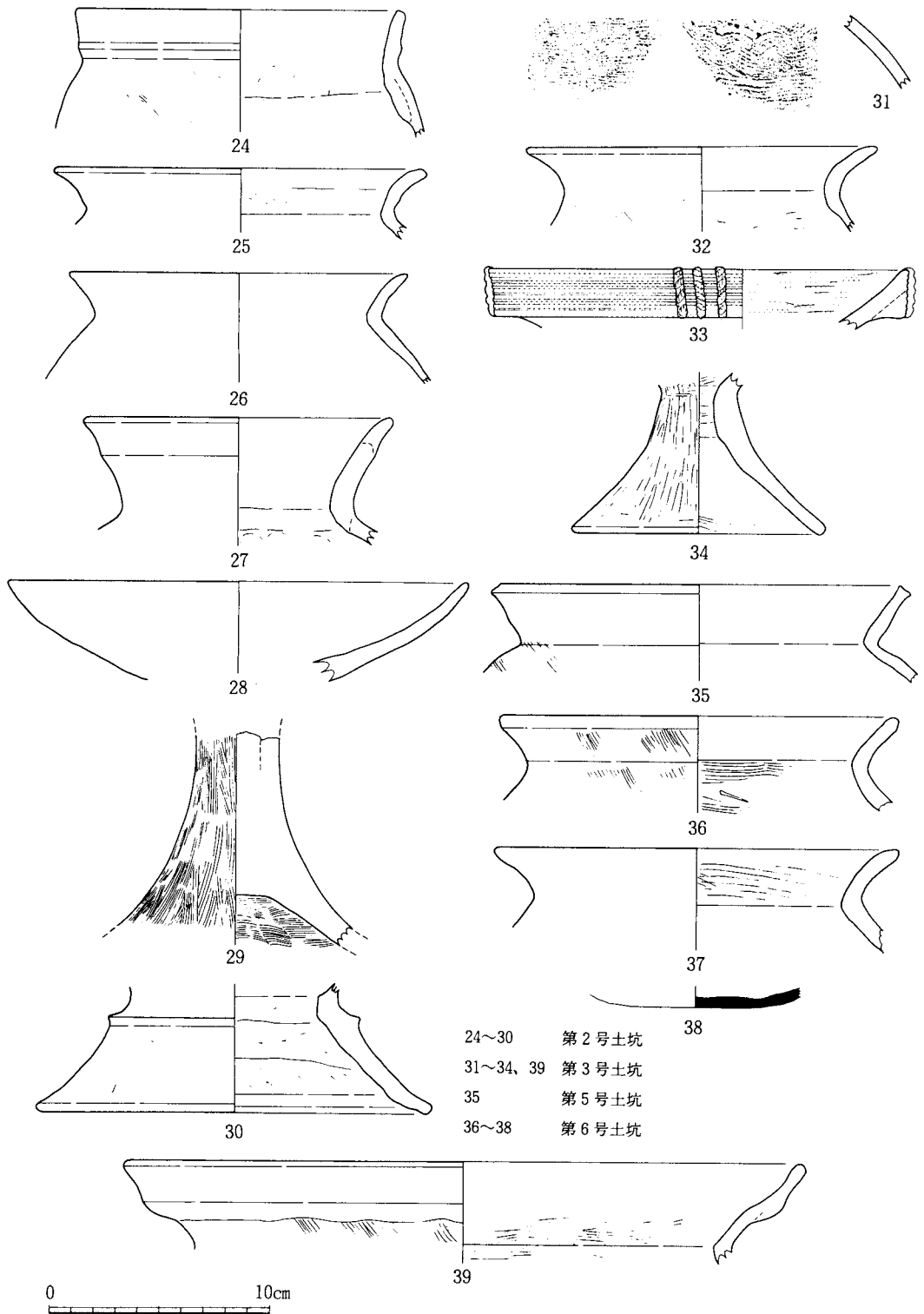
第2号土坑覆土出土遺物のうち24～26は土師器甕である。24は口縁部下端が有段口縁状にやや肥厚する。胎土中に海綿骨針を含む。25は口径16.8cmを測る。口縁部内面にハケ調整を施す。26は口径15.4cmを測る。外面に煤付着。27は土師器壺である。口径13.7cmを測り、口縁部中位で器壁がやや厚くなる。胎土中に海綿骨針を含む。28は土師器高杯である。赤橙色を呈し、体部内湾気味にたちあがる。胎土中に海綿骨針を含む。29はにぶい橙色を呈した土師器であり、支脚または甕類把手と考えられる。図では支脚として表現した。やや崩れた六角形に面取りされ、内外面にハケ調整を施す。全体に火を受けた痕跡が残り、胎土は粗い砂粒を多く含む。30は土師器器台脚部で鼓形を呈する。裾部上端にしっかりとした稜がめぐる。外面ヨコナデ調整の後タテ方向にミガキ調整を装飾的に加える。また内面に3工程に分けたケズリ調整を施す。27、28、30はⅠ期に、他はⅡ期に位置づけられる。

第3号土坑覆土出土遺物のうち31は土師器壺である。外面に波状文、内面にヨコハケ調整を施す。32は土師器甕で口縁部はゆるやかに外反する。33は東海系の土師器壺口縁部である。淡橙色を呈し、口径約19cmを測る。外面に7本1単位の擬凹線を施した後、3本1単位の棒状浮文を貼りつける。また棒状浮文に板状工具で交互に施文をおこなう。内面はミガキ調整である。34は土師器器台である。裾部はなだらかに開き、裾端部を平坦に仕上げる。39は土師器有段口縁の甕である。口径30.5cmを測る。口縁部はゆるやかに外傾し、端部を丸くおさめる。いずれもⅠ期に位置づけられる。

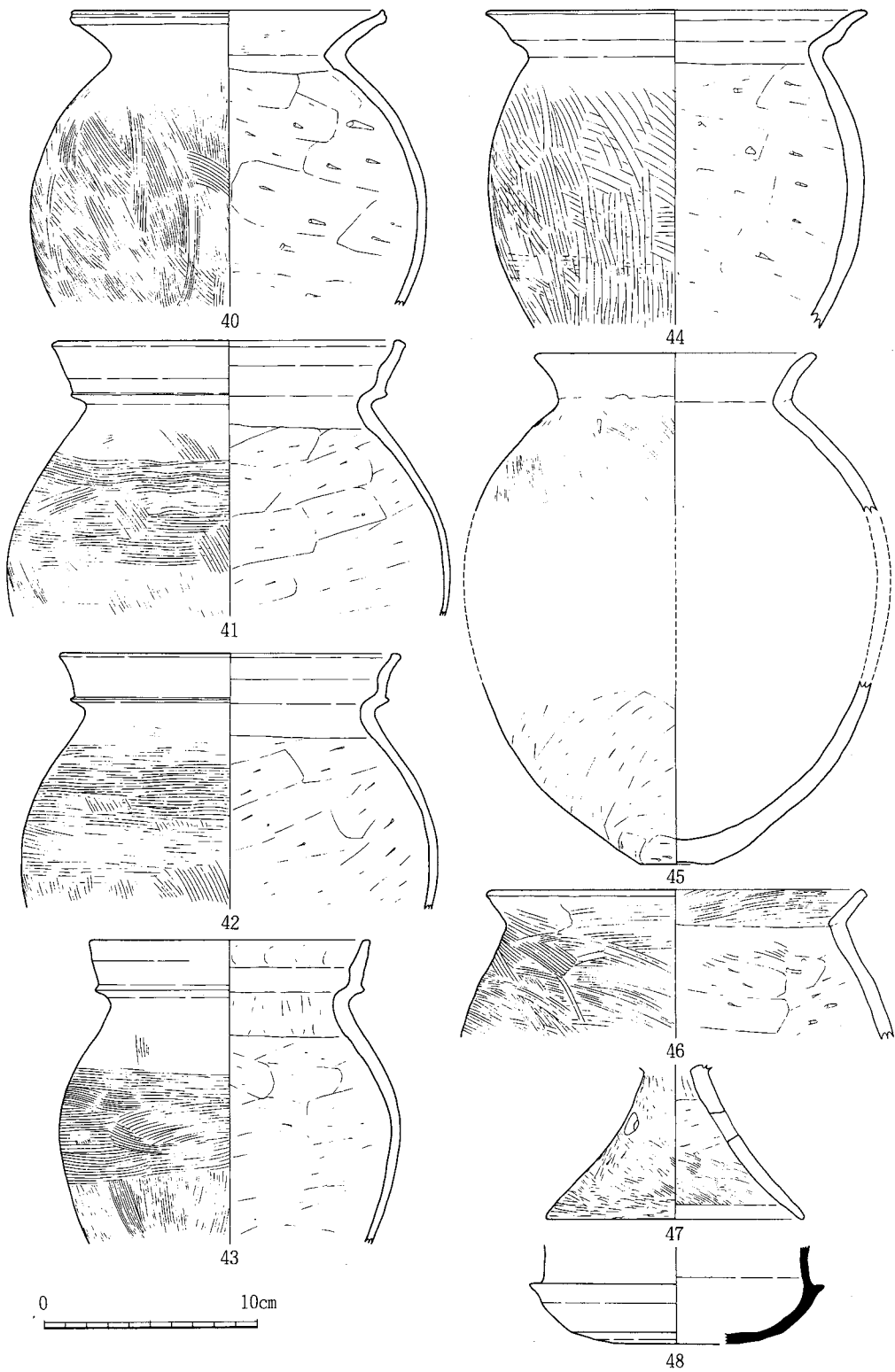
第5号土坑覆土出土遺物35は土師器甕である。口径18.2cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。

第6号土坑覆土出土遺物36、37は土師器甕である。36は口径17.6cmを測る。口縁部はやや内側に肥厚し、端部を丸く仕上げる。胴部外面ハケ調整、内面ケズリ調整を施す。37はにぶい灰黄色を呈し、口径18.2cmを測る。口縁部内面に粗いハケ調整を施す。38は須恵器杯身である。底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。いずれもⅡ期に位置づけられる。

第7号土坑覆土出土遺物のうち、40～46および49は土師器甕である。40は口縁端部を上方に小



第9図 Nトレンチ土坑出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



第10図 Nトレンチ第7号土坑出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

さくつまみあげ、外側に狭い口縁帯をつくる。胴部外面はタテ方向のハケ調整、内面はケズリ調整をおこなう。胎土中に海綿骨針を含む。41～43および49は有段口縁の甕で近似した形態をとる。いずれも口縁部外面下端にしっかりとした稜をもち、口縁部中程で内側が肥厚する。また胴部外面はタテ方向ハケ調整の後、上半部にヨコ方向ハケ調整を加える。内面はケズリ調整である。口径は41で16.2cm、42で15.8cm、43で13.0cm、49で20.8cmを測る。44は有段口縁状の甕で口縁部は大きく外側に開く。45はくの字の甕で口径15.4cmを測る。胎土中に海綿骨針を含む。46の頸部は明瞭に屈曲し、口縁端部を平坦に仕上げる。口縁部内面および胴部外面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整が残る。胎土中に海綿骨針を含む。47は土師器器台脚部である。なだらかに開く脚部の三方に穿孔をおこなう。外面ミガキ調整、内面ハケ調整を施す。48は須恵器杯身で口縁部たちあがり内傾気味である。また受け部端部は面取りがしっかりとしている。在地産と考えられ、MT-15型式伴行期に位置づけられる。本土坑出土遺物は後世の混入の可能性をもつ46と48を除き、一括性をもつⅠ期の良好な資料と考えられる。

4. ピット、窪地出土遺物（第11図）

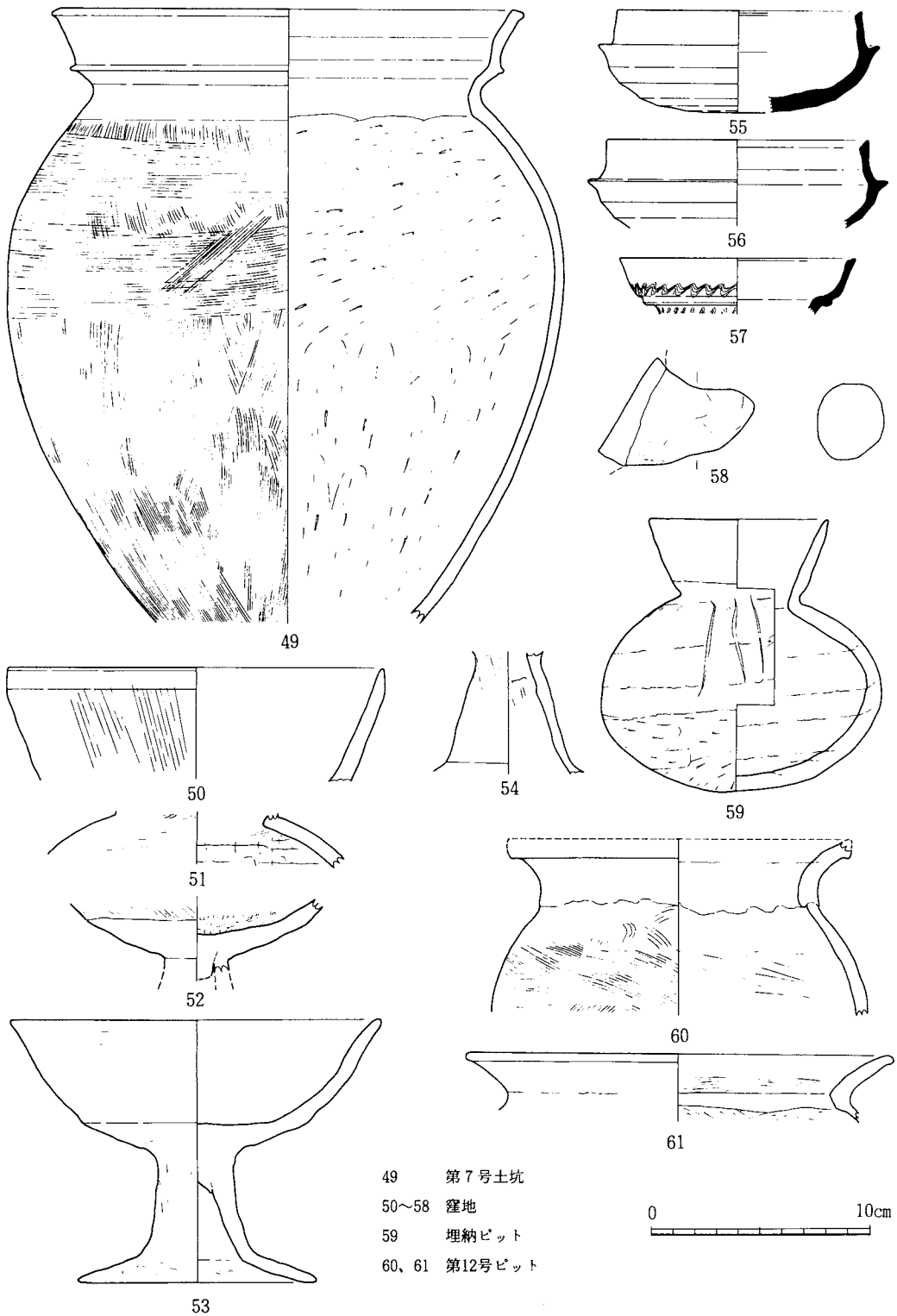
窪地では自然堆積したと考えられる覆土より遺物が出土している。50は土師器壺である。口縁部外面にナデ調整を施し、端部は先細りで直立する。51も土師器壺であり、球胴形を呈すると考えられる。内面に粘土紐の積み上げ痕が残る。52～54は土師器高杯である。52は内面に粗いミガキ調整を施す。53は口径17.0cm、器高12.2cmを測る。坏底部と体部の境は不明瞭に屈曲する。体部は内湾しながらたちあがり、口縁部やや外反する。54はにぶい橙色を呈し、胎土中に海綿骨針を含む。55、56は須恵器杯身である。55で口径11.0cm、器高4.7cm、56で口径11.8cmを測る。口縁部はやや内傾し直線的にのびる。各部の面取りはしっかりとしている。底部外面 $\frac{3}{4}$ 以上に回転ケズリ調整を施す。在地産と考えられ、MT-15型式伴行期に位置づけられる。57は須恵器甕である。口径10.8cmを測り、外面に波状文を施す。陶邑産と考えられる。58は土師器把手である。にぶい黄灰色を呈し、胎土中に少量の海綿骨針を含む。

埋納ピット出土遺物59は土師器小型壺で、正位に置かれたような状態で出土した。口径8.0cm、器高12.8cmを測り、口縁部は直線的にのびる。胴部上半にタテ方向の線刻が3本認められる。Ⅱ期に位置づけられる。

第12号ピット覆土出土遺物60、61は土師器甕である。60の口縁部は上方にのび、外端に狭い口縁帯をもつ。61の口縁部は大きく外側に開き、端部を丸く仕上げる。胴部内面にケズリ調整を施す。いずれもⅠ期と考えられる。

5. 包含層出土遺物（第12～14図）

62は有段口縁の甕である。口縁部は直立し、外面に2本1単位の擬凹線を2単位施す。口縁部内側にヨコハケ状のヨコ方向ナデ調整をおこなう。63は土師器甕で口径19.6cmを測る。内側にわずかに指頭圧痕が残る。64・66～70も土師器甕である。64の口縁部直立し、外側に幅約1.5cmの口縁帯をつくる。胴部内面にケズリ調整を施す。66は小片のため傾きに不安があり、もう少し外傾する可能性をもつ。67は口径18.0cmを測る。口縁部内側に粗いハケ調整をおこなう。68の口縁部は内側に少し肥厚し、端部を丸くおさめる。69の胴部が張らない。口縁部は外側に短く屈曲、端

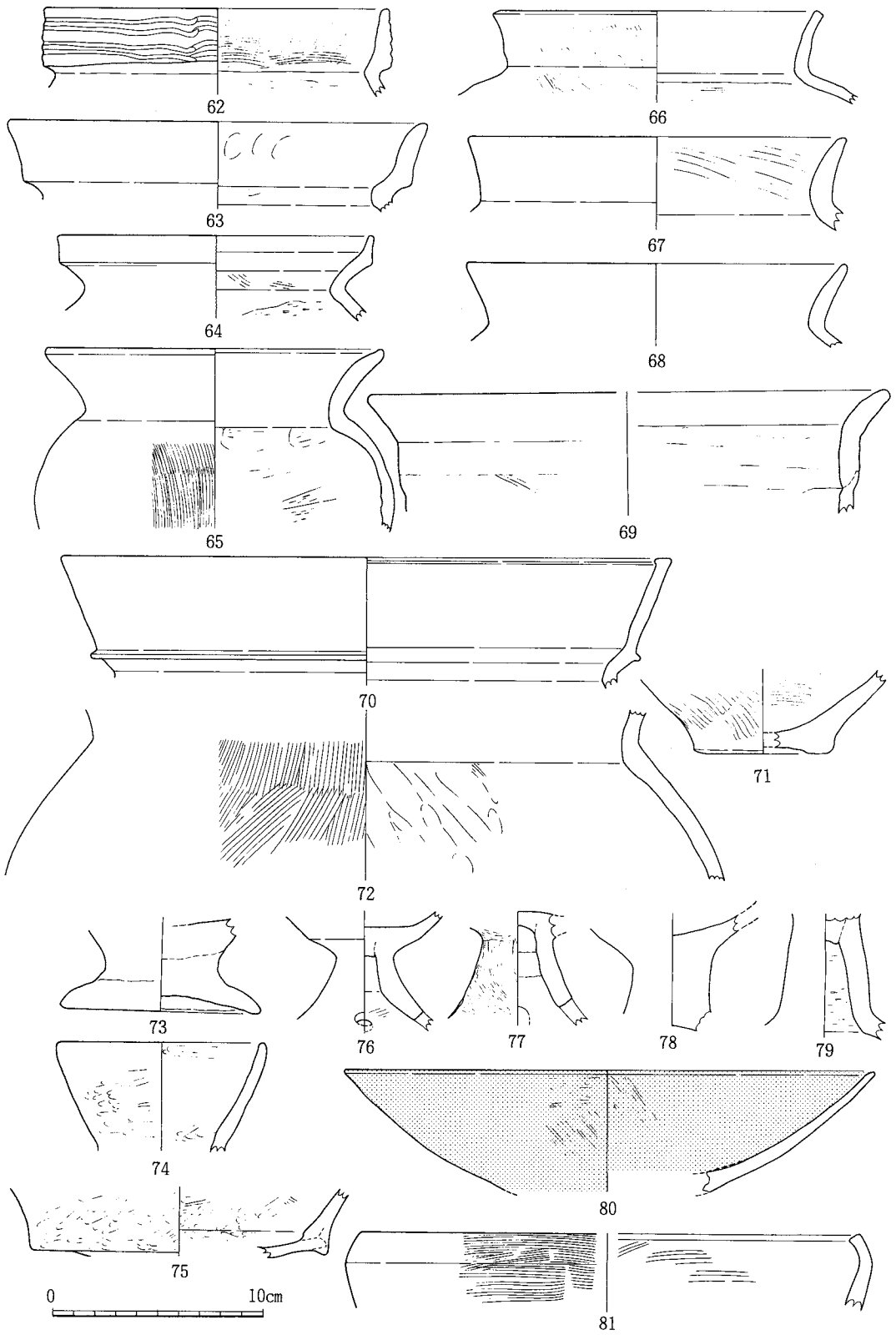


第11図 Nトレンチ窪地、ピット等出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

部を丸くおさめる。頸部内面にヨコ方向の指ナデ痕が残る。70は有段口縁の甕である。口径約39cmを測る。各部の面取りはしっかりとしている。65は球胴形を呈する土師器壺である。口縁端部は内側に肥大し、端部を丸く仕上げる。胴部外面に細かいハケ調整、内面にケズリ調整を施す。71は土師器壺底部と考えられる。底部外面中心部がやや凹み、輪状を呈する。72は土師器甕頸部である。胴部外面はハケ調整、内面はハケ調整の後、タテ方向指ナデ調整を加える。73は土師器壺または鉢の台部と考えられる。淡橙色を呈し、調整不明。74は土師器壺である。口縁部やや内湾し、端部を丸く仕上げる。内外面ともにミガキ調整を施す。75～80は土師器高杯である。75は内外面ともにミガキ調整を施す。胎土中に海綿骨針を含む。76は脚部四方に穿孔をおこなう。77も脚部四方に穿孔をおこない、外面にミガキ調整を施す。78は明橙色を呈し、胎土中に焼土粒を含む。79は胎土中に海綿骨針を含む。80は赤彩され、口径25.2cmを測る。81は土師器鉢で口径約24cmを測る。口縁部内湾し、端部を平坦に仕上げる。内外面ハケ調整を施す。鹿首モリガフチ遺跡に類例がみられる。82は土師器碗である。内面ミガキ調整を施す。83～86は須恵杯身である。83は背が高く、口径11.8cm、器高5.1cmを測る。口縁部と天井部の境の稜を深い沈線で表現している。MT-15型式に位置づけられる。産地不明。84は口径12.7cmを測る。天井部と口縁部の境の稜はあまり目立たない。天井部2/3程度に回転ケズリ調整を施す。MT-15型式伴行期に位置づけられ、産地不明。86の天井部にヘラ記号「/」が認められる。南加賀産と考えられる。88～91は須恵器杯身である。88は口径11.9cm、器高5.0cmを測る。口縁部たちあがり内傾し、端部内側で面を取る。受け部端部は丸くつくる。MT-15型式伴行期に位置づけられ、在地産と考えられる。89は大型、扁平な器形をとる。口縁部たちあがり内傾する。外面に自然釉付着。TK-10～43型式伴行期に位置づけられ、南加賀産と考えられる。90の口縁部たちあがり内傾する。91は口径11.2を測り、端部の面取りは鋭さを欠く。TK-209型式伴行期に位置づけられる。92は須恵器有蓋高杯脚部。脚端部は丸味を帯び、全体にシャープさを欠く。陶邑産と思われる。93は須恵器甕である。4本1単位の波状文を施す。92と同時期に位置づけられ、陶邑産と思われる。94は無蓋高杯杯部である。径不明。92と同時期に位置づけられ、陶邑産と思われる。95は須恵器甕で口径19.7を測る。複合口縁状に肥厚し、端部を上方につまみあげる。南加賀産と考えられる。96は須恵器瓶類。口径12.8cmを測り、口縁部を丸く仕上げる。南加賀産と考えられる。97は瀬戸・美濃の灰釉皿である。98は土師器把手であり、胎土より15につく可能性をもつ。99は軽石で片面が摩耗し、砥石に利用されたと考えられる。長軸6.2cm、短軸4.6cm、厚さ3.2cmを測る。100～102は土師質の土錘である。100は長さ5.4cm、径4.5cmを測る。101は長さ5.6cm、径3.4cm、重さ51gを測り、線刻が認められる。102は細身で長さ5.4cm、径2.1cm、重さ19gを測る。103は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで、内面の同心円タタキには原体に亀裂が生じたためか、中心を通る幅約2mmのキズが入る。104は淡緑色のヒスイ製の匂玉で明緑色を呈する。

6. 北陸自動車道路関係分布調査出土遺物 (第16図)

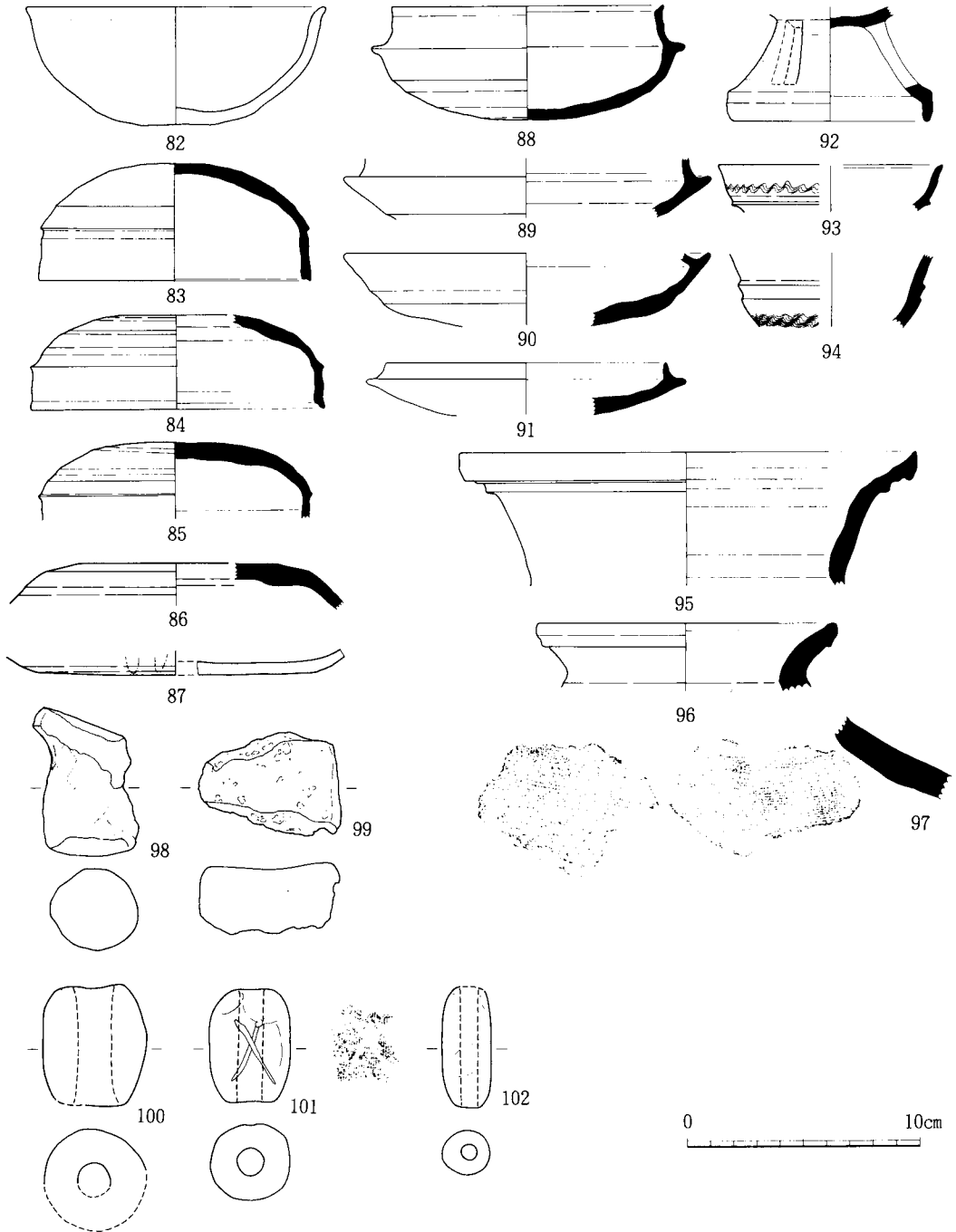
昭和44年秋、北陸自動車道路建設に係わる分布調査の一環として県教育委員会が本調査区Nトレンチ北側の近接した地点、3ヶ所で試掘調査を実施している¹⁰⁾。試掘トレンチはAトレンチ(2×10m)、Bトレンチ(2×10m)、Cトレンチ(2×30m)の3本が設定され、いずれも明確な



第12図 Nトレンチ包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)

遺構は検出されていない。試掘調査地点および出土遺物より本遺跡の一部と考えられるため、出土遺物について若干述べる。いずれも地表下20~30cmの粘土質の褐色土中から出土した。

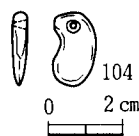
105・106は土師器甕である。頸部から口縁部外面はタテハケ調整の後、ヨコ方向のナデ調整を施す。口縁端部は平坦に仕上げる。106は口縁部やや外反し、端部を丸くおさめる。口縁部外面の



第13図 Nトレンチ包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)



第14図 Nトレンチ包含層出土遺物実測図 (S = 1 / 4)



第15図 Nトレンチ包含層出土遺物実測図 (S = 1 / 2)

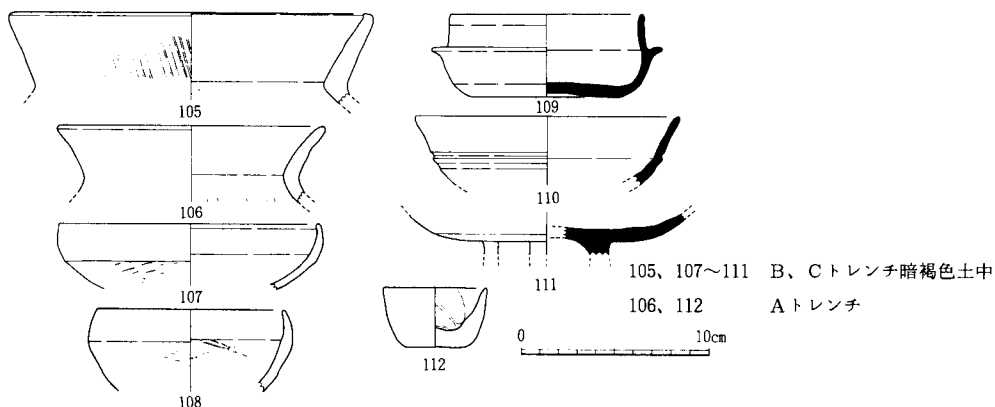
煤の幅は約2.5cmを測る。107・108は土師器碗である。107の体部外面下半にケズリ調整を加える。108は体部外面に粗いハケ調整を施す。109は須恵器坏身で口径10.2cm、器高4.4cmを測る。体部下半から底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施す。器壁は薄く、口縁部はやや内傾しながら端部を丸くおさめる。

陶邑産と考えられ、TK-47型式伴行期に位置づけて大過ないと思われる。110は須恵器無蓋高杯。坏部外面は文様をもたず、沈線により稜を表現する。胎土より南加賀産と考えられ、MT-15型式併行期に位置づけられる。111は須恵器高杯で脚部三方にスカンが入ると考えられる。産地不明。112はコップ状を呈する手づくね土器である。

第4節 Sトレンチ (東相川遺跡、第17~19図)

第2節で述べたとおりSトレンチは調査区南側に位置する東相川遺跡の一部と考えられる。調査区は排水路予定地に南北の長さ約43m、幅約2mで設定し、南側からS1~S5区に区割をおこなっている。また主軸は排水路主軸線と一致し、方位はN-26°-Wをとる。周囲の地形は南側および東側が高く(現水田面で標高7.0~7.4m)、いわゆる島状地形にあたり、北側および西側にむかってゆるやかに傾斜している。

基本土層層序は上層より第1層耕作土、第2層淡茶灰色粘質土(床土か)、第3層暗茶灰色粘質



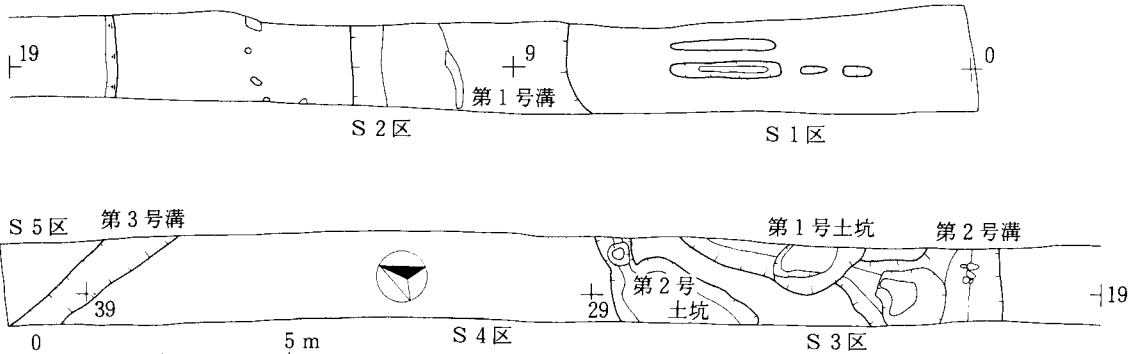
第16図 北陸自動車道関連分調出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

土（旧耕土）、第4層暗灰色粘質土（包含層）、第5層黄灰色粘質土（地山）となる。またS2区付近から北側に地山面がゆるやかに下がり、第3層と第4層の間に暗灰色～灰白色の粘質土が自然堆積する。

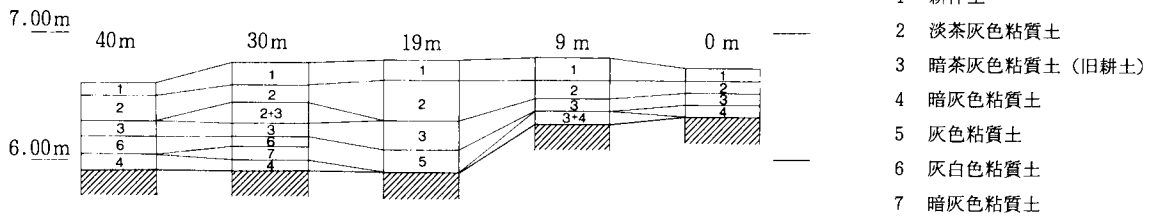
1. 遺構

検出された遺構は溝3条、土坑2基であり、集落周辺部の様相を呈する。

溝 第1号溝は東西方向に流れ、東壁で幅4.30cm、深さ0.5mを測る。覆土は上層より、暗灰色粘質土、黒色粘質土、暗緑灰色粘質土（植物遺体、水苔を含む）となり、起点から10.50mの地点でそれぞれ26cm、17cm、8cmの厚さを測る。いずれも自然に堆積したと考えられ、第2号溝とはほぼ同じ時期に機能し、のち自然廃絶したようだ。また溝底部より自然木が出土している。第2号溝はT字状に二又に分かれている。深さは25～30cmを測り、覆土は暗灰色粘質土が自然堆積している。覆土底近くより円石とともに15世紀前半に位置づけられる白磁皿が出土した。第3号溝は



第17図 Sトレンチ遺構実測図 (S = 1/50)



第18図 Sトレンチ土層断面実測図（東壁）



第19図 Sトレンチ出土遺物実測図 (S = 1/3)

幅60～80cm、深さ約8cmを測る。覆土は暗灰色粘質土である。時期不明。

土坑 第1号土坑は第2号溝を切って地山面まで掘られる。崩れた円形を呈し、径約1.4m、深さ約40cmを測る。底面は起伏が激しく、覆土は粗い褐色砂である。出土遺物はないものの、第2号溝廃絶後掘られ、覆土も他の遺構と大きく異なるため、かなり新しい時代のものと考えられる。第2号土坑は第2号溝に平行するように掘られる。長軸2.5m以上、短軸1.6m以上、深さ16cmを測る。底面は平坦で覆土は植物遺体を含む暗灰色粘質土である。北側より幅20～30cm、深さ約10cmの溝が流れこむ。出土遺物なし。

2. 遺物

113は第2号溝覆土より出土した白磁皿である。台径4.4cmを測り、底部内面に目痕が残る。15世紀前半を中心とした時期に位置づけられる。114～116は包含層より出土した。114は須恵器杯で灰白色を呈し、摩耗が著しい、底部と体部の境は明瞭で、体部は外側に開くと考えられる。平安時代前期に位置づけられる。115は須恵器甕底部。径約12cmの円形の焼き台の上で焼成された痕跡が残る。南加賀産と考えられる。116は珠洲片口鉢で13世紀に位置づけられる。

第5節 小 結

今回の調査のうちNトレンチで検出された遺構はⅠ期（古墳時代前期前葉）、Ⅱ期（古墳時代後期）、Ⅲ期（中世以降）に分けられる。Ⅰ期は後述する地形の制約から比較的小規模な集落が、短期間存在したのと考えられる。Ⅱ期は主に土坑や第2・3・5・6号溝のように平行もしくは直交する溝が検出されており、出土遺物はTK-47～TK-209型式併行期と時期幅をもち、一定期間集落が存続したようだ。またⅢ期は溝のみが検出され集落の縁辺部にあたると思われる。Ⅰ、Ⅱ期の集落の立地状況は共通性をもち、地山面が礫層に変わる1区より東側、そして地山面が急激に下がる9区より西側に遺構が集中する。すなわち地形に大きな制約を受け、扇状地のつくる微高地上、砂質土を地山とする地点に集落が形成されたと考えられる。また、その中でも4、5区のように地山面が細かい礫層に変わる部分では遺構はほとんど検出されていない。扇状地上に立地する集落の成立のあり方の一端がうかがえる。

なお今回の報告書も含めて本地域は県営は場整備事業に係わる発掘調査、分布調査が集中している。その結果、比較的限られた範囲に弥生時代中期から平安時代までの集落遺跡が地点を変えながら断続する状況が明らかとなっている。例えば昭和63年度第1調査区ではNトレンチⅡ期に先行する遺構群が、また昭和62年度調査区ではⅡ期に後続する遺構群が検出されている。また中相川地内加茂神社境内に所在する2基の小円墳²⁾はⅡ期と時期が重複し、何らかの関連が考えられる。今後、同地域全体を視野においた集落展開の研究が課題となろう。

註(1) 『北陸自動車道路関係埋蔵文化財調査概要報告書(1)』 石川県教育委員会 1969

(2) 第1章「序説」『加賀三浦遺跡の研究』 石川県教育委員会・松任町教育委員会 1967



1区全景（東より）



1区全景（西より）



1-7・8区 ピット (西より)



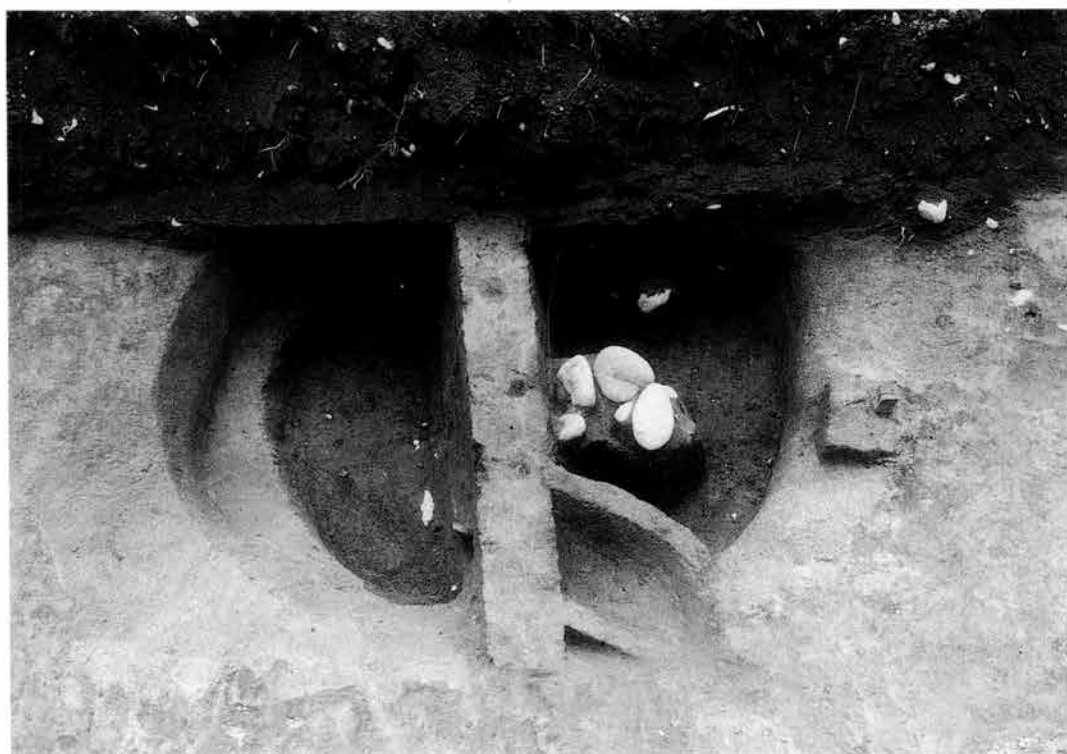
1-11区 (西より)



1-11区 3号土坑、ピット16 (北より)



1-11区 石組土坑 (西より)



1-11区 1号土坑（北より）



1-11区 1号土坑完掘（北より）



1-12・13区 (西より)



1-13区 4号土坑、1・3号溝 (北より)



I-16区 ピット (東より)



II区調査前風景 (西より)



Ⅲ区全景（東より）



Ⅲ区全景（西より）



Ⅲ-1区(東より)



Ⅲ-1区(西より)



Ⅲ-1区 土器出土状況



Ⅲ-1区 土器出土状況



Ⅲ-1区 北壁土層断面



Ⅲ-1区 土器出土状況



Ⅲ-1区 土器出土状況



Ⅲ-1区 土器出土状況



Ⅲ-5区 土器出土状況



Ⅲ-13区 溝状遺構



Ⅳ区全景（東より）



Ⅳ区全景（西より）



Ⅳ-1区 溝状遺構（東より）



Ⅳ-3区 0号土坑他（東より）



IV-21区 発掘風景



IV-21区 1・2・5号土坑(北より)



IV-22区 3号土坑（北より）



IV-22区 1号溝（北より）



Ⅳ-22区 6号土坑（北より）



Ⅳ-23区 7号土坑（南より）



N-23区 8号土坑（北より）



V区全景（西より）



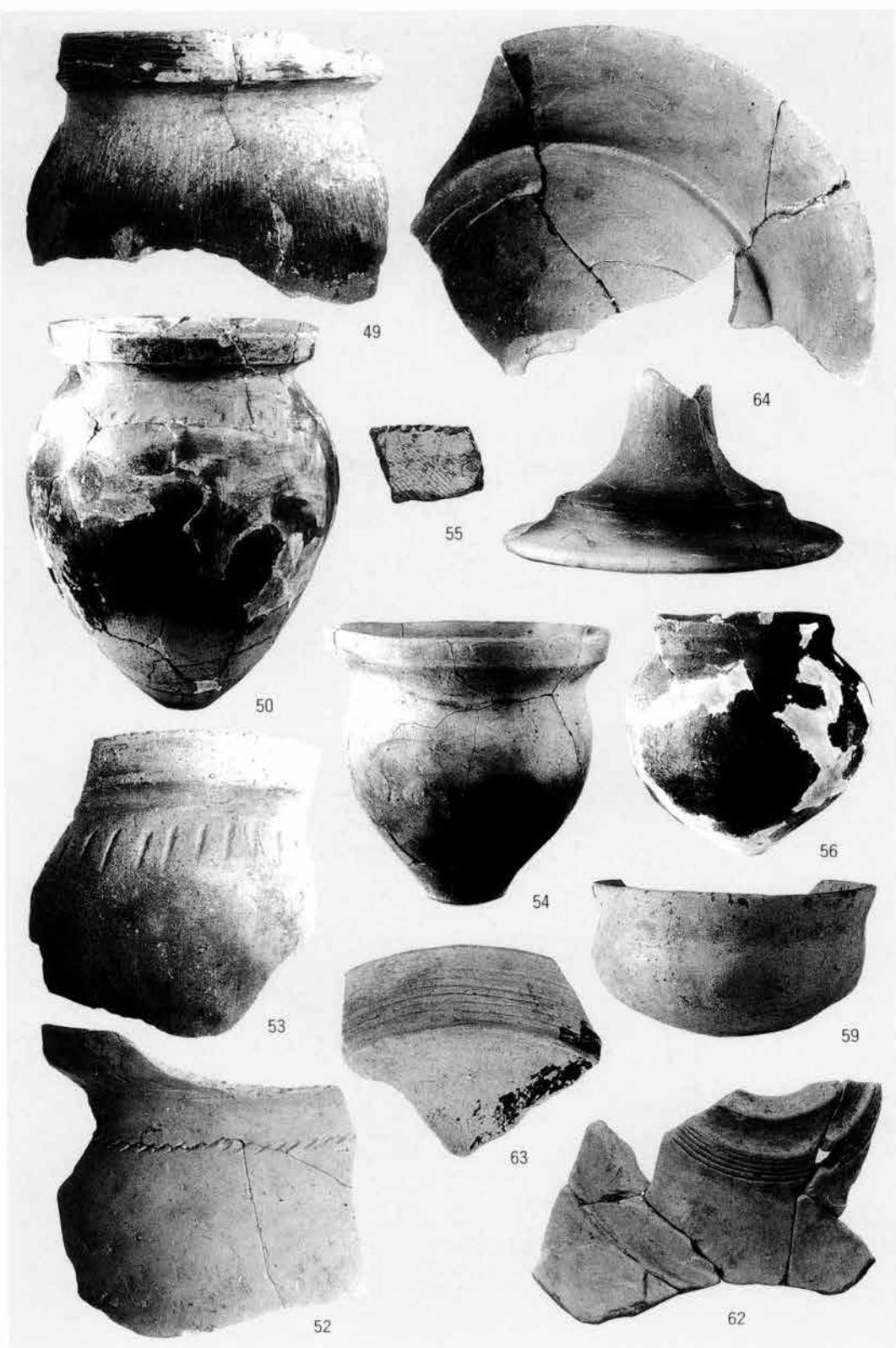
I・N区出土土器



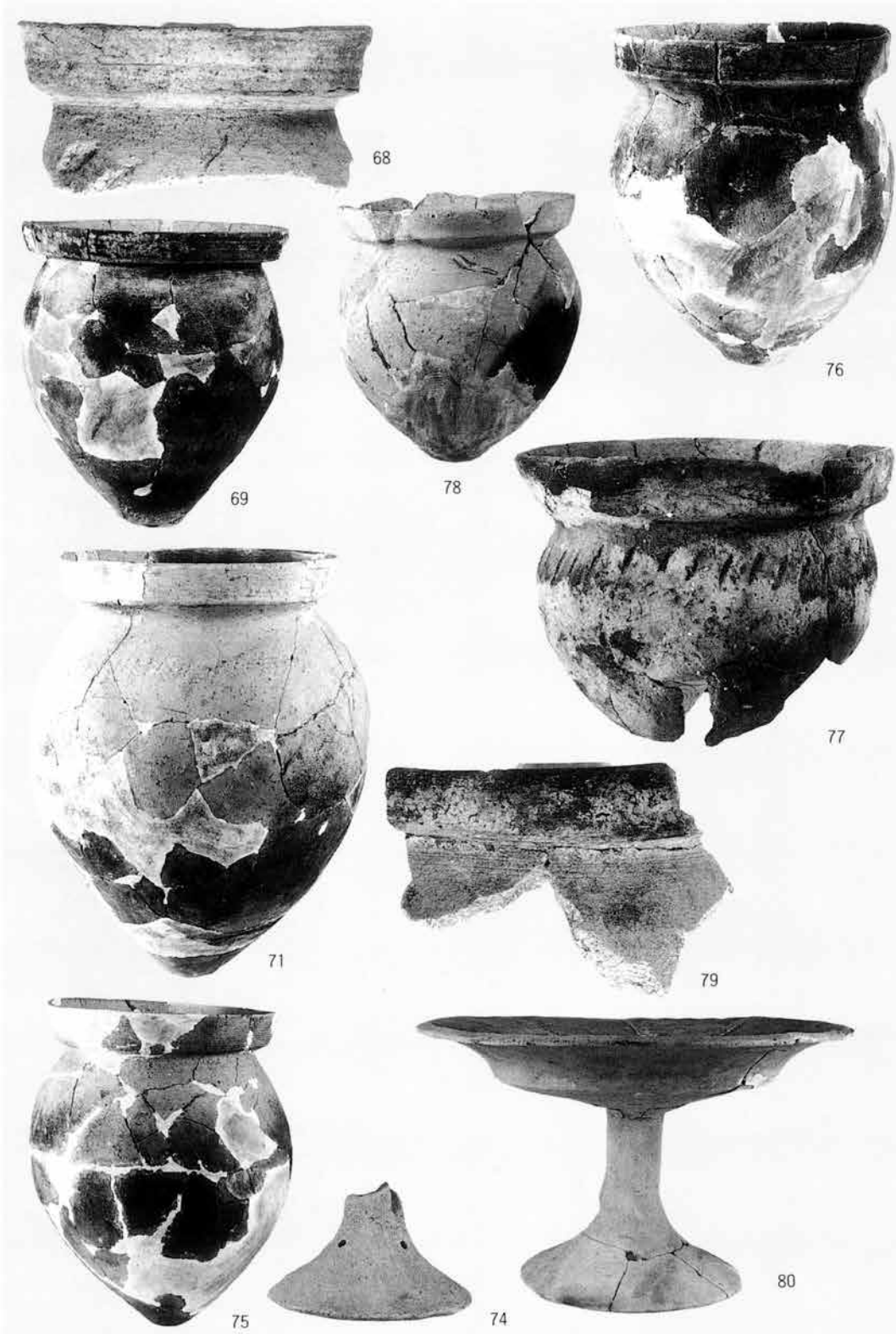
Ⅲ区出土A群土器1



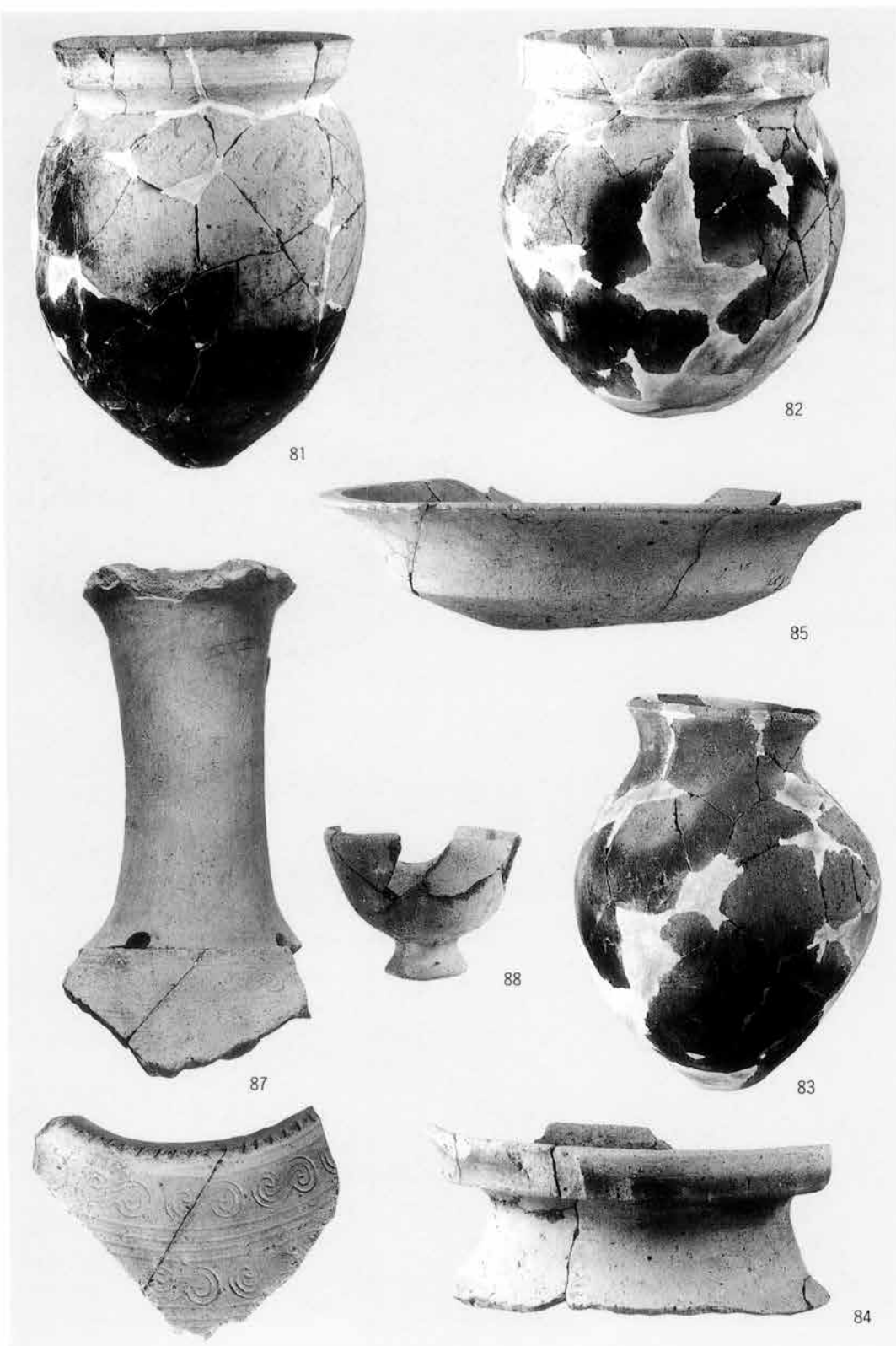
Ⅲ区出土A群土器2



Ⅲ区出土B群土器



Ⅲ区出土C群土器



Ⅲ区出土D群土器



90



91



96



94



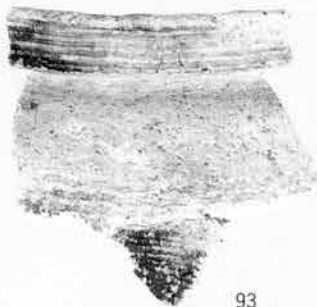
100



92

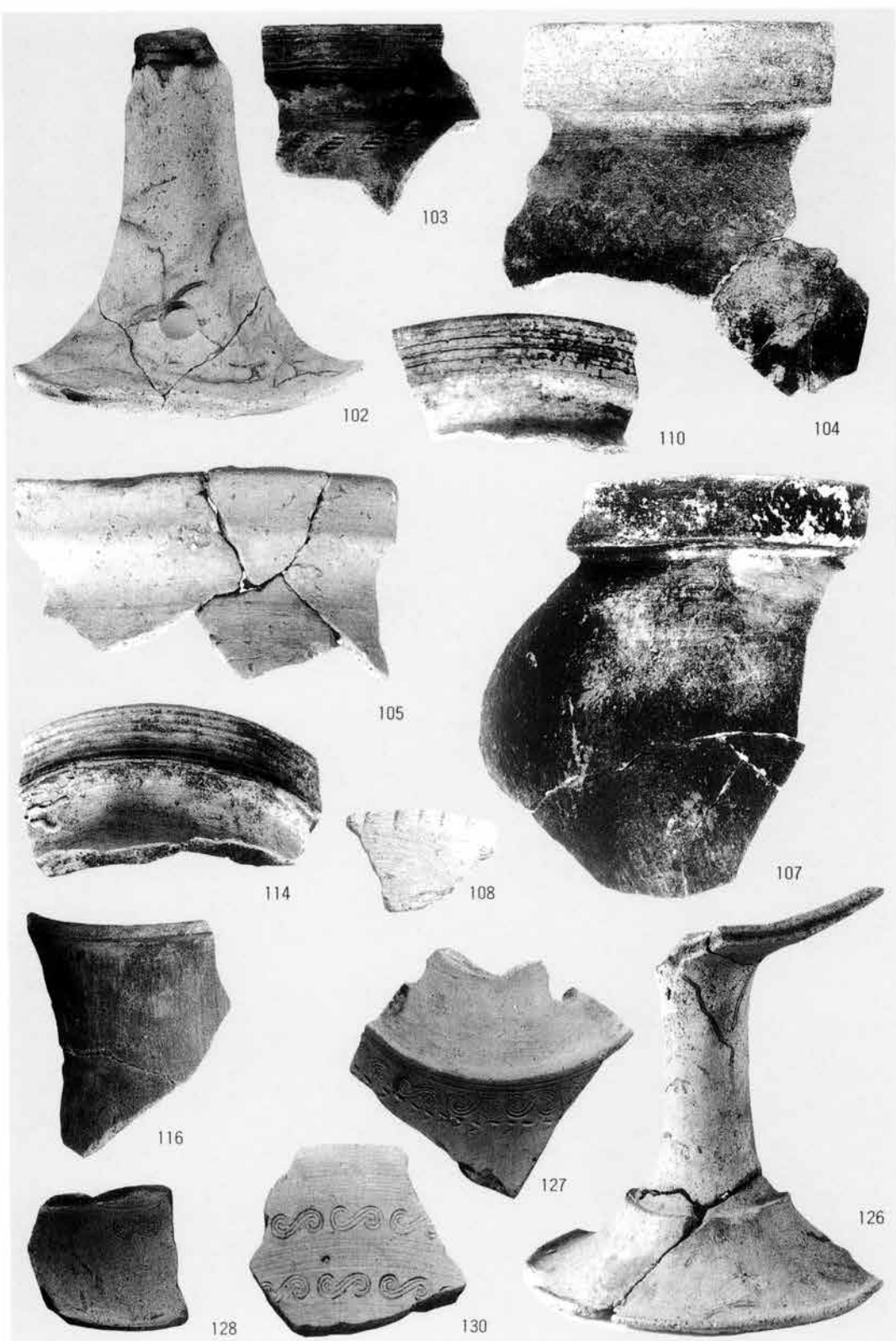


101



93

Ⅲ区出土E群土器



Ⅲ区包含層他出土土器



調査前風景（南より）



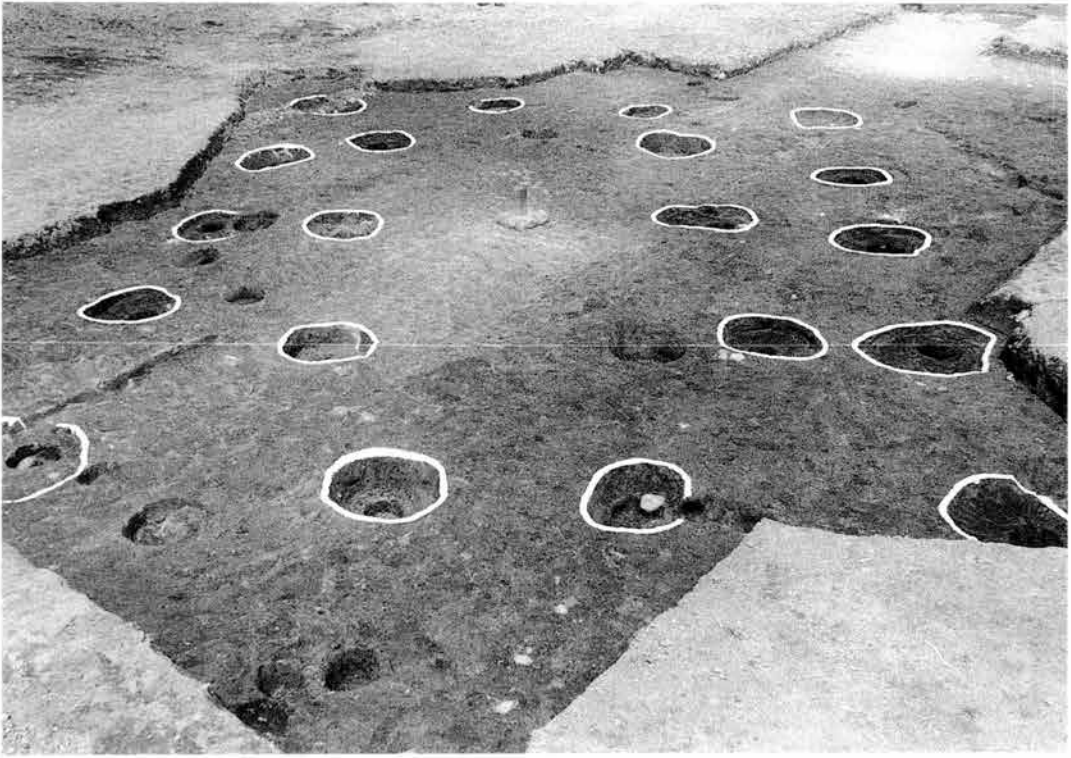
調査区全景（南より）



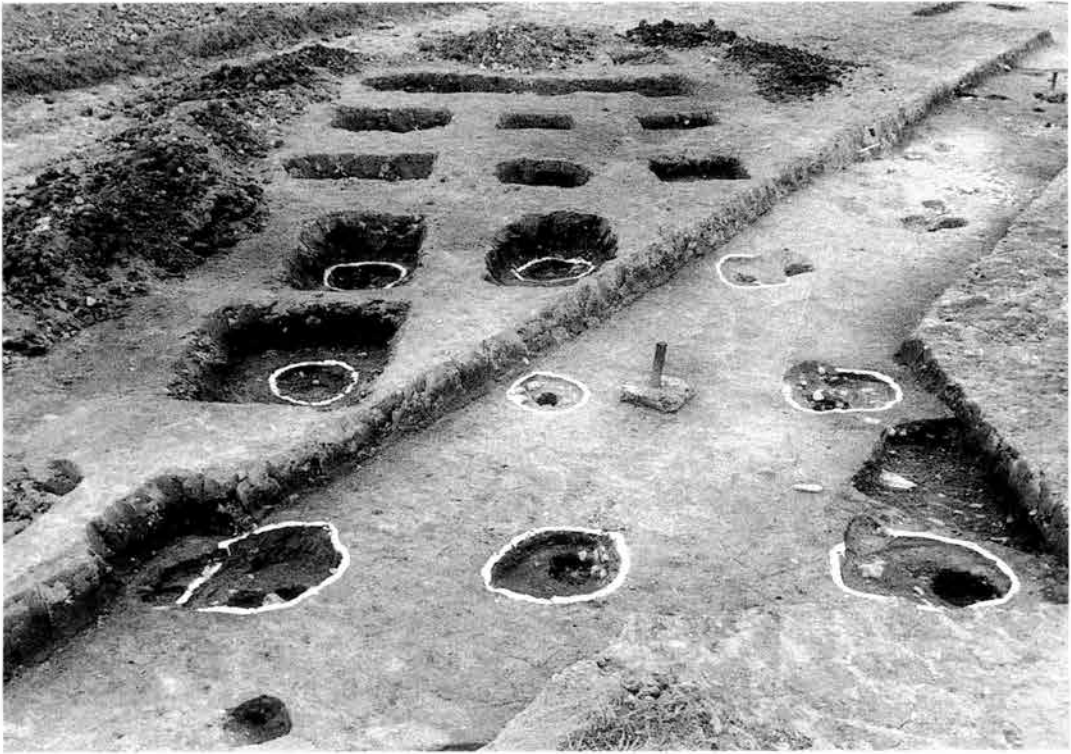
作業風景



作業風景



15・16区 1・2号建物



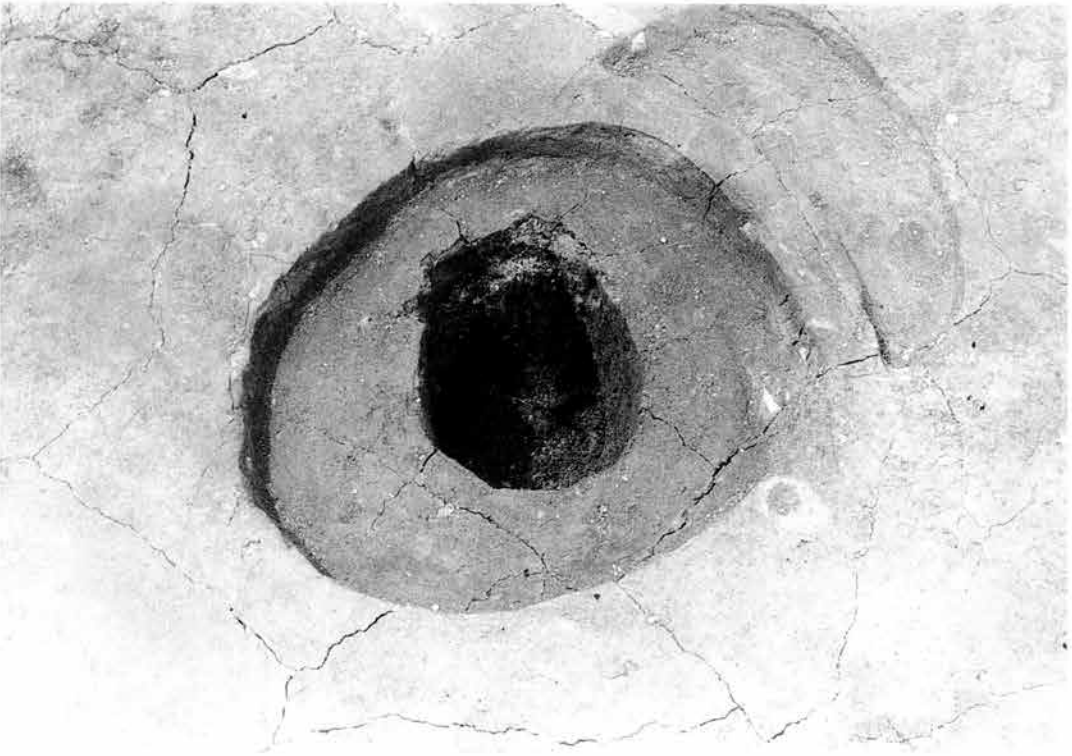
12・13区 3号建物



0区 4号建物



0区 4号建物



2号建物 ビット27



2号建物 ビット28



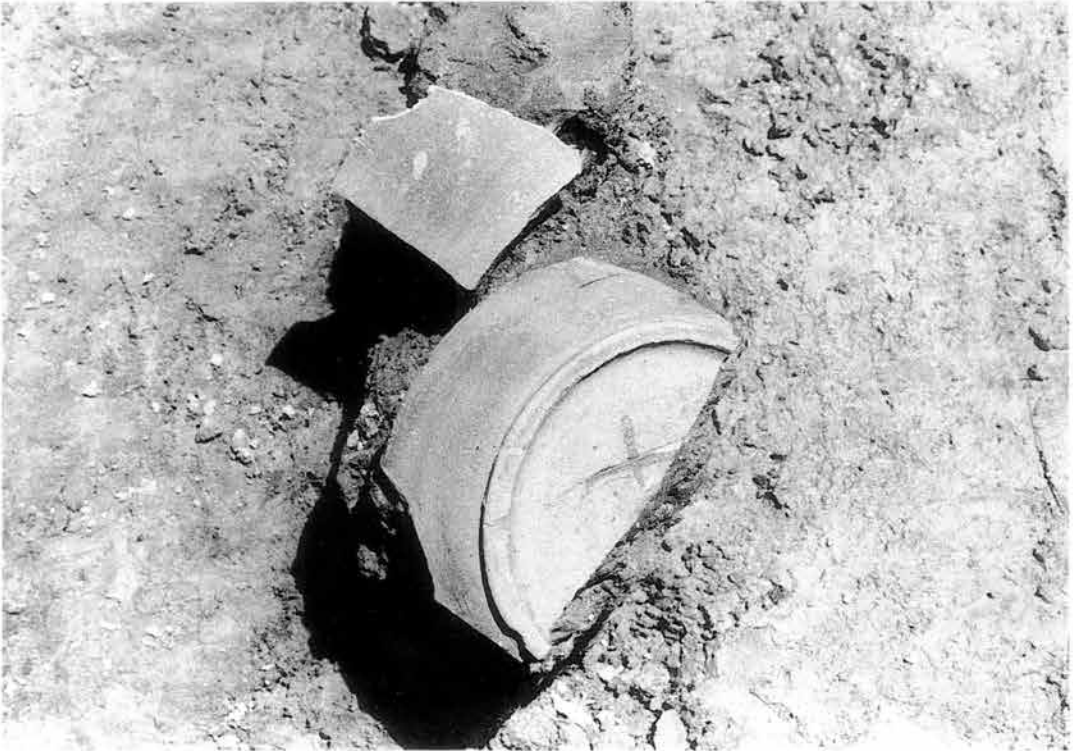
28・29区 1号溝



3区 14号溝



24区 遺物出土状況



24区 墨書土器出土状況



20区 5号溝



20区 2・3号土坑・6号溝



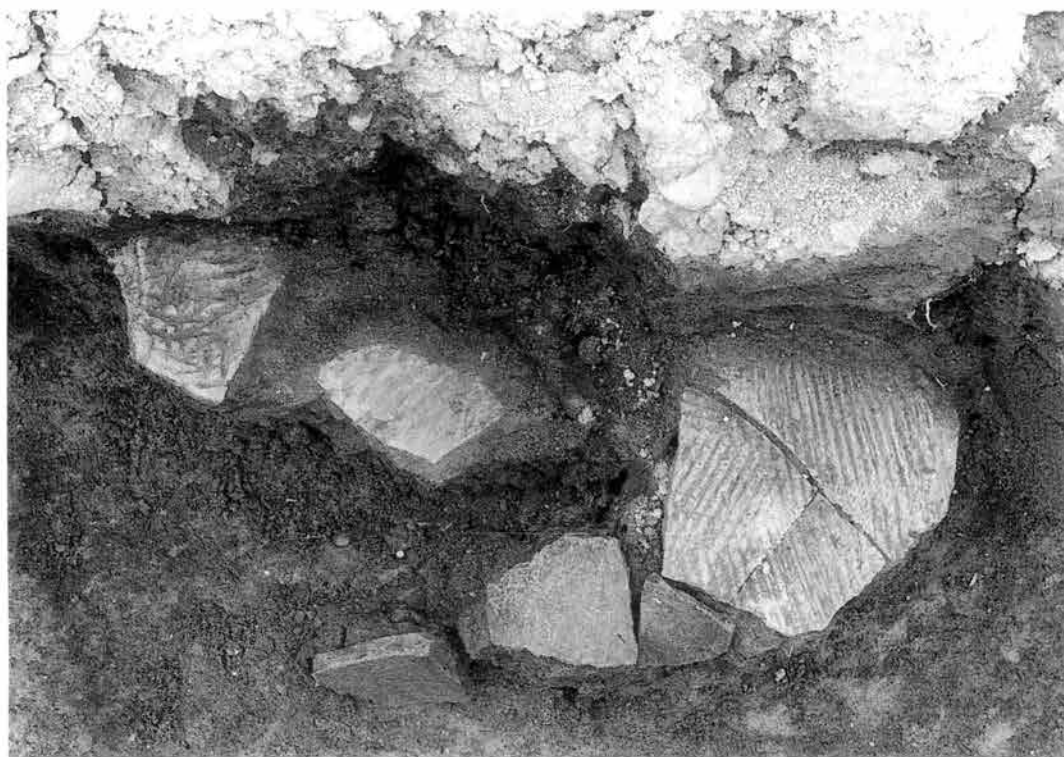
16区 4・5号土坑



16区 ヒット6



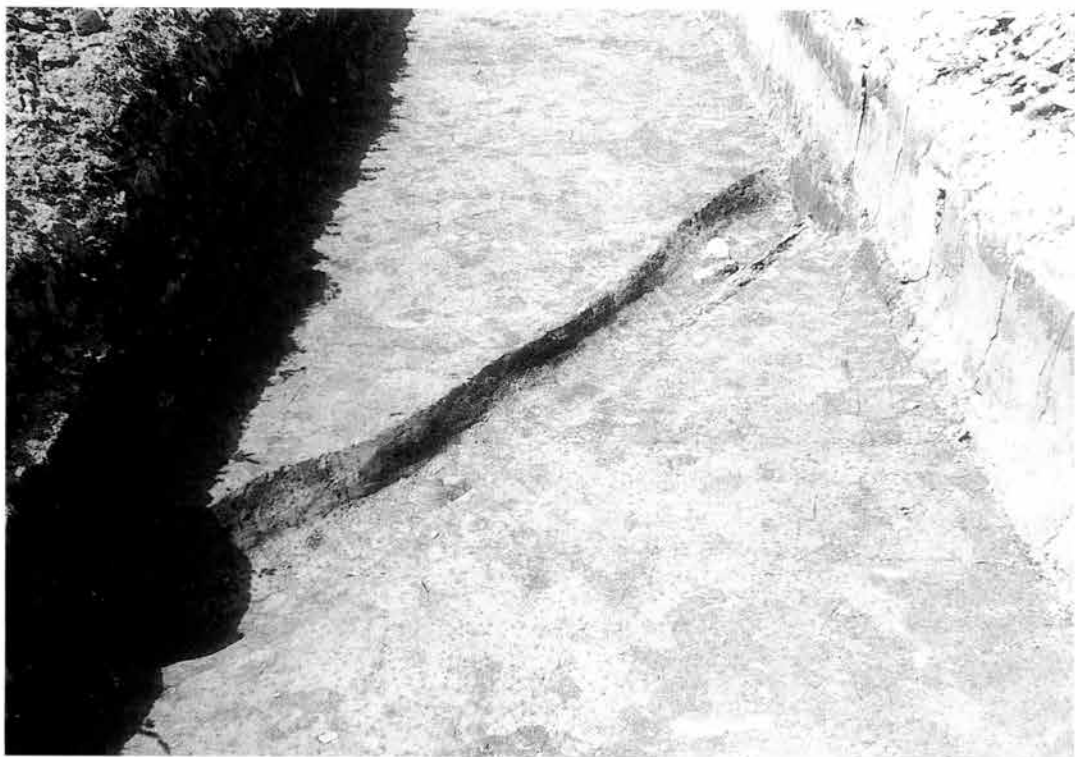
16区 遺物出土状況



遺物出土状況



5区 8号土坑・11号溝・ピット74



0区 16号溝



14区 炭化物



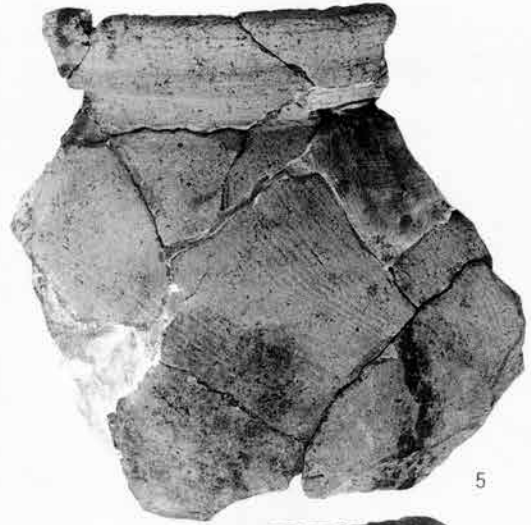
御手洗川源泉跡記念碑



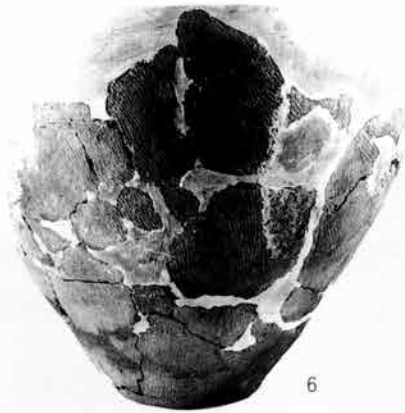
3



4



5



6



5



7



10

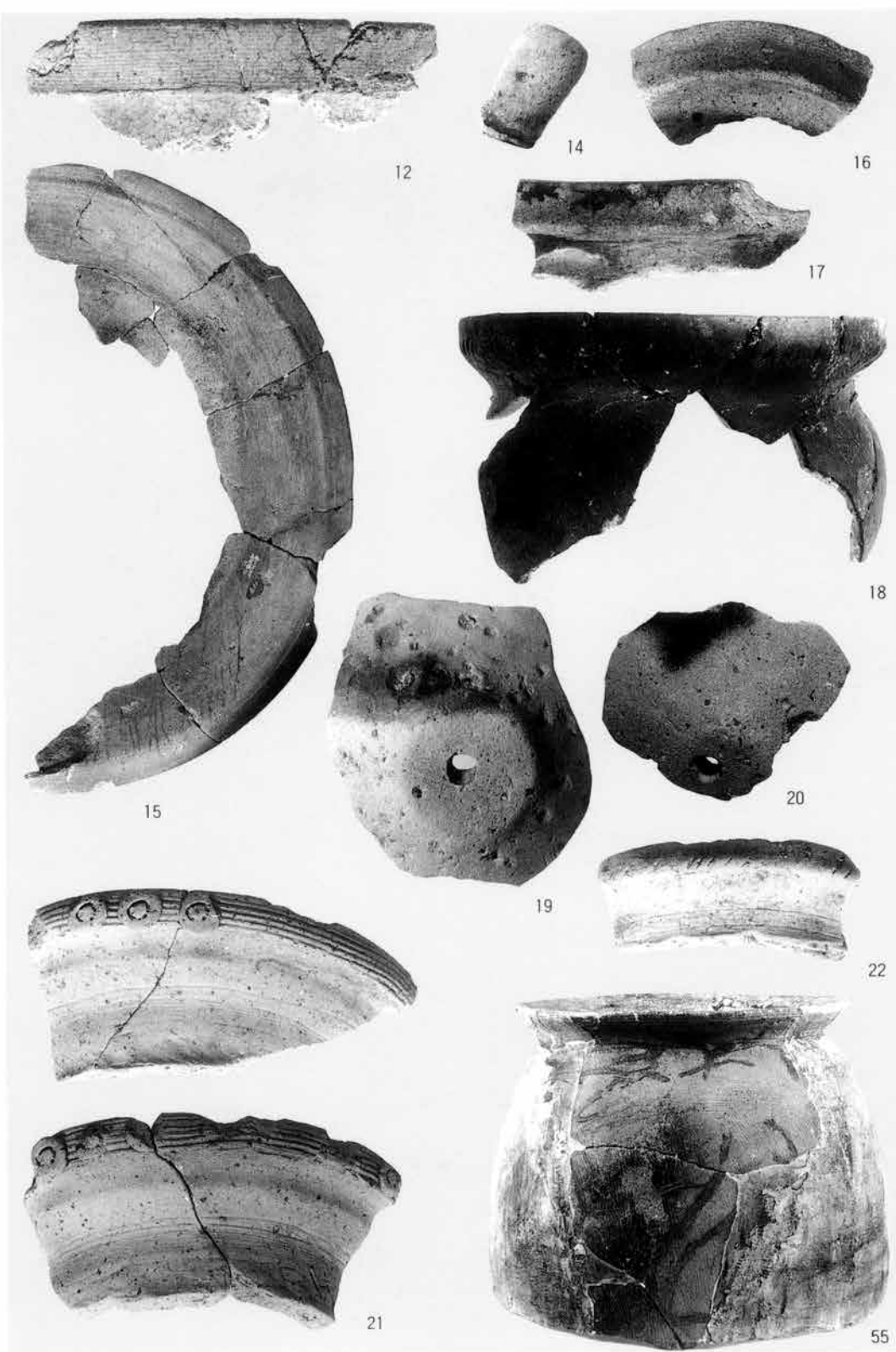


8

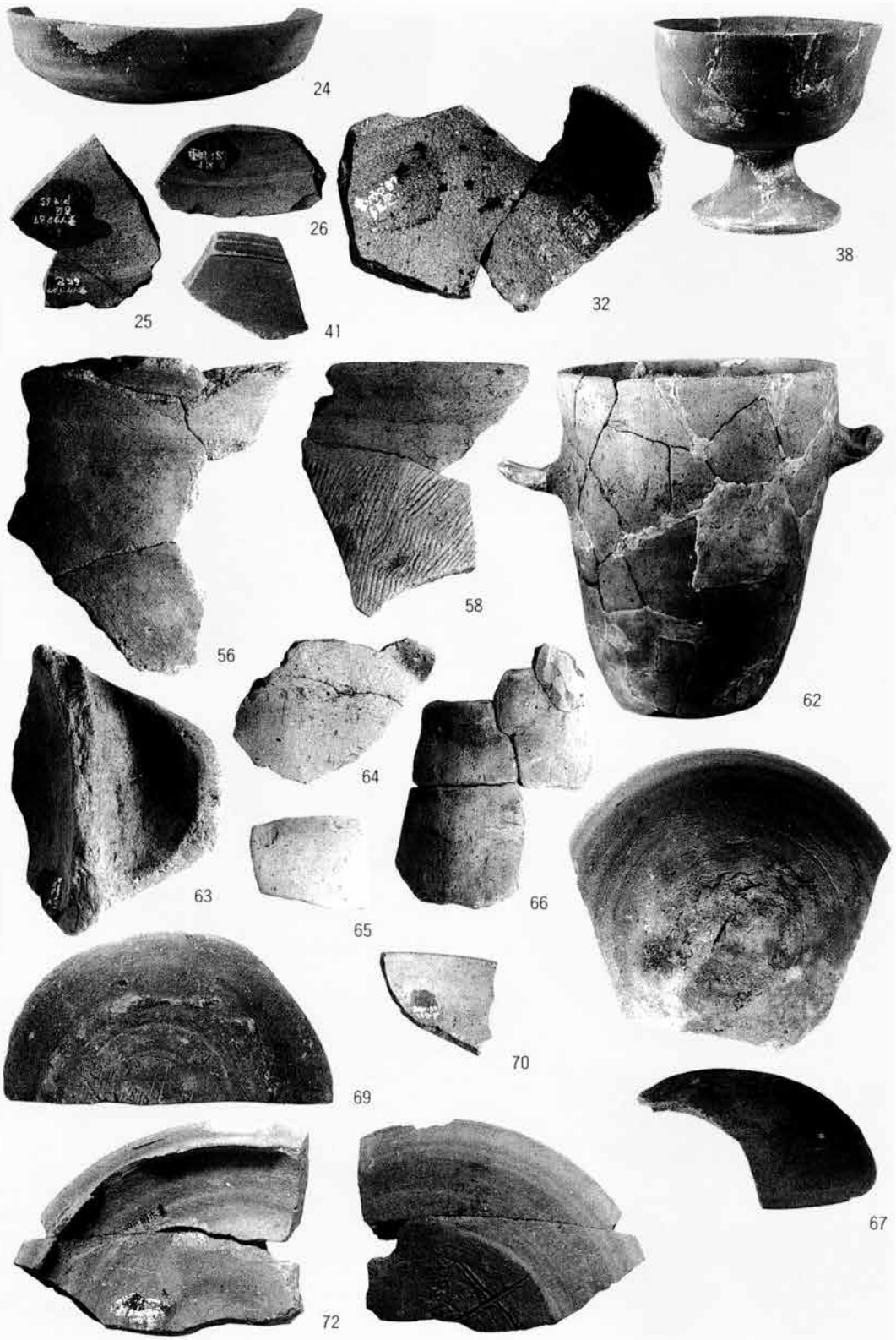


11

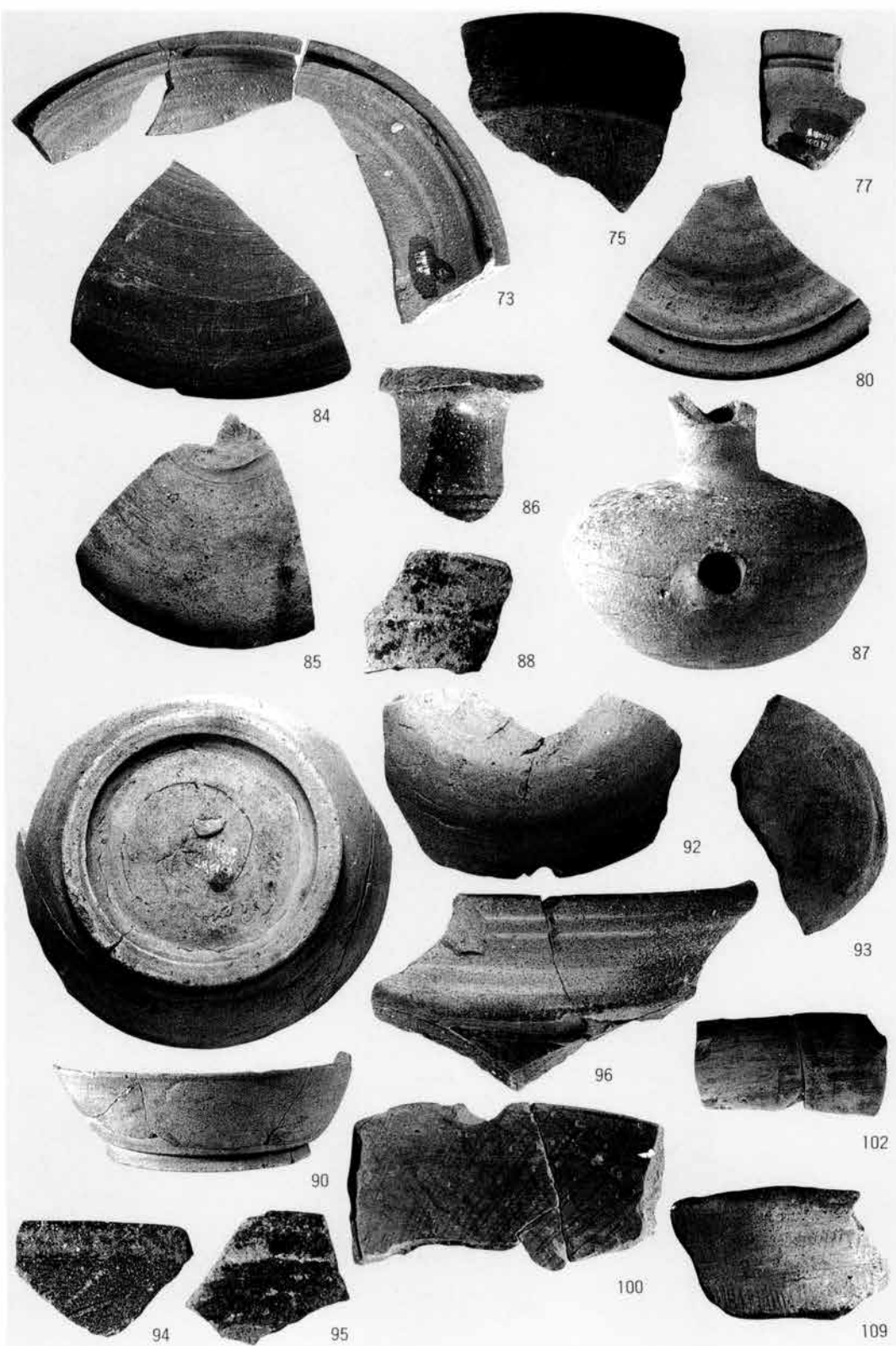
出土遺物（弥生時代）



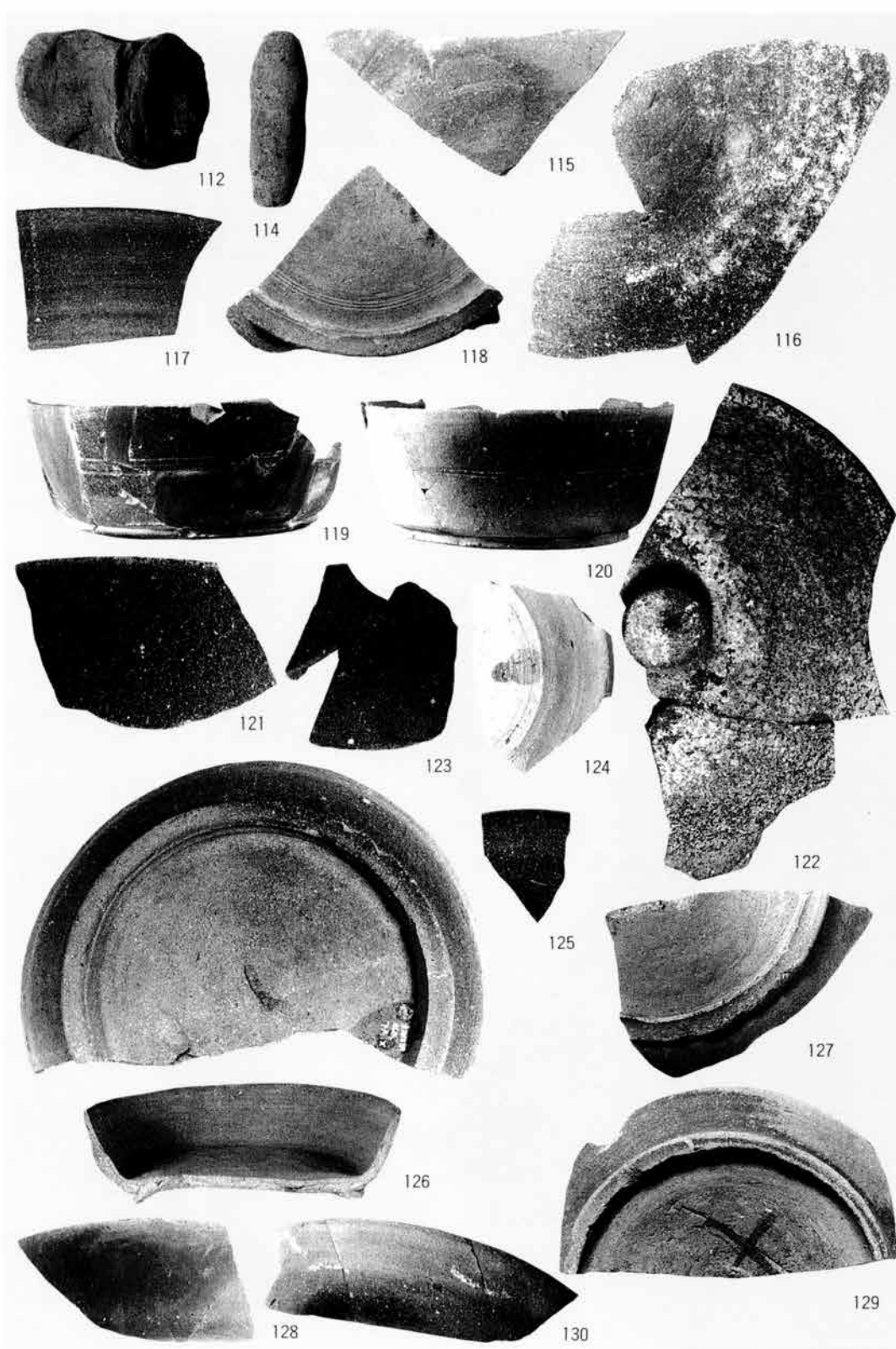
出土遺物（弥生時代）



出土遺物 (古代)



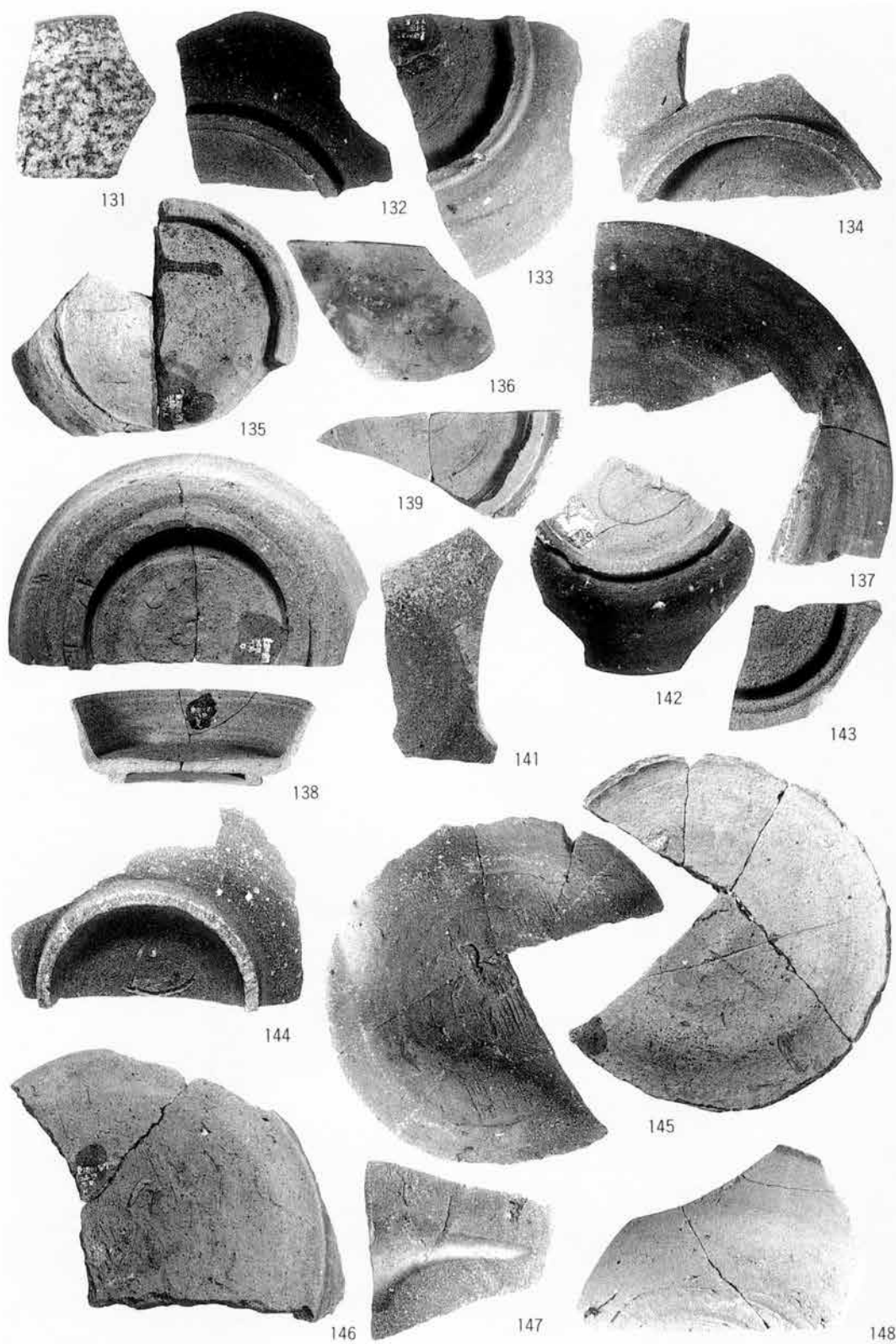
出土遺物（古代）



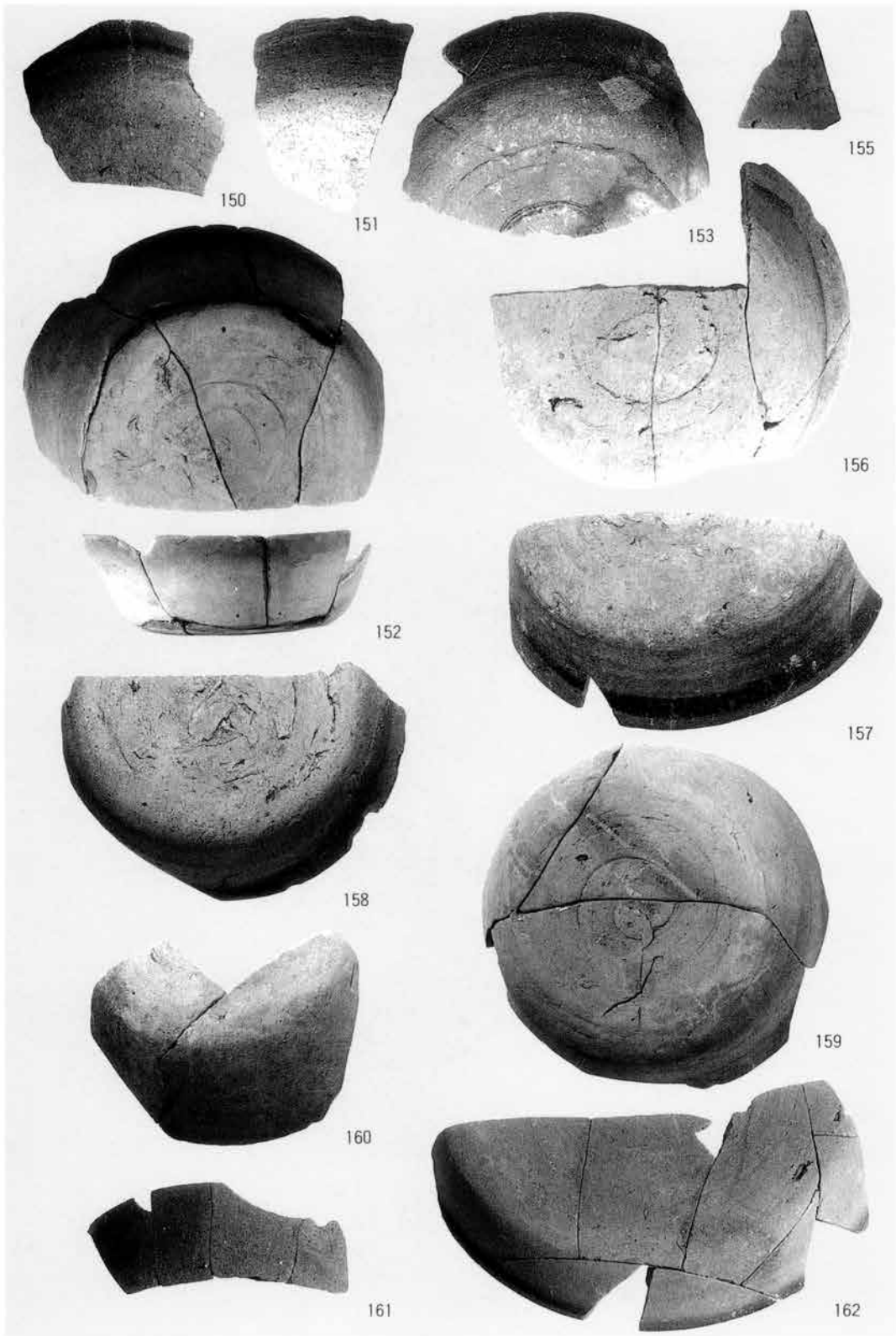
出土遺物（古代）



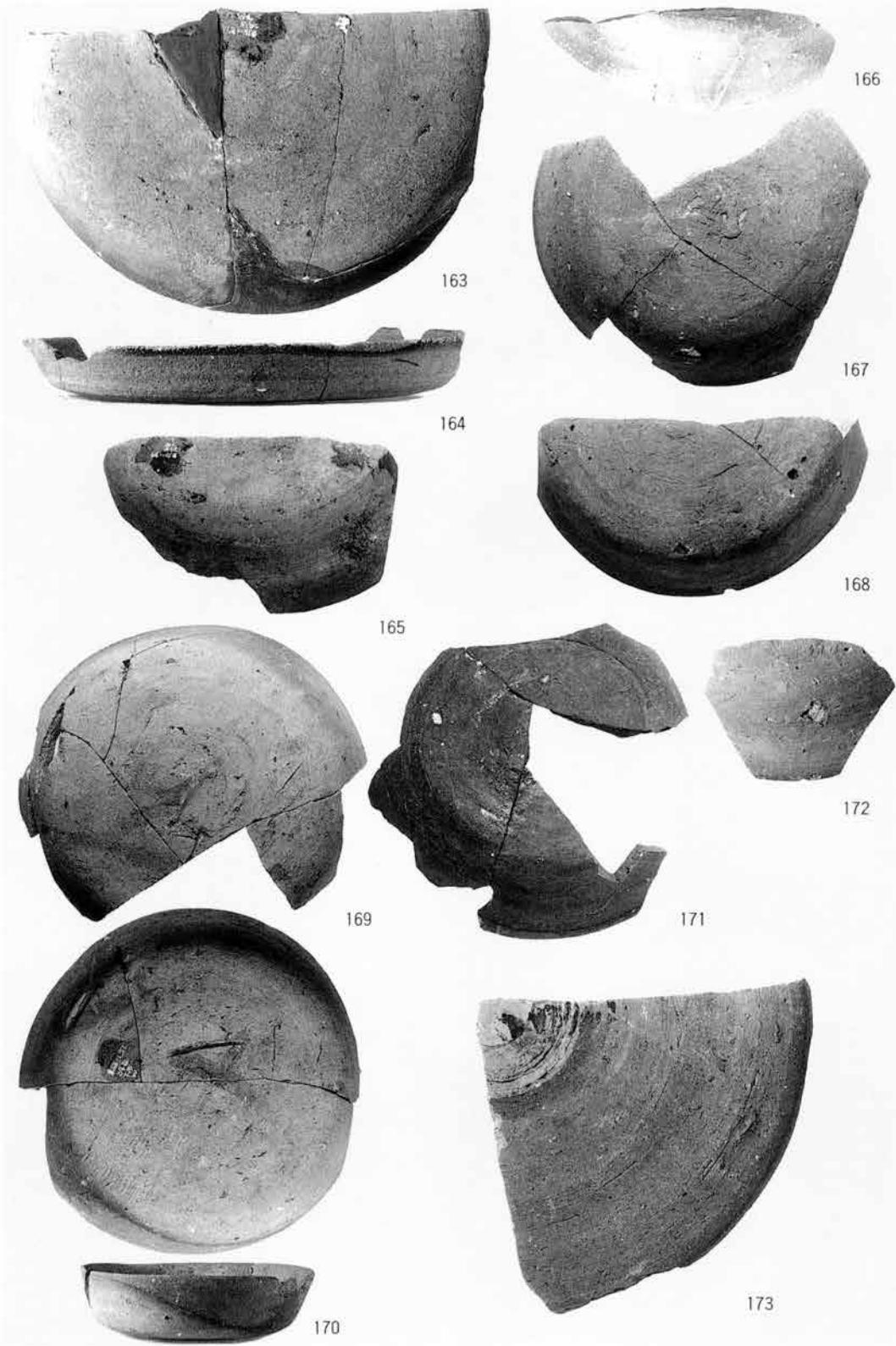
出土遺物（古代）



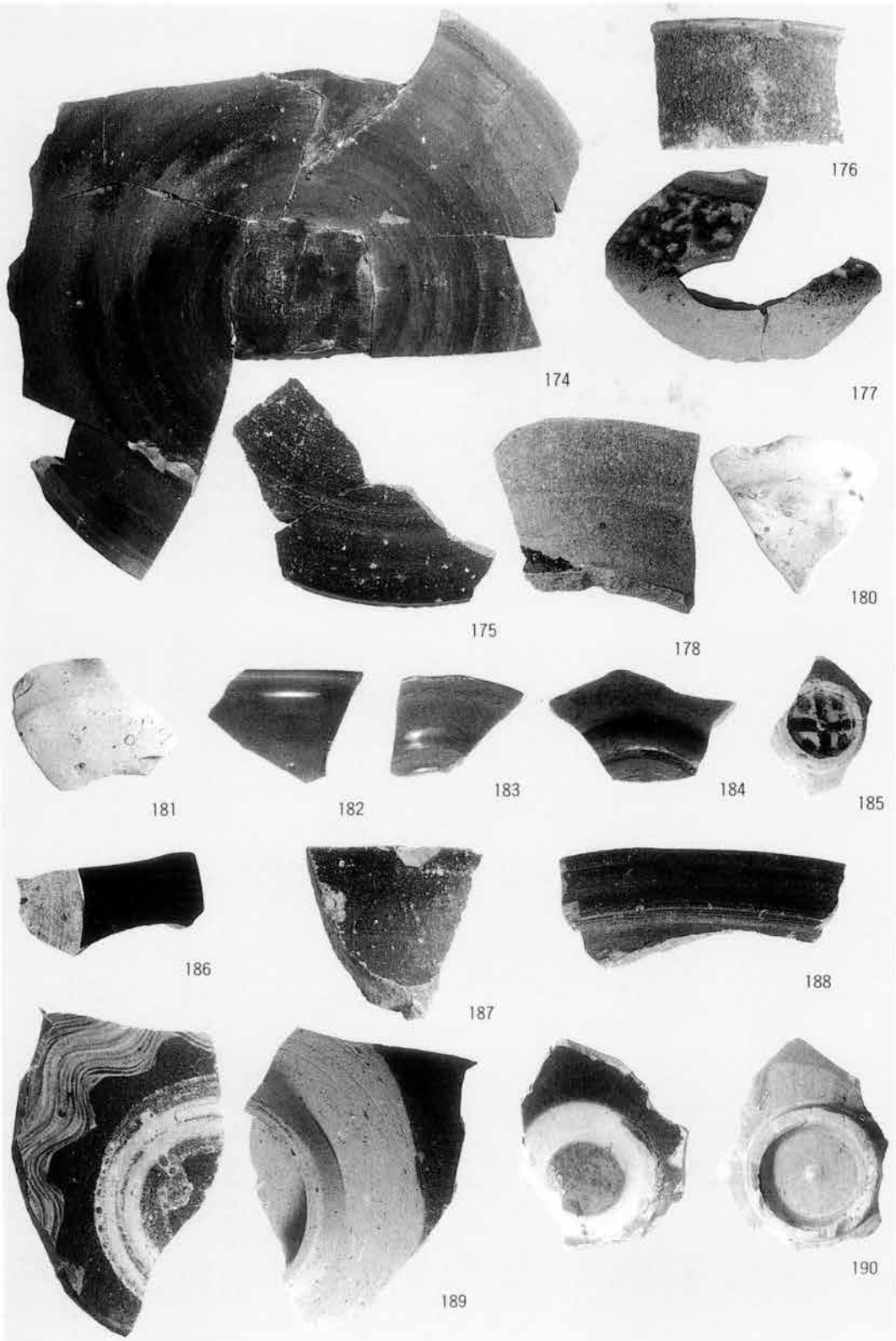
出土遺物（古代）



出土遺物（古代）



出土遺物（古代）



出土遺物（古代、中近世）



第1調査区表土除去作業

南から



8区 S101・SK07調査風景

南から



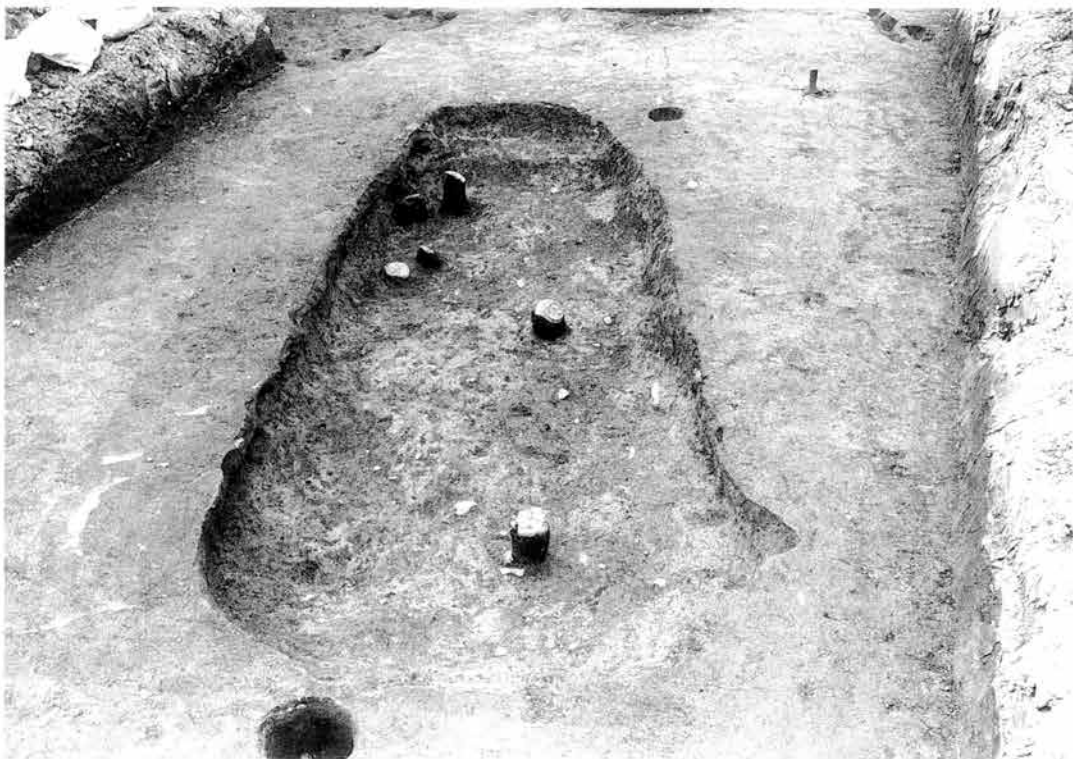
8区 S101

北から



同上 カマド

北から



8区 SK07

南から



10区 SB03

南から



11区 S102

北から



11区より南を望む

北から



12区 S103

北から



14区より南を望む

北から



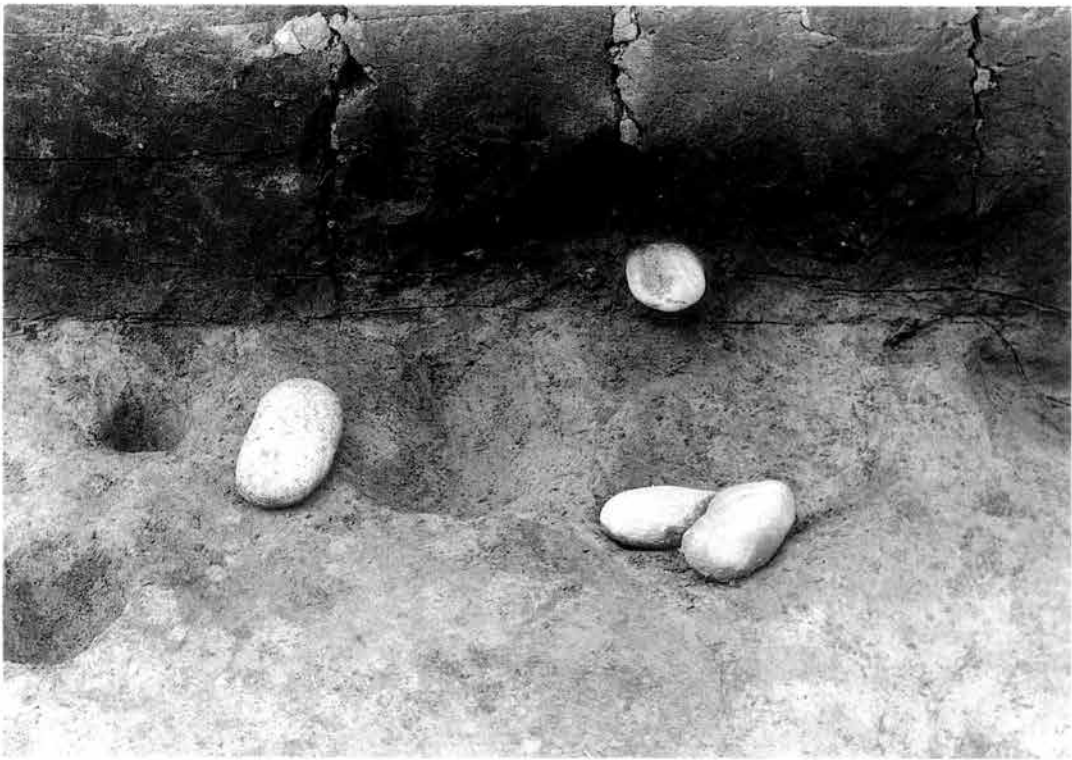
13区 S I 04調査風景

南から



13区 S I 04

北から



13区 S I 04床面棒状磔出土状態

東から



16区より北を望む

南から



18区 S I 05

北から



30区 S I 06付近より北を望む

南から



31区 SB08-P79高杯出土状態



32区 S107

南から



32区 S107土器(61)出土状態

西から



32区より北を望む

南から



38区より北を望む

南から



第1調査区全景

北から



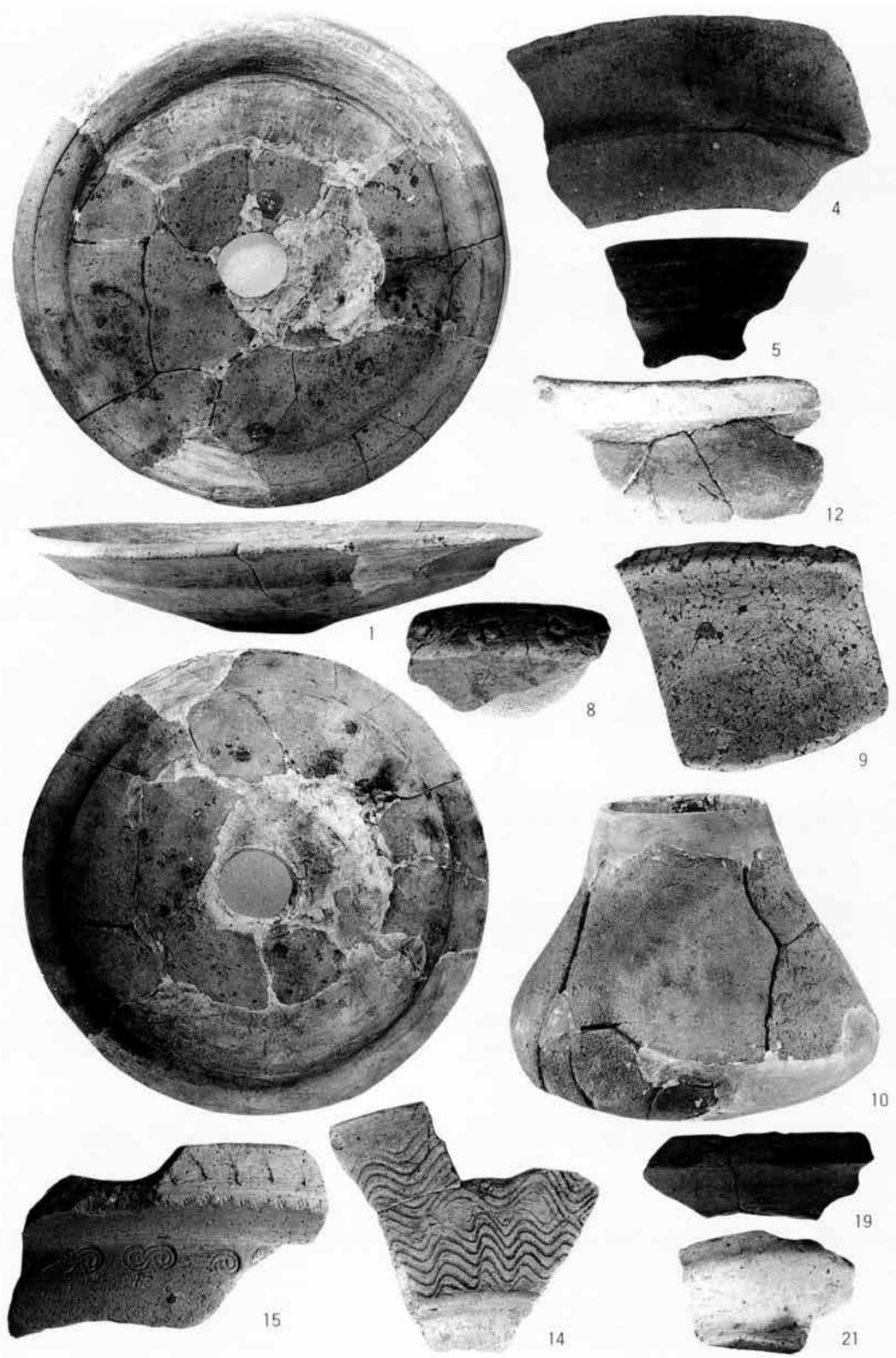
第2調査区作業風景

西から

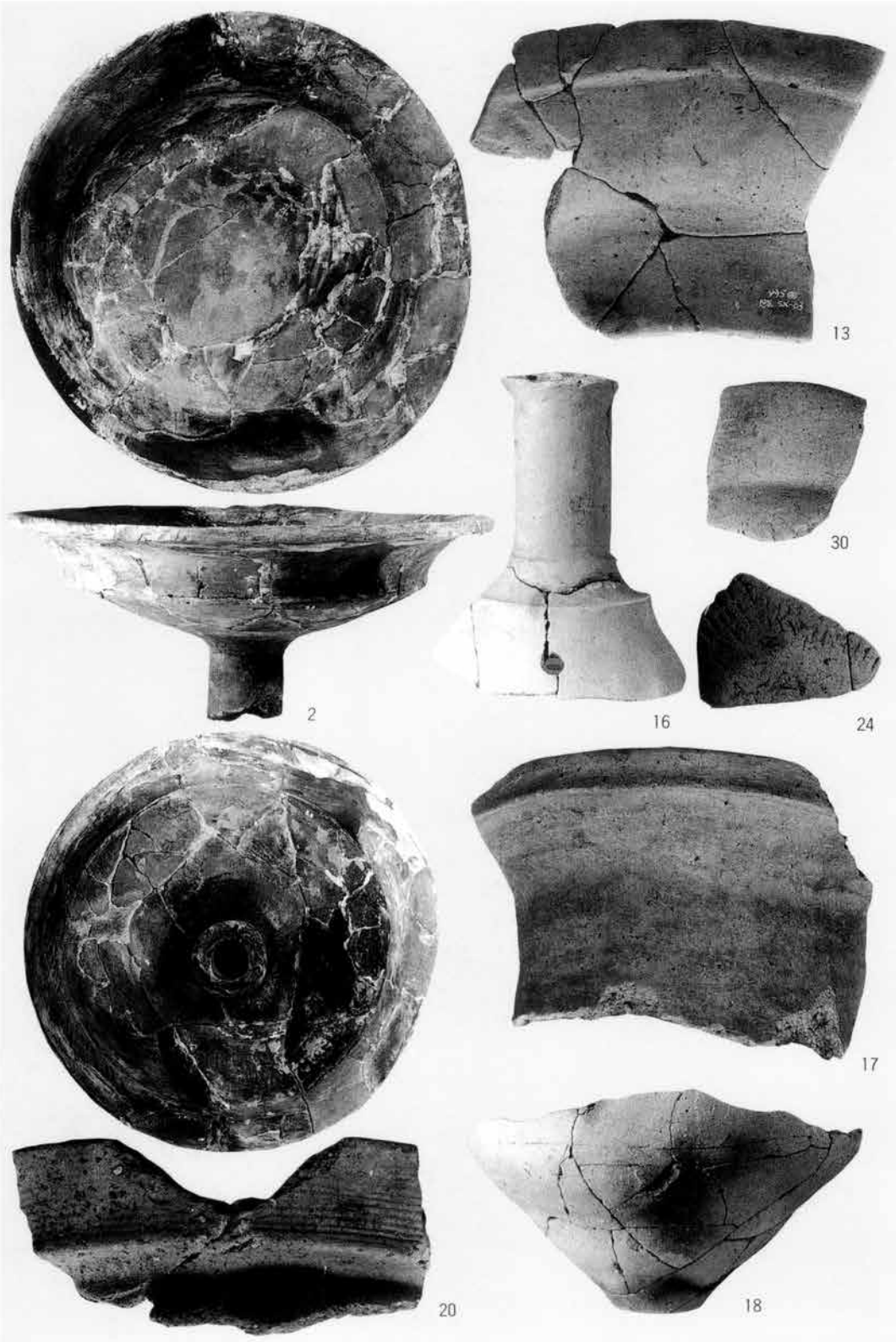


同上 SB01

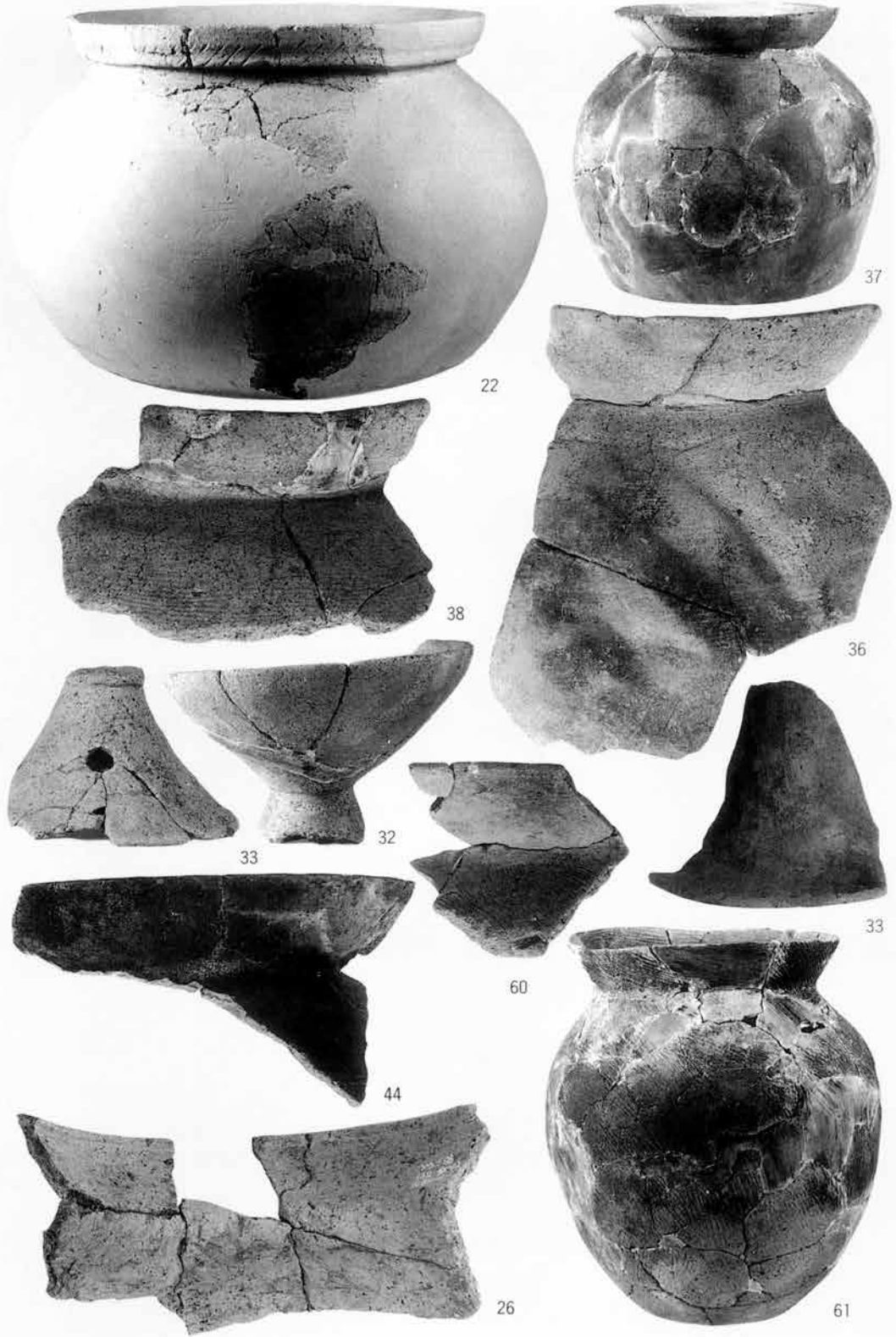
西から



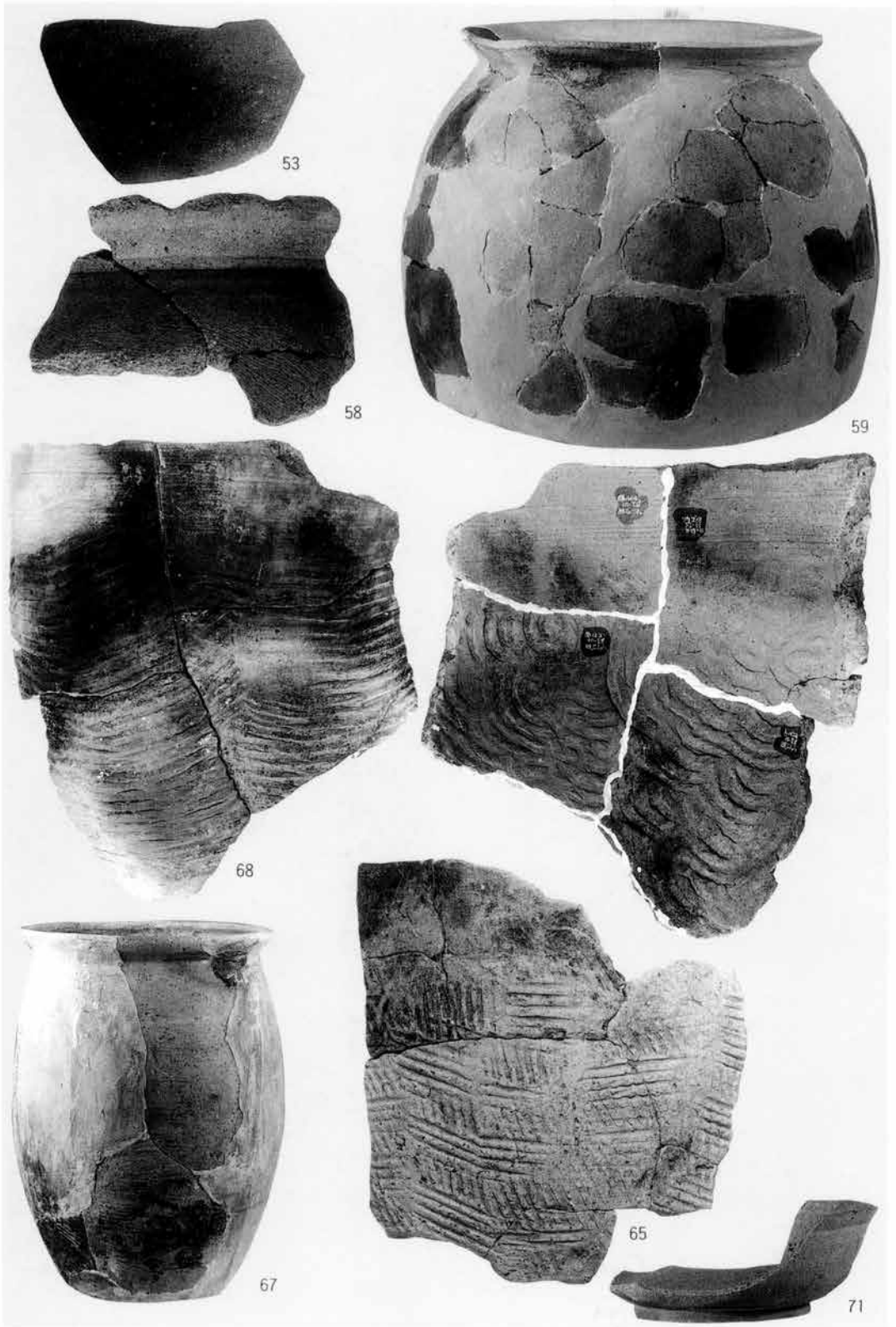
出土遺物（弥生時代）



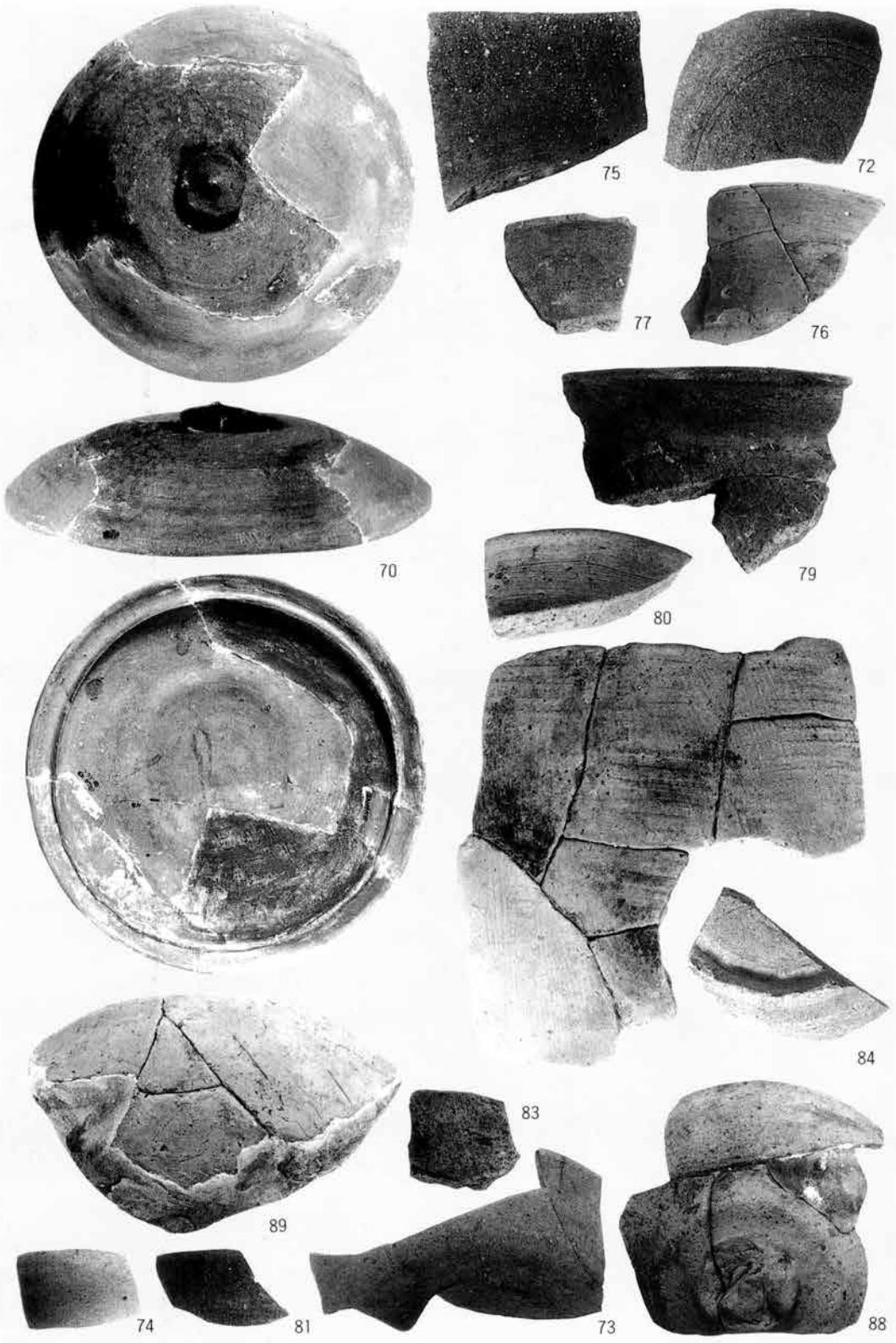
出土遺物（弥生時代）



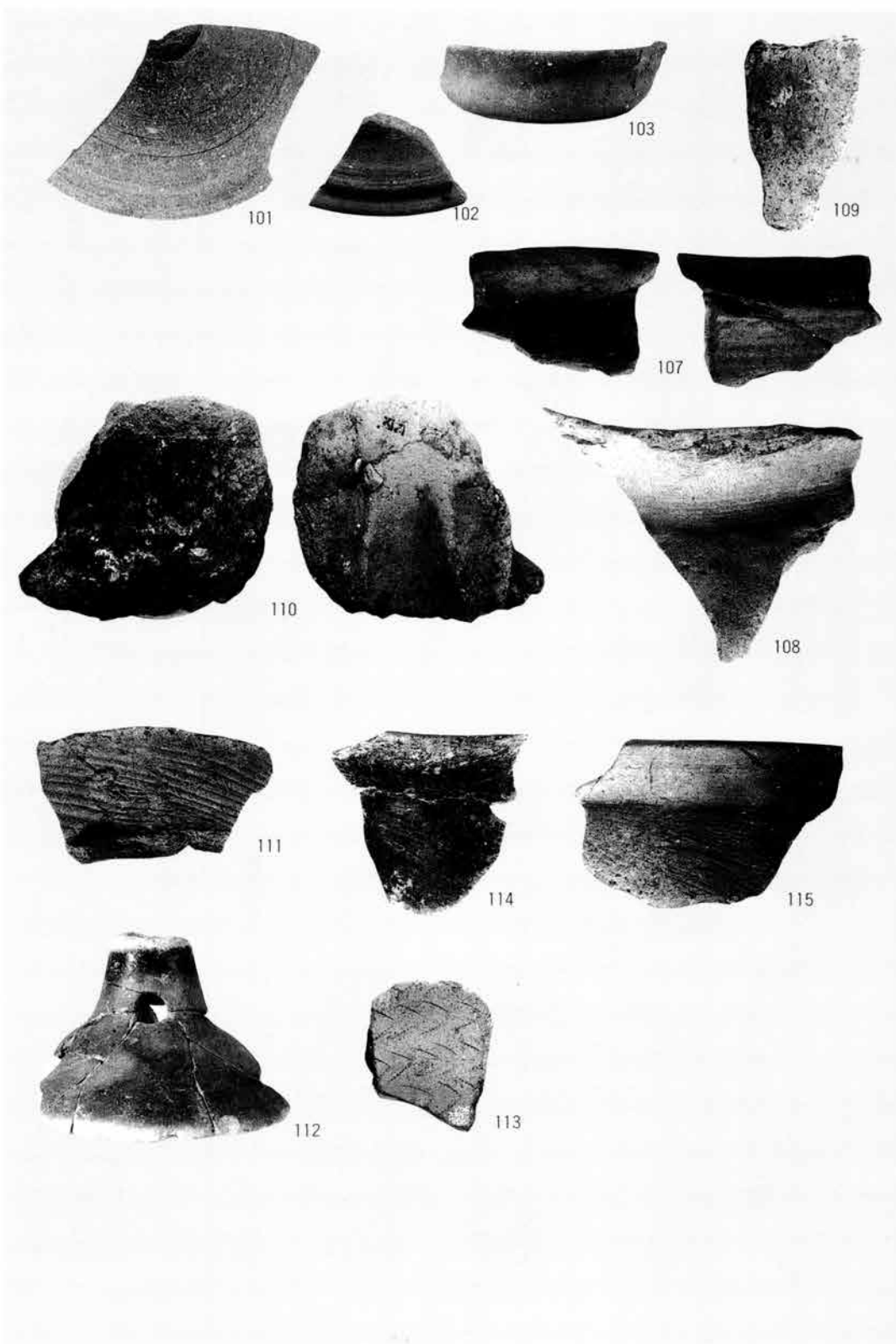
出土遺物（弥生・古墳時代）



出土遺物（古墳時代、古代）

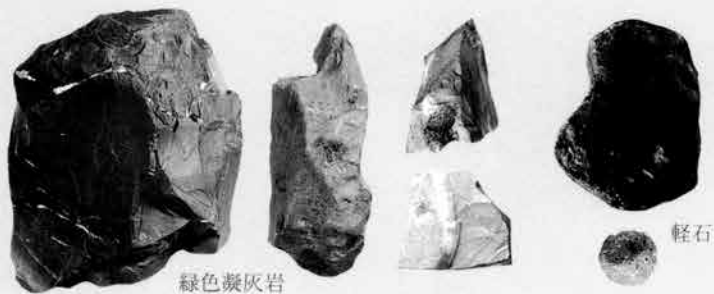


出土遺物（古代）



出土遺物（古代、第2調査区出土品）

昭和61年度



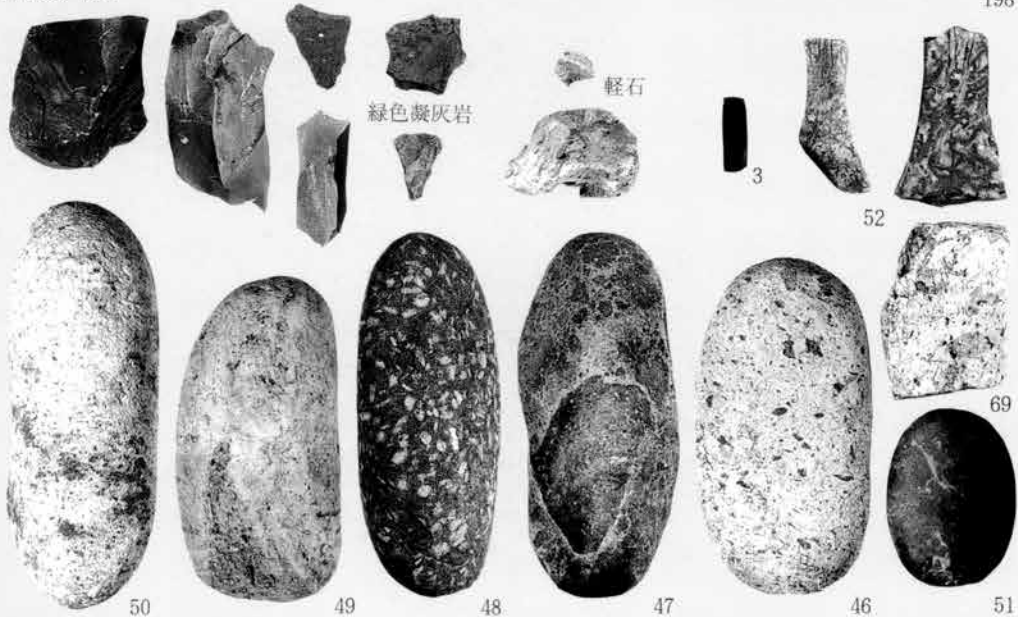
平成元年度



昭和62年度



昭和63年度



出土遺物（石器・石製品他）



Nトレンチ 完掘状況 (西から)



Nトレンチ 1～8区完掘状況 (東から)



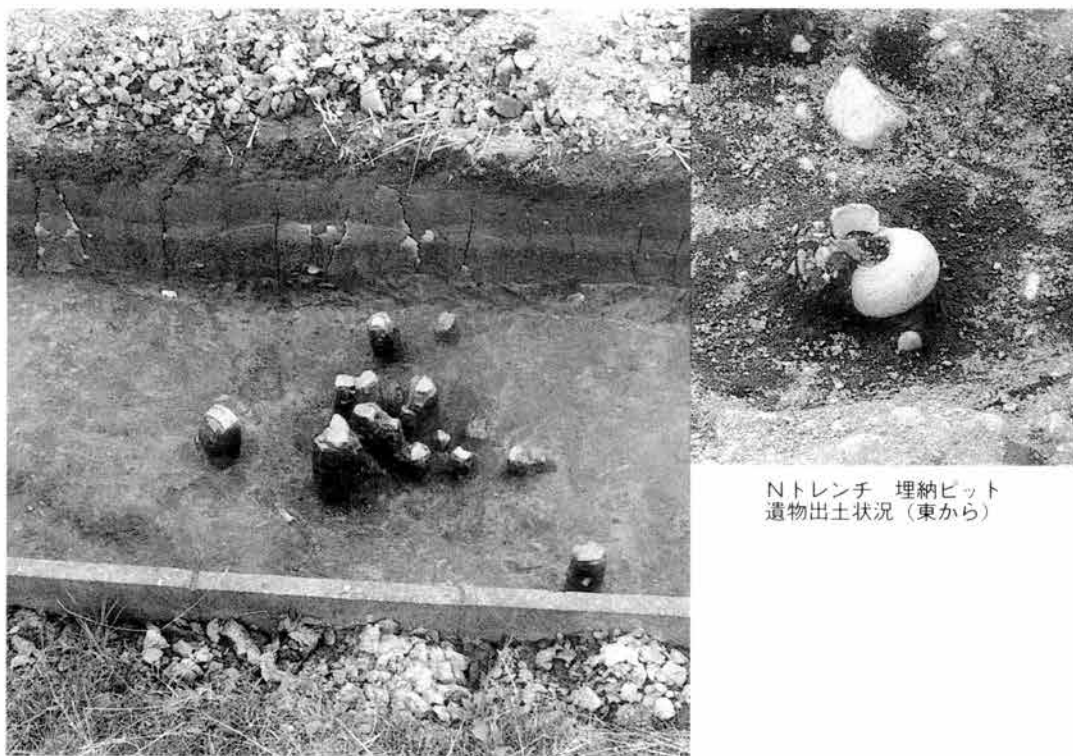
Nトレンチ 第2号竪穴住居跡（西から）



Nトレンチ 第3号竪穴住居跡（東から）



Nトレンチ 第2号土坑（西から）



Nトレンチ 埋納ビット
遺物出土状況（東から）

Nトレンチ 第3号土坑（北から）



Nトレンチ 第5、6号溝（西から）



Nトレンチ 調査作業風景（東から）



Nトレンチ 窪地（西から）



Nトレンチ 9～13区完掘状況（西から）



Sトレンチ 全景 (南から)



Sトレンチ 遺構完掘状況 (南から)



4



42



13



29



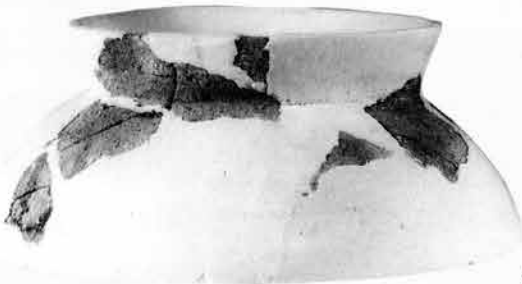
33



43



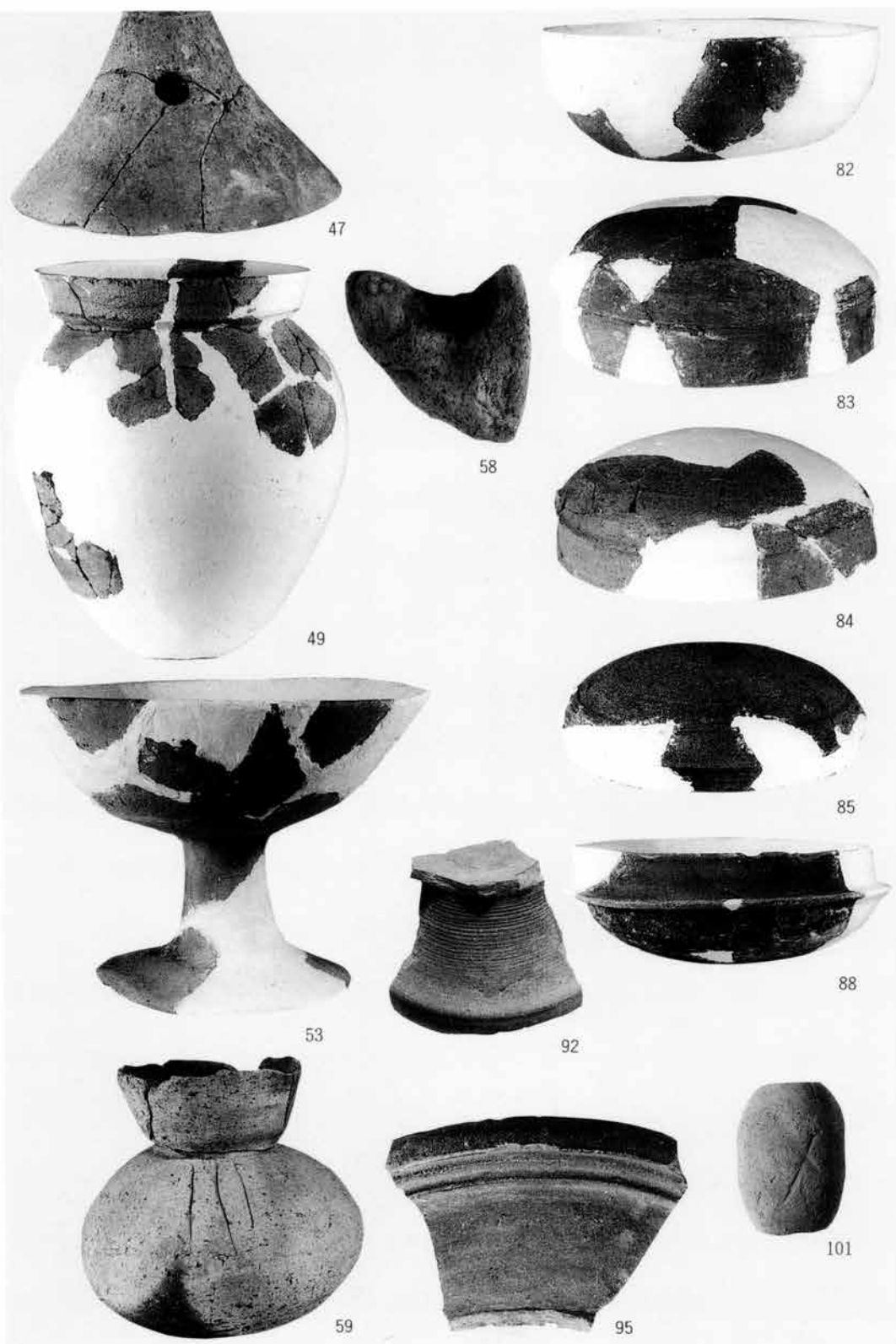
40



45



44



出土遺物

相川遺跡群

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区東相川
工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年 3月 20日 印刷

平成4年 3月 31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印刷 能登印刷株式会社
